

第八卷

朝顔日記

廓文章

梅の由兵衛

敵討高松

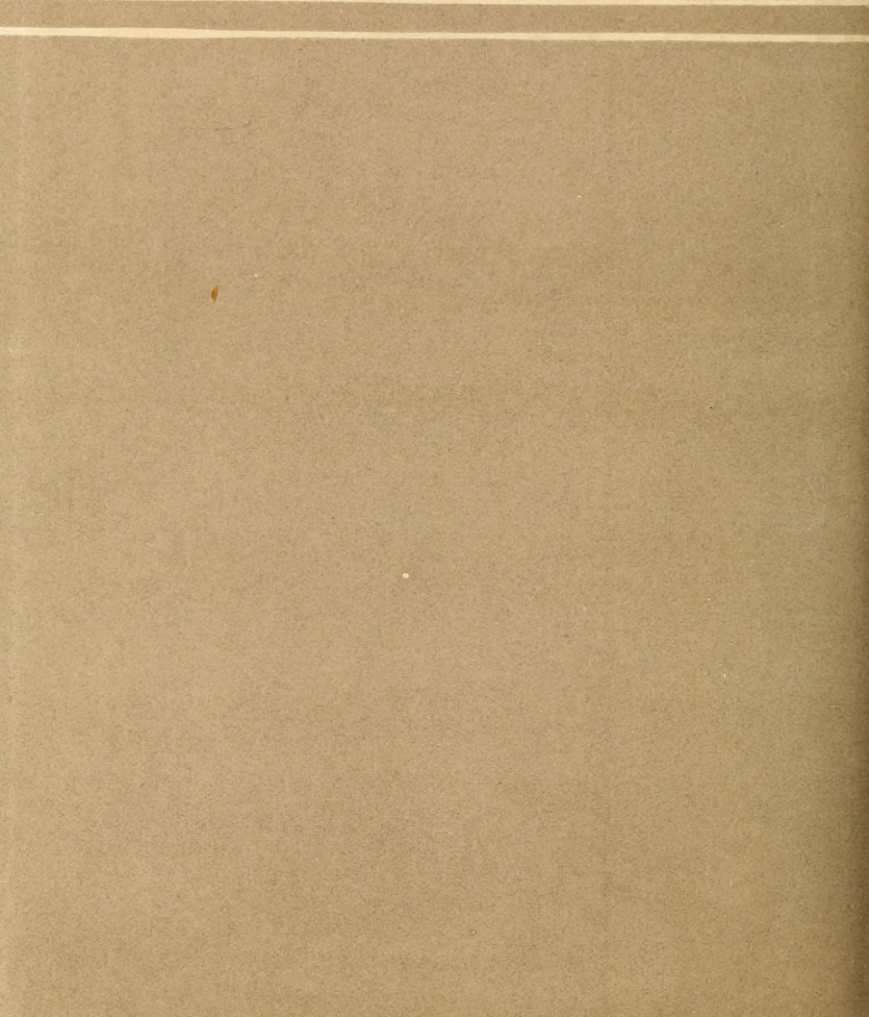
PL
767
K32
v.8

Kawatake, Shigetoshi
Sewa kyogen kessaku shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



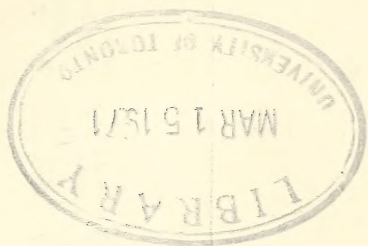


河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎
共編

第八卷

世話狂言傑作集

東京 春陽堂發行



PL
767
K32
v.8

目次

解説……………一—三

◎曙つゆの色ひぬま 葬あさかは 日記にっ (朝顔日記)……………一

◎廓くろわ 文ぶん 章しょう (吉田屋)……………九七

◎春はる景色げしき 梅うめの由兵衛よしべゑ (梅の由兵衛)……………一三三

◎敵かたき 討うち 高たか 砂すごの 松まつ (研辰)……………二五五

解 說

「曙色つゆのひぬまろさき色にうつ葬日記」は「増補生寫朝顔日記」と全く同一である。この作の出來上つたには、大體次のやうな經過がある。

芝屋芝馬あ（本名は芝屋勝助）といふ人は、長崎圓山の遊女の腹から生れた疇人で、浪花に出たからの淨瑠璃の作にも「箱根靈驗壁仇討」などの名作もあるが、常に長話といふ小説稗史を綴り、自ら好事の人を寄せて、一夜讀切りに話す事をして連中を組み、その社中で話の種の勝れたものゝある時は、これを稗史に綴り、その席でも講じ一夜の讀切にする事を初めた。その長話には數種あるが、その中に葬、油、首、櫛、狗などといふものがあつた。この中葬を歌舞伎に脚色して、二世嵐吉三郎に宮城阿曾次郎をさせようと思ひ、狂言作者の近松徳與に話し、狂言は大方書いたが深雪に扮する俳優がなかつたので、その儘に四五年經つた。その内馬田柳浪といふ醫師に話して挿繪を加へ、小説稗史として前編五卷、後編五卷を出版した。それから四五年經つうちに芝馬も徳與も歿し、葬日記の小説だけが廣く行はれたのを、文化九年頃に堀江市の側芝居で「生寫葬物語」の名題の下に、出來島千助が狂言作者で市川團三郎に駒澤をさせたが、これは不評に終つた。文化十一年に江戸から若女形澤村田之助が七年振りに浪華へ來

たが、田之助は器量もよくそれに琴三味線に達してゐたので、これ幸ひと芝叟徳叟の遺稿を取り出し、奈川晴助が修正して、正月から角座へかけた。これが今日の朝顔日記の始めであつて、名題は「けいせい筑紫琴つくしりん」と呼んだ。

義太夫の方では文政年間に山田案山子といふ人が、竹本重太夫の爲に作したが、完結せずに歿したのを、翠松園主人が刪補潤色した。それは嘉永三年のことで、「生寫朝顔日記」といつたのであるが、六字の名題は佛號に通ふといふので、その道で忌む事であるから、「増生寫朝顔話」と變へたのである。この作は随分長篇のものである。而して現行はれる宿屋の段や、大井川の段は、この作の一節である。

この作の大體の骨子は大内家のお家騒動である。豊前大友家の殘黨が、大内家に仇をしようと思ふ。深雪は阿曾次郎に添はれぬ悲しさから、小瀬川へ身を投げる所を助けられて、荒妙といふ大友の殘黨の惡婆に誘拐されて摩耶山に幽閉されたりする。種々な事件が起つて來るが、深雪は忠僕に伴はれて首尾よく駒澤の屋敷を訪ね、婚儀を取り結ぶ。岩代一派大友の殘黨の奸計も、駒澤の忠義によつて露顯し、大内家は安泰に治まる。この間に大内の當主義興公は、大磯の揚屋で瀬川といふ女に迷ひ國政を怠るが、瀬川が貞女で自殺して殿を諫め、且つ駒澤の異見で眼が覺めるなどといふ挿話もある。

こゝに収めた臺本は、「筑紫琴」とこの義太夫物とをとり合はせたものと言つてよい。院本には蛇皮六といふ人物は出て來ない。然し琴を彈する所と大井川とは院本通りである。文久三年七月申村座上場の時の臺本で、「右興行の節原本を得て寫し置くもの也」と三世瀬川如臯の筆で奥書のある臺本である。

その時の役割は、

秋月の娘深雪（澤村田之助）、宮木阿曾治郎、駒澤次郎左衛門（坂東彦三郎）、藤屋徳右衛門（關三十郎）、岩代瀧太（市川米十郎）、蛇遣ひ蛇皮六（嵐冠五郎）、秋月由美之助（中村鶴代）等。

「曙色舜日記」といふ名題は深雪を勤めた三代目澤村田之助の俳名が、曙山であつた所から附けた名題である。深雪といふ役は二世田之助によつて有名になつただけに、三世の田之助にとつても由緒ある芝居であつた。

「廓文章」はいふまでもなく「夕霧阿波鳴戸」の一節から出て、現在のものにも、次第に進化したものである。「夕霧阿波鳴戸」は近松門左衛門の作、寶永七年七月廿四日から竹本座にかつた淨瑠璃物である。

夕霧といふ太夫は「澤標」によると、京都島原の遊女屋に桔梗屋意得、扇屋四郎兵衛といふ者があつたが、寛文十二年に島原から大阪新町に移つた。夕霧はこの時一緒に移し植ゑられた名花だつたといふ。島原に居た時分から芳名は聞えてゐたので、大阪では移つて來るのを待ち構へた程の全盛であつた。この夕霧は江戸の三浦屋高尾、京都林屋の吉野、浪華の扇屋夕霧と並べて、その土地の名物とまで數へられてゐた。三浦屋高尾は橋詰の道誓寺に墓があり、仙臺候との關係によつて名高く、吉野は灰屋紹益に嫌いで數寄の道に志しが深くて名を残したが、この夕霧は一點の嫌もなく全盛を極めたもので、客の招きに應じ切れない所から、劇中女郎を置いて客の座敷へ出した。これが即ち引舟の濫觴であるといはれる。延寶六年正月六日に夕霧がかりをめの病に罹り、百方醫療をつくした中葉もなく、年二十七歳で遂に死去した時、浪華市中は夕霧の噂で持ちきる有様であつたといふ。「時の人惜しむ事松を離るゝ葛かつらの如し」と迄形容されてゐる。下寺町淨國寺に葬り、花岳芳春信女といふ戒名で、墓の右側には鬼貫の「この墓は柳なくてもあはれなり」といふ句が彫つてあつたといふ。

かくの如く人氣があつたから、劇にも直ぐ脚色された。夕霧の歿した年、延寶六年二月三日から、大阪道頓堀荒木與次兵衛座に、「夕霧名残正月」と題して、その追善劇が興行されて、伊左衛門には坂田藤十郎、夕霧には霧浪千壽が扮して大當りであつた。この作は近松門左門

の作だと傳へられるが、遺憾ながら傳本がない。之に次いで出たのが「夕霧七年忌」で作者は近松門左衛門、貞享元年の作、俳優はやはり伊左衛門に藤十郎、夕霧に千壽であつた。藤十郎は伊左衛門が得意の藝で、一生の中十八回演じてゐる。操りの方では貞享三年の「三世相」が最初で近松の作。その次はこゝに云ふ「夕霧阿波鳴戸」である。これが寶永七年七月廿四日で、夕霧の三十三回忌に當り、且つ坂田藤十郎の歿した翌年の事である。近松は名優と遊君との追善をこの作に於てなしたのである。「廓文章」はこの作を更に安永九年に改作したもので、今も扇屋に夕霧の文を傳へて居るといふ所から、この外題が産れたのである。

「夕霧阿波鳴戸」は三段物である。その梗概を記すと、

上の卷は即ち廓文章の場であるが、阿波の大盡に化けて來たのは平岡左近の妻お雪で、夫左近が夕霧に馴染み、仲に子まで儲けたと聞き、様子を見に來て實は伊左衛門の子といふ事が分かるが、流星は武士の妻、あくまで左近の子といふ事にして、伊左衛門にも承知さして連れ歸る。

中の卷は平岡左近の邸。子の源之介はこゝに引取られてお世繼として育てられ、心優しいお雪の才覚で夕霧も源之介の乳母といふ事にしてこの家に來る事になる。伊左衛門も我が子なつかしさ、顔見たさに駕籠昇となつて夕霧の供をして來る。喜左衛門が萬事のとりもちである。玄關

先で伊左衛門は餘所ながら我が子を見ていとしがる。左近夫婦は喜左衛門に金渡すとて中へはひる。後に残つた夕霧と伊左衛門は源之介にひしと抱きつくが、小兒ながら侍育ちの源之介は慮外者め眞二つと臨差に手をかける。夕霧は驚いて種々になだめ、乳母が始めての御訴訟に、この二人を一度父母と呼んでくれといふ。源之介は早速承知して「と、様か、様」と呼ぶので、二人は嬉し涙にくれる。所へ左近出て玄關先でそれを云はれては自分の武士がすたとて、お雪のとめるのも聞かず源之介の大小をとり追出す。夕霧は源之介に我等こそ誠の父母であるとあかす。源之介は誠の父母が嬉しいと、伊左衛門と共に出て行き度いといふ。夕霧は病中なり、あまりの悲しさに氣を失ふのを、喜左衛門がすかしなだめて元の處へ歸らせる。この場は先年新派の伊井容華が近松研究劇として演じた事がある。

下の巻では、夕霧は大病で扇屋に寝てゐる所へ、伊左衛門源之介親子が深笠に身をやつし來て、粗の山を唄つて夕霧に迷ふなとさす。情の深い扇屋夫婦は伊左衛門と悟つて家の中へ入れる。吉田屋喜左衛門はお雪の名代とて來て八百兩出し身請けするといふ。所へ又伊左衛門の母親妙願の使も二千兩持參し、家の嫌を断では死なされぬとて身請けを申込む。扇屋空はそれを見て今迄働いてくれた夕霧は此方で證文を巻くといひ放す。夕霧はこの世の名残りに妙願様を一度拜みたいといふ所へ、門口にゐた妙願が入つて來て「妙願こちの家へ迎へとり、

金づくめにしても養生し、この姑が精力で本復させてみせるぞと、家内が勇む勢につられて諸病は氣より本復の、顔もいき〜にこ〜と立つて踊るや扇屋夕霧、憂ひかへつて喜びを語り傳へて三十五年、又五十年又百年千歳の秋の夕霧を、なほ萬代の春の花見る人袖をぞ傳へける」といふので終る。かうして夕霧の全快をほのめかしたのは、一代の名妓を舞臺の上でも無駄に死なせまいとする、近松の注意であつたといはれてゐる。

富本でこの芝居をした最初は、天明四年正月森田座で「クざりよとくち伊左衛門春夜障子梅」といひ、夕霧に三

栴徳次郎、伊左衛門に四世幸四郎。太夫は富本齋宮太夫。この他富本物には寛政七年正月郡座

の「今今か登廊水仙か夕霧か中村のしほか、伊左衛門か三世溜川菊之丞か、富本豊前太夫等と、寛

政十年三月桐座の「か道行菜種羹か夕霧か三世菊之丞か、伊左衛門か三世宗十郎か」などがある。こ

れ等は皆現今清元に傳つてゐるものである。常磐津では嘉永五年十一月市村座で「か三鶴中吉田屋か」といふ名題で、夕霧をしようか、伊左衛門を高助が演じてゐる。

十郎兵衛おつるの芝居「傾城阿波鳴戸」も亦この原作によつたもので、明和五年竹本座にかゝり作者は近松半二、竹本三郎兵衛等。この當時竹本座は窮亡のどん底にあつて、せめて全盛期の作者の物と同じやうな名題のものと、此作を選び、座本の名まで故人の近松門左衛門の名を使つたのであつたが、この作は不入りで失敗であつた。この外夕霧伊左衛門に關する作には

「夕霧笹の袂」、みはつくしなほのあな「零標浪花詠」、みはつくしなほのあな「題浪花文章夕霧塚」などがある。

「春景色梅由兵衛」は原名を「隅田春妓女容性」といつて初代並木五瓶の作、寛政八年正月、江戸桐座の二番目狂言として興行されたものである。「春景色梅由兵衛」といふのは、たゞ單にその名題變へにすぎない。然し稿下當時のものに後半狂言作者が多少の補筆を施さしものであるには間違ないが、原型に近いものには既に一二印行本もあるから、わざと現行脚本、江戸末期の舞臺本によつた。

この狂言に脚色された梅の由兵衛といふのは本來俠客ではない。西澤一鳳の「傳奇作書」によると大阪築業町の梅遊の吉兵衛といふ者で、胡椒織巾といふ事を始めて仕出した程の大悪黨であるといふ。大阪中の兩替屋の手代小者の親兄弟の在所までも知つてゐて、盜の方便にしたといはれる。常に丁銀板を兩替屋へ持つて行つて予銀にかへ、今一度見せよとて丁銀を受取り、それを摺りかへる事に妙を得て、異名を「板替の吉兵衛」といつて恐れられた。博奕で入牢したが、元禄二年四月十九日の大赦に獄を出て、その五月十九日天王寺屋九左衛門方の小者長吉が、金子百兩をかへに行く所を呼びかけ、在所から親が來たと偽つて厭がる長吉を無理に連れ歸り、女房の小梅といふ十五六の年増りの博奕の巧い女に云ひつけて、長吉の後から蒲團を被せて刺

し殺し、百兩を奪つた。近所の者が之を見付けて訴人しようとしたのを、家主の與次右衛門といふ者が、あれは夫婦喧嘩だとして止めた。吉兵衛はその金で新地堂島北町で茶屋を出さうと用意してゐる中に、小梅の弟三右衛門がその妻を離別した。その女が天王寺へ落し文をして、長吉は梅澁の吉兵衛が夫婦して殺し、その死骸は三右衛門が捨てたと書いてあつたので、與力同心を新地に遣はした。吉兵衛が新町の廓へ行つた所を六月十九日に捕へて、死骸の捨場所を尋ねると小初瀬の邊の古井に捨てたといふので、捜して見ると色も變らずにあつた。金は八十兩ばかり残つてゐたといふ。吉兵衛は磔にかゝり、他の三人は大坂追放になつたが、與次右衛門は高津に隠れてゐたのを訴人あつて斬罪になり、小梅はその後子殺しをして磔になつたと傳へられる。

この梅澁の吉兵衛を梅の由兵衛といふ名にして、始めてこの役を勤めたのは、初代澤村宗十郎である。元文元年中村座で「遊君鎧會我」といふ名題の下に、二番目狂言として梅の由兵衛を演じた。「澤村家實見」によると「正月二日より打續き大當りになり、二番目梅の由兵衛、男達オトコにて白と紺の繻子片身替りに鶯と烏の縫、紫の鑲頭巾に錠をおろし敵役を相手に男達、今を初めの旅衣ヨイヤマカシヨと頭巾をとると奴にて、見物の眼を驚かせ、大評判古今の大入なり、今もつて云傳ふ」と記してある。その烏の模様と頭巾とは今日迄も襲用せられ、所謂「宗十郎

頭巾」といふ言葉さへ生じたのである。

次いで出たのが浮瑠璃劇で、「あまはさきつち薬野中の隠井」といふ、原田由良助の作並木宗輔の添削で、元

文三年豊竹座へ上場された。此作は五段の作に似通つた點があるから、梗概をのべておく。

初段の口、備前國早島あまはさきつちの家中、唐琴清右衛門は妻お吉の兄磯島伴七の悪心から、殿のお刀凌藤四郎の銘ある刀を紛失の科で閉門中、上使として大日附牛窓十郎左衛門が來り、その情で刀詮議の日限を延ばして貰ふ。切は大阪。お吉は刀詮議に大阪へ來り元の家來梅の由兵衛を便り一軒借家して住ひ、表向きは由兵衛の妻としてゐる。由兵衛の女房小梅は本八といふ者にそゝのかされて、お吉の留守に家に上り、縁の下へ身をかくし様子を窺ふが、由兵衛が來合はせてお吉は元のお主と分かり、二人は初對面の挨拶をする。

二段の口は渡邊橋由兵衛の伯母の家。由兵衛は藤四郎の刀を買ふために金を借りに來るが、伯母が吝嗇だとして借母に事情をあかされて歸る。切は由兵衛の家。小梅の弟長吉は久し振りで姉の所へ來る。金を百兩持つてゐるといふ。小梅はその金は欲しいが云ひ出しかねて、由兵衛が早く歸つてくれゝばいと待つてゐる。所へ由兵衛が歸つて來て小梅を用違に表へ出し、大の儀を助ける爲と小の蟲の長吉を切り殺す。小梅が歸つて來て悲しむがお主の爲にはと得心せしめ、臨終の長吉に様子を聞けばこの金は盗んだ金、小梅が常々金のない事を苦にやむを助け

る爲に持つて来たもので、殺されるは覺悟だといふ。夫婦涙にくれながら、來合せてゐた伯母の諫めで野中の井戸へ葬る。

三段目は「道行涙のたま呼たまひ」で小梅由兵衛が長吉を葬りに行く道行。切は目出たく刀を買ひ戻してお吉に渡す。代官が出役になり本八、古手屋三ぶさぶの悪事露顯し、由兵衛と三人引立てられるので終つてゐる。

「野中の隠居」は明和八年に竹本三郎兵衛、寺田兵藏二人によつて改作され、豊竹座の舞臺にかつた。名題を「御駕籠定期蒞業」といふ。

これ等の作に、小三金五郎の筋をなひませにして作られたのが「隅す田だ春妓はるけい者しや容かた性せう」である。初演の時の役割は。

梅の由兵衛(三世澤村宗十郎)、女房小梅、丁雅長吉(三世川菊之丞)、金谷金五郎(初代市川男女藏)、額の小さん(松本米三郎)、綾瀬主水之助(源之助後の四世宗十郎)、信樂勘十郎(二世坂東三津五郎)、娘お君(市山富三郎)等。

であつて、大當り大評判であつたといふ。

俗に研辰と呼ばれる「敵討高杉松」といふ作は、作者、年代ともに不分明である。作者は並

木五瓶とも傳へられるが、作柄の上から見て初代五瓶の作ではないやうに思はれる。或ひは二代目、三代目の五瓶の作であるかも知れないが、正確には知られてゐない。これを興行した座も一流の大劇場に於てではなく、大阪の濱芝居といふ二流三流の劇場であることは知られてゐるが、それすら年代記的に明確にするは困難であるらしい。

今年の十二月、猿之助、左右衛門、龜藏等が歌舞伎座で演じた竹柴兼三氏の作「研辰の討たれ」といふ芝居は、この作にヒントを得て作られた、近代的意義ある時代喜劇である。

茲にこの臺本を収めたのは、何となく活動寫眞のやうな、興味本位な、通俗な世話狂言の見本として存置したいからでもある。

(例により、本冊の校訂、解説に關しては、文學士間民夫氏の援助、研究に俟つ所多い事を附記して謝意に代へる。大正十五年四月上旬、河竹繁俊しるす。)

つ
ゆ
の
ひ
ぬ
ま
あ
さ
が
ほ
に
つ
ま

曙
色
舞
田
記





ついでにぬまの

影を

影を

はきとる

ふりかへし

そと

福三

三子

三子

伊勢

曙色薺日記（朝顔日記——三幕）

序 幕

役名

宮城阿曾次郎、娘深雪、母操、腰元皐月、同千代竹、同桔梗、醫者遊仙、坊主醫者桂庵、瀬田伴藏、藪野丹六等。

本舞臺一面の淺黄幕、上の方宇治橋の欄干、石の傍示杭、宇治平等院椋の鳥道としるしあり、下の方葎簾張りの茶屋、すべて宇治川橋詰の體、幕の内より仕出し床几に腰を掛けて居る、茶屋男茶を汲んでゐる、茶摘唄にて幕あく。

○ なんといつも、賑やかなことの。

△ 螢見がたんと出るぢやないか。

茶屋 當年は殊のほか螢が早う出ました。

○ いやもう宇治川の螢狩といふは、諸國に聞えてある事ぢやて。

△ 日暮れから見物して行きませう。

茶屋 さやうならよい見晴しへ御案内申しませう。

○ さあ〜ござれ〜。

トやはり右の唄にて仕出し下手へはひる、ト花道よりくわむ頭の醫者遊仙、後より坊主醫者桂庵連れ立ち出て來り、

遊仙 これは桂庵を、よい所でお目にかゝりました。

桂庵 さればさ、お出でを存じたらお誘ひ申さうもの。

遊仙 この間は病氣も閑ゆるぶら〜と、この宇治のほとりへぶらつきに出た所さ。

桂庵 然らば川端を夕方まで御同道。

遊仙 マア〜あの床几へ。

ト右の唄にて兩人床几へ腰をかける、桂庵こなしあつて、

桂庵 さてはや尊公には何とも申譯もござらぬ仕合、御存知の通り病家も少ないこの桂庵、それ故に

お借り申した金子も段々延引、何分流行風か麻疹でもはやる時分までお待ち下されい。

遊仙 ハテようござる、ない物を無理に取らうと申すやうな遊仙ではござらぬ、愚にも大内家のお手
置なれども親どもが死去致し、ゆづり受けた金銀が澤山ござる故、先づ當分何不足なく暮し居
りますぢや、同じ九州より上つて來てもこなたの懇意めさるゝ、菊地の浪人阿曾次郎とはきつ
い違ひ。

桂庵 そりや一口に云へるものでござらぬ、先の世によい種を蒔いてござつた上、この桂庵などに金

貸しても催促めされぬ隠徳は、誠に此世からの生佛。

遊仙 さてその生佛も此頃は、戀煩ひで石佛のやうになつてゐますわいな。

桂庵 ムウ尊公が戀煩ひとはとんと解せぬ、シテその先の相手は處娘にて候か、但し白拍子にて候

か。

遊仙 處娘も處娘も、揚貴妃や小町から酒上を取りさうな大美人でござる。

桂庵 シテマアそれは何者の娘でござる。

遊仙 ハテそれが知れてをれば戀煩ひはせぬわいの、この間開帳参りにふと見染めてから朝夕忘れぬ

娘の顔、この戀さへ叶ふ事なら余は何ほでも惜しまぬ、何とその娘に逢ふ知恵はあるまいか。

桂庵 知恵というたら何がなし、人立ち多いくんじゆの所をぶらぶらあるくが上分別。

遊仙 いかさまこの宇治などへ、螢見物などに出かけまい物でもない。

桂庵 犬もあるけば棒に逢ふといへば、川端をぶらぶら見あるいたら棒に逢ふまいものでもない。

遊仙 そんなら日の暮れぬ内に、宇治川のあたりを。

桂庵 サあるきませうか、行き戻りでも大きな道。

遊仙 フツトみなまでのたまうな、性をつける前祝ひに、少々なれども。

ト紙入より金を出し、

けんじ天皇。

桂庵 ヤこりや二兩、受納蜂の孫息子。

遊仙 見えたつたらばあとで。

桂庵 そんなら遊仙老。

遊仙 桂庵老随分氣をつけて。

桂庵 サアござりませ。

ト茶摘唄にて兩人下手へはひる、ト前の道具残らず引いてとり、淺黄幕を切つて落す。

本舞臺見付け奥深にして遠見宇治川の景なり、上の方丘の心にて柳の釣枝、舞臺前浪板、東西の花

道に青霞をとり付けし浪板せり上る、後ろ一面に浪の張物、手摺りの襟にして、こゝに綺麗なる屋形船、一面に障子立てあり、浪の音一聲にて道具納まる、ト直ぐに獨吟になる

よるべなぎさのあま小舟、いづく泊りとしらぬ火の。

トこの唄の内下の方より小舟に宮城阿曾次郎、瀬田伴藏、藪野丹六着附け袴大才にて提重を出し酒盛りしながらよき所に出づる。

伴藏 ヤア弾きをるぞく。

丹六 あの屋形舟と見えるわえ。

伴藏 聲はよいが、歌が解らぬ。

丹六 いかさま、歌が聞きたうござる。

ト始終酒盛りしながら捨ゼリフよろしく、阿曾次郎棹をさして、

阿曾 アイヤ随分唱歌は解つてござる、あの琴歌は不知火と申して九州菊地の秘曲にてあの外十八段

の浪返しと申す手がござる、西國にさへ弾ずる者稀なるに誰が傳へて、ハテ奥床しい。

伴藏 イヤモ我等などは歌の事は一向なもの、喉いた櫻に陽つなぐ心なしでござる。

丹六 ソレソレ、酒と肴で氣儘より外に存じませぬて。

伴藏 然しあの音聲では定めて顔も美しからう、あの障子を開けて歌はいでなア。

丹六 イヤ〜障子を開けて二度びつくり、思ひの外警女かなぞではあるまいか。

伴藏 いかさまさう聞くと、旨のやうに聞えまする。

阿會 イヤ〜あの女は警女ではござるまい。

兩人 そりや又なせでござります。

阿會 さればさ、すべて女の聲は陰聲と申せども盲目はわけて陰なれど、あの聲は陰中に陽を含み居

れば、女は女なれど兩眼は明らかと存じられます。

伴藏 いかさま目明きと聞くと、一倍顔が見たうござります。

阿會 何を仰せらるゝやら、ハ、ハ、ハ。

兩人 サアサア酒に致さう酒に致さう。

かぞへんとすれば秋の風。(ト歌の切れにとまる。)

ヤンヤ〜。

ト此内酒盛りになり歌の切れにて屋根船の障子一面開く、内に母操、着流し屋敷なりにて香をきいてゐる、娘深雪振袖帽子にて琴を前に置き、皐月、千代竹、桔梗腰元にて附添ひ居る。

千代 申し御寮人様、船の内もあまりお氣づまりにござりませう。

桔梗 ちつと川を御覽なされい。

深雪 イヤモウ、やつぱりこゝがよいわいなあ。

千代 そのやうにおつしやらずとも、まあくこれへ。

兩人 お出でなされませいなあ。

ト無理に深雪を前へ連れ来る、此内小舟は酒盛りしてゐる。

臯月 なんとこの景色は、どうぞござりますえ。

トこれにて深雪ふつと阿曾次郎を見て、

深雪 ほんにまあ、よい、けしきぢやわいなう。

ト風の音の鳴物になり、舟の内の鼻紙一面に散る、この内深雪の帽子巻上がる、皆々びつくりして、小舟の内もこなし。

伴藏 南無三寶、天狗風ぢや。

深雪 アレエ。

ト舟の中へ逃げてはひる。これにて障子を閉める。

丹六 萬歳樂々々。(トいろいろ散る物を押える。)

阿會 ハテけしからぬ川風、もうしづまりましてござる。

丹六 鼻紙も残らず散り、すんでの事羽織をとられようとした。(ト千代竹上を見て、)

伴藏 アレく、何やら空にちらちら飛んでをりまする。

ト皆々空を見て、

丹六 イヤ見事々々。

阿會 これがかのかまいたちと申すもので、風を巻き上げて風なぎますれば下りるものでござる。

トやはり静な風の音にて最後の帽子上よりちらく舞ひ下る、腰元兩人捨ゼリフにて手をアゝきいろくある。此内阿會次郎片手にて棹をさし片手に扇を持ちそろそろと舟を出す、此内深峰陣子を

開け窺つてゐる、此時帽子は川の中へ落ちようとする。阿會次郎程よく扇にて受け取る。

伴藏 丹六 イヤ見事々々。

ト褒める、此時小舟は屋形舟の際へ行きとまる。

ヲツトあたるぞく。(ト阿會次郎帽子を見て、)

阿會 こりや帽子と見えます。

腰元 ア、申し。

ト腰元三人を阿曾次郎見て。

阿曾 これはこなた衆しうちうのでござるか。

梶月 ハイ私わたくしの所ところの、御寮人ごれうじん様さまのでござります。

阿曾 それは幸さいひ、納なめておかつしやれ。

ト扇に頼子たのこをのせて出す。

千代 これはまあようお取りなされて下くださりました、今いまの様やう子すでは、なうさつきさん。

梶月 さいなう、定さだめてお喜よろこびなされますわいの。

桔梗 ほんにようお取とり下くださりました。

ト頼子たのこを取とつて障子しょうじの内うちへはひる。

丹六 とてもとてもの事ことにこの舟ふねを、もそつとそつちの方はうへやつてはどうでござるか。

伴藏 それくあの舟ふねの前まへへむけたらようござらう。

阿曾 ア、イヤく、これではよその舟ふねのお邪魔じまになれば、此舟このふねを遠とほざけるがようござらう。

ト棹しやくをさし戻もどさうとする所へ舟の障子しょうじを引ひき抜ぬく。

腰元 ア、申し申し、ちよつとお待ち下さりませ。

伴藏 これ／＼、舟を待てといはれまする。

丹六 さア／＼おひかへなされぬか、ドレ／＼。(ト丹六入りかはつて。)

御用と仰せらるゝは。

千代 イヤ此方の主人の中されますには、嗚今帽子をお取り下されしは御親切の段、一寸お目にか

りまして、お禮申したう存じますれば、

桔梗 さもしきこゝえもお慰みかたがた、何卒此方の舟へ御出でなされますやう、どうぞお願ひ申

しまする。(ト伴藏丹六こなしあつて。)

阿會 これは／＼御挨拶 忝うござりますれど、女中ばかりのお舟に同席致すは不躰にごされば、こ

の儀は御容赦下されい。

伴藏 これさ先生、そりや何事でござる、願つてもない幸ひなれば。

丹六 まあ／＼あれへござるがよろしうござる。

阿會 イヤ、男女七歳にして席を同じうせずと申す事もござれば。

伴藏 ハテ左様ではござれど、今日一日は學者をうつちやつて。

丹六 ぐつとくだけのるがようござらう。

阿會 これは又何事なにことを御ごせらるゝ、イヤなに女中ぢやうちう方宜あたしくお斷ことわり申まをして下くだされい。

桔梗 左様さまやうならあなた方あなたをお願ねがひ申まをして、口上こうじやうを申まをしておもらひ申まをしませう。

千代 それがよいわいの。サア申まをしあなた方あなた、どうぞ一寸いちゆん御出ごいでなされまして。

皐月 唯今ただいまの通とほりおつしやつて下くださりませ。

伴藏 丹六 サア私わたくしども共どもは。

ト阿會次郎へ氣兼ねのこなし。

腰元 三人 イエイエ、マアく一寸いちゆんでござります。

ト無理に引つばるこなし。

伴藏 丹六 然しからば長々ながく名代なぐだいに。

腰元 サア、お出いでなされませ。

ト無理に引ばり兩人上へ上る。

阿會 左様さまやうなら拙者せつしやは川下かはしもへ舟ふねをさげて。

ト棹をさしにかゝる、母操前へ出て、

操

ア、モシくマアくお待ちなされませ、先程より女子共に承りましたれど申さば遊興の場所、ひたすらこれへお出でなされますやう。

阿曾

イヤその儀はそれなる御兩所にお聞き下され。

ト又舟をさげようとするを伴藏丹六あわてゝとめ、

伴藏

どつこい、我々二人を人質におき、舟を下げようとはあまりでござる。

丹六

折角の仰せなれば、マアくこれへお出でなされい。

ト無理に手を取る。

阿曾

イヤく拙者は。

皆々

ハテさて、マアお出なさるがようござる。

トかすめたる遊山舟の鳴物になり、皆々無理に阿曾次郎を連れて舟の内へはひる。

腰元

マアマアこれへお出でなされませ。

ト上の方へすゝめる、此内深雪こなしあつて。

阿曾

イヤく矢張りこのまゝ。

操

それではかへつて悪うござります、マアくひらに。

阿曹 さやうなら御免。

ト三人よろしく上へならぶ、操、深雪、腰元下の方へならぶ。

イヤモウお構ひ下さるな、たつてのお招き故推参仕りましたが、誠に存じがけないお款待に預り忝き仕合せにござります。

操 ほんに先程は娘が帽子を、お取り下されました有難うござりまする。それ、お禮を。

深雪 ありがたう。

ト恥かしきこなし。

阿曾 これはく御挨拶いたみいたします。

操 持ち合せましたるさゝえもあらししてお呼立て申し、何の風情もござりませぬと、まづお氣晴しに一つお上りなされて下さりませ。

ト杯を阿曾次郎にさす。

阿曾 これはお杯下されますのでござりませう。

ト杯取り上げ阿曾次郎呑んで、

此のお杯は丹六殿へ。

丹六 かたはな
これは忝かたはない。

伴藏 つぎ
その次は拙者せつしやに廻まはさつしやれ。

丹六
ハテせはしない。

ト丹六飲んで、此内深雪阿曾次郎にこなしあつて千代竹に囁く、千代竹傍の扇を取つて深雪へ渡す。
深雪扇へ歌を書き千代竹に渡す、千代竹阿曾次郎の傍へそつとおく。

あ
お上りなされいでも、まづこれは御返ごへんばい杯。

阿曾 あそ
頂戴ちやうたい仕つかまつらう。

ト杯を取つて飲み操深雪へこなしあつて伴藏にさす、伴藏飲んで。

伴藏 ばんざう
憚りはげながら。

ト腰元へさす、各々拾ゼリフによろしく、此内阿曾次郎扇を取つて使つてゐる。

丹六
なんと小舟こぶねと違ちがひ、氣きが晴はれ々と致いたしたではござらぬか。

阿曾 あそ
成程なるほど諸國しよこくに名所なしょもござれど、山城やましろの宇治川うぢがははとりわけ名所なしょも多く、川かはの景色けしきは繪ゑに描かきましたやうな風情ふうせい、なんと御兩所ごりやうしょ絶景ぜつけいではござらぬか。

ト云ひながらふと扇を見てこなしあつて、

梅が香をこむる霞の絶間より、隠れて匂ふ鶯の聲。こりや拙者の扇。手蹟の見事さと云ひ歌のやさしさ、こりやいつの間に。

臯月 申し、そりや御寮人様でござりますわいなあ。

阿曾 さやうならばこれが。

操 ハイ、これはまあ娘とした事が、あなたのお扇子に。大方取違へましてがなござりませう。お

ゆるしなされて下さりませ。

阿曾 これはく御挨拶、いたみりまする。

伴藏 どうぞならう事なら我々にも。

丹六 イヤそれは格別、先程あれにて承りました爪音こそ、あれは筑紫の松浦檢校が手をつけまし

たる不知火と申す調べにて、かゝる秘曲は都といへど知る人稀なるに、何國のお方でござりませ

するか、卒爾ながら承りたうござります。

操 これはお尋ねにあづかりお恥かしう存じます、申すに名もない者ども、お明し申すは又折もご

ざりませう、あなたこそよしあるお方と見受けました、何卒御名をお聞かせ下されませうなら

有難う存じます。

阿曾

ア、イヤ私儀は西國方の浪人、おこがましよう名乗りますやうな者でもござりませぬが、とかく律の調べを好みまする、それにつけて菊地家には菊の葉と申す秘曲がござるよし、近頃なれなれしき申しやうながら、此の曲をお聞かせ下されませうならば、喜ばしう存じまする。

操

これはまあくわしう御存じ、その歌は娘がよう覚えてをりまする、最前のお禮に弾かせてお聞かせ申すでござりませう、なう娘、

ト深雪阿曾次郎へ見惚れうつとりして居る。

コレ娘、コレ、これいなう。

ト深雪びつくりして、

深雪

アイ。

操

これあなたの御所望ぢや程に、菊の葉をお聞かせ申しやいなう。

深雪

イニ私しや。

操

サアお聞かせ申しやいなう。

深雪

お恥かしうござりますわいなあ。

トこれにて操阿曾次郎と顔見合せ、

操 ホ、、、。

阿曾 ハ、、、。

ト此内深雪扇を出して皐月に曝く。

皐月 申しあなた様にはこの扇へ、何なりともお書きなされて下さりませとお願ひでござります。

阿曾 イヤモウ、拙者は筆と申しては不風雅でござれば、この儀はひらに御免下されい。

伴藏 ハ、、、、我らが申すやうな儀を仰せらるる。

丹六 見事な御手蹟で、ツイ何なりと。

千代 一筆是非にお願ひ申します。

阿曾 これは一しほ閑りいつた事。(ト扇を取つて開き、)

ムウこの扇面には一輪の 薙。

ト筆を取る、操こなしあつて、

操 ほんにまあさつきにからお話ばかり致して、あなた方には嘸御退屈にござりませう、ソレ御酒

をあげても。

桔梗 ハイ／＼サアお一つあがりませ。

伴藏 左様さまやうならも一つ下くださりようか。

ト又酒を飲む、此内阿曾次郎件の扇にさらさらと書き、

阿曾 これは御扇子おせんすをよごしました。

ト深雪一寸見て操へ渡す。

操 露つゆのひぬ間まの葬あまがほに照てらす日ひかけのつれなさに、あはれ一ト村雨むらさめのはらくとふれかし。ほんに

まあ情じやうのこもりしこの御作意ごさくい。

阿曾 何卒なにとぞ唯今ただいま申した菊きくの葉はを。

伴藏 イヤこれよりは御作意ごさくいの葬あまがほの歌うたに手てをつけたらば。

丹六 いかさま、こりや面白おもしろうござらう。

阿曾 幸さいはひ菊きくの葉はの調子てうしにて。

伴藏 いづれ一節ふしお頼たのみ申す。

皆々 サア所望しよぼうぢや、所望しよぼうぢや。

ト深雪恥かしきこなしにて、琴にかゝる事よろしく。

露つゆのひぬ間まの葬あまがほに、照てらす日影ひかげのつれなさに、あはれ一村雨むらさめの、はらく

と降れかし。

ト此内皆々酒盛りして居る、東の揚幕より以前の遊仙うそくとして出て来る、下手より桂庵出て行き合ひ、東の毘花道にて、

遊仙 ヲ、桂庵か。

桂庵 遊仙老。

遊仙 とかく娘に逢はぬわいの。

桂庵 口が暮れかゝつたらなほの事。

遊仙 どうぞ逢ひたいものぢやが。

桂庵 氣をつけてござりませ。

ト行き違ひ桂庵は舞臺の方遊仙は東の揚幕へはひる、唄切れる。

皆々 やんや〜。

トこれにて入相の鐘鳴る。

阿曾 アリヤもふ入相、日が暮れまして女中と同船は人の思わく。

伴藏 ハテこれからが螢の最中。

腰元 まそつとこれにおいでなされませ。

阿曾 イヤ御縁もござらば、又御意得まするでござりまする。

阿曾次郎捨ゼリフよろしく深雪桔梗に囁く、桔梗心得て硯と紙とを持ち伴藏に聞く。

伴藏 名か、ムへよし〜。

此内丹六は先へ小舟へ乗り伴藏を見て、

丹六 伴藏殿、何をなさる〜。

伴藏 拙者は唯今戀歌を書いて居りまする。

ト書付けて渡す、桔梗深雪へ渡す。

阿曾 サア〜、伴藏殿。

伴藏 ア、大分食べ酔つた。

トひよろ〜とする。

阿曾 これはしたり、まづ〜。

ト無理に小舟へおろす。

操 なんの風情もござりませぬにおひまを取らしまして、お氣の毒に存じまする。

阿曾　これは／＼御挨拶。

操　くるしからずば今しばらく、なう娘。

深雪　アイ。(ト恥かしきこなし。)

阿曾　アイヤお暇申しまする。

深雪　そんならどうでも。

阿曾　御縁もござらば。

腰元　ア、申し。

阿曾　おさらばでござります。

ト以前の鳴物にて阿曾次郎棹をさし丹六伴蔵は酔ひたるこなし、この舟化へはひる、舞臺指々後見送りうつとりしてゐる深雪へ腰元附人。

腰元　御寮人様。

ト深雪矢張りうつとりしてゐる。

申し、もうし。ミン。

操　これ娘。

ト操深雪の春を扇にて一寸打つ、これにて深雪びつくりして持ちたる扇を落して心付き取り上げ、顔にあてるを、木の頭、操思入。腰元本意なきこなし、双方よろしく。

ひやうし 幕

二幕目

明石の浦舟の場

役名

宮城阿曾次郎、深雪、腰元三人、關助。

本舞臺見附奥深に浪幕、舞臺前一面に浪幕、上の方にひがき元船、下手に百石程の船、兩方より傍へよせて兩方共苦かけてあり、日覆より月をろし、すべて明石の浦風待の體、浪の音、幕あく。直ぐに床の淨瑠璃。

晴れて行く播摩濁、一夜明石の浦が、り苦をならべし舟もやひ、頃さへ秋の月満ちてこゝぞ名に負ふ磯貝の、娘深雪は過しより積る思ひのかこち顔、何がな心なくさめの腰元共がよりこぞり。

ト淨瑠璃の内首を上げると内に深雪短檠をかざし歌書など讀んで居る、腰元三人侍附きて居て。

腰一 アレ／＼見やしやんせ、向うの方が淡路島、こちらに見ゆるが舞子の濱、夜でさへこの景色ほ

んに晝とつくりと眺めたら、よい慰みでござんせう。

腰二 これにつけても辛氣なは、御寮人様のお顔もち。

腰三 いろ／＼とおなぐさめ申しても、お心が浮かぬので困つた事ではござんせぬか。

侍 イヤモそれ故に身共が心配、此度御主人實右衛門様御歸國のところ大阪よりの御病氣にて、陸

路をお下り、母御操際にも引き續いてお立ち、荷物も残らず積み入れ、深雪様をあづかり下る

船中にて、もしお煩ひでも出では我々が不調法、口頃お氣に入りのお手前達随分お諫め申して

おくりやれ。

腰一 申しお寮人様、あの月でも御覽じて、お心をうき／＼とあそばしませ。

へ すゝむるつき／＼うかまぬ深雪。

深雪 我が心すぎにし方をたちかえり、ふるき都ぞ今は戀しき、この歌は源氏の君須磨の浦にさすら

ひ給ひて、都を思ひやり給ひし歌、ほんに思へばあぢきないは我が身の上、なんぼそなた衆が

いさめてたもつても、なんの心が勇まうぞえ。

ヘッ 打ちしめりたる苦の露消ゆるばかりの物思ひ、知つたる中の腰元ども、

腰一 ヲ、お道理でござります、過し宇治の螢狩のゑにしの帽子のお世話。

腰二 船へお迎ひ申したる御浪人のその立派さ。

深雪 それ故ふつと思ひ染め、こがれくらすその内に。

腰一 桂庵が婿沙汰をこちら聞いて喜びしが。

腰二 思ひがけない間違ひで。

深雪 どうぞま一度逢ひたいと思つて居る間にこの迎ひ、國へ行つたその時は一生お目にかゝらぬか

と思ひまはせばまはすほど、心の内の本意なさ戀しさ、推量してたういなう。

ヘッ 推量してとばかりにて、泣く音は浦の小夜千鳥、浪間たゞよふ風情なり。

侍 ヤアこれはしたり、皆よつてお氣を慰めようとはせず、かへつて何か申し出し猶じめく、

コレどうぞおいさめ申して呉れ。

腰一 サアそれが私の思ひ付き、その時にお弾きなされた菊の葉を、ここでさらふもせめてものお心

ゆかし。

皆々 そりやよい思ひ付きぢやわいなあ。

侍

なるほどこれはよいお氣慰めであらう、サア〜こゝで、サ、早う。

とすゝめられさすが否とも岩ばしの、まだ解けやらぬ谷間の深雪、心づくしの爪琴を、月に向うてかきならす。

ト麗元深雪の前へ琴を出す。

絃によるてうつなぎそふ、こなたの小舟は東へとさしのぼる月眺めんと、

苦を拂うて阿曾次郎空に見入りて獨り言。

阿曾

ア、誠や同じ月とは云ひながら所によつてこれを賞す、信濃に更科近江には石山、こゝも名に負ふ明石の浦、幸ひの舟がかり思はぬうつさん、ハテ心涼しき風情ぢやなあ、これにつけても思ひ出すは故郷の空、兄駒澤主膳殿には不慮の御最期、心に望まぬ家督の御堂も兄の横死の實否を糺し、後室のお頼み江戸表へ立ち歸り若殿治部之助様をお迎へ申し、これを功に正三郎が跡目の願ひ、佞人共を退けんがこの身の望み。これはしたり沖中とは云へど他聞もあり。

トあたりへこなし。

ハテ、ひとしほの眺めぢやなあ。

心ゆるまぬ弓張の月の餘念もなき目の座頭、聲をしるべにさぐり出で。

ト苦市座頭のこしらへにて出て来り、

苦市

申し阿會次郎様、それにござりまするか。

阿會

ヲ、苦市殿、あぶないぞや。

苦市

イエ〜 私わたくしの名なの苦市たまいちをしつかりと捕とらへをりまする。

トさぐりよつて、

誠まことにあぶないと云いへば私わたくしの身みの上うへ、此度このまゝ旦那衆だんなちゆうのお蔭かげで都みやこへ上あり参まゐる道々みちづかにて胡麻ごまの糰だんごにつ
けられました、ア、かう申まをす内うちも震ふるえが出でますやうなあぶない事こと、所ところをああなたのお蔭かげを掛かけま
してやうやう遁のがれ、このやうに室むろから一所いこに便船びんせんして下くださるお心こゝろざし、何なんとお禮れいを申まをしませう
やら。

阿會

何なんの〜、弱よわきを救すくふは武士ぶしの習ならひ、禮れいにおよぶ事ことではない。

苦市

イエ〜それでも命いのちの親おや。

阿會

ハテようござるわいの。

苦市

有ありがたうござります。

ハ座頭ざとうの禮れいの子期伯牙しきはくが、それにはあらねど美妙びめうの爪つま音ね、思おもはずハツと心耳しんじを

すまし。

ト琴の音に氣をつけるこなし。

阿會 ア、隣りの舟にも、お仲間が乗つてゐらるゝやら、あの爪音。

苦市 ほんに、こりや妙手でござりまする。

ト阿會次郎こなしあつて、

阿會 あの爪音は菊の葉、菊地のお家より外に稀なるあの秘曲。

苦市 イエ〜筑紫では専らはやりまして、我々風情の者迄も稀き覺えた菊の葉、お慰みに一寸お聞

かせ申しませうか。

阿會 それは幸ひ、貴公のお手許承はらうか。

苦市 せめてお伽を申すがお調ひ、さらば一曲調へませうか。

どれ一曲と三味線に合す調子も浪返し 舟をへだての連れ弾きこと。

ト苦市三味線にかゝる。

菊の栞の端手唱歌。

こなたの船には娘の深雪、それと聞くより不審顔。

トこの淨瑠璃の内苜市琴に合はせて三味線を弾く、深雪こなし。

深雪

アレ隣りの三味線もやつぱり菊の葉、思ひもよらぬつれづれは互ひに想ふ想夫恋、これにつけても思ひ出す。

ト扇を出してこなし。

へこひ

戀しゆかしにその人のもしやと思ふ娘氣の、見やる目先に思はずふつと。

ト深雪こなしあつて阿曾次郎と顔見合はせ、

深雪

や、あなたは。

ト行かうとするを皆々留めて、

皆々

これはしたり、おあぶなうござります。

深雪

ほんに思ひがけないと云はうか、夢ではないかいなあ。

皆々

これはまたけしからぬ、お氣のふれた、マア〜こちらへござります。

深雪

フム、やつぱりあなたたちやわいなう。

腰一

これはしたり、夜露があたるとお身の毒。

皆々

サアこちらへござりませ。

サア、こちへと皆々が、無理に連れ立ち船の内、後に心はひくばちの縁の糸や三味線の、どうなる事と是非もなく、なんと唱歌やかたみの扇、目あては小舟はつたりと、落ちしはなんぞと取るひまに、打ちつれてこそ入りにけり。

ト此内深雪阿曾次郎の方へ扇を授り、阿曾次郎上り上る、皆々深雪を苦の藤へ連れてはひる、阿曾次郎いろいとすかし見て、

阿曾 ハ、ア、大船より女中方が取り落したものと見える。

露けき繪面葬は。

コリヤこれいつぞや、宇治で書いたる葬の書議。

苦市 エ。

阿曾 イヤ、頼あらしには船を出すであらう。こなたは先へ休まつしやれ。

苦市 左様ならお先へふせりますでござりませう、あなたももうお休みなされませ、ア、明けても暮れても目を塞いでゐながら寝るといふもおかしたものの、左様なら横になりますでござりませう。

〱 苦市はさぐりもつてぞ入りにける。

ト 苦市 苦の内へはひる。

阿會

ハテどうしてこの扇が、思はずこゝで我手に入りしは、合點のゆかぬ。

〱 思案に月も雲がくれ、心もそらに娘の深雪常には細き娘氣も、思ひ詰めて

は一筋に忍び出でたる船やぐら、すかし眺めて。

ト 深雪 出て來り、

深雪

申し阿會次郎様。

阿會

身が名をよびしこなた様は。

深雪

いづぞや宇治でお目にかゝりし。

阿會

ム、すりやその時に思はずも。

深雪

帽子をおめぐみ下されました。

阿會

その息女がどうしこここへ。

深雪

これには段々深い様子の、マア何よりはあなたはどうして。

〱 飛び立つ心 あぶなやと手をさしのべて 〱 ひつたりといだき月影 〱 苦船に

折しも晴る、^ムむら雲、^ム空にも粹や、^ム通すらん。

ト阿曾次郎手をとりにおろす。

阿曾 テモ思ひがけない、していづれへお越しなるぞ。

深雪 阿曾次郎様、あなたはお馴染でござりまするなあ。

阿曾 これはしたり、この阿曾次郎お恨み受ける覚えはござらぬ。

深雪 サアそれがあなたの御馴染、いつぞや宇治でお目にかゝり恥かしい事ながら、思ひ染めても

母さんの手前、本意ないその場のお別れに、聞いたあなたの御名前。

家へ歸れば父さんが、殿御持たすといはしやんす。

一旦見染めたあなたをのけ外に殿御は持つまいと、思うて暮すその内に桂庵様といふお人がくわしいあなたのお話に、父さんは御存じなけれど私が嬉しさ、月待ちの折りからあなたのお出と聞き、待ちこがれて居りましたに、あなたと偽り似ても似つかぬお人のお出で、私のびつくり父様のお腹立ち、その日暮方誠のあなたのお出なれど父様の不興のお言葉、其時お別れ申してよ

り、どうぞま一度お目にかゝつてこのわけをと、思ふ心の届いてや、おなつかしうござりまする。
^ムすがりなげくぞ道理なり。

阿曾

ハテ聞てそれは思ひもよらぬ事でござつた、いづぞや宇治でお別れ申してより村屋様をもつて度々のお招き、然し義遠の儀は少しも存ぜず、所にちと仔細あつて他國仕る故何かの御禮、又はお願乞に参りしが御か不興の御挨拶、合點ゆかぬが心せく儘そのまゝ出立致せしが磯貝氏の御息女と、とくにも存じてをつたれば又致方もあるべきに、それは格別御兩親へも何かの御禮。

深雪

父様も母様もあの船にはをりませぬ。

阿曾

して女儀ばかり、たゞお獨りにてこの旅路は。

深雪

サア父様も母様も先へお下り遊ばして私を後に残しおきしが、急に下せとのお便り故是非なく京地を立ちました、國へ歸ると父様が殿御持たすとおつしやるけれど、一旦思ひ染めたあなたをのけ外に殿御をもつ心はござりませぬ、幸ひこゝでお目にかゝりましたは神佛の御引き合せ、私と一所にあの船へお乗りなされて、國へ歸つて父様にお逢ひなされて下さりませ。

阿曾

サアそのお心は嬉しけれど娶るには必ず媒介あり、嫁に某はこの度鎌倉のお使、首尾よくしおほせなば、表むきより媒介をもつて申し入れん、それ迄は随分御無事で、サア早う船へお歸りなされませ。

深雪 そんならあなたと一所いしょに、お連れつなされて下くださりませ。

阿曾 ハテ、それでは親御おやの手前てまえ。

深雪 そんなら私わがの願ねがひは叶かなひませぬかえ。

阿曾 サア唯ただいま今いまかうと申まをすわけにも。

深雪 さうぢや、南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

へおむ
思おもひさつたる覺悟かくごの體てい、

阿曾 これはしたり、早はやまるまい。

深雪 それぢやといつて。

トふりさうとする。

阿曾 これは又短慮またりよ千萬ばん。今いま入水いりずみなす時ときは南親みなせへ不孝ふかうになるがや。

深雪 そんなら連れて退のいて下くださりますか。

阿曾 サアそれは。

深雪 ならぬはやつぱり。

阿曾 ぢやと申まをして。

深雪 イエ、私しや死にたい、死にたうござります。

阿曾 すりや某が得心なくばどうあつても。

深雪 なんの生きてをりませう、どうぞ願ひを叶へて下さりませ。

トすがりつく、阿曾次郎思入。

阿曾 是非に及ばぬ、叶へて進ぜう。

深雪 そんならあなたと御一所に。

阿曾 義を立つる時には磯貝氏の御愛子を見殺すに似たり、これも一つは不仁のいたり。

深雪 エ、嬉しうござります。

阿曾 さはさりながら御両親の御歎きなきやう、某と立ち退きしと一紙を残して。

深雪 そんなら私は委しいわけを。

阿曾 随分人目にたゝぬやう。

深雪 かならず待つて下さりませ。

阿曾 一旦の言葉は金鐵、サア早う。

深雪 アイ。

「あいと返事も愛嬌の露重げなる苦船へ、いそぐ立つて入りにけり。」

ト苦船の蔭へはひる。

「後見すまして阿曾次郎、溜息ほつと月隠れ。」

ト此時月を引き上げる。

阿曾 思ひがけない深雪殿の心ざし、この場で否むその時はわれ故命すてたりと、風聞あつては言譯

なし、ひとまづこの場を連れぬいて九州長へ飛脚をもつて、さうぢやさうぢや。

「思案は胸に碇綱、露の命の風ふせぐ、苦押し分けて入りにけり。」

ト阿曾次郎はひる。

「時分はよしと悪者共苦わきより窺ひ出で、相圖の呼子を吹き立つれば小舟
早めて押し来る、互に何か囁き合ひ元の所へ忍び入る、折りから向ふに關
助が逃げ来る悪者のがさじと、息を切つて馳せ來り。」

ト關助と悪者一卷を奪ひ合ひながら出て來り一寸入れかはつて、

關助 大切な預りの一卷、怪我せぬ内に渡してしまへ。

悪者 折角手に入るこの品を、うぬらに取られてつままるものか。

關助 何をうぬが。

ト又一寸立廻つてきつと見得。此時阿曾次郎苦船より出て來り關助と顔見合せ、

ヤ旦那様か、お尋ね申しましたわいな。

阿曾 ヲ、關助か。

ト此時惡者窺ひ出て、

二人 阿曾次郎觀念。

打つてかゝるを身をかはし、襦を拂へばこなたも曲者、さうはさせじと双

方より岩も碎けと打ち込む双物を、しつかと留めて動かせず。

深雪は何かと調へて、またも櫓にのび上り。

ト深雪出て、

深雪 阿曾次郎様。

阿曾 深雪殿か。

深雪 よう待つて居て下さりました。

トこれより又立廻りになる。

〽の 乗り移らんとする所へ。

大勢

風が直つた、船を出すぞく。

ト方々にて云ふ、立廻りの舟船頭一人水をくぐつて逃げる、阿曾次郎悪者を後へ打ち込む、此時大船は帆を十分に揚げ此船をはすに段々と奥へ引く、深雪氣をもむこなし、又悪者阿曾次郎にかゝるを見事に切り込む、途前阿曾次郎屍體をつく、此時青市出てかぢりつくをおさへる、小べりへ手をかける、木の頭、刀を抜き海を見こむ。

〽あしら云か 後白浪とぞ。

ト三重にて双方よろしく。

幕

大詰

島田宿屋の場
大井川の場

役名

駒澤次郎左衛門實は宮城阿曾次郎、岩代瀧太、朝顔實は深雪、戎屋徳

右衛門、奴關助、奴三平、坂田勇藏、出来島團平、蛇遣ひ蛇皮六、番頭喜助

女郎お島、同お若、同おせん等。

本舞臺三間の間常足、本陣表がムリ、講中札色々掛けあり、見附け赤麩駄荷の書割り、上手障子屋
體、下手板塀、こゝに御泊宿坂屋と記しこれより下手本陣門の書割り、この間出入りあり、よき所
に大内家中駒澤次郎左衛門、岩代瀧太と記せし立札、こゝに戎屋の抱へ女郎おせん、お若、お島の
三人いづれも女郎のなり、奴關助外に中間三人、雲助四人とせり合うてゐる、驛路入り馬士頃にて
暮あく。

雲一 コレ／＼親力、與津からこゝまでの道、一本の酒手はお定まり。

電二 お大名であらうが商人であらうが、馬に乗つたら酒手はとらア。

四人 酒手を下せえ／＼。

關助 ハテ、わいらが與津から酒手なしで乗せようと云つた故、安いものだと銘々乗つたが。

可内 ヲ、この可内も土手平も、乗つたゞけは錢を拂つた。

中間 云ひ分はねえはずを、つけ上りのした馬士ども。

中三 酒手よこせと悪口雑言、思へばく慮外な奴の。

雲二 何も慮外云つた覺えはねえ、たかど酒手をとらうやるめえとのいさくさだ。

四 ハテ四も五もいらねえ、酒手を貰ふかこの首をやるか、親方片をつけてくんねえな。

奴皆 云はせておけば法外な奴。(トきつとなるを鬪助なだめる、)

雲一 何だ切る氣か、道中の雲助は豆腐や西瓜のやうに、造作なく切れねえぞ、なんだく。

二 びく／＼するな、駄折助め、二本差しが恐くつては、田樂は食はれねえぞ。

皆々 サア切つて貰へく。

關助 事を無難に濟まさうと、云はしておけばさまぐの出放題、モウ料簡がならないわい。

ト双方又立ちかゝる、馬士唄になり或屋徳右衛門、やつし羽織のこしらへにて下手より出て來りこの中へはひり。

徳右 これはしたり、マアくお静まりなされませ、私が悪うは計ひませぬ、お腹が立たうがマア

マア御料簡なされませ。

關助 さう云ふ貴様は誰ぢや。

徳右 私の本陣戎屋徳右衛門でござりまする。サアくあなた方は御尤もでござりますが、相手が

悪うござります、マア〜おしづまり下さりませ、ヤイ雲助ども。

四人 へイ。(ト徳右衛門を見てしよげるこなし、)

徳右 わいらは何をやかましく云ふのだ、こつちの大事なお客様に過言をはくと、街道筋を封じらぞよ。

四人 へエ。(ト皆々頭をかく、)

奴皆 ぢやによつて。(トおこつくを徳右衛門とめて、)

徳右 サア〜ようござります、道中で弱身を見せるとお國の名折れと、思召す所は御尤もでござりまする。

雲一 コレ〜親方、こちららの譯も聞いて貰はう、客を馬に乗せて酒手を貰ふは當りまへ、その漕手てをかれこれ云はれちやア。

三 さうだ〜、この府中の宿きつて、東海道を股にかける、おいら達の名折れ。

徳右 サア〜よいわ、おぬし達の云ふ事も聞えてある。

奴皆 そんなら亭主、こちらが誤りか。

雲皆 おいら達が誤りでござんすか。

徳右 サア／＼、双方ともに解つてござります。

關助 コリヤ亭主、上げたり下げたり。

奴皆 どう挨拶をするのだやい。

徳右 たかど貰ふのぢや。

皆々 ヤア、。(ト有り合ふ筈をとつて)

徳右 おはま、錢一貫取つておじや。

下女 ハイ／＼。(ト錢箱の錢を持ち來り徳右衛門に渡す。)

徳右 そりや持つて行け。(ト錢を投げ出す、皆々こなし。)あなた方がやらぬとおつしやるも意地、又こ

いつらが取らねばならぬと云ふも理窟、申をとつて私が挨拶の一貫文、これをとつてすまして

貰はう。

雲一 成程、親方のさばきは尤もだ、一貫では足らねども徳右衛門様の挨拶、これですましてやれ。

三人 ハイ親力、有難うございます。(ト皆々捨ゼリフにてわやく／＼云うて下座へはひる。)

關助 コリヤ御亭主、アノ鳥目をその許にやらしては。

徳右 ハテようござりまする、あいづらを相手にするはかつたいに棒打ち、うつちやつて奥で御体止

なされませ。

お若 ほんにどうなる事と思つたに、旦那さんのおさばきで、

せん 早速らちがあいてお目出たう存じます。

お島 誰ぢやと思ふ、我屋の徳右衛門は男でござんす。

徳右 時にあなた方は御休息なされませ。

關助 いかにもさう致さう。そんなら御亭主。

徳右 ドレ、御案内致しませう。

ト馬士唄になり、徳右衛門先に關助、娘三人ついて奥へはひる、女形殘り。

お若 なんと皆さん、どうで今夜はやかましからうぞえ。

せん サアそのやかましいで思ひ出した。アノこちのやかまし屋の喜助どんが、アノごぜの朝顔をつ

けつ廻しつ。

お島 それ／＼この間も道中で捕へて、手を合はせての無理くどき、あんな男にさうなら馬にはじ

かれたがはるかまし。

お若 これはしたり、又そのやうなかけ口、喜助どんが聞かんしたら大抵の事ぢやあるまいぞえ。

お島 それでも私等が聞いて居るともしらず、たつた一度それが厭なら口々なりと、袂をとらへて吸付いたり、あきれて物が云はれぬわえ、ほんに厚皮と云はうか、じんばり男と云はうか。

トこの内宿引喜助番頭のなりにて窺ひ居る。

喜助 そりや誰が。

お島 アノ宿引の喜助づらが。ハト顔を見てびつくりして、

三人 ヤアお前は喜助どん。

喜助 なんだ、俺が尻引出すとあきもせぬ焼もち、朝顔に惚れたが何ぢや、あいつに男がなけりや俺も女房はない、すりや互ひに妻なし夫なし、連立つて乞食してもわいらに三文も無心云つた事はない、あまりがや／＼とかげ口きムアがるな、あたいま／＼しい、ソレお客が御膳まへだ、臺所へ行つて手傳へ。

三人 アイ。

喜助 行けやい、エ、うせうと云ふに。

三人 ヲ、こは。(ト三人奥へはひる。)

喜助 エ、いま／＼しい、帳なとつけておかう。

ト喜助帳合にかゝる、四ツ竹節錫杖の音になり、花道より蛇皮六、蛇を遣ひながら出て来り、

蛇皮 御當地にては長虫、常陸の國では山うなぎ、これわいさでどつこいしよ御めんよう。あそこ

の門へ立つと蜂拂ふやうにぬかしをる、いまくしい縛めだ。(トこのやうな事なながら本舞臺へ来る。) ヤアさて御當地にては長虫、常陸の國では山うなぎ、まづ最初お目にかけてするが、

喜助 通れく、籠をつけてゐて手がふさがつてゐる。

蛇皮 ハテどこでも悪い受けぢや、これぢやア蛇遣ひも荷賣がへとでかけさアなるめえ。

ト行かうとするを喜助見て、

喜助 コリヤく、手前は蛇皮六ぢやアねえか。

蛇皮 ヲ、喜助さん、見知り越しに通れとは馴れた人だぞ。

喜助 われと知らぬ故通れと云つたのだ。料簡さつせい〜。

蛇皮 時にこなさん、何やら能に頼みたいと云はしつたが。

喜助 われを見掛けて頼むと云つたは、今宵の泊り客岩代瀧太様のお頼み。(ト兩人あたりを見て小太に

なつて、) 相役の副澤次郎左衛門といふ人を、しくぢらさねば御分地の大學堂が太堂の掛け、

又瀧太様の出世の邪魔、そこでその次郎左衛門が預つてゐらるゝお納戸金五百兩は、出来ぬ

平といふ人が盗み取つて、俺に渡しておかしやつたが持ちつけぬ大枚の金、隠し所に困つたてや。

蛇皮 さうしてお前五百兩の大金はどこへ埋めた。

喜助 悪例の所は首めかしいと人の氣のつかねえやうに、奥座敷の釣花活へ隠して、上へ花まで生けておいたから氣遣ひなし。

蛇皮 うまいく、さうしてその分口でも來るかえ。

喜助 そりや知れた事、割附しなくてどうするものか。(ト小判一兩出して蛇皮六へ渡す。)

蛇皮 忝い、すぐさまこつちへ受内峠。コリヤアノ五百兩の分口がたつた一兩かえ。

喜助 ハテマアきゝやれ、（蛇皮高次郎左衛門尉晩々々金のあらため、是非後に金あらための時、五百兩不足と云ひたてるわ、その時にわれを盗人にしてまづ國へ連れて行くわ、その時道から逃がしてくれるわ、そこで五十兩貰うた金を茄子割り、なんとちつとの間盗人になつてくれまいか。）

蛇皮 そりやはや盗人になるまいものでもねえが、五百兩の盗人になつて五十兩山割りとは、チト壺算用ぢやあるめえか。

喜助 そんなら俺が思案が悪いか。

蛇皮 サア、マアよく思つてもみなせえ、その次郎左衛門といふ奴が短氣者で、用金の盗人詮議にも

及ばぬと、討ちはなされたら廿五兩で命の釣りかへ、こいつ中々あぶない仕事だ。

喜助 そんならどうしたものだしらん。

蛇皮 なんでも殺したら殺しどく、後から尻のこぬ奴が有りさうなものだが。

喜助 いかさまなア。

蛇皮 ヲ、ソレ、この間からこゝへも来る朝顔といふ盲目女、こゝらあたりに差構ひのない宿なし、

あいつはどうだらうナ。

喜助 コレサ、粗相云ふな、俺が蝶よ花よと惚れこんでゐるアノ女。

蛇皮 ハテさて、何をするにも怒づく、あいつを金の泥棒にしてばらして仕舞へばよいぢやアねえ

か。

喜助 ぢやというてアノ朝顔の器量を見い、この島田宿 廣しといへども、あゝいふ面は二町目の花魁

にもない器量よし。

蛇皮 さうしてお前の戀は叶つたかな。

喜助 イヤモウ、いろ／＼と口説けども得心せぬわ。

蛇皮 ソレ見なせえ、あいつは云ひかはした男がある故、所詮お前の云ふ事は聞き入れぬ、所で厄病の神で敵討。

喜助 ヲ、出来た、委細は後に。

蛇皮 首尾よくいつたら。

喜助 五十兩は山割りし。

蛇皮 喜助さん。

喜助 蛇皮六、しつかりと頼んだぞよ。

蛇皮 へ、さす物ぢやございやせん。(トこの時揚幕にて子役大勢。)

大勢 朝顔ぢや〜。

喜助 コリヤ。(ト騒ぐ。)

蛇皮 合點だ。

ト喜助は奥、蛇皮六は下手へはひる、四ツ竹節になり花道より朝顔實は深雪、石竹の切繼ぎ衣裳、袖乞ひの普女のこしらへにて琴を背負ひ杖をつき出て来る、後より子役大勢ついて来る。

子一 コレノ、盲目の姉さん。

常住弾かんす朝顔の歌。

三 三味線や琴が聞きたい。

四 サア、早う弾いて聞かせて。

皆々 下されいなう。

朝顔 ア、コレハ、いつもお門までさんじます、旦那様方のお子達、ドレ、御機嫌をそこねぬ中

にお聞かせ申しませう。(ト云ひ、舞臺へ来る、この時喜助出て来り、)

喜助 ヤイ、いけやかましい餓鬼めらだ、早く歸りやアがれ。

子一 ヤア、我屋の男が怒りをつた。

皆々 早く逃げる、ハ、アイ、ハ。(トはやしなから下手へはひる。)

喜助 エ、騒々しい餓鬼めらだ。(ト朝顔の傍へより、) コレ朝顔、今日はまだ逢はぬの、マア、こつ

ちへ来やれ。(ト門、竹の合方になり、兩人真中へ座る。)

ほんにナア、日かいても見えぬが美しい事わいな、日がな一日宿中を歩き廻りさぞ草臥れるであらうなア。コレ朝顔や、こゝにも長うぬやるがこの近所より何とか云ふであらうが、在郷者は

油断ゆだんがならぬぞや、てんがう云うても決して返事へんじはしやらぬがよいぞや、どんな深みふかみへはまらうも知れぬぞ、よいか〜。そなた思ふも身みを思ふぢや、コレうんと云つてくれる氣きはあるまいか。

朝顔

これは〜見る影かげもない私わたくしを、有難ありがたうござりますれど男をとこを持つ事ことばかりは。

喜助

コレサ、さう云ふものではないものだ、なう俺おれぢやとて宿屋奉公やどやまづらうしてゐれども、明日あすにもこの島田しまだか金谷かねやの内うちへ店みせを出ださねばならぬ、それ、さうなる時はお主ぬしをと心に鈍おろそをおろしておい、コレ朝顔あさなほ、うんと云ひなよ〜。

朝顔

サア有難ありがたうはござりますれど、かやうに致いたして居ゐりまするも、私わたくしには許婚いひなづけが。

喜助

エ〜。

朝顔

サア云いふに云いはれぬ譯わけがござりますれば、どうぞこればかりは御免ごめんなされて下くださりませ。

喜助

ナニそんな野暮やぼを云いはずと、コレ朝顔あさなほ。

朝顔

どうぞ御免ごめんなされて下くださりませ。

喜助

それぢやアならぬといふのか。いゝわ、さう木きで鼻はなをくゝつたやうに云いはれちやア、俺おれも口くちをひらけて引ひ込んでひつこでもゐられねえ、俺おれもナ、今いままで云いふ事こと聞きいて貰もらはうと思おもつて、こんな物ものでも引ひ

ばらして恩をかけておいたぞよ。サア應と云へばよし、いやなら少しづつ貸した小遣錢から着せた物、算用せい。

朝顔 サアお前様のが御尤もでござりまするが、どうぞ。

喜助 それだから云ふ事を聞きなよ。

朝顔 サアその儀は。

喜助 エ、面倒な、着せた物はがうか。

朝顔 こゝは往來中のござりますれば、お許しなされて下さりませ。

喜助 そんなら云ふ事聞くか。

朝顔 サアそれは。

喜助 サア。

朝顔 サア。

兩人 サアくくく。

喜助 え、持のあかぬどう盲目め、どうするか見やアがれ。

ト朝顔の帯を解きにかゝる、この時蛇皮六窺ひ出て喜助をひきのけ顔にてしらせ投げた思入。

蛇皮 アよんやさ。(ト喜助のみこみ投げられたる思入あつて、)

喜助 アイタ、、、、、、ヤイ蛇皮六なんで投げた。

喜助 ヲ、投げたばかりぢやアねえ、四の五のと云やアふみのめすぞ。

蛇皮 なんだふみのめす、コレよう聞けよ、コノ女郎めはさいなむすじがあつてさいなむのだ、わりや又なんで邪魔をするのだ。

蛇皮 俺も又この鞆顔はチトかばふ筋があつてかばふのだが、われがさいなむ筋を聞かうかえ。

喜助 望みなら云つて聞かさう、この女郎めはあとの月からこの宿へ来て、わいらが宿へ泊つて引解き一つでふるつてゐるを見て、俺もふつと思ふにはまんざら悪うも育たぬ奴。可愛事だと思つて昨日は百、今日は二百と錢をやつて情をかけ、口説いてみても色よい返事はなし、コリヤまだ俺が心が届かぬと、コレ聞けよ、このつぎくの着物から帯ゆもじまでつもつてみれば六貫七百、昨々も三百はりこんだ、酒肴を買ひ調へ口説いても三文とも思はぬ返事、そのやうに厭がる者に俺も亦大枚の、錢を貸しちやアおかれねえ、サアすつばだかになつて俺に返せ、またかばふ筋といふ返事を聞かう、どうぢやえ。

蛇皮 ム、そんなら貴様、アノおめくに惚れて六貫七百入れ上げたのか。

喜助 商賣は宿引でも、世話をしかねぬこの喜助さ。

蛇皮 モシ又その七貫を返したら。

喜助 ハテ、損さへせねばもとくさ。

蛇皮 イ、ワ、その金返さう。

喜助 アノ乞食のわれが、大枚七貫。

蛇皮 ヲ、おめえも知つてる通り賭場へ直れば、三十貫や四十貫はふり廻す蛇皮六だ、幸ひこゝに持

つてゐる七貫といやアア一兩、これで算用はすんだぞよ。(トかます煙草人より百錢を出して、)

そりや一兩。

喜助 いゝわ、一兩が戻るからは料簡してやる、エ、丁度よい壺を蛇皮六め、ウ又覚えてゐるよ、い

ま〜しい。

トやはり口ツ竹の食方にて息入あつて奥へはひる、この時朝顔探りよつて、

朝顔 申し蛇皮六様とやら、剛造も薄いこの朝顔に今の款儀をお見捨てなう、大枚のお金を立替下さ

れました、エ、有難うござりまする。(ト手を合はす、蛇皮六こなし、)

蛇皮 ハテ禮云はんすには及ばぬ、互ひの事でござんすわい。

朝顔

デモ一枚のお金を助力なされて下さります事ぢやもの、さういふあなたの金聲は、モシ立花様と申しませなんだかえ。

蛇皮

いかに下油、ア、イヤそんな者ではない、初めて逢うた蛇遣ひ、こんな身すぎはしてをれど正直正統なこの蛇皮六、こなたに金を助力するの何の由縁はなけれども、わたしはこなたによう似た娘がある故子のやうに思はれて、見る度毎にハ、アいたはしい事ぢや、目かいの見えぬにとほくとあちらこちらの門に立つ、心算を察すると跡が一杯になつて、汗と涙がごつちやになつてこぼれるわいなう。この上は煩はぬやうに身を大切にさつしやれや、又これはどのやう事があるまいものでもない、用意に持つてござれ、さうして何でも食べたい物買うて食はつしやれ。

ト以前の小判を出す。

朝顔

イエ〜決してお心遣ひ下さりますナ、さうしてこんな事、マア〜そちらへ。

蛇皮

マア〜入るまいけれど年とつた者の云ふ事、ハテナ納めておかつしやれ、ありやうはわしや他人のやうには思はれぬ、さうしておりやチト用がある程に、一廻り行て來るから待つてゐやんせ。(ト無理に朝顔の懐中へ金を入れる、朝顔こなし)

朝顔

段々との志、嬉しうござんす、けれどこれではどうも。

蛇皮

ドリヤ行てこようか。(ト蛇皮六舌を出し小睡れする、朝顔後を見送り、)

朝顔

落目を救ふ人の誠と、由縁もない私に路用の金まで、エ、忝なうござります、それにつけても阿會次郎様は何處にどうしてござるやら、エ、苦に色かへる濱の松風ぢやナア。

ト四ツ竹の合方になり、朝顔下手へはひる、蛇皮六窺ひ出で。

蛇皮

まんまとつかませたアノ金、今にも五百兩の言談になつたら喜助どんと云ひ合はして、齋人はあの女郎、廿五兩は我等がしめこ、イヤ待てよ、このやうな小さな事をせうより今喜助が云つた奥座敷の花消に、理めてある五百兩をわれらが着服。こいつは拍子まんが直つて来たわえ、しかしどこらの言談に聞してあるかしらぬ。(ト奥へ行きにかゝるを、關助出で支へる。)

エ、びつくりするわえ。

關助

なにびつくりする、さうしてむせえなりで、貴様は何だ。

蛇皮

俺か、おらア蛇、イヤサ蛇遣ひの蛇皮六と云ふもんでござんす。

關助

その蛇遣ひが奥を見込んで何をする。

蛇皮

われが構つた事ぢやアねえわ。

關助 イ、ヤ、この關助の目にかゝつた日にやめつたにこの場。

蛇皮 エ。

關助 動かすものか。

蛇皮 さうぬかしや、うぬから。

ト兩人よろしく立廻りあつて、關助蛇皮六を押へる、この見得よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間高二重、上手網代塀、いつもの所枝折戸、向う山水を描きし襖、二重上に岩代瀧太
榜着付、駒澤次郎左衛門同じく袴、下に出来島團平、坂田勇藏半纏ぶつきき羽織にて、いづれも酒
盛りの體。平舞臺下手に夷屋徳右衛門袴羽織にて手をつかへ居る、誂への唄にて道具留る。

徳石 粗末なる田舎酒でござりますが、宜しうめし上つて下さりませ。

駒澤 イヤモウ町噂の御料理、祝着に存ずる。

岩代 はなはだ馳走で食べ過ぎたて。

坂田 モウ御酒はこれにて納めてくりやれ。

出来 我々は一向御酒は不調法、杯さへ手にとらないわ。

徳石 そのやうにおつしやらずと、もう一つお上りなされませ。

岩代 さうして何か耳かしまして奥や中の間で歌ひをるが、アリヤ何だ。

徳石 ヘイ、アノ唄は朝顔と申しまして、年の頃は十八九の女子、可愛い事には盲目でござりまするが、いつぞやから参りましてアノ唄を琴に調べて、袖乞を致しまするが、根がうづ高い故專

ら流行まして、あちらの座敷こちらの座敷と、今ではこの島田で流行兒でござりまする。

坂田 イヤ成程それは珍らしい。イヤ御家老へ申し上げます、その女をこれへ招びよせ朝顔の唱歌を

承はりまするは、いかゞでござりませう。

出来 いかさま勇藏殿の仰せらるゝ通り、旅中の鬱散でござれば、御家老に承はらずとも苦しいは

ござりますまい。

駒澤 なにさま鬱散とござれば、苦しうもござるまい、ナウ瀧太殿。

岩代 さやうでござる、亭主その朝顔とやらをこれへよんでくりやれ。

徳石 かしこまりました、たしか勝手へ参つて居る様子でござりました、私が連れて参りませう。

ト下手へはひる。

出来 琴が上手で器量がよいとは十分でござる、しかし日が見えぬとは惜しいもんではござらぬか。

坂田 どういふ身の素性が存ぜぬが、不便な者でござる。

岩代 なに、女が来るまでモウ一戯くみませうか。

駒澤 それがよくござる。(トこの時奥にて、)

徳右 サア〜朝顔、早うおぢやいの。(トこれにて床の浮瑠璃になる。)

むざんなるかな秋月の、娘深雪は身に積る敷きの敷の重なりて、晴失ふ日
なし鳥、杖柱とも頼みてし朝香はもろく朝露と、消え残りたる身ひとつを
さすがに捨てても縁先の、飛石探る足元も危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風
情にて、やう〜座敷へ手をつかへ。

ト朝顔をいざなひ徳右衛門出て来り。

徳右 これが即ち唯今申し上げました、朝顔でござりまする。コリヤ何も恐い事はない、サ、つツト

出やいなう。

朝顔 ハイ〜。めしましたはこのお座敷でござりまするか、拙い調もお笑ひ草、おはもじさまや。
と會釋する、顔も深雪がなれのはて、一目見るより駒澤はさてはとびつく

りしながらも、あけてそれとも岩代瀧太、己が悪事のあらはれに、互ひに色目さとられじと、空に紛らす煙草の煙。

徳右 申し御覽じませ、悪うも育たぬやうに見えます、なんといじらしいではござりませぬか。

坂田 ハテ聞いたよりよい器量、これなれば定めてその歌も、さぞかしと思はるゝ。

徳右 イヤモウ私が申すもあぢなものなれど、なか／＼あぢをやりまする。

出来 しかれば早く唄はせい。

坂田 朝顔とやら、サア／＼早う。

兩人 所望ぢやく。

朝顔 ハイ／＼。

兩人 サア早く。

朝顔 ハイ。

徳右 これはしたり、何を遠慮する事があつて、サア弾きや、コレお客は御大身様、弾いたらそれだけの事は。サ、早う弾きやいなう。

引立てる氣の弾かせたさ、厚き情は身に染みながら、思ひ廻せば。

朝顔 淺間あさましい。

駒澤 ヤ。

朝顔 ハイ、唄うたひますでござりまする。

へこが 焦るゝ夫をとこのあるぞとも知らぬ盲目めくらの探り手さぐに、戀こひゆる心こころつくし琴こと、誰たれかは憂うれさを斗と爲と巾きんの糸いとより細ほそき指ゆび先に、差さす爪つめさへも八橋やっはしの、やつれはてたる身みをかこち、涙なみだにくもる爪つめしらべ。

出来 何をうちく、早はやう唄うたへ。

朝顔 ハイイ。(ト朝顔涙ながらに琴に向ふ。)

へつゆ 露つゆのひぬ間の朝顔あさがおに照てらす日影ひかげのつれなさに、あわれ一むらさめ村雨むらさめのはらくと降ふれかし。

坂田 成程なほほど奥おくにて歌うたふよりはまた一倍ばい、よく見みればなか／＼袖そで乞こひをする女おんなとも見みえぬが、これには何なんぞ仔細しさいのありさうな事ことナア。

出来 これさく勇藏ゆうざう殿どの、アノ器量きりやうで袖そで乞こひをするからは、何なんでもいがみ根性こんじやうでもあつて、親おやの勘當かんどう一

家親類にも見放されたとかいふやうな事であらう。

坂田 イヤ、さやうとも見えませぬ、コリヤ女、そちや不義いたづらであらうがいの。

朝顔 イエ、なんのマア、さやうな事ではござりませぬ。

出来 然らばやつぱりいがみ根性。

徳右 イヤ、モシ可愛さうに何のそんな事でござりませう、コリヤ朝顔、存もお慰みぢや、

そちがその落ぶれた事、お話し申しやいなう。

朝顔 サア尋ねに預かりますもこの身の懺悔、私も以前はよしある武士の娘、小さい時に許嫁の

殿御があつたとの事なれども、それはまだ東西わかぬ中の事、様子あつて父様は御浪人なされ

て都の御住居、そのうちに重なる月口に人ととなり、ふつと見染めたお方がござりまして、その

殿御の後を慕うて國を出ましたのでござります。へつ岩代こなしあつて、

岩代 なに男の後を慕ひしとは。どふいふ仔細ぢや、尋ねてみさつしやい。

出来 シテ尋ぬる男といふは何者。

朝顔 見染めた殿御は御浪人。

岩代 ヤア。

坂田 シテその馴染は。

朝顔 サアその馴染は、すぎし卯月の中空に都の辰巳宇治の舟、こがれよるべの蟹狩。

嵐ひ染めたる戀人と、語らふ間さへ夏の夜の短かい契りの本意ない別れ、
所尋ぬるたよりさへ、思ふにまかせぬ國の迎ひ。

親々に誘はれ難波の浦を舟出して、身をつくしたる、

うき思ひ、泣いて明石の風待ちに、たま／＼逢ひは逢ひながらつれなき嵐
に吹き分けられ、國へ歸れば父母の、

思ひもよらぬ夫定め、立つる操を破らじと屋敷をぬけて數々の、憂目をしのぎ都路へ上つて聞
けばその人は、東國の旅と聞く悲しさ。

又も都を迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の關路を後に近江路や、みの尾張さ
へ定めなき、戀しく／＼に目を泣きつぶし、ものゝ黒白も水鳥の陸にさまよ
ふ悲しさは、いつの世いかなる報いにて重ね／＼の歎きの數、あはれみ給
へとばかりにて聲をしのびて歎きけり。

岩代

エ、面白くもない長事で、ほつとりと退屈した、アノ女早く歸せ〜。

早く歸せと云ふ折から、息を切らして駆け来る侍。

トバタ〜になり下座より、半纏股引の侍出て、

侍

ハッお旦那へ申し上げます、唯今お納戸金勘定にかゝりましたる所、金子五百兩の紛失故早速申上げます。

駒澤

ハテ心得ぬ、今日一日に五百兩の大金不足致さうやうもなし、ハテナア。

岩代

旅行のうち金預りは駒澤殿。

出来

見えぬとばかりにては事すまぬ。

坂田

但し盗賊の仕業なるか。

徳右

私が宿で金子が失つては、本陣の名折れ。(トこの時喜助上手より出て、)

喜助

へい〜、申し上げます、その盗賊は外ぢやアござりませぬ、こゝに居る女郎めでござりまする。

ト朝顔を引出す、皆々こなし。

皆々
なんと。

喜助 サア盗んだ金出してしまへ。

朝顔 これく喜助さん、滅相な何のそんな事、夢にも覚えは。

喜助 ないとは云はさぬ、うぬが懐に。(ト引付けようとするを、徳右衛門とめて、)

徳右 コリヤ待て喜助、可愛さうに目も見えぬ者が、大枚五百兩といふ金をどうして取らうはずがな

い、その上ついに奥へ通した事もないに、イヤコリヤ盗人はあれぢやあるまいく。

喜助 コレく旦那殿、そのやうにお前さん朝顔をおかばひなされても、もう叶ひませぬ、その證據

を出してお目にかけてませう。(ト無理に懐中へ手を入れ、以前の小判を出して、)

この一兩の金がお尋ねなさる多の字の極印、これでござりませう。(ト出す、出来鳥取つて、)

出来 コリヤこれ正しく殿の極印。

岩代 あと四百九十九兩の金子はどう致した、早く白状させい。

喜助 かしこまりました、ヤイ女郎め、われ人につられければ人亦われにつらし、よう思ひ知つたか、

この金はどうして持つてゐる、サアその譯をぬかせ、ぬかさぬか。

朝顔 サアその金は。

喜助 ぬかさによ、かう。(ト打たんとする、朝顔こなし、)

朝顔 マア〜待つて下さりませ、恩ある人の難儀とつゝみましたが、ありやうに申します、その

金は最前、蛇遣ひの蛇皮六様に。(トこの時上手にて、)

關助 ヲ、その盗賊、唯今それへ。

ト關助蛇皮六に繩かけ引立て出る、蛇皮六二重の駒澤、岩代を見て。

蛇皮 やあなたは。(ト岩代云ふなと思入。)

關助 エ、下にをらう。この蛇遣ひ迂曲な奴と見受けました故、引すへましてござりまする。

喜助 コウ〜蛇皮六、五百兩の盗賊か、さうではあるまいがの。

蛇皮 どうして〜正直正道な俺がなにそんな事。ハイ〜朝顔に相違ござりませぬ。

出来 ヤイ〜蛇皮六とやら、その方に金子の疑ひかゝりをれば、覚えのない事ならば覚えないと、

眞直にこの場で申し上げい。

朝顔 これ〜蛇皮六さん、最前お前に貰ひました金が紛失のお金とやら、それ故にこの難儀、あり

やうに申しました、どうぞ詫言して下さんせいなア。

蛇皮 これ思ひもよらぬ事を云ふわえ、俺がいつ貴様に金をやつた、貴様に一兩もやる金がありや、

こんなざまをして居ぬわえ、そんな覚えはないぞ、アリヤみんな嘘でござりまする。

朝顔 それでも最前表にて。

蛇皮 ハ、ア、コリヤ人違ひだな、ついに見た事もねえ女子。ハイ私は毛頭いさゝか、少しも覺えのない事でござりまする。

朝顔 それはマア何を云はしやんすぞいなア、あれほど最前誠らしう金を貸して下さんしたお前が、そのやうな事を云はしやんして。

蛇皮 ハテ知らぬ、覺えはない。

岩代 盜賊は女めに極まつた、ソレ繩ぶて。

出來 ハツ。(ト圍平下りて朝顔に繩うつ、)

關助 その女になぜ繩をおかけなさるゝな。

岩代 この女は盜賊の科極まりし故、繩かけるが何とした。

關助 イヤ盜賊は此奴に極まる。(ト蛇皮六へ思入。)

出來 蛇皮六を盜賊と云ふ證據は。

關助 その證據と申しまするは、唯今その女が貰ひし金と申したら、彼奴一兩の金貸した覺えはないと答へし詞のはしぐ、きつと詮議相とげなば金の在所、又相ずりの輩まで。

皆々 ヤ。(トぎつくり思入。)

關助 ハテ、知れさうなものでござる。

岩代 イヤ何は格別、蛇皮六は金を貸さぬといふがコレ正銘、云ひがけひろぐにツくい女郎め、うぬ許婚を袖に致して不義働くその罰で、今そのさまになり下り、盜賊までひろぐ横道者、ソレ詮議して白状させい。

喜助 サア女郎め、金の在所ぬかしてしまへ。

朝顔 イ、エ、覚えはござりませぬ。

喜助 ム、云はざアこれくらはすぞ、ほえるなよ。

徳石 コレまで、どうするのぢや。

喜助 又とめさつしやるか。

徳石 さればいやい、たかどか弱いこの女、そのやうにぶち打擲してひよつと死でもした時は、誰をつらまへて詮議する。

喜助 エ、。

徳石 サアそれぢやによつて、こゝはマア一旦ゆるめておいたが、よさうなものやうに存じます

る。

岩代 この上は瀧太が、金の在所云はしてみせませう。

駒澤 アイヤ瀧太殿、お待ちなされい。

岩代 ナゼとめさつしやる。

駒澤 さればでござる、惣じて罪の疑はしきは輕うはからふが公の道、最前より見る所なか／＼アノ

女盗み致すやうな者とも見えませぬ、然し證據は彼が懐中より極印金の出でたる上は、コリヤ疑ひはその方に、サかゝり合はせし者ども、手前が存する旨あれば立騒がすと下に居やれ。

岩代 これさ／＼駒澤殿、御自分一人承知でも、手延べにならぬ殿の用金、それだによつてアノ女。

駒澤 ハテ旅中の金子預りはこの駒澤、事あらだてなば拙者はもとより、相役方まで越度ならん、そ

こを思つてこの詮議、出立までに相糺し金の員數揃ひなば、貴殿の越度と云ふではなし、いらざる事に瀧太殿餘りお氣をもまれぬが、かへつてその身のお篤かと存じまする。(ト岩代思入。)

イヤなに亭主、朝顔とやはそちにしかと預けおく。

徳右 スリヤ私に、ハイ、しつかりと預りました。

岩代 蛇皮六は身共があづかり、きつと糾明。

駒澤 アノ貴殿が。

岩代 いかにも。

駒澤 ハテナア。

喜助 ヤレく、息勢はつて草臥れた。

徳右 マア奥へござつておしづまり。

關助 なにさま、出立までは開もあらう。

岩代 蛇皮六を引立てい。

駒澤 徳右衛門にはその女。

徳右 きつとお預り申しまする。

八景太が駒の算用違ひ、桁ははづさぬ駒澤が、心あるじは朝顔を引立ていこ
そ。

ト唄になり駒澤は朝顔へこなしあつて、岩代は出来島坂田喜助付き添ひ、關助は蛇皮六を引立て皆
皆奥へはひる、朝顔、徳右衛門後へ残り思入あつて。

徳右 預かる事は預かつたが、ひよんな物ではあるわい。

朝顔 このやうな身に落ぶれし故にみするかと人さんのお疑ひ、ほんに／＼なんの／＼源文そんなさ

もしい心は持ちませぬ、まだこの上にどんな辛い身になるとも厭はねど、盗人かたりと云はれるは情ない身の上ぢやなア。

徳右 ヲ、尤もぢや、弱い者は歩にとらるゝと目の見えぬそちが、なんの五百兩の金を盗まうぞ、そ

りや俺がよう知つて居る、お二人の中お一人は、どうやらお慈悲深さうな方、お頼み申してこの繩は解いてやる、きなくせずと俺次第になつてゐや。

朝顔 エ、有難うござります、侍の娘が今のやうに打懸に差ひ、いかに目かいの見えぬぢやとて

覚えもない盗賊の悪名、私や口惜しうござります／＼、死にたうござりますわいなア。

徳右 これはしたり、今死んだら白いか黒いかはわかりもせうが、その尋ぬる人にはどうして差はれ

る、とかく人は命が物種。

朝顔 それぢやと申して。

徳右 ハテ、若い者といふものは。(ト朝顔を下へすゑる。)俺にまで泣かしおる。

ト兩人よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間中足の二重、見付け襖、上の方床の間、上下落間建仁寺垣、植込み書割、座敷の體
上手に釣花活あり、八ツの鐘にて道具納まる。

や、更け渡る秋の夜や、寢られぬまゝに駒澤は、四邊見廻し獨り言。

ト駒澤二重上手に住ひ居る。

駒澤

君が一日の情に妻が百年の命を捨つるといふ事、今までよそ事に聞きしが、今といふ我が身に
にひしと當つたり、一人の妹は若殿のために最期をとげ、今又深雪がなれのはて袖乞とまで
なり下り、我を尋ぬるせつなる心底、不便とは思へども大事の役目、大望を抱へしこの身、先
頃志州鳥羽浦にて逢ひたる時にも、やさしき詞かけずんば今の憂き身をさせまじきに、知らぬ
事とは云ひながら、誠ある女に難難さするも我が誤り、この年月の辛苦を語るその身より、傍
に聞き居る心の苦しさを、思廻せば不便やなア。

悲歎の涙に暮れ居けり、かくと様子を白張りの襖押しあけおしやれのおな

へ。

ト女郎お鳥以前のなりにて出て、

お島 モウシ、まだお休みなされませぬか。

駒澤 イヤモウ晝は乗物にて折々睡眠致せば、今夜はどうか寢苦しい。サ、勝手へ行つて休んでたも。

お島 モシ寢苦しうてお伽があるなら、おみ足をさすりませうか。

駒澤 ア、イヤそれには及ばぬ、サ、行きや。

お島 そんなら今夜も一人寢せうか、ア、情しらすめが。

へ としやべり廻つて入りにけり。(トお島よろしくあつて奥へはひる。)

駒澤 ア、時に五百兩の金の紛失、ム。

へく 工夫をこらすその折から、何心なく亭主は立出で。

徳右 これは御家老様には、まだお休みなされませぬか。

駒澤 ヲ、徳右衛門、さてく今宵は大きに馳走、殊に様々の事が出来致し、定めて亭主も心勞であらうな。

徳右 これは、結構なお詞、私はテトあなた様にお願ひがござります。

駒澤 ム、願ひとは何事ぢや。

徳右

餘トの事ことでもござりませぬ、最前さいぜんお預あづかり申まをしました朝あさ廣ひろが事ことでござりまする、御存ごぞん知られします
通り目とほりめは見みえず、常つねに奥おくへはやりませぬ者もの、なか／＼もつて盗ぬすみさうな女にとは存ぞんじませぬ。

駒澤

サ、手前てまへもさやう存ぞんじた故相ゆゑあひやく役やくどもの手てにかけず、それ故ゆゑその許もとに預あづかけ申まをした。

ト 右衛門横手を打ち。

徳右

ア、シタリ、又またお侍さむらひさま様の知ち恵ゑは別べつなもの、町人ちやうどながら徳右とくさく衛門ゑもん感かん心しん致いたしました、とても事こと
にあの儀ぎを。

駒澤

ハテ解とくなりとはほどくなりとおぬしの勝手かつて次第しだい、徳右とくさく衛門ゑもんお手前てまへは町人ちやうどに似合にあはぬ人の落目おちめ
を見捨みすてぬ親切せつせつ、それについて、テトその許もとに頼たのみたい事ことがある。

徳右

イヤモ、あなた様さまのお頼たのみなら何なになりとも、シテそのお頼たのみは。

駒澤

イヤ外の事ほかでもない、やはり朝顔あさなほの事こと、よしある人の娘むすめと見みえるがさて／＼切せつなる志こころざし。かけ
構かまはぬ事ことながら不便ふびんに思おもふ、幸さいひ持もち合あはせたるこの二品ふたしな、徳右とくさく衛門ゑもんその方かたにしつかりと預あづかけ
る間あひだ、朝顔あさなほに渡わたしてくりやれ。

徳右

委細わいさいかしこまりました。(ト二品手にとり、) コリヤマアおびたゞしいお金かね、その上うへこの袱紗ふくさ包かみ
は。

駒澤 ヲ、それこそは大明國秘法の目薬、甲子の年に出生せし男子の生血を以て服すれば、いかなる眼病も即座に平癒、朝顔に渡してくりやれ。

徳右 これは、何から何まで、お心を籠められた下され物、朝顔に渡し喜ばせまするでござりませう。

駒澤 何かにつけておぬしの世話、よきにはからうてくりやれ。

徳右 かしこまりました、最早更けましたればお休みなされませ。(ト徳右衛門、駒澤立ち上り、)駒澤 ア、世の成行とは云ひながら、我故深雪がなれのはて。

徳右 やつれにやつれし朝顔が。

駒澤 身の上話も胸に釘。

徳右 戀故にこそ目なし鳥。

駒澤 我が良薬は奥へても。

徳右 何卒本服させんにも。

駒澤 たゞ得がたきは男子の生血。

徳右 一人助けて一人を殺す。

駒澤 人の命は金づくにも。

徳右 かどなへ見れば我も甲子、モシヤ年度を御存知あつてか。(ト兩人顔見合せ)

駒澤 徳右衛門、まだ行きやらぬか。

徳右 旦那様。

駒澤 明朝逢ひませう。

胸に一物主人の心、臭の臥所へ、

ト兩人こなしよろしく、道具ぶんどす。

本舞臺三間の間中足の屋體、上手に釣花沽かけてあり、すべて奥座敷の板棧、送り返しにて道具箱

まゐる。

ここは入りけり、やゝ更け渡る秋の夜や、庭には蟲の聲々に鎌首もつた
げ蛇皮六が

ト下手より蛇皮六窺ひ出る、床の合方、蟲の音。

蛇皮 瀧太様のお差圖で、治郎左衛門をばらしてくれいとのお頼み、まてよ、アノ治郎左衛門といふ

奴はたしかに宮城阿曾次郎、あれが宮城ならなか〜おいら風情の手ではゆかぬ、なまなか事をしだしたら俺が首はころり、それよりは奥へふんごんで、満座の中で恥面かゝせ。ヲ、さうだ、まてよ。それよりはとつくりと利害を説き、俺が落ぶれた難儀の事を話したら、少々は貸してくれまい物でもない。まてよ、貸りた所が五兩か十兩の目くされ金、それよりは喜助に聞いた奥座敷の釣花活に、四百五十兩どめてあるを俺が一人着服して、こゝを随徳寺、それがいつちよい判箇ぢや。(ト邊りを見廻し釣花生けを見付け、このうち駒澤障子をあげ一寸見る。)さては話の釣花活、これぢやな、幸ひ邊りに人目もなし、瀧太の頼みはうつちやつて、さらばお金を。

ト二重へ上らうとする所へ圖平出て、

出来 蛇皮六か。

蛇皮 アイ。(トびつくりして精のき、よく〜見て)お前は最前のお侍。

出来 喜助を知らぬか。

蛇皮 喜助をお尋ねなさるゝは、定めて金の事でござりませう。

出来 いかにも、金を隠しおきしは奥座敷と聞く。

蛇皮 サアその金の在所は、知つて居ります。

出来 スリヤそちが。

蛇皮 シテ分口の五十兩は、どうでござりまする。

出来 氣遣ひ致すな。五百兩盗み出だし内四百五十兩は喜助に預け、残り五十兩の内一兩は喜助に渡

し四十九兩は身共が所持する。

蛇皮 そんなら早う戴きませうかえ。

出来 そりや駒澤を立たして後の事。

蛇皮 そんなら祝ひに一つしめませうか。

兩人 ハよい／＼／＼。(ト手を打つ、この時鶴笛になり、奥にて、)

それお立ちぢやぞえ。(ト上手より坂田勇藏出る、蛇皮六下手へ隠れる。)

坂田 最早寅の上刻。

出来 出立の刻限。

坂田 お支度がよくば参りませう。(ト奥へ云ふ、兩人奥にて、)

駒澤 いかにも出立致さう。(ト駒澤、岩代 女共皆々附添ひ出る。)

岩代 岩澤殿、出立は相なりませすまい。

駒澤 ム、拙者に^{せつしや}出立^{でしたつ}がならぬとは。

岩代 臂^{うで}に紛失^{きんしつ}の五百兩の盜賊^{たうぞく}は知^しれましたか。

駒澤 お氣遣^{きづか}ひなさうな、五百兩の金^{かね}に跣躰^{ちんたい}はござらぬ。

岩代 金^{かね}に跣躰^{ちんたい}はござらぬとは。

駒澤 淨^{じやう}みし奴^{やつ}は相^あ知^しれました。

岩代 スリヤその盜賊^{たうぞく}は。

駒澤 盜賊^{たうぞく}はアノ花活^{はないけ}。

岩代 ヤ。

駒澤 サ、あやつを吟味^{ぎんみ}致^{いた}しなば、相^あ知^しれさうなものでござる。

出来 それ知^しられたら。

ト圍平拔討ちに駒澤へかゝる、駒澤支へながら釣花活へ手裏劍を打つ、これにて四百五十兩落ちる、この時圍平の懷中より金包みを引出し。

駒澤 員^{あかし}も四百五十兩、あと四十九兩は圍平殿のお働^{はたら}き。

坂田 あと一兩は盜賊の金、それにて都合五百兩の紛失^{きんしつ}の金揃^{かねぞろ}ふ上^{うへ}からは。

駒澤 蛇皮六そちにも疑ひはれた。

岩代 シテ五百兩の盜賊は。

駒澤 その盜賊はこの花活。

岩代 ヤア。

駒澤 無難に金子かへる上は、強ひて詮議はいらざる事。

岩代 スリヤこのまゝに。

駒澤 許しつかはす拙者が裁判、灘太殿お心に叶ひましたか。

岩代 イヤ叶ひました、すんど心に叶ひました。

駒澤 然らば金子紛失の儀は、御沙汰御無用。

岩代 いかにも承知つかまつと。

關助 シテこの者は。

駒澤 きつと糾明致す奴なれど、以前いさゝか恩義もあればその返報、エイ。

ト花活の中へ金包みを入れ投げてやる。

蛇皮 ヤア、こりやお金、エ、有難い。

とほうく、逃げて歸りける。(ト蛇皮六逸散に花道へはひる、雨車になる。)

岩代 ヤア、けしからぬ雨の脚。

坂田 ソレ雨具の用意。

皆々 ハ、ア。(ト下手より大勢にて乗物を一挺かき出る。)

岩代 駒澤殿、お先へ。

ト岩代乗物へ乗る、供廻りよろしく、團平附いて花道へはひる。

駒澤 コリヤく女ども、徳右衛門を呼んでくりやれ。

女皆 旦那さんく。(ト奥より徳右衛門出て、)

徳右 これはお早お立にござりまするか。

駒澤 フ、サク、さてく昨夜より段々の世話、別して朝顔の一節旅行の鬱散、感心致した、先程

の品この扇子もろとも、は、な、に遣はしたも。(ト袱紗につみし扇を渡す。)

徳右 何から何までお情深い旦那様、さやうならば随分ともに御道中恙なく、めでたうお國入りあそ

ばされませう。

關助 エ、生憎降りが強くなりました。

駒澤 急がずばぬれざらましを旅人の。

徳右 あとよりはるゝ野路の村雨。これが大方やらすの雨とか、申しまするのでござりませう。

駒澤 いかさま、その村雨の露のひぬ間を朝顔に、今のこの身を、語り聞かさば。

徳右 エ。

駒澤 さらば。(ト乗物へはひる。)

關助 おたち。(ト乗物へ關助、坂田勇藏、家來附添ひ花道へはひる。)

お島 なんと皆さん、大水の出たあとのやうぢやないかえ。

せん 大水のはづぢや、このマア雨の降りやうわいな。

お若 このやうに降つたら大井川が留らうぞえ。

お島 川が留つたら又大客ぢや、覺悟しなさんせ廻しぢやぞえ。

せん 申し旦那さん、まだ夜明けまでは早うござりますれば。

皆々 チトお休みなされませ。

徳右 イヤおりやまだチト用がある、わいらは座敷のはき掃除して早う休みや。

皆々 ハイ〜合點でござんす、サ、おぢや〜。

ト女形皆々奥へはひる、ト上手より喜助、朝顔を引立て出て來り、

喜助

サアくうせいノどめくらめ、うぬは繩をかけてけつかつたに、どうして繩を解きやアがつた、それはさうとうぬに貸した金を返すか、但し俺が心に隨うか。

朝顔

サアその金故に最前の難儀。

喜助

われの誼議はおりや知らぬ、金返すか抱かれて寝るか、サアノ、どうぢやぞえ。

トこの時徳右衛門、喜助を投げ懐中より金を出して、

徳右

そりや借りの一兩、取つておけ。(ト喜助取つて、)

喜助

エ、折角物になる所旦那様の支へこさへ、何とせう、主と病にや勝たれぬ、マアこの金はお貰ひ申して、思へばアノ女。

徳右

ヤ。

喜助

あなたの髻が曲つてゐる。(ト喜助振り上げし手を指さして奥へはひる。)

面ふくらしして入りにけり。

朝顔

常任お世話になる上、あられもない事お聞かせ申しまして、お恥かしう存じます。

徳右

コレ今の志はわしが金ぢやない、今夜お泊りの御家老様がこなさんに渡してくれいと、くれ

ぐれとのお頼み、まだくその餘りがこれほど、外に扇が一本、これも御大身様がはなちやと云うて下さつた、こなさんにきつと渡しますぞ。

手渡しすればいぶかしげに。

朝顔 このやうに澤山に、お金を下されうはずはなし。

徳右 その上にこの扇、ア、何やら書いてある。

朝顔 エ、その扇に。

徳右 一輪の朝顔が書いてある。

朝顔 モウシ、その傍に何ぞ書いてござりまするか。

徳右 ヲ、書いてあるく、何ぢや露のひぬ間の朝顔、コリヤ朝顔の歌ぢや、さうして裏にも何やら

書いてある。

朝顔 何と書いてござりまする、ちやつと聞かして下さりませ。

徳右 宮城阿曾次郎こと駒澤次郎左衛門と書いてある。

朝顔 エ、。

ハツとびつくり俄かの仰天。

そんなら御大身と云つたは阿曾次郎様であつたか。エ、知らなんだくく、遅かつたわいなう。

ト身をもだえ泣き伏す、徳右衛門不審のこなし。

徳右 コリヤ、遅かつたとは、そりや何が遅かつた。

朝顔 さいなア、常からあなたの御親切、焦れて日まで泣きつぶせし殿鞆といふは、この扇を持つてゐる阿曾次郎様の事でござりまするわいなア。

徳右 ヤアくく。(ト徳右衛門びつくりこなし。)

朝顔 道理こそ長前より、よう似たお聲と思ひしが、御大身とある故詞もかけず居ましたが、そんならやつぱり阿曾次郎様、かう云ふ内も心がせく、お後を慕うて。(ト駆け出すを徳右衛門とめて、) サア心がせくは尤もながら、折悪うこの大雨、殊に目かいの見えぬ身でこの行先は大井川。水に溺れて死ねば死ね、こゝ放して下さりませ。徳右 然しながらこの吹き降り、ヨ、幸ひの簑と笠。

へい 行かんとすれば支へる喜助、ふり切る拍子に身は先へ、よろめく手許へ。

トこの時喜助出て朝顔を支へるを、徳右衛門これを支へて、この立廻りよろしく。

ソレ笠。

天の助けあて忝かたじけなしと押しお戴いたき、杖つゑを力ちからに降ふる雨あめもいつかな厭いとはぬ女の念力ねんりき、
後あとを慕したうて追おうて行く。

ト朝瀧袋を着、笠をかざしてよろしく花道へはひる。

徳右 ヲ、さうぢや。

ト徳右衛門行きにかゝるを喜助支へる、立廻りながら袴をとる事あつて、ト喜助を當て花道付け
際にてきつと見得、これにて舞臺の喜助見事にかへる。

後あとを慕したうて。

トよろしく三重、雨車、雷の音にて、

幕

返し

本舞臺向う一面大井川の遠見の張物、こゝに以前の奴鬨助真中に立身、左右に川邊人足大勢取巻き居

る、この見得禪の勤めの鳴物にて暮あく。

關助 コリヤうぬら、何とするのだ。

人一 ヲ、何ともしねえが、おのれが主人。

二 駒澤とやは川を渡つたそれ故に。

三 われが附添ひあつては邪魔と。

四 さる侍に頼まれて。

五 主従二人ひきはなしたも。

六 一緒において働かせぬため。

七 俺の仲間の大勢にかうとり巻かれちやア。

八 モウ叶はねえ一文奴め。

皆々 覺悟しろ。

關助 へ、エ、ほざいたり川越めら、うぬらの手ごめに合ふものか。

一 その廣言あとで聞かうわ。

二 面倒だ、たゝんで仕舞へ。

皆々

がつてん
合點だ。

ト浪の音、詭への鳴物になり關助人足を相手によくしぬきの立廻り存分あつて、ト々皆々を退
込みきつとなり、こゝへ人足一人打つてかゝるを當てよ。

關助

御主人様おしじんさまの御身おみの上うへ、ちつとも早くはや。(ト見事にかへし。)

ヲ、さうだ。

ト花道へはひる、ト淺黄幕切つて落す、と旅人の仕出しよろしく捨ゼリフあつて上手へはひる、浪
の音打上げ淺黄幕切つて落す。

本舞臺一面大井川の體、二の手三の手浪子掃り、舞臺上手詭への蛇籠並べあり、真中詭への拾枝、精
々に蛇籠をおき、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、浪の音、雨車にて道具とまる。と直ぐ
に床の淨瑠璃になり。

追おて行ゆく、名なに高たかき街道かいだう一の大井川おおいがは、ししのを亂みだして降ふる雨あめに打うち交まじりたる
はたゝがみ、漲みなり落おつる水音みづおとは、物凄ものすこくも亦またすさまじい。

トかすめて浪の音、雨車。

夫を慕ふ念力に、道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪がこけつ轉びつ。

トバタ／＼になり、以前の朝顔逸散に走り出て来て、花道にて轉び、起上つて舞臺へ來り。

深雪 あの水音は大井川、ア、嬉しやく、こゝまで來たが折悪いこの大雨。

やう／＼こゝに川の端。(トよろしくあつて、)

なう川越たち、今こゝを駒澤次郎左衛門といふお侍、この川をお越しなされたか、まだか、どうぞ聞かせて下さりませ。

云ふ聲さへも息切れの、聲に川越口々に。

川越 ヲ、その胸澤様はとうにお越しなされた、殊に最前の大雨で。

皆々 川がとまつた、川止め／＼。

深雪 エ、。

ハ、ア悲しやと張りつめし力も落ちて伏し轉び、前後不覺に泣きけるが、又起き上つて見えぬ目に、空をにらんで。

天道様、エ、。

聞えませぬ。

聞えませぬ。

聞えませぬわいなア。

この年月としつきの艱難かたかたしんく辛苦しんくも、どうぞマ一度その人に逢あはせてたべと片時かたときも、祈いのらぬ間まとともないものを、今日けふに限かぎつてこの大雨おほあめ、川止かわどめめとはくエ、何事なにごとぞ、思おもへばこの身みは前まへの世よで、如何いかなる事をこと罪つみせしぞ。さてもく、エ、

あぢきなや、焦こがれ焦こがれたその人ひとに逢あうても知らぬ盲目なうもくの、この目めはいかなる悪業あくごふぞや、夫おつとの後あとを戀こひ慕したひ、石いしになつたる松浦湖まつうらがた、ひれふる山の悲あはしみも身みに比くらべては數かずならず。

三千世界さんぜんせかいを尋たづねても。

こんな因果いんぐわが又またと世よに、あるべきかはと口説くちごとき立て、拳こぶしを握にぎり身みをふるはし、流涕りうていこがれ歎なげきしは、よそに見みる目めもあはれなり、やゝあつて起たき上あがり、

ヲ、さうぢや〜、とても添はれぬ身の業因、この川水の増さりしは所詮死ねとの事なるべし、未來で添ふを樂しみに。

こゝを三途の岸と定め、弘誓の船にのりの道ヲ、さうぢや〜。

急がんものと泣く〜も、夫を戀し小石の數、袖や袂に拾ひこみ。

ト石を拾ひよろしくあつて、

南無阿彌陀佛。

南無阿彌陀佛の聲もろとも、すでに飛ばんずその所へ、駈け來る三平徳右衛

門、かくと見るより抱きとめ、

トバカ〜になり、以前の徳右衛門、三平奴のこしらへにて出て、直ぐに舞臺へ來り、

三平 コレ申し深雪様、マア〜お待ちなされませ。

深雪 イヤ〜誰かは知らねどこ、放して、殺して下さりませ。

徳右 マア〜心を靜めて待たつしやれ、コレ朝顔殿、わしもこなさんの身の上が氣遣ひさに、こゝ

まで走つて來た。コレ、三平殿とやら云ふ人も見えたぞや。

三平 コレ御寮人様。下郎めでござります。モシ三平めでござります。

無理に手をとる抱きのくれば。

深雪 ム、さう云ふ聲は三平か。

三平 モシ下郎めでござります、すんでの事に危い事、これには何ぞ様子がござりませう、どうぞ聞かせて下さりませ。

深雪 コレ三平、エ、遅かつたくくわいなう。この年月期難して尋ね焦れた阿曾次郎様、折角お目にかゝつたに盲目の悲しさ、さうとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかゝり戻つて聞けばやつぱりその人、おのれやれ、追付かうと後追うて来たればこの川止め。コレ三平、どうせうく、どうせうぞいなう。

三平 ヲ、お道理だく。

徳右 ヲ、尤もだく。

三平 サア下郎めもあなたの御行方を、尋ね廻るその内に一昨日の夜の夢に、浅香殿に逢ひ、即ちあなた様は烏田宿戎屋徳右衛門方にござると、云はつしやると思へば目が覺め、コリヤ何でも不思議と夜を日についで来た甲斐あつて、危い場所でお目にかゝり、これといふも日頃から、

信心致す神佛のおり合せでがなでござりませう。ヤレ／＼嬉しや／＼、下郎がお目にかゝる上はお氣遣ひなされますな、下郎めが駒澤様にお添はせ申します程に、必らず短氣な事をなされまするなや。

徳右

ヲ、さうとも／＼、三平殿の云ふ通り命あつての物種、その嬉しい人に添はうにもその身を大事にせにやならぬ、この後ともに奴どのを力にして。

三平

そりやもうわしが命にかけても、お添はせ申さずにはおきませぬ。シタが申し深雪様、浅香殿には坂東巡禮になつて、東海道へ尋ねて見えるはず、お遣ひなされませぬか。

深雪

さればいなう、その浅香にはあとの月、濱松の宿で廻り逢ひしが、その夜悪者に出逢ひ敷ケ所の手傷、死ぬる今際に私をよび、中山造には私が産の親古部三郎兵衛といふ人あり、この守り刀を證據に尋ね行き、秋月弓之助の娘と名乗つて逢へとの教へ、可愛やつひに死にやつたわいの。

ト錦の袋に入れし懷劍を出す。

三平

ム、スリヤ浅香殿には悪者のために非業の死を遂げられしとや、ホ、ホイ。

ハッとはかりに驚くうち、始終聞きぬる徳右衛門。

徳右 ム、ウ、そんならあなたは秋月弓之助様の、御息女でござりましたか。

深雪 娘深雪が、恥かしいこの姿。

徳右 アノ御息女で、さうとは知らず遇せし悔しさ、この上は徳右衛門が深雪様へ御土産。

と件の短刀抜きはなし、腹にぐつと突き立つれば、三平驚き押しとぐめ。

ト徳右衛門、深雪の懐剣をとつて腹へつき立てる。

三平 コレ、こなたには何故この異期。

深雪 モウシ徳右衛門様、早まつた事なされましたなア。

と云へば苦しき息をつき。

徳右 もと私 はあなたのお尋ねなされる、古部三郎兵衛でござりまする。

三平 ヤ、そんなら常々親旦那のお話ありし古部氏でござつたか。

深雪 その三郎兵衛が何故あつてその生害。

三平 これには何ぞ様子があらう、諺を聞かせて下さりませ。

言葉に手負ひは顔を上げ、

徳右 不審は尤も、一通り聞いて下され。(ト竹筒入り合方になり) 私事はその以前あなた様の祖父様、

秋月兵部様に御奉公、若氣のあやまり奥女中と忍び逢ひ、御手討になる所を弓之助様に助けられ、女もろとも鬨を立ち退き産み落せしが即ち女子、貧苦の中で育てしが二ツの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へこの短刀を添へて養子にやりしが。

廻りくゝて思はずも、親が命を助けられし。

秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れずに、導きをつたか。

でかしたなア。

最前駒澤様のお物語、唐土傳來の藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も即座に平癒との事、今聞き知つた故主の御息女、目しひとなりしこのお姿、せめて少しの御恩返しとこの三郎兵衛が生れ年、丁度幸ひ甲子の年、我が生血にて件の藥を調合なし、三平殿あなたへおすゝめ申して下され。

深雪 その志は破しけれど、そなたの血潮を現在この場で。

徳右 ヲ、三平殿、時刻が延びる、早くく。

三平 ハ、ア天晴忠義の古部氏、この生血を用ひざれば心づくしも水の泡、ソレ。

三平用意の水呑みとり出し、手負の血潮を受けとめく、泣き入る深雪が懐の妙薬とり出し。

ト三平腹より水呑みを出し傷口へあて血をしぼり、深雪の懐中より薬を出し水呑みに入れ、サ御寮人様、少しも早くこの薬を。

さしよすれば。

深雪

かたげた
忝い。

深雪は受けとりわが夫の情にあまる賜物と、押し戴きく、唯一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、蟻の這ふまで見えすくにぞ。

ト深雪薬を呑みほす、薄ドロくになり、兩眼開く。
ヤ、今まで盲ひたる兩眼の、忽ち開くも薬の奇特。

三平
なに兩眼とも開きしとナ。(ト深雪の傍へより顔を眺め、)ヲ、ほんに兩眼が開いて、常に變らぬ深雪様、ヤレく嬉しやく、エ、お目があいたく。(ト喜び徳右衛門に思入。)ア、これといふも

三郎兵衛殿が命を捨てよ。

深雪

この身へつくす忠義の心。

兩人 エ、忝かたけない。

深雪みゆきが嬉うれしさ人々ひとびとも、悦よろこび合あふこそ道理だうりなり。

徳右 エ、嬉うれしや、最早もはやこの世よに望のぞみなし。

三平 開ひらきしお日は盲まうき龜かめの浮う木ぎ。

深雪 優うと曇ど華げまさりの二人ふたりの賜たま物もの。

三平 露つゆのひぬ間の朝あさ顔がほも。

深雪 今朝けさの嵐あらしに散ちつて行ゆく。

徳右 いづれもおさらば。

しげる朝顔あさがお物語ものがたり、後のちの世よまでも。(トよろしく兩人愁あはひのこなし。)

南無阿彌陀佛なむあみだぶつ。

いちじるし。

ト徳右衛門落お入りる。兩人回向くわうきやうのこなし、本釣鐘ほんつりかね、浪なみの音ねにて、よろしく。

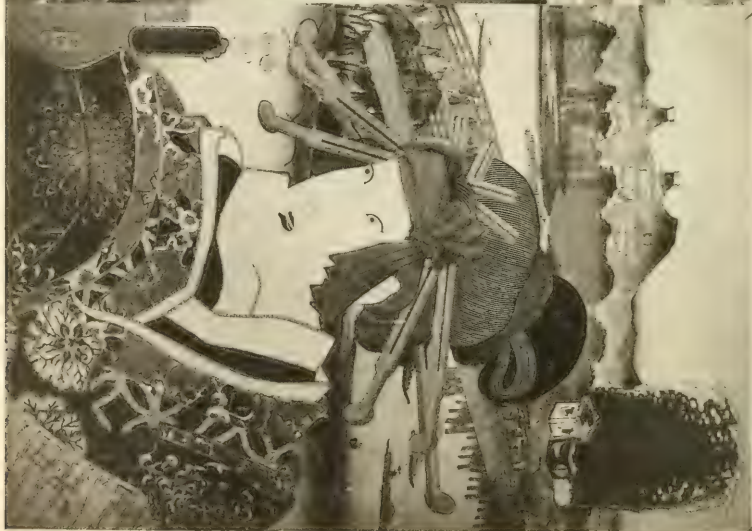
世話狂言傑作集

朝顏日記（終り）

廊く
る
り

文ふ
ん

章し
や
う



廓くわ文ぶん章しやう

(夕た伊左衛門いざゑもん 吉田屋よしたん || || 一幕)

新町吉田屋の場

役名

吉田屋喜左衛門、阿波の大盡萬右衛門、藤屋伊左衛門、吉田屋の若い

衆大勢、扇屋の夕霧、喜左衛門女房ぢやま、仲居しげの、仲居○△×、禿

一、二、三。

竹本連中、常磐津連中

本舞臺、向ふ吉田屋と記せし長暖簾、左右格子造り、一面に注連飾り。すべて新町吉田屋表がムリ
の體。爰に若い衆十人、揃ひの半纏にて餅を掲いでゐる。この見得しころの合方通り神樂にて幕あ
く。と皆々餅を掲ぐ事よろしくあつて、

若一
サア／＼これから後は搗入れの曲搗き、マア一服喫まうぢやねえか。

廓 文 章

- 若二 いつもは引舟ややりてが打交つて餅搗すれど、
- 若三 お大盡様の惣揚げで、おいらが寄つてのこの餅搗。
- 若四 家の嘉例に掲上げて、後は出入の大一座で、
- 若五 飲み放體の底抜け上戸で藝盡しの惣まくり。
- 若六 去年も藝のうまい者におやまさんが岡惚れしたから、
- 若七 今年も腕に振をかけ、どうか思ひ付かれないものだ。
- 若八 思ひ付かれるはよいけれど、もし其んな事が店へ知れると。
- 若九 出入は言はずと上つたり。矢張りこりやア持役で、
- 若十 惚れられないのが互ひの仕合、先づそれよりは御馳走に。
- 若一 なるのがいつち安心だで、今日惣仕舞のお客の内でも、阿波のお客が此方の見當だ。
- 若二 何でも阿波大盡様の御馳走なら、粟餅がよからうわい。
- 皆々 違へねえ。ハ、ハ、ハ、ハ。

ト皆々床凡にかゝり煙草を喫んでゐる 賑かなる唄により、花道より阿波の大盡好みの羽織着附花
染めの置き手拭にて、後より仲居四人、赤前垂にて、若衆二人禿二人附添ひ出て來り、花道にて、

萬右 「朝寢する旅人もあり年の暮」と、誰やらが句にありしが、寒紅梅の色酒に、難波の女郎見まほしく、逢けき阿波より年籠り。廓に名高き夕霧太夫と、晴れて逢ひたきわが望。藝子仲居が取持で、色の音締も吉田屋に、今日で五日の流連も、君に逢瀬を、コレ働いて呉れ。頼むぞ頼むぞ。

仲○ 主が左程に御執心で、遠い阿波から難波津へ、お登りなされたお心は、テモ戀知りの大盡様、

仲□ この新町にも名の高き太夫さんも多い中で、扇屋の夕霧さんへ登りつめてござんすあなた。

仲△ その御心もじを汲みわけて、どうぞ首尾して太夫さんを、逢はせたくは思へども、

仲× 過ぎし秋の半から、御病氣でござんしたゆゑ。

若一 そこを押してもどうがなと、旦那さんもおかみさんも、氣を揉んでござりましたが、

若二 張と意氣地の太夫さん、心が解けて今夜こそ、よい吉左右が、

皆々 ござりませう。

萬右 この上ともに頼むぞ。

仲○ 何は兎もあれまあ〜あれへ。

皆々 サアお出なされませいなア。

ト右の唄にて皆々舞臺へ来る。餅掲きみなく前へ出て、

若一 これはお大盡様。

皆々 ようお戻りなさいました。

ト萬右衛門床几へ腰をかけ、

萬右 オ、若い者共には産揃ひだな、シテ餅場はもう濟んだか。

若一 ハイ残らず濟ましてござりまする、イヤモウ當年の餅場は、この吉田屋へ旦那様の御逗留にて、

若二 毎日の下され物で、皆一同に糺みがつき、

若三 腹むと申せば、唯も搦結めの一と曰は、

若四 私共が受持つて、杵こね取りの拍子事、

若五 旦那へお目に、

皆々 懸けたうござりました。

萬右 それは早物事であつたなう、併しながら、世間では年の暮の忙しい其最中を、幾日もく流連

するとは、夕霧太夫に違ひたさゆゑに、

トこの時暖簾口より仲居×出て來り、

仲× これは旦那様、唯今お歸りでござりましたか、もしお悦びなされませ。家方の餅湯を幸ひに、

家の旦那が自身にまゐり、夕霧さんを無理矢理に頼みましたれば、流石名うての太夫さん、今日は幸ひ氣合もよし、吉田屋夫婦の顔を立て、行かうというてござんすわいなア。

萬右 ム、それでは夕霧が來ると申すか。

仲○ もしお大盡様、上首尾で、

皆々 ござりませうがな。

若一 夕霧様がお出でとあらば、これから奥で何時もの通り、

若二 大座敷での大酒盛、飲んだり喰つたり、

皆々 貰つたり。

萬右 コリヤ〜皆まで言ふな、承知ぢやわえ。(ト銘々小判を遣る。)

皆々 これは有難うござりまする。

若一 これがほんの濡れ手で粟のお大盡様。

若二 夕霧と誰だ二人。

若三 仲吉田屋の隠れ家で、

若四 今日餅搦の杵ともなり、

若五 臼ともなつてしつぽりと、

若六 千代も替らぬお床入。

皆々 お目出たうござりまする。

萬右 エ、煽るなえく。

仲〇 サアお大蓋様には奥座敷へ、

萬右 皆も一緒に、

皆々 サアくお出なされませ。

ト所作の切にて萬右衛門先に、皆々暖簾口へはひる。鳴物打上げ、床の出語りになる。

冬編笠の赤ばりて、紙子の火打ひざのさら、笠ふき凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとす

れば古への、花は嵐の颯に、けふの寒さを喰ひしばる、はみ出し鏝も神

寂びて、鑑つまりし師走の月、胡散らしくも吉田屋の、内を覗いて、

トこの文句の内、花道より伊左衛門、謡への編笠紙衣のなりにて、扇を持ち一本差にて出て來り、

門口へ來て、

伊左 喜左衛門家にゐやるか。喜左々々。

鼻ハなに扇あふぎの横柄わうへいなり、男おとこども飛とび出いで、

ト暖簾口より以前の若衆十人出て來り、

若一 ハイ、喜左衛門家にをりまするが、何人どなたでござりまするな。何なにだ、此奴こいつア風かぜの神かみの聞きえか。

若二 烏囃とりおどしを見るやうな態さまをして。

若三 喜左衛門に逢あふも凄さまじいわえ。

若四 百貫目ひゃくくわんめも遣つかふ大盡だいじんのやうに扱あつかひがアがるが、

若五 奴らぬはまあ何處どこの小屋こやから失うしやアがつた。

若六 あらう事ことがあるめえ事ことか、人ひとの門かどへ立たちながら、

若七 冠かぶとり物ものも脱とらねえで、横柄わうへいな物ものの言いひやう。

若八 圖々づうくしいにも程ほどのあつたものだ、

若九 ちつとは目先めさきを利きかせて言いへ。

若十 いけ巫山みさげ戯げた。

皆々 奴らぬぢやアねえか。

棒ムまかれなといひければ。

伊左 何なんぢや、百貫目くわぬめがそのやうに尊たごいものでもないわいの。ハテ喜左衛門きざゑもんといふべき者ものがいふいふに、コレ違ちがはしてたもいなう。

若一 此奴こいつ様さま々なごたくを吐つくな。よいわ、逢あひたくば逢あはせてやらう。

皆々 オ、こんな目に逢あはしてやらう。

竹箒たけはら振はり上ある、喜左衛門きざゑもん飛とんで出いで。

ト皆々有合あふ竹箒たけはら纏まとぐるみなどを持ち立ちかゝる。奥より喜左衛門出で、

喜左 ア、コレノ待まちたぬか。けふは餅搗もちつきの神かみひ日に、わいら何なんを騙だまぐのや。そんな物を振ふ上げて、もし痕あとでもついたら如何いかしようと思おもふ。アレ合あひの行いかぬ身み形かたちなれば、もし強請ねだりものかもしれぬもの、兎角とがく騙だまして歸かへすがよい、減めつた多たな事ことをせまいぞ。

トこちらへ來り、

ハイ、喜左衛門きざゑもんは私わがでござりまするが、逢あふと仰おつしや言いはるは、まあ何方どなた様さまでござりまする。

笠かさを覗のぞいて、

ヤ、あなたは。

伊左 喜左、わしぢやわいなう。

喜左 藤屋の若旦那、伊左衛門様でござりまするか。

伊左 懐しさに逢ひに來ました。

喜左 それはまあようお出なされました。(ト若衆に向ひ、)ソレ見ろ。これだによつて、俺が常々から言はない事か。漢多な事をするなど吩咐けて置くぢやアねえか。あなたを何方と思ふ。俺が大事の旦那様だ。鉢巻もとり、肌も入れて、お詫言を申せ。氣のよい旦那様なればこそよいが。
へムムムムお許しなされて下さりませ。

若一 ハイ、唯今のは私共が無調法。

若二 大事のお方とも存じませず、

若三 飛んだ祖相を致しました。

若四 どうぞ今日の所は眞平御免

皆々 なされませ。

伊左 そんなら今のやうに敷きはせぬな。

皆々 どう致しまして。

伊左 さうしてアノ呵りはせぬな。

皆々 どう致してあなた様へ。

伊左 そんなら愈々謝つたな。

若一 謝りましたともく、近年にない大謝りを。

皆々 致しました。

伊左 ちつとさうもあらうわいなう。

喜左 サアく早く奥へ行つて、お取物の仕度でもしろ。

皆々 ヘイく畏りましてござりまする。

ト若い衆みなく奥へはひる。

喜左 ほんに困つた奴等ではあらわえ、ハムム。扱お珍しい、どうしてまあ、モン、あなたが御違

塞と承はり、奈良伏見までお尋ね申しました、よう今日はお出なされました、サアくこち

らへお遣入りなされませ。

袖引寄すれば、

伊左 アムコレく喜左、さりとては紙衣ざはりが荒い。

引けば破るゝ、掴めば跡に師走浪人、昔は槍が迎ひに出る、今はやうく
長刀の、草履を脱いで編笠の、仲の座敷に通りけり。

ト踊り地を冠せ、兩人思入あつて奥へはひる。知らせに付き、前の大格子を引いて取る。

本舞臺三間の間平舞臺、下手伊豫籠の淨瑠璃臺、正面上の方一間の床の間。續いて三尺の違ひ棚。

此下襖の出遣入。上手給こゝろに襖の出遣入。この内一間の障子家體、開閉あり。又この内塗骨の障子家體。よき所に置炬燵、蒲團をかける事、矢張り踊り地にて道具納まる。と下手の襖より以前の仲居四人座蒲團煙草盆手灸り火鉢、外に煙草盆一つ持つて出て、茶を出す支度する事あつて、奥へはひる。これにて喜左衛門を先に伊左衛門出て來り、

喜左 ヤレくマア御機嫌ようお出なされまして、お日出たう存じまする。今日は又嘸表はお寒うござりましたでござりませう。サアく炬燵へおあたりなされませ。

伊左 オムコリヤよい所へ炬燵が出来てゐる。置炬燵がうやな。オム暖いく。

ト炬燵へあたる。

喜左 イヤ又この冷えます事は。嘸お寒うござりませう。オム幸ひ。

と羽織をふむと打ちかければ、

ト傍に有合ふ亂れ箱の羽織を着せる。

伊左 イヤモウ寒酒しの伊左衛門を勞つての深切忝い。志を戴きませう。

戴いて着る有様を、喜左衛門つくづく見て、

喜左 成程浮世と申すものは、誰あらう藤屋の伊左衛門様ともあらうお方に、この喜左衛門が上げま

す羽織、假令蜀紅の錦二重づるの古金襴でも、戴いて召しませうか。ほんにあなた様の苦心を思ひますると、熱い涙が滾れます。

目をしばたしくぞ實なる。

伊左 アムコレく喜左、我が身も絆のやうにもない、どうしたものぢや。アム愚痴なぞや。人

は知らずこの伊左衛門。今このやうな姿になつたも、さらく口惜しいとは思はぬ、何故と言

や、例へていはうなら、重い材木でも牛馬が負うては珍しうない、それを猫か鼠が持運びした

ら、これはと人も手を打たう。丁度まあ其んなもので、かうして紙衣一枚で、七百貫目の借銀

負うてびくともせぬ所は、恐らく藤屋の伊左衛門、申し難いが日本に一人の男。そこで

金ぢやによつて、いかう冷える。オム寒むく。

喜左

總身が金とは有難い。喜左衛門が餅搗に總身が金のお大盡様。やがてあなた様の御湖當も赦りまして、舊のやうにおなりなさるは今の間。ア、目出たい。コレおやま、まだ蓬萊は飾いねど、正月の心で三方飾つて持つておぢや。早う。

やま アイ。

いと女房が櫛葉に、ほながをかしき橙柑子、蜜柑や何やかやかち栗。

トこの文句の内女房おやま好みのこしらへにて喰積を持ち、仲居衆の、廣蓋に銀の銚子三つ組の杯臺ともに載せ、小さき重詰など持ち出て來り、喜左衛門「おやま、珍らしいお方が來た。當て見ろ」といふ拾ゼリフいろくあつて、

伊左

コレおやま、わしぢやわいなう。

やま

オ、これはく伊左衛門様でござりましたか。ようまアお出遊ばしましたなア。お前様の事を承はりました、大抵や大方お家じ申した事ではござりませぬ。大夫様からは日々のお文なれど、何れにお出遊ばすやら、毎日々々お噂申してをりましたが、このやうな嬉しい事はござりませぬ。ほんにまあようお出なされましたなア。

伊左

そなたも變る事がなうて目出たいなう。

やま 有難うござりまする。

伊左 その目出たい序に、尋ねたい事があるわいなう。

ト夕霧の事を言出しかねる捨ゼリフいろくあつて、

深切な二人の衆、蓬萊とまでは気がついたが、最前から夕霧が事を、これ程も言出さぬは、此頃餘所で噂を聞けば、わしが事を氣に病んで、患うてゐるとの事、もしや無常の夕霧と消えはせぬか。喜左衛門、どうぢやぞいの。コレ内儀、言うて聞かしや、どうしたのぢや。わしに嘆きをかけまいと思つて、それで言はぬのか。コレ何の泣かう、泣きはせぬ。おりや笑うてゐる程に、言うて聞かしたもひなう。

泣かぬくといふ聲も、氣遣ひ涙にぎりける。

喜左 成程、先程から太夫様の事を申しませぬは、私の不調法。さう思召すは御尤もでござりまする。

ト喜左衛門おやまをこちらへ招き、

コレおやま、旦那へお話し申して呉れ。

やま 何のそれは私より、お前旦那へお話し申したがよいわいなア。

喜左 こんな事は男より女の方がよいものぢや。

やま ハテそれは男役ぢや、こなさん言うたがよいわいなア。

喜左 男の女のと、何で差別があるものか。内を納めるは女房の役ぢや。お主から言うて呉れく。

やま ハテお前言はしやんせいなア。

喜左 イムヤお主から言やれといふに。

トおやまを伊左衛門の方へ突きやる。

やま 言ひ難い事といふと私にばかり。

ト仲居の樂のを入れる事。おやまは言ひながら伊左衛門と顔見合せ、

ホ、、、、、。モシお憤ひなされませ、夕霧様も秋中は、お氣色もお悪うござりましたが、この頃は段々とお心持も治つてござりまする。それに又餘りお家にばかりお出なされますのは、却つてお氣がつきようと存じまして、幸ひ奥のお客がお頼みで。

伊左 エ、。

やま サア無理にお頼み申しまして、お客へ今日初めて。それでアノ太夫さんも奥へお出になつてをりますわいなア。

伊左 エ、そんならアノ夕霧は氣色もようて容へ來てゐると言やるか。そりやアノほんの事かいな

う。

やま 眞か嘘か、あの障子から奥を覗いて御覽じませ。

伊左 スリヤあの夕霧が、ム、。

伊左衛門は急いたる顔色。

ト上手の障子を一章あける。此内に夕霧と客人の影法師駆る。伊左衛門いろ／＼こなしあつて、

しばし詞もなかりしが。

ほんにきんと氣色もよいさうな。わしや又あんな事ぢやないと思つてゐたに、氣合のよいはよ
けれども、成程。恐らく天地開け始めてより、傾城の誠と座頭の遠眼鏡は見た事がないといふ
が、それに違ひはない。コレそなた衆の心にも、わしが今日愛へ来たは、定めし夕霧が顔を見
たさに来たであらうと、思やる所も恥しいが、さうではない。物嫌のやうな傾城めに、徹摩も
心は残らねど、知つての通り彼奴が腹から出た悴。丁度もう今年で七つ。遣手の玉が才覺
で、里に遣つたといふけれど、今思へば里に遣つたも皆んな偽り。大方捻ぢ殺して捨てをつた
であらうわいの。

喜左 やま

どう致して滅相な。

伊左 イヤ／＼餘り進ひもあるまい。これを思へば、傾城買より紙屑買がましであらうわいの。
やま そりや又何故でござりまする。

伊左 何故と言や、金銀を出して、彼方から取るものとは状文ばかり。ようまあ積つて見や。七百貫目の紙屑では、富士の山の張抜が出来るであらう。埒もない事思ひ出し、大事の紙衣の袖を、コレこのやうに涙で濡らした。ア、纏目の離れぬその内に、さらばお暇致しませう。

ト立上るを、

やま まあ／＼お待ちなされませ。そのやうにお腹をお立てなされますと、折角お出なされましたに、まあ御酒でもお上りなされませ。

伊左 イヤ／＼酒も飲みたうない。あた腹の立つ、歸りませう／＼。

ト振切つて花道の方へ行き思入。喜左衛門夫婦氣の揉めるこなし。

とても歸るなら、もう一遍廻つて歸りませう。

ト舞臺へ戻り、三人顔見合せ、

ハ、ハ、ハ、ハ。

喜左 へ、へ、へ、へ。

やま ホ、、、。

三人 ハ、、、。

伊左 コレ喜左衛門、ひよんな事言うて、餅場の祝ひ日ぢやのに、忌々しいの何のと言うて、氣にかけてたもんなや。

喜左 どう致しまして、左様な事が。

伊左 そんなら腹立はせぬな。ヤレ／＼嬉しや／＼。

喜左 サア御機嫌が直つたら、お銚子を早く持て來や。

やま アイ／＼、お燗もつけて置いたわいなア。まあごゆるりと召上つて下さりませ。サア／＼口那お一つ召上つて、久し振にてこちらの人へお差したされて下さりませ。

伊左 そんなら目出たう飲んで差さうか。

ト杯を取り上げ、一口飲んで、

イヤ／＼酒を飲んでをられぬ。矢張りわしは歸りませう／＼。

トこちらへ来ていろ／＼こなし。

イヤ／＼こりやどう思うても爰にはをられぬ。歸つた方がましであらう。去んだものであらう

か。爰こゝにゐようか。行ゆかうか行くまいか。いつそ炬燵こたつへあつてこまごう。

トつひに炬燵へはひり、手枕をして寝るゆゑ、喜左衛門おやまの兩人氣の毒なる思入。

喜左 これだから俺おれがいふまいと思つたに、手前てまへが夕霧ゆふきり大夫だいはうの事ことを言つたからだ。

やま それでもお前まへが言へ〜と言はしやんすゆゑ、私わがが言ふまいというたのに。

喜左 それだと言つて、あのやうに皆みなんた言はずとよい事ことを、口くちから出で任せつべこべと言ふからだ。

お枕まくらを持つて來こな。

やま アイ〜。

ト襖たもとの裏うらより枕まくらを持ち出て伊左衛門にさせる。喜左衛門おやまに囁く。

そんなら奥おくの、首尾しゆびを見合みあせ。

喜左 早く〜。

やま アイ。

ト矢張り踊り地おどりぢにて奥へはひる。喜左衛門思入あつて、

喜左 イヤモウ何時いつに替からぬ旦那様だんなさまの御氣質ごきしつ、この喜左衛門がためには福ふくの神かみとも崇あがめにやならぬ、

大事だいじのお方なた、昔むかしに變かる今いまの御不自由ごふじゆう。それを苦くるにもなされぬは、流石さすがの大家だいがの旦那様だんなさま。やがて御ご

勘當お能の時節もござりませう。まあそれまでは千萬日も、御逗留なされて下さりませ。

へこのこと
心残して奥へ行く、跡見送りて伊左衛門。

ト喜左衛門入あつて奥へはひる。伊左衛門起上り、あたりを見て、

伊左

このやうになつた伊左衛門を、喜左衛門夫婦が志、忘れは置かぬ、嬉しいぞよ。それに引替へあの夕霧。ア、それも變りし此身の姿。變らぬは唐の懸ぎぢやなア。

ト下座の獨吟になり、

唄へ
可愛男に逢坂の、關よりつらい世の習ひ。

ヨウ／＼引いてさま／＼、ほんにあの唄を聞くにつけ、去年の月見はあの奥座敷で太夫と二人樂んだ、あの時の面白さ、ほんに彼奴に限つては、あのやうな水臭い氣であらうとは。

唄へ
思はぬ人に堰止められ、今は野澤の一つ水。

いかさまなア、變り情も世にある時。このやうな形をして、腹を立てたり拗つたりしても、誰も何とも思ひはせまい。コリヤ矢張り思ひ切つて歸りませう。さりながら喜左衛門夫婦の者の志。違はずに去んでは此胸が。

唄へ
すまぬ心の中にもしばし、澄むは山縁の月の影。

トこの内又障子より覗く事あつて入。その儘炬燵へはひる。

竹へ
むざんやな夕霧は、流れの昔懐しく、飛立つ心奥の間の、首尾はくちせぬ
縁と縁、屏と心の相の山、間の襖の具合よく。

トこの内夕霧襤なり、好みのこらしへにて奥より出て来り、

竹へ
明け暮れ戀しい夫の顔、見るに嬉しく走り寄り、わが身とともに襤に、
引纏ひ寄せとんと寝て、抱き締め締め寄せ泣きけるが。

夕霧

伊左衛門さん、目を覺まして下さんせ。モシわしや驚うてなア。

竹へ
疾に死ぬる筈なれど、けふまで命存へしも、神佛のひかへ綱、コレ懐かし

うはないかいな、顔は見たうはないかいな、と擔り起しく抱き起せば、

竹へ
とつて突退け、

伊左

コレこゝな夕霧殿とやら、夕飯殿とやら、こなさんのやうに、節季師走ゆうくかんと、結構

な閑な身の上とは違ひます。この伊左衛門はナ、七百貫目といふ借金を負うて、夜責糺ぐ付
しい身の上。こんな時に寝ぬと寝られませぬ、必らず邪魔して下さりますな、あのこゝな物思

嫁殿。

竹へ

ころりと轉けて空殿。

夕霧

伊左衛門さん、お前何言はしやんす、私やそのやうに言はれる覺えはござんせぬ、恨みがあらば言はしやんせ、サア聞きませう何ほども、寝さしはせぬく。

伊左

ア、コレく側へ寄つて貰ひますまい、勘當受けても藤屋伊左衛門、今のやうに奥の客に踏まれたり蹴られたりする、傾城に近附は持ちませぬ。あのこゝな萬歳傾城どの、萬歳ならば春おぢや、通りやく。

竹へ

通りやといひければ、

夕霧

ム、この夕霧を萬歳傾城とわえ。

伊左

萬歳傾城の評を知らずか。知らずば言うて聞かさう、コレ侍の足にかけて蹴られるを、萬歳傾城といふぞや。

竹へ

藏に目出たう侍りける。

しかも足駄履いて蹴るやら。

竹たけへしたた
年とし立ちかへる足あし駄だにて、誠まことに目め出でたう侍はべりける。

然しかしながら何なにも身みすぎぢや、どんなよい衆しゆに蹴けられても損とんは行ゆかぬ、ア、慾とを知しらねば身みが立たたぬ。

竹たけへくわか
慾よく若わかに御ご萬まん歳さい、年とし立たちかへる足あし駄だにて、誠まことに目め出でたう侍はべりける。

侍まむらひも蹴ければ町ちやう人も蹴ける、町ちやう人も蹴ければ伊い左さ衛ゑ門もんも蹴ける、蹴けるくく、コレ喜き左さ、餅もちでも米こめ

でもやつて去いなしや。

竹たけへわけ
譯わけも涙なみだの捨すて詞し、煙たばこ草くさ引ひ寄よせ吹ふく煙き管かん、そらさぬ體ていにてゐたりける。

常とこへゆふぢや
夕ゆふ霧きり涙なみだもろともに、恨うらみられたりかこつのは、色いろの習なひといひながら、そ

れは浮う氣きな水みづ淺あ黄わう、思おもひ染そめた其その日ひより、こんな縁えんが唐からにもあるか、派は手てな

浮う名なが嬉うれしうて人ひとの誹そりも世よの義ぎ理りも、竹たけへしらかみ
白しろ紙かみに書かく文ぶんにして、返へん事じと

る手ても心こゝろ急いそぎ、竹たけへくぜつと
口くち舌ぜつの床とこのよしあしも、常とこへうれれ
嬉うれしいにつけ悲かなしいにつれて

忘わすれた事ことはない。竹たけへ
それにお前まへの悪あく性せうを、わしが案あんじはうつり氣きな、外ほかに

もしやと言いひがしり、竹たけへきよねん
去こ年ねんの暮くれから九こ一じゅう年ねん二に年ねんに音おと信づなく、それは幾いく世よ

の物案じ、それゆゑにこの病、瘦せ衰へたが目に見えぬか。煎薬とねり

薬と、鍼と按摩でやうくと、命つないでたまさかに、逢うてこなんに

甘へうと、思ふ所を逆な、こりや酷らしいどうぞいの。憎やと膝に引寄

せて、さすりつ、泣きつ聲をあげ、譯も、性根も、なかりけん。

ト文句の内口紅の長文をつかひよろしくある。踊り地バタ／＼になり、奥より喜左衛門おやま仙居
皆々出て來り、

やま モウシ／＼お二人様、お悦びなされませ。阿波の大盡様と申しまするは、あなたの御家來忠七

様と申す方にて、あなたのお家の首尾も直り、追つけこれへ打揃うてお迎ひにお出でなさる
とて、裏口よりお歸りなされましたわいなア。

伊左 何と言やる、そんなら内の首尾が直つたと言やるか。

喜左 何に致せ、このやうなお目出たい事はござりませぬ。

ト向うを見て、

と申す内、もう其處へ。オ、イ／＼。

ト呼ぶ。早渡りになり、幕あきの若衆十人千兩箱を銘々持ち、後より着流しの若衆も出て來り。

皆々 エツサツサ〜

ト舞臺へ來り、よき所へ積上げる。トこの内におやま奥より、祝儀包みを澤山亂れ箱に載せ、持ち

出て來る。

やま サア〜皆の衆、御祝儀が出たゆゑに、御禮申したがようござんす。

ト皆々へやる事。

皆々 これは有難うござりまする。

伊左 オ、目出たい〜。延喜に一つメめてたも。

ト皆々手を打つ事よろしくあつて、

皆々 お目出たうござりまする。

家内が勇む勢に、つれて本腹伊左衛門、悦びの眉を開くや扇屋夕霧、名
を萬代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

ト踊り地を冠せ皆々こなしよろしく、

幕

廓文章 (終り)

は
る
げ
し
き
ら
め
の
よ
し
げ
あ
る
ぎ
し
き
ら
め
の
よ
し
げ
あ



山崎

山崎
山崎

山崎

山崎
山崎

山崎

山崎

春景色梅由兵衛はるげ しむづめの よしへ（梅の由兵衛ゑ 四幕）

序 幕

三圍土手の場

大七座敷の場

役名

梅の由兵衛、源兵衛、伴五郎、十平次、醫者久庵、悪者二人、仲間一人、亭主才兵衛、信樂勘十郎、金谷金五郎、女房小梅、額の小三、小糸、お筆等。

三圍土手の場。本舞臺向う一面の草土、手出茶屋、床几を並べ、すべて三圍土手の體、流行唄通り神樂にて幕あく。

□
なんと此の土手は、いつもく賑かな事ぢやねえか。

梅の由兵衛

○ さあ今日は正月二十日の夷子講だが、來月の初午は猶賑かであらう。

△ これから秋葉嶺へ參つて、白鬚の方へ行かうか。

□ それもよからうが、龜井戸へ廻らうぢやないか。

○ 成程龜井戸へ行つて、梅屋敷ももうよからうな。

△ この頃は龜井戸には四季の花があるので、大分賑かになつたの。

□ それぢやあそろく出かけようか。

○ そんなら皆さん、御一緒に参りませう。

△ や、なんでも大勢程がようございます、そんなら皆さん。

皆々 さあ、参りませう。

ト矢張り右の鳴物にて皆々上手へはひる。と花道より信樂勘十郎袴羽織大小好みのなりにて、仲間を連れて出て参り、花道にて

仲間 もしくお日祝、何れへお廻しなされます。

勘十 身共は白鬚へ参詣いたして、歸りにはまた梅堀邊にちと内川あれば、そちは先に宿所へ立ち、今暫らく手間がとれやうと申し置け。

仲間 左様なればお邸へ。

勘十 苦しくない、早う参れ。

仲間 畏りました。ト仲間引返してはひる。勘十郎こなしあつて、

勘十 藏前の伯父大人へ御無心中した金子、どうぞ山兵衛に。イヤ先づ、参詣いたして参らうか。

ト矢張り右の鳴物にて上手へはひる、花道より頼の小三好みのなり、小糸お筆矢張り藝者のなり、若い衆が箱廻し、後より亭主才兵衛羽織着流し白足袋雪踏にて出来り、

小三 ほんに三圍の稻荷様は、いつも賑かな事ではござんせぬか。

小糸 小三さんはまだ出やしやんしてから間もなければ、勝手を知らしやんすまいが、花の頃は此の
上手は又格別ぢやなあ。

小三 サア今日この向島の大黒屋へ来る事を知らせてあれば、私はおの方に早う。

ふで ええ、そりやお前の深間金谷の。

亭主 や、なに金谷とは。

小三 いゝえいなあ、こゝらに間屋といふ所がござんすかえ。

亭主 おゝ間屋の里、潮入の五百崎、みな潮田川八景の内ぢや。

小糸 八景と言へば、懺か今門前で逢うたは、久庵さんでござんしたな。

亭主 あの久庵殿は人相見やら、醫者様やらとんと譚が分らぬ。

トこの内花邊より久庵好みのなりにてつか／＼と出來り、

久庵 これは君達、最前門前でちらと見たによつて、呼びかけたところを聞いた風といふはあれど、聞かぬ氣でずいにげとは如何なこと。

小三 久庵さん、今お前の噂して居たところぢやわいなち。

久庵 どうで碌な噂さではあるまい、當からわれを悔れどお國の典藥、夫より江戸へ來てだん／＼引下つて三里の久庵、餘り醫者もはやらぬによつて、これ／＼。

ト懷中より鏡への天眼鏡を出して、

久庵 この木玉の天眼鏡ぢや、源兵衛先生に頼んで買うて貰うた。(トこれを皆々へ見せる。亭主見て、)亭主 こりや餘程よささうに見えまするな。

久庵 こやつをかまへて箱を見るのぢや。

小糸 私の相はどうでござんすえ。

久庵 ヨシ／＼、まづ天中天帝ひらき保壽窪高く北角丸くなし、清の道が球いわえ。

小糸 情の道が疎いとほえ。

亭主 はて色事が嫌ひぢやと言ふ事ぢや。

小三 久庵さん、私を見て下さんせ。

久庵 藝者のお職は又違つたものだ、ム、成程、コリヤ伴五郎殿がどのやうに口説いても靡かぬ筈ぢや、一日里詰めた男を靡れぬといふは、ハ、ア貞女かな賢女かな、操正しき女郎、藝者に稀なる相ぢやわえ。

小三 なにを言はしやんすやら、久庵さん様子を知つて、翫らしやんすのかいなあ。

久庵 なんの翫るのではない眞實のことぢや、兎角藝者女郎は悪性なお方がよいぢや、この久庵もあり女郎に振らるゝ故、それで思付いた人相見、昨晩も吉原へ行つて見世を張つてゐる女郎共を見歩き、中で悪性なやうな、よく勤める女郎を見立てゝ上つた所が、どう間違つたやら又振られたわえ。

皆々 ホ、、、ほんに馬鹿らしい久庵さん。

亭主 いやかうして居らうより、ちつとも早う大黒屋へ行つて小さんが身請けの相談、伴五郎様がお待ち兼ねでござらう。

久庵 さうして源兵衛先生も行かれたであらう、悪老参つて鯉の汁を吸はにやならぬ。

小三 小糸さん、お筆さん、わたしや大黒屋より梅若様の方へ行かうわいなあ。

小糸 さうでござんすわいな。

亭主 ア、減損な、肝心の玉を手放して堪るものか。

小糸 大事ござんせぬ、私が吞込んでゐるわいなあ。

ふで さあ小三さん、ござんせいなあ。

ト矢張り右の鳴物にて皆々上手へはひる。と花道より伴五郎着流し、羽織大小、仲間緝看板にて、
付いて出る。後より十平次切つき非人のなりにて付いて出て、

十平 ハイ、最前からお願ひ申します、どうぞやつて下さりませ。

仲間 ハテ、此奴付くなといふに、しつこい非人め。

ト言ひながら舞臺へ来る。十平次矢張り付いて来る。

十平 ハテ結構な旦那、御人體にも似合ひませぬ、たつた一錢遣つて下さりませ。

伴五 こりやこりや非人、持合せがあれば先程から遣はずが、折悪しく持合せがないによつての。

ト十平次を見て、

伴五 ヤアそちは。

十平 お前様は曾根、(ト言はうとするを、)

伴五 こりや一錢二錢の合力を頼ふ非人、なあ。(ト仲間へ思入あつてのみこませまる。)ナニ家來、そちは

大黒屋へ參つて、源兵衛堀の源兵衛が參つたか尋ねて參れ、さあ早く行けく。

仲間 畏りました。(ト上手へはひる。後見送りこなしあつて、)

伴五 そちや家來の十平次、はて變つた姿になつたなあ。

十平 なつたどころではござりませぬ、伴五郎様お前様に頼まれ國を出奔、この江戸へ參つてお前様

に貰うた金も遣ひなくしてこのさま。

伴五 身共もそちが行衛を尋ねてをつたが、かの申合せし千葉の御家の重寶、菅家手向山の色紙はそ

ちに。

十平 さあ、首尾よく盗んだ手向山の色紙の流通口も指圖通り、これ。

ト懷中より一札を取り出して、

この通り。(ト見せる伴五郎取つて開き見て、)

伴五 何々、菅家手向山の色紙請取申候所實證也、然る上は兼ねて御頼みの通り此方にて密かに賣

り拂ひ、金子は後より遣はし申可候、爲念色紙請取候一札仍如件源印判伴印殿へ。

十平 色紙の金をせしめたく、お目に懸りたくをりました。

伴五 イヤ氣遣ひいたすな、此上は源兵衛と相談して褒美の金はすつしり、まづ此の一札は其方所持

いたしてをれ。(ト伴の一札を十平次へ渡す。)

十平 そりや有難い、しかしそれまでの凌ぎ、斯様な、なりなれば。

伴五 それ當座の貢。

十平 こりや僅少二兩かえ。

伴五 ハテまた後から遣はすわえ。

十平 間違はぬやうにお頼み申しまする。

伴五 それにつけてもあの金五郎めが、この江戸にて身が執心の藝者の小三に。

十平 金五郎の事は源兵衛殿の子分の者に言付け、見付け次第に仕舞うてとる此方の魂膽さ、それゆ

ゑに源兵衛親方に話したこともあるが、なにを言ふにもこゝは往來。

伴五 ぢやと言うてそのなりでは、身共も同道とも言はれまい。

十平 お氣遣ひなされまするな、今の間になりをつくつて見せませう。

作五 然らば後に大黒屋にて。

十平 左様なれば伴五郎様。

作五 十平次、ちつとも早うなりこしらへ。

十平 へい御尋ね申します。どれ男振りを仕立てこようか。

ト右の鳴物にて十平次は下手伴五郎は上手へはひる。ト花道よりバタ／＼になり揚幕より悪者○を
見事に投げて金谷金五郎着流し、町人のなりにて悪者△の手を振ち上げ花道にて、

△ あいたあいた、緩めてくれるく。

金五 大川端で皆知つた顔だ、通りすがりに喧嘩をしかけ、常談も人によるわえ。

ト投げのけ、言ひながら舞臺へ来る。

○ いやとんだ強氣なものだわえ。

△ 顔に似合はぬ兵法柔術、なんぞの役に立たうかしら。

○ ちつと稽古をして貰はうか。

金五 なんの兵法の柔術のと高が町人、そんなことを知つてよいものか。

△ いや知らぬと言はれまい、以前は下總千葉の藩中。

○ 今では町人金五郎、額のがた小三と深い仲、それゆゑおいらも。

兩人 肖りてえのだ。

金五 成程、それで様子やうすがさつぱり知れた、コリヤ行き合ひの喧嘩けんかから持ち込んで、かうくしろうと

頼みてがあるのだな。

兩人 マア、そんなものよ。

○ あのこ小三を、おいら達の仲間へ貰ふのだ。

金五 ハ、、、、、くれないの貰ふのと小三は藝者親方の抱へ、金五郎が自由にはならぬ、よし又自由

になればとて、遠るめえというたらどうするのだ。

兩人 おゝ、かうして貰ふのだわ。(ト兩人金五郎にかゝる。)

金五 はてしつこい、なにをするのだ。

ト是より詭への鳴物になり兩人を相手に立廻りになる。此内花道より梅の由兵衛着流し、男達好み
のなり一本ざし、詭への頭巾を冠り出て、花道より舞臺を見て思入あつて舞臺へ来る。此の時上手
より伴五郎窺ひ出て金五郎を切らんと立寄るを、由兵衛伴五郎を突廻し見事に投げる。伴五郎起上
り由兵衛を見、逃げてはひる。金五郎はこれを知らず立廻りよろしくあつて、トゞ兩人逃げてはひ

る。金五郎追ひ駆け行かうとするを由兵衛後より、

由兵 金五郎様待つた。

金五 やあ。お、由兵衛殿か。

由兵 今の様子を來かゝつてとつくりと見ましたが、なか／＼天晴の働き、さすがはお侍の果程にあ
る。

金五 ヤア。

由兵 下總千葉の御家中金谷金五衛門様の御子息、金五郎様のお身持でござりませうか、もしまあこ
れへお掛けなされませ。〔ト合方替つて、〕改めて言ふには及ばれども、此の由兵衛も以前は千葉
の御家中三島隼人様の家來、若氣の過りにて、いやおれが身上は後の事、思ひがけなき故主の
娘御小三様、お前様と言ひかはし、國を墮落ち其職勤に隼人様の預つて御座る御家の重寶、手
向山の色紙紛失、夫故に小三様の親御隼人様にはお國での御難儀、段々様子を聞きまするに、
小三様の今の身上は人に欺され吉原の藝者奉公、お前様は神田邊の知る邊の方にござると、始
終の様子聞き捨てならぬ故主の事、大恩受けた由兵衛が、及ばずながらお世話申すお二人様
は、お國へ歸參の色紙の詮議。

梅の由兵衛

金五 サア小三が縁によつて、色々世話になる金五郎が身の上、ほんに仇には思ひませぬ。

由兵 さう思うてなら、必ずともに今のやうな事は。

金五 小三が事から以前朋輩のあの伴五郎が、頼みと見えて二人の悪者。

由兵 さ、兎角お身が大事でござる、もう達引き事はよしになされませ。さうしてお前様は何方へ。

金五 けふは大黒屋へ小三が來てゐると知らせたゆゑ。

由兵 左様でござりますか、わしも大黒屋へ行かねばならぬが一緒に行くもなんとやら、まあお前様

は先へござつて。

金五 そんなら梅の由兵衛殿。

由兵 金五郎様、それ大黒屋には小座敷もあれば、随分密かに小三様と、

金五 エ、。

由兵 ハテ、どうなりとなされませ。

ト流行唄になり金五郎由兵衛こなしあつて上手へはひる。由兵衛後を見送つて思入、此の内勘十郎

下手より出て、

勘十 それにゐるは梅堀の由兵衛ではないか。

由兵 さうおつしやるは。

勘十 信樂勘十郎でござる。

由兵 誠にあなたは勘十郎様。(ト頭巾を取らうとする。)

勘十 イヤ由兵衛、そちが頭巾の様子。承はつてをれば、取らずと其の儘く。

由兵 左様なれば、御免なされて下さりませ。

勘十 人は其の以前を忘れぬを專一と存ずれど、えて忘れるものなるに由兵衛は格別蕙恩を思ひ、夏

は笠を頂き冬は其の儘頭巾の内に。

由兵 故主隼人様の手蹟にて、私へ御意見の狂歌、堪忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍。

勘十 なる堪忍は誰れもすれど、堪忍のなりにくいところを堪忍するとは、流石三島隼人殿のお教を

守る、結構なる心掛。

由兵 御存じの通りお國元の御城下にて御供先の大喧嘩、相手の三人を仕止めた拙者、直にお仕置き

にもなるところを、御主人のお情けにて不思議に命を助かりお國を追放、その砌りに此の歌を

そちが守りにせよと下された今の狂歌を頭に戴いた御主人の感恩、達摩ではなけれども、誰方

に逢うても滅多に取らぬ此の頭巾。

勘十

イヤ神妙なる志、それにつけても隼人殿は、この勘十郎が爲めには幼少よりお世話に預りし

劍術軍學手跡の師匠、下總に育つたれど今は親許江戸表へ立歸り、金杉の御家に勤めるもこれ皆隼人殿のお蔭、身共もそちに習うて舊恩を忘れぬ心、由兵衛、役に立て、くりやれ。

ト袱紗包みの金を出す。由兵衛取つて、

由兵

こりやこれ儘に金子、役に立てるとおつしやるは。

勘十

様子は聞いた御息女の身の上、思ひがけなき吉原の藝者とやら、身請けとやらをそちが心遣ひ、僅かなれども身共が寸志。

由兵

師弟のよしみに勘十郎様が。

勘十

みつぐではない、由兵衛殿へ。

由兵

いやそれは。

勘十

ハテ役に立てば身が悦び、此の後とても遠慮に及ばぬ。

由兵

有難う存じまする。

勘十

梅堀の宅へ尋ねて行かうと思ひしに、こゝで逢うたは時の幸ひ、身共は屋敷へ。

由兵

左様なれば勘十郎様。

勘十 いやなに、準人殿の狂歌は何んとやら言うたなう。
田兵 堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍。

ト頭巾へこなし、勘十郎思入あつて、

勘十 おゝ、その通り。

ト唄になり思入あつて勘十郎花道へはひる。由兵衛後を見送り金を囊き思入あつて上手へはひる。後流行唄、通り神楽になり、花道より小梅、世話女房好みのなりにて出る。後より源兵衛着流し羽織なりにて出て来る。

源兵 ヲ、イ、モシ〜梅堀のお内儀〜。(ト呼びながら出で、)

小梅 私のことでござんすかえ。(ト振り返り、)おや、誰かと思つたら、お前は源兵衛さん。

源兵 小梅坊久しく逢はなんだ。

小梅 久しうお目にかゝりませぬが、お前もいつもお替りなうて。(ト云ひながら舞臺へ来る。)

源兵 まあ〜、爰へかけたがよい。

小梅 いえ、私やちと心も急げば。

源兵 お前も今日は三圍の稻荷様へお参りか。

梅の由兵衛

小梅 稻荷様へお参りの序に、一寸大黒屋へ行かねばならぬ。

源兵 それは丁度いゝ、おれも大黒屋へ行かにやならぬ、まあ爰へかけたがよいが、さうしてなにぞ用か。

小梅 アイ、こちの人に用事があつて。

源兵 やあ。

小梅 サア申兵衛殿に、モン私や前の藝者と違ひ三年後に嫁入して、今では梅堀の梅の由兵衛が女房小梅でござんすわいなあ。

源兵 はて梅盡し面白、おれも源兵衛堀の源兵衛と言はれては、ちつとは男も賣つたもの、藝者の時から惚れ抜いてゐる小梅、いや由兵衛が女房になつたとて、さう素氣なくせずと、まあ一服のんでもあんまり罰も當るめえぞ。

小梅 エ、有難うござんすが、お前も梓のやうにもない、附けて下さんせいな、昔かはらぬ煙草といひ煙管迄。

源兵 なんの煙草は薄舞、煙管は村田よ。

小梅 お前は矢張吉原へお通ひであらうな。

源兵 今ぢや世界が下つて前のやうにはねえのよ。(ト此の内小梅煙草を付け、源兵衛へ遣る。) これさ野

暮め、拭かいでもいゝ事に。

小梅 源兵衛さん、ゆるりとこれに。(ト行かうとするを引きとめて、)

源兵 これさ、その様に急かすともいゝぢやねえか。

小梅 いえ、こちの人に急に逢はねばならぬ。

源兵 ハテ、男の頼んで居る所へ、女房の行くもまづいものぢや。

小梅 エ、。

源兵 おれと違つて由兵衛は男がいゝ故、藝者が惚れるわさ、今日も大黒屋での、其の藝者を連れて

楽しんでゐるであらうよ。

小梅 ム、そんなら此方の人には、情婦がござんすかえ。

源兵 こなさんは知るめえが、額の小三と云ふ美しいまだ新米の藝者、吉原中へ浮名が立つてゐる、それを知らぬとは、ハ、ハ、ハ、とんだ事だ。

小梅 まあ、待つて下さんせ、なんと云はしやんす、此方の人由兵衛殿が、あの藝者の小三とやらに。

源兵 はて、町内まちないで知らぬは亭主ていしゆばかりなりサ。

小梅 ム、それで解よめた、小三こと云いふ文ぶんの來くろは此方こちの人が。一

トこなしあつて云ふ。源兵衛煙草をのみながら、

源兵 梅うめの由兵衛よしべゑに二人ふたりの女房にようぼう、小三こ小梅こと悋氣りんきの炎は燼せん。

小梅 え、さういふ事こととは今いままで知しらず。

源兵 梅うめの由兵衛よしべゑに二人ふたりの女房にようぼう。(ト源兵衛小梅と顔見合せ。)

小梅 ホ、、、、、私わたしとした事ことが、源兵衛げんべゑさんに水みづを向むけられ思おもはず知しらず。

源兵 これさ眞實げんじつの事ことだ、是これが嘘うそなら此源兵衛このげんべゑ二度どと廊らうへへひるめえ。

小梅 イエ、それでも。

源兵 おれが此方こなたに惚ほれてゐる故ゆゑ、由兵衛よしべゑの仲なまを割さかうと小三こが事言こといふと思おもふも、こりや尤まごも、女むすめの

心こゝろで嘘うそと思おもふは無理むりはねえが、源兵衛げんべゑがいふ事こと嘘うそか實まことか、是これから大黒屋だいこくぎへ行いつて、とつくり様よう子こを見みたがよい。

小梅 アイ、こりやさうしませうわいなあ。

源兵 たとひ行いつても、小三こが様やう子なを糺たすまでは隠かくれてゐやれ。

小梅 そんなら源兵衛さん。

源兵 小梅おれと一緒に。

小梅 合點でござんす。

源兵 さあ、かう來やれ。

ト小梅帯をしめ上げる。源兵衛立ちかゝるをよろしく知らせにて、通り神樂、流行唄にて此の道具
ぶんまはす。

大七座敷の場。本舞臺見附暖簾、上の方折廻し障子屋體、いつもの所へ被折木戸を出し、すべて

向島大七の模様、賑かなる流行唄にて道具納まる。と奥より小三金五郎の胸倉を取り、

小三 まあなんぢやあらうと、ちよつと來て下さんせいな。(ト言ひながら出る。)

金五 小三、見苦しい男の胸づくしをとつて、まあこゝを放せ。

小三 金五郎さん、お前口説どころぢやござんせぬ、奥へ來てゐる伴五郎が私を身請けすると言
て、源兵衛諸共親方さんと相談、此の間から私が氣を揉んでゐるゆゑ、最前由兵衛に送うたゆ
ゑ此の事とは思へども、いろく世話になる上、また身請けとは何うも云はれず此の事を

前から。

金五

それぢやというて氣の毒な、せめて手附なりと、おれが調へてと思ふが、昔と違ふ今の身の
上、僅かの金にさへ手聞える。

小三

身請けの高は二百兩とやら。

金五

せめて百兩、あゝ誰ぞ、

小三

貸してくれる人はないかいなあ。

ト兩人當惑のこなし、此の内花道より十平次着流し浪人者のなりにて出で、門口に窺ひみて、此の時ずつとけひり、

十平

其の金身共が用達て申さう。

二人

エ、。(トびつくりこなしある。)

十平

あいや其方には御存じあるまい、なれど手前は能く存じて居る、金谷金五郎殿、僅な金子に差
支へ當惑の様子、幸ひ拙者持合はせし金子二百兩。

ト金包を出す。兩人見て不審さうに、

小三

アノ、此の金を金五郎さんへ。

十平 心置きなく遣ひめされ。

金五 無ければならぬ金の手詰め、貸さうとおつしやるは忝いが、ついにお目にかゝり申さぬ、近附でもない私へ。

十平 用達て申すは淺からぬ二人が戀仲、感心いたした拙者も浪人なれども、以前は武士、と申すも表向き、有様は是が今の渡世でござる。

金五 エ、。

十平 いやさ、少々の金子を取引いたして世を渡る浪人者ゆゑ、それ故吉原へ入込み大盡金、又は太夫金を貸して、口錢をとる口入れでござる。

金五 ム、すりや聞傳へて居る金の世話役、口入とやら。

十平 それゆゑ近附でなくとも、貸附けるのでござる。

金五 えゝ忝い、そんなら小三。

小三 まあ、その金を。

金五 お借り申しまする。

十平 お待ちなされ、お望みなら貸して進ぜるが、金利と拙者が筆墨代の極めは先へ引かねばならぬ

が、始めての得意金五郎殿だけ後での差引、慥かに思へば苦しうござらぬ、まづ一札を書いて遣はされい。

金五 その一札と申すは。

十平 ト金五郎心得て、硯箱を出して十平次の前へ置く。十平次書きて、知れた證文、此の通り認め下され。

ト下書を金五郎へ渡す。金五郎その通りをさら／＼と書いて、

金五 して此方様のお名前は。

十平 土手のどぶいや瀬地屋六右衛門。

金五 六右衛門とな。(ト書くうちに、)

十次 六右衛門殿へ、金谷金五郎自筆なれば書判でも爪印でも大事ない。

云ふ通りを認め渡し。

金五 是にてよろしうござりまするか。

十平 どれ、よろしうござる、然らば百兩。(ト金を渡す。)

金五 エ、忝、思ひがけなく、これ小川。

小三 こんな嬉しい事はござんせぬわいなあ。

金五 時に肝腎のお前様の所はえ。

十平 返さつしやる時分には、此方から受取りに来る。

金五 そんなら其時。

小三 御浪人様。

十平 お二人、いづれ又お目にかゝらう。

ト唄になり、十平次こなしあつて奥へはひる。小三金五郎思入あつて、

金五 これ小三、思ひがけない此の金が出来たからは、身請けは此の金五郎、なんと嬉しいかゝ。

小三 こんな嬉しい事はござんせぬ、ほんに思へばあの方、二人が仲を結ぶの神さん。

金五 此の悦びにそんなら一寸。

トこなしあつて引寄せる。此前より小梅奥より出かけ様子を見て、此の時さてはと思入あつて前へ

出で、

小梅 ちとお尋ね申します。ト是にて兩人びつくりして、

小三 ハイ、してお前さんは。

梅の由兵衛

小梅 額のが小三様さまといふい業者衆しやしゆは お前様まへさまでござりまするか。

小三 小三こは私わでござんす。(ト金五郎の方かたへ向むひ、)

小梅 お前様まへさまはいよ、此この小三こさんと。

金五 サア恥はかしながら言交いひかはした金五郎きんごろう、それがどうしましたな。

小梅 今の様子ようすでお二人ふたりともに、つい一通りひととほの交情なつかではござんせぬなあ。

小三 アイ恥はかしい事ことながら、お國くにで深ふかういひかほし、此この江戸えどへ來きても矢張りやはりかはらず。

金五 追附おっつけ小三こを身請みうけして、わしが女房にやぼう。

小梅 そりやこそ私わを欺たぶしくさつた。

金五 これ、女中ぢゆうちゆう、最前さいぜんからの様子ようすといひ、二人ふたりが事ことを委くはしう聞きく此方こなたさんは、

小三 まあ誰方だれかたでござんすぞえ。

小梅 はい、これは御免ごめんなされませ、私わたくしとした事ことが不作法ふさぽうな、私わたくしは梅うめの由兵衛よへいが女房小梅にやぼうこめと申し

まするもの。

小三 そんなら聞き傳つたへた、梅堀うめぼりの由兵衛殿よへいどののお内儀ないぎかえ。

小梅 してお前さんまへさまは此方こなたの由兵衛殿よへいどのに、近附ちかづきでござんすか。

小三 アイ、不思議に廻り逢うた以前の家來、段々との由兵衛が世話。

金五 小三が縁にて、此の金五郎まで。

小梅 エ、そんなら此方の人の以前の御主人、三島隼人様とやらのお娘御でござんしたかいなあ。

金五 此の江戸へ來て人に欺され藝者の勤め。

小梅 さうとは知らず、アタ憎らしい源兵衛づらめが。(ト奥へ思入)

金五 外ならぬ由兵衛どの、お内儀の、

小三 小梅さん、此の上ながら、

兩人 お頼み申しますぞえ。

小梅 これは、御挨拶痛み入ります、こちらの人の大事の御主人なれば、私も及ばずながら。それ

はさうと由兵衛殿は。

小三 奥の座敷でお前と一所に、私もちよつと。

小梅 そんならお慮外ながら。

金五 わしは親方に逢うて、今の金を身請けの手附に。

小三 さうして下さんせ。(ト小梅思入あつて)

小梅 ほんに思へば源兵衛づらに誑かされたが腹が立つ、がようまあ此方の人に先へ逢はなんだなあ。

小三 エ、。

小梅 いえ、どれ由兵衛殿に。

ト流行員になり、小梅小三金五郎奥へはひる。後へ源兵衛伴五郎久庵十平次出て来り、

源兵 どうか目算通りに、

十平 まんまと首尾よう、金五郎にあの百兩。

源兵 彼奴が取れよば、苦みてう分ちや。

久庵 そりや忝い、金が出来たら天眼鏡を買はねばならぬ。(ト天眼鏡を出して見せる。)

伴五 時に源兵衛、先達て預けて置いたあの手向山の色紙、急に賣拂うて小三が身請の。

源兵 はて氣遣ひさつしやるな、わしが預つてゐる色紙は千葉家の重寶、野暮な盗みもの、滅多に世間へ出されぬ品、それぢやによつて手を廻して賣拂ひ、金さへこしらへたら小三が身請けもわしが呑込んでをりまする。

伴五 それがどうぞ今日の内に。

源兵 たとひ金がなくても源兵衛堀の源兵衛親分を捉へて、鐵壁押しに押付けても身請けはお前様
にさせまするわいなう。

久庵 まあ先生に任せて伴五郎様。

伴五 さう行けば赤し。

トバタ／＼にて、是より亭主小三を引立て出る。

小三 親分さん、こりやお前何をさしやんすぞいなう。

亭主 何をするとはこれ金五郎様、お前は／＼大それた人ぢやの。

金五 親分／＼奥で渡した身請けの金、なんでおれが大それた事をした。

亭主 その受取金は是此道りの、みなどうみやく小判、こりや贖金ぢやわえ。(ト金を出して金五郎に見せ
る。)

金五 なに、その金が。(ト取つて改め見て。)やゝこりや贖金、ム。(トびつくりこなし。)

小三 えゝ、そんならそのお金は。

金五 ム、いやなに御浪人、ちよつとお目にかゝります。

十平 身共になんぞ用かな。

金五 近頃ちかごろ率そつじ爾にながら、最前さいぜんお借り申した百兩ひゃくらうの金は、これ此この通りとほり。(ト金を十平次に見せる。) さあ

よもや此この贖金あがねをお借かしなされう筈はずはござりませぬが、こりや何なんぞの間違まちがひで。

十平 これこれく金五きんご郎らう、成程なるほど金子かねこ御用達申したが、身共みどもの貸かしたは正真ちやうじん正銘せうめいの實じつの小判こばん。

金五 それにまた、此この金かねは。

十平 どれ見みせやれ。(ト取つて見て隠とびつくりなし。) ヤ、、、、、ほんとはこりや贖金あがね小判こばんぢや、こ

れ金五きんご郎らう、わりや顔かほに似合にあはぬ恐おそろしい事ことをするなう。

金五 なんと言いはつしやる。

十平 いやさ、身共みどもより借かりた正真ちやうじんの小判こばんを其方そつちですりかへ、その言いひ譯わけけで返かへさぬのか、こりや

慥たじかな一札書さつかいて、砂すなにする氣きかそりやならぬ。

亭主 これ金五きんご郎らう様さま、此この小三こぞうが身請みうけけはどうするのぢや。

金五 え、これ。(ト十平次を見てこなし、伴五郎出て、)

伴五 こりや、親分おやぶん小三こぞうが身請みうけけは身共みどもがいたすぞ。

亭主 さやうなれば其その金子かねこを。

伴五 いやさ、その金かねは。(ト源兵衛の顔を見る。)

源兵 身請みうけの金かねはおれが渡わたす、此この源兵衛げんべゑが渡わたす、親分おやぢい言いひ分ぶんはあるまいな。

小三 いゝえ私わがの身請みうけは、矢張ぶちば金五郎きんごろうさんでござんすぞえ。

亭主 でも、そのやうな金かねでは。

金五 いやそれは。(ト十平次にきつとこなしあつて) 親切しんせつらしう金かねを貸かして、こりやおれをば。

十平 盗人ぬすびと猛々まうまうしいと、騙かたをひらぐ金五郎きんごろう、いつその事こと。

ト引付けようとするを振拂ふ。小三止めてちよつと立廻りにて十平次兩肌脱ぐ、下に襦袢を着てゐる。金五郎小三見てびつくり、

金五 やゝ、そのなりは。

十平 何を隠かくさう、おりや此通このとほりの乞食こじき非人ひにんぢや。

小三 そんならその非人ひにんが。

十平 金谷かなや金五郎きんごろう様、見るかげもない乞食こじき非人ひにんの金かねを借かりて返かへさずには置おかれまい、さあ貸かした金かねをどうぞ御慈悲おんじひに返かへして下くだされ。

金五 さあそれは。

源兵 金五郎きんごろう、こりや乞食こじきの金かねを借かりたに違ちがひはないか。

十平 何んの違ひがあるものか、慥かな一札。

金五 見すくこりや、うぬ。

十平 贗か眞正かなぜその時に改めぬ。

金五 さあそれは。

十平 金を返すか。

二人 さあ、

三人 さあくく、

十平 どうするのだ。

トセリフいろくある。此の時一間の障子を引きぬき、内より由兵衛煙草盆を控へ、煙草を喫みながら。

由兵 それ百兩。(ト前へ投出す。皆々見て。)

皆々 や、梅の由兵衛。

金五 やあこれは由兵衛殿。

由兵 はて、何んにも言はずと、その金濟まして仕舞はつしやりませ。

小三 さうぢや。(ト金を取上げ、)これ金五郎様、此金ちやつと。

金五 いやく、此の金遣うては。

小三 大事ござんせぬ、由兵衛が志早う濟して下さんせいなあ。

金五 それぢやというて。(ト由兵衛が顔を見る。由兵衛返せとこなし、)えゝ忝い。(ト金を取上げる、此の

内源兵衛、)

源兵 流石の由兵衛、梅堀の通り清程あつて切れるわえ。

久庵 おゝ切れるく、追付け小三と金五郎が仲も首尾よく切れるであらう。

小三 えゝ。(トこなし。金五郎十平次が傍へ寄つて、)

金五 騙りと知つて騙り取られる百兩、さあ受取れ。(ト突き附ける、十平次こなしあつて、)

十平 おゝ受取らう、貸したものを受取るのに、不思議はねえわえ。

ト金を受取り襦袢の袖をとつて小列を改め、包んで懐中へ入れる。

小三 金受取らしやんしたら、最前の一札を取らしやんせ。

十平 一札とは。

金五 おゝさうぢや、おれが書いた預り手形を。

十平 そりやこゝにある。それ證文。(ト金五郎に渡す。開き見て、)

金五 菅家手向山の色紙慥かに受取り申候處實正也、然る上は御頼みの通り此方にて密かに賣拂ひ、金子は後より遣はし申可候、念の爲め色紙受取一札仍如件。

皆々 やあ、それは。

十平 南無三違つた。

ト取りにかゝる。金五郎は付廻す。小三隔てる。

金五 違うても此方の事。

十平 でも。

ト小三を引き退ける内、由兵衛一間よりつかくと出て、一札を取つて、

由兵 菅家手向山の色紙慥かに受取申候處實正也、然る上は兼ねて御頼みの通り密かに賣り拂ひ申可候、金子は後より遣はし申可候、念の爲め色紙受取一札仍而如件、伴印殿へ源印判。

十平 それ讀まれては。(ト左右よりかゝるを突き退け、)

由兵 ハテ、百兩にはよい掘出し物。

兩人 いや、それは。(ト又かゝるを立廻り、兩人を見事に投げる。)

ト頭巾を取り尻をからげる。源兵衛つかくと出てちよつと抜きかけるを山兵衛付け廻して、伴五郎久庵かゝるを立廻つて投退け、十平次逃げるを襟上捉へて引付けきつとなる。金五郎小三は久庵伴五郎を隔てる。山兵衛十平次を引付け、

由兵 今を始めの旅衣、よいやまかせとな。

由兵 ヤイどぶを食め、合點の行かぬ此のさまで、千葉のお家の重寶の手向山の色紙をば渡した受取り、此の一札の伴印 源印の木名を、うぬが口からほざかせずば、慥かにそれと知れてはあれど盜賊の證據、さあどうだ。

十平 いやさ、それは。

由兵 ぬかさによ、うぬかうして。

ト一札を持つて十平次を色々と責める。此の内源兵衛思入あつて、久庵の天眼鏡を取つて一札の上へ劈し目をうつす思入にて、一札を焼き捨てる。皆々びつくりして、

小三 それく、大事な一札を。

金五 なぜ焼捨てた源兵衛殿。

源兵 ホイ、思はぬ粗相。

由兵 大方知れた色紙の行衛、もう此の上は。

ト立上りきつとなる。此の時奥より以前の小梅つかくと出て、頭巾を取上げ由兵衛へ見せて

小梅 これ此方の人、お前は此の頭巾を忘れさしやんしたかえ。

由兵 ヤ。

小梅 サア、此の頭巾は一生の守り、此の内には。(ト差付ける。由兵衛思入あつて、)

由兵 ム、此の場の仕宜のならぬ堪忍するが堪忍。

小梅 心一つにとり納めて、

由兵 これといひ、場所というても大切な。

小梅 サア、よもや唐天竺へも渡るまい、サアなん時でも。

由兵 おゝ、さうぢやなう。

ト尻からげを下す。小梅こなしあつて。

十平 嬉しやおれが身の上は。(ト立ちかゝるを、由兵衛手早く有り合ふ繩にて引括りて、)

由兵 大事の代物、金五郎様。

金五 おゝ合點ぢや。(ト引揃ゑる、源兵衛皆々顔を見合はせ、)

源兵 ム、ウ。(ト落付けるこなし。亭主前へ出て、)

亭主 最前からこゝに待つて居りましたが、小三が身請けは。

小三 親方さん、外へ行けばわしや牛きてはゐぬぞえ。

小梅 減多に死なさぬ、身請けは此方へ、ナア此方の人。

伴五 イヤ此の伴五郎が、ナア源兵衛。

源兵 ハテ彼方の分り次第。

亭主 何方でも、兎角お金の早い方へ。

皆々 さあ、その金は。(ト由兵衛思入あつて、)

由兵 女房、その頭巾を。

小梅 アイ。(ト渡す。由兵衛取つて、)

由兵 金五郎様おなじなさるな、小三郎の身請けはいたしまする、いやなに親方、ちつと顔を貸して

下され。

亭主 あの、私にか。

トこれを合方になつて、由兵衛右の頭巾を取つて思入あつて、

由兵 才兵衛どの、此の頭巾はちつと様子あつて由兵衛が爲めには一生の守り、それで不斷は滅多に脱がねども、金の手詰めに脱いだ頭巾、幸ひあり合ふ錠前びんと卸した此の頭巾は、身請けの手附け調へて引替へるまで、預つてくれまいか。

亭主 成程、今江戸中で顔の知れた梅の由兵衛殿、こりや面白い、金の代りに預りませうか、して何時頃まで。

由兵 明々後日まで。(ト此の内小梅思入あつて、)

小梅 今日(けふ)は正月(しげ)の二十日(か)、明々後日(あさ)は二十三日(にち)の晩(ばん)まで。

由兵 屹度(きつと)百兩(ひゃくらう)の金調(かねぢょう)へて、頭巾(づきん)を此方(こつち)へ取戻(とりもど)す。

亭主 ようございます、呑込(のみこ)みました。

由兵 店(みせ)へ屹度(きつと)預(あづか)りましたぞや。

亭主 畏(かしこま)りました。

久庵(くあん) これ(これ)は源兵衛(げんべい)先生(せんせい)、彼方(あちら)へ頭巾(づきん)で身請け(みうけ)が出来(でき)たら、此方(こつち)はこりや足袋(たび)でなと小三(こさん)が身請け(みうけ)を、ナア伴五郎(ばんごろう)様(さま)。

伴五(ばんご) お(お)うさ、足袋(たび)でならずば、バツチでも大事(だいじ)ない。

源兵 はて無駄を言はずと黙つてござれ、掛合はずとこけて来る小三が身請け、二十三日の晩まで
ちや、これ後へ廻つて思案があるわえ。

小梅 こちの人、あれまた。(ト源兵衛へこなし)

由兵 はて、彼方に思案があれば此方にも證據の一札、假令焼いても後日に屹度。

源兵 すりや何時なりとも。

由兵 源兵衛堀と、

源兵 梅堀と、

伴五 久庵

由兵 源兵衛。

金五 源兵衛。

由兵 ム、。

小梅 これ。(ト立寄り、思入ある中へ小梅はひる。)
源兵 かさねて逢はう。

ト唄になり皆々思入、由兵衛小梅小三金五郎十平次を引立て奥へはひる。源兵衛伴五郎久庵残り。

伴五 源兵衛、共方が働きで一札は焼捨てたれど、盗賊は十平次、われ／＼が所持するといふ事を。

久庵 さうちや、由兵衛めがかんづいた様子。

源兵 はて大事ない、色紙の事はしらばツくれて覚えなと言ひぬく、又小三が身請けも頭巾を預ける程の仕宜、三日の内には金は出来ぬ。

伴五 然らば半時も早く彼の色紙を。

源兵 さあ待つてはをられぬ、これから直ぐにこなたも同道で色紙のせいらく、久庵は後に残つてどぶ六めにふけつて来いと、ナア。

久庵 それも合點。

源兵 伴五郎様はわしと一緒に。

伴五 いや、ま一度ちよつと小三に。

源兵 ハテまあござれといふに。

ト唄になり皆々はひる。知らせにて此の道具ぶん廻す。

大七表かゞりの場。本舞臺向う一面の板塀、よき所へ切戸口、屋根付きの枝折門、すべて大七表かゞりの體。時の鐘、各方にて道具納まる。と枝折の内にて、





小梅 もうそれには及びませぬ、よしにして下しやんせ。

言ひながら出る。後より男ぶら提灯を提げて出で、

男 もう日が暮れました、是非土手から吾妻橋まで送りませう。

小梅 忙しいのに大事ござんせぬわいなあ。

男 イエ、由兵衛隊に言譯けが濟みませぬ。

小梅 そんならお前送つて下さんすなら、とても御苦勞ついで、吾妻橋を渡つてこの文を。(ト男へ

渡す。)

男 弟淺次郎殿へ、姉小梅より。

小梅 サアわしが弟が藏前に奉公してゐます、そこへ其の文を届けて下さんせ、委しい様子は道

道話しませう。どうぞ行つて下しやんせ。

ト流石頃になり、小梅男を連れて花道へはひる。あとバタ／＼になり十平次久庵出て來り、

十平 久庵、源兵衛親方の方へか。

久庵 さうぢや、その繩を。

十平 おい解いてくれや。

ト後ろを向く。繩を解くところへ金五郎出で、

金五 座敷をふけつた乞食め、働きやがるな。

十平 やあ、わりや金五郎か。

久庵 邪魔な二才め。

十平 やつてしまへ。

ト兩人金五郎へ懸るをちよつと立廻つて、見得より詭への鳴物になり、いろく立廻りあつてトド金五郎十平次を追ひかけて花道へはひる。久庵此前より立廻りの内うろくして上手の松の木へ登り、窺ひ居て此の時降りようとする。又足音するゆゑ降り兼ねるところへ、内より小三小糸お筆出

小糸 お筆 小三さん、どのやうに尋ねても金五郎さんは、あやしやんせぬわいなあ。

小三 さうして悪者共も見えず、こりや由兵衛に言はねばならぬ。

ト此の内小糸上手の立木へ目をつけ久庵を見て、

小糸 あれく、松の木に誰やら居るぞえ。

トこれにて久庵袖にて顔を隠す。

小糸 お筆 ほんに、あれは慥かに。

小糸 それく、猿であらうわいなあ。(ト松の木の上面にて。)

久庵 キヤツキヤツく。(ト猿の眞似をする、三人思入あつて、)

小三 いや猿ぢやござんせぬ。ありや烏ぢやく、なあ、お筆さん小糸さん。

小糸 おゝ、ほんにありや烏ぢやさうなわいな。

久庵 カアくカア。(ト烏の眞似をする。)

お筆 いや烏ぢやござんせぬ、鶯ぢやわいな。

久庵 ピイヒヨロくく。(ト又鶯の眞似をする。)

小三 いえく、ありや鶯ぢやない、見やしやんせ、頭の圓い所は鯛ぢやわいなあ。

小糸 ほんに、鯛ぢやわいなあ。

小三 ありや鯛ぢやく、河岸で見せる鯛男ぢやわいな。

ト久庵見世物の眞似をしようとしてゐる。

三人 ようく、鯛様々々。

小糸 鯛男も槌に鳴くであらうわいなあ。

久庵 鯛に困り詮方なしに、

久庵 たこくく。 (ト皆々笑ふを三人囁く。)

小糸 おんなら由兵衛さんに、さうぢや。(ト奥へはひる。久庵びつくりして落ちる。)

小三 やあ、お前は久庵さんか。

久庵 小三坊か。

トかゝるを兩人立廻つてゐるところへ、由兵衛提灯を提げつかくと出て、久庵を突廻す。

久庵 やあ由兵衛、われを。(トかゝるをちよつと立廻つて、下手の井戸へ打込むを木の頭にて。)

小三 それでは。

由兵 構はずござりませ。

ト小三の手を取つて由兵衛花道へはひるを、よろしく、

ひやうし 幕

二 幕 目

米屋の場

同返し扉外の場

役名 丁稚長吉、信樂勘十郎、角力長五郎、米屋佐兵衛、女房小梅、手代喜

介、同權七、娘お君、下女お竹等。

藏前米屋の場。本舞臺三間の間常足二重、向う真中暖簾口、上手上下戸棚、しも手茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、下手帳場格子、帳簿、いつものところに門口、此外大格子、すべて藏前米屋の體、爰に權七帳面を控へ居る。喜助十露盤を置いてゐる。平舞臺に長五郎田合角力の前髪臺にて俵を差上げてゐる。稽古唄角兵衛にて暮あく。

喜助 八百七十目。

權七 八百七十目。

喜助 二百三十目。

權七 二百三十目。

長五 こりや〜どつこい。(ト俵を差上げ投出す。よいやさ。(ト相撲に勝つた見得をする。)

喜助 これは情ない、長五郎さんの力持で大事の帳合ひをあへられてしまった。

權七 なんぼ稽古にしても、雷電や谷風のやうな角力には、生れかはつてもなれまい。

兩人 ハ、、、。(ト笑ふ。長五郎これを聞きて、)

長五 ヤイ、權七喜助そりやなにを言ふのぢや、おれが好んで角力取にならうと思つてゐるぢや、長五郎、名乗はのべ紙と付いてある、此の秋の相撲から番附へ入れて貰つて土俵へ上つて見せる、夫故凝つて稽古をしてゐるを、何んでそんな事を言うて笑ふのだ。

權七 いや笑ふのではないが、所詮あなたはぬ事ぢや、よしにしたらよからう、なう喜助。

喜助 ヲ、さうぢや、長五郎さん、お前江戸の角力へ出ようより、ちつと遠いが小人島の鬪取にならつしやれ。

長五 うぬが、主同然のおれを澤山さうに吐かすが、在所にゐた時分から下地のある長五郎、追付け鬪取になつて見せう、喜助でも權七でも相手は嫌はぬ、一番揉んでやらう、来い。

喜助 こりや面白い、米屋に奉公するものが、まんざら無手ではない、權七行け。

權七 一番揉んで見ようかい。

長五 大地へ埋めでやらう、用心して、さあ来い。

ト長五郎しこを踏む。權七を相手に角力をとる。喜助行事のやうになり、長五郎權七兩人いろくあつて、ト權七長五郎を見事に投げ。喜助權七わつと笑ふ、長五郎むつとして、

長五 なんぢや／＼、今のは怪我の張合、誠におれや此の間からちつと色事に凝つてゐる故、それで今のやうに、はて争はれぬものぢやなあ。

兩人 それがほんの負惜しみぢや、ハ、、、、。(ト兩人笑ふ。此聲にて奥より主人佐兵衛親仁のこしらへにて出て。)

佐兵 なんぢや店先がさわつくが、喜助權七、言付けて置いた勘定はどうぢや、よいか。

兩人 大概片附いてしまひました。

佐兵 そりや早かつた。いや長五郎、儘か娘が奥で尋ねてゐたぞや。

長五 それは大方。(ト思入あつて主人を見て) ハテなんの用ぢや知らぬ。

ト俄かに髪をかき上げる。

權七 これさ長五郎さん、角力取より色取の方がよからう。

喜助 それく滅多無性に此中から。

長五 はて思ひ内にあれば面皷顔に顯はれるぢやなあ。

佐五 なんのことぢや。

稚のなりにて出て來り花道にて、

長吉 勘十郎様には思ひがけないところで、お口にかゝりましてござります。

勘十 さればく、長吉其方もこりや淺草へでも參詣したか。

長吉 イエく、下谷の方から廣徳寺前の花主場廻りでござりまする。

勘十 身共は又觀音へ參詣の次手、伯父者人をお見舞ひ申さうと。

長吉 それはようお出でござりまする。

勘十 サア同道いたさう、長吉來やれく。

ト兩人門口へ來り、長吉門口を開ける。佐兵衛見て、

佐兵 おゝ長吉、今戻つたか。

長吉 はい左様でござります、勘十郎様がお出でなされました。

佐兵 なんぢや、甥の勘十郎が參つた。

勘十 左様にござりまする。(此の内勘十郎向へはひる。)

佐兵 やれようこそく、さゝこれへく。

勘十 然らば御免下されませ。(ト二重へ住ふ。)

長五 勘十郎様、ようお出なされました。

勘十 長五郎變る事もないか。

長五 まあ〜あれへ。(ト喜助罷七茶頓草盆を持ち行く。)

佐兵 勘十郎はおれが甥、あの長五郎は死んだ婆めが甥、在所にゐたれど去年から此方の内へ來てゐ

るも、角力になりたき望み、今世話するも婆が遺言、どうぞ關取に。

長五 いやもう親仁様のきついお世話になります、勘十郎様よろしうお禮を。

勘十 はてつながる縁なれば、假令になつても随分出精が肝要ぢや。

佐兵 おれが商賣の米屋、その内に長吉といふ丁稚と長五郎といふ角力、曲輪日記の淨瑠璃のやうな

との噂ぢや、ハ、ハ、ハ、ハ。

喜助 ほんに長吉、花主先の米はどうぢや。

長吉 皆後からいうてやらうと。

長五 長吉、わが身をお君さんが尋ねてゐたぞや。

長吉 なに、それはお前様の事でござりませう。

長五 へ、こいつはちつとちん〜ぢやな。(トこなし。)

佐兵 時に勘十郎、なんと思つて参られた。

勘十 今日けふは觀音くわんおんへ參詣まぎながら伯父おぢ者もの、(ト懐中より紙包の金を出し)金子百兩先きんす びやうだんじちま日ひ急いそに入用にようあつて借か

用よう申まをしましたなれども、今日こんにち御返濟ごへんさい申まを上げまする、御受取ごうけとり下くださりませう。

佐兵 はて伯父おぢ甥なまの仲義理なまざりがたい、さう無なうても大事だいじないわさ。

勘十 イヤ、又御無心またごむしん申まを上げまする僕わがもござれば、先まづ受取うけとり下くださりませう。

佐兵 そんなら慥たしかに受取うけとりりました。此帳このちやう面簿めんぼ笥かきの抽斗ひきだしへ入れて置きませう。

ト右の金を帳簿笥の抽斗へ入れ、鏡前をおし、長五郎これを見てゐる。勘十郎となしあつて、

勘十 百兩ひやうりやうの金御返濟かねごへんさい申まをした上うへは、抽者せつしゃは最早もはや離中りぢゆうさう。

佐兵 それは餘あまり早々はや、せめて奥おくへ御座ござつて酒さけ一つ。

喜助 左様さやうなら奥おくへ勘十郎かんじゅう様さま。

勘十 然しからば。如何いかやうとも、さあ長五郎ちやうごろうも一いっ緒しょに來きやれ。

ト唄になり、勘十郎佐兵衛先に替々奥へはひる、引きつがへてお竹下女のなりにて出て、

お竹 長吉ちやうきちどんく。(ト呼びながら出てあたりを見て、)今聲いまこゑのしたは慥たしかに長吉ちやうきちどん、何處どこへ行いかしてや

んしたやら。

お君 お竹く。(ト呼びながらお君世話娘の振袖なりに出て、)こゝにゐやるか、最前より尋ねてゐたわ

いなあ。

お竹 お君さん、なんで御用でござりまするか。

お君 お竹や、昨夜頼んだ物を、かの人に渡してたもつたかや。

お竹 まあ長五郎さんには渡しましたが、肝心の長吉殿には昨晩から間が悪うてまだ渡しませぬ、け
さから花主廻りで留守でござりましたが、今聲がいたしましたから、渡さうと思つてそれで尋
ねてをりますわいなあ。

お君 エ、モ長五郎さんは大事なが、早く長吉に渡してたもいなう。

お竹 ハイ、合點でござります、そんなら奥で間を見合はせて渡しませう。

ト言ひながら奥へはひる。お君こなしあつて、

お君 どうぞ私が思ふやうに、南無観音様々々々。

ト手を合はせ拜むこなし。此の内奥より出て來り、

長五 お君さん。(ト恥かしきこなしにて言ふ)

お君 エ、。(トびつくりこなしあつて)長五郎さんかえ。

長五 アイ。

お君 ようお出なさんしたな。(トこなし。)

長五 お出ぢやがどうだえ。

お君 長五郎さん、昨夜竹に渡したものが届いたかえ。

長五 そりやあの、長たらしい此の文かえ。(ト懐中より出して見せる。)

お君 あいなあ。(ト恥かしさうに顔を隠す。)

長五 なんの、恥かしい事があるものか。

お君 それでもお前、あのやうな文をお前讀んでかえ。(ト長五郎無筆のこなしにて、)

長五 讀めまいか、おりや在所にゐる折寺屋へ五年も行つた者ぢや。

お君 さあ讀んで下さんしたら、誰にもいうてお呉れなえ。

長五 誰にいふもので。

お君 そんならあの通りぢやぞえ。

長五 まあゝの通りぢや、あの通りはあの通りぢやが、なんとあの通りを口で一週で言うて聞かさん

せ。

お君 えゝもあのやうな事を恥かしい、口でどうまあ言はれるものぞいなあ。

長五 なんの言はれぬ事があるもので、どうでそりや長吉のやうにはあるまいが。

お君 又そんな事を長五郎さん、見やしやんせいなあ。

ト壘へ指で書いて見せる。長五郎讀めぬ故いろ／＼とこなしある。

お君 ぢやわいなあ。

長五 ぢやわいなあで解るものかいなあ。

お君 えゝ、どう讀んでぢやわいなあ。(ト又壘へ書いて、)さうしてかうぢやわいなあ。

長五 さあ、それでも。

お君 これいなあ。(ト又書かうとするを、)

長五 エ、もう書くまい／＼、女子のものを書く程面倒なものはない、よう喋る口を持つてゐて、滅

多無性に書きたがる女ぢやなあ。

お君 それでも人が聞くわいな。

長五 聞いたらどうぢやえ、誰がなんと言うてか。

お君 いゝえ。

長五 そんならぐづくした筆先より、一挺とほすが近道ぢや、さあちよつと。

お君 えゝもう、知らぬわいなあ。

長五 得心ぢやないか。(ト傍へ寄る。)

お君 それでもあれ、誰やらが。

ト擦り抜けようとするを捉へて、彼方此方と二三度追廻す。此の時内より權七出て來る。長五郎夢中にて權七を捉へる。

權七 こりや何をするのぢや。

長五 えゝ(ト顔を見て、)

長五 やあ、權七か。

權七 こゝに長五郎さん、勘十郎様が呼んでぢや、さあござりませ。

長五 いや、おりやこゝでお君さんと、地取りをしかけてゐるのぢや。

權七 まあ、ござりませ。(ト無理に長五郎を奥へ連れてはひる。お君思入あつて、)

お君 なんぼこちの爲めぢやとて、あの憎らしい長五郎づらに、えゝも、どうしようぞいなあ。

トちつと思入、なまめきやうの合方になりて、奥より長吉芝居の番附を見ながら出て來る。お君長

吉を見て、

お君 やあ長吉か。(ト傍へ寄るのを、素知らぬ振にて、)

長吉 ハイお君様。(ト矢張り番附を見てゐる。)

お君 そりやなんぢや。

長吉 奥の硯箱にござりました故、見てをりまするわいな。

お君 わしにも見せやいなう。(ト番附を取り見て、) ほんに此の狂言の時、父さんやわがみと一緒に見に行つたなう。

長吉 ハイ、見に行つたさうでござりまする。

お君 此狂言は面白かつたぢやないかいなう。

長吉 お前様は面白うござりませうが、私は氣が揉めてござりまする。

お君 さあ、其方の氣の揉める事故に。

長吉 お君さん、お前をお頼み申しました事、聞えてござりまするか。

お君 そりや一昨日のことであらうがな。

長吉 サア、それぢやによつて私はな。

ト言ふ内、身よりお竹出て思入あつて、

お竹 お、嬉しや、長吉どんこゝにかや、お君様も一緒に。

お君 よい所へお竹、昨夜頼んだ文はどうしやつた。

お竹 矢張爰に。ハト懐中より出す。お君取つて、

お君 これ長吉、どうも口では言はれぬ此文、とつくり讀んでたも。

ト長吉の前へ置く。長吉取つて、

長吉 そんなら此の文。

お君 お竹おぢや。トお竹を連れて鼻へはひる。長吉こなしあつて、

長吉 口で言はれぬ此文。長様まゐる君より。(ト封を切つて) 今更文とは御覽の程も読しながら、不

束な我身事を是までとやかく御申下され候へども、入目の間に聞てられ、慇懃と御返事いた

し不申候、誠に長吉と評あるやうに御申し被成候へども、慇懃に上下の備ないとは申せども

長吉は奉公人の事なり、私にさら／＼左様の事にはござなく候、必ず／＼長吉事を御念にお

かけ下されまじく候、此上はそもじ様と二世も三世も替らぬ女夫と存候へば、そもじ様にも

御心の程御替らせなきやうに頼み上し、また／＼首尾を見合せ御目もじの上、ちと、御

頼中上度事御座候へばあひたく候、日出度かしこ、長五郎様まゐる君より。

ト讀む内いろくこなしあつて、又繰返し讀むことあつて、

ム、そんなら書出しの長様まゐるは長五郎の様か、借てはお竹が粗相に長五郎へやる文を間違へて、大方わしへは切文でがなめらう、さうとは知らずこれまで互に言ひ替し、親切らしい事も皆空言か、わしを救して殊に又姉者人の嫌ない無心、その事を頼んでおくに長五郎へ其様に、えゝ腹が立つく、思ひかへられたより姉者人の頼み、百兩の金が今宵中に。こりやまあ、どうせうぞ。

ト右の文を繰返し見て、いろく思入あつて、

さうぢや所詮金の出来ぬ時は、姉者人に言ひ譯けなし、いひかはしたお君様と。さうぢや。

ト思入あつて奥へ行かうとする。勘十郎、ずつと出て、

勘十 長吉どうしやつた。

長吉 えゝ勘十郎様。

勘十 伯父者人の平強ひにて相頼まうと思つたに、長吉は逃げをつたな、ハ、、、、いやもう甚だ酷酲、まあこれへ來やれ。

梅の由兵衛

長吉 私わたくしは奥おくへちつと用ようが。

勘十 ハテ苦くるしうない矢張やうはり是これにて。

長吉 デモ私わたくしは。

勘十 ハテマア、下したにゐやれと申まをすに。

ト勘十郎酒に酔ひたるこなしにて、無理に長吉を引きする。

勘十 それにあるは何なにぢや。(ト以前の番附を取つて、)こりや芝居しばいの番附ばんづけぢやな、こりや長吉ながきち。

ト呼べどもうつとり奥を見てゐるゆゑ、

勘十 これさ長吉ながきち。(ト大きく言ふ。これにて長吉心付き、)

長吉 ハイ。

勘十 此この芝居しばいと申まをすものは、凡すべて世間せけんの流行事はやりごとをとり仕組しくみ狂言きやうげんにする、中なかにもお染そみ久松ひさまつ八百屋やお七なな、古手屋ふるてや八郎兵衛やうべゑ又は油屋あぶらやの十人切じゅうにんぎり、皆根みなねが色いろよりその身みを果はたし、恥はぢをさらし、親兄弟おやせうだいに難がた儀ぎをかけるも、いかに若いとて芝居しばいをつい慰なぐさみとばかり見るは無駄むだといふもの、勸善懲惡くわんぜんちやうあくそれぞれに理非りひを分わかつて見るはこれ萬代ばんだい不易ふたぎ、太平たいへいの道具どうぐ四書五經しよしよごきやうよりその合點あつてんのゆく近道ちかみちの學がく問もん、其そのの身みに引較ひきくらべて、鬼角おにかく謹きんむが肝要かんじやう、それをうかく、後先あとさきの辨わへなく、腹立はらだちまのざれ欺がまさ

れての無分別に切り、サ、切狂言にはつゞまる所は悪人亡び、善人世に出る六段目の思案が大
事であらうがな。

長吉 思ひまはせば此の身にも、端折りかどみの兄弟は、たつた一人の姉者人。

勘十 梅若を尋ねて班女が物狂ひ、哀れな面白い淨瑠璃ではないか。

ト長吉にのみこませる。これにて合點の行きしこなしにて、

長吉 勘十郎様の今の御異見有難うござります。芝居の語に長吉もよう合點いたしましてござりま
する。

勘十 合點が参つたか夫は重疊、なにを言ふやら酔ひまざれ、必ず氣にかけやるな。

長吉 ア勿體ない貴方のお志、有難う存じます。

勘十 これも外ならぬ伯父の家、その奉公人の長吉、奉公大事に辛抱すれば育ちと言ひ人柄と言ひ、

好み合うた仲なら未々はお君が掣、いやさ向ふ獅子には矢も立たず違つて語らば心も解けん、
戀はわびしさであり、又これからはとつくりと俳諧の語、神祇、釋經、戀の句の合點の行くや
う奥にて語らん、長吉來やれ。

長吉 はゝい。

勘十

はて来やれといふに。

ト兩ノ思入にて頃になり奥へはひる。後合方になり以前の權七喜助長五郎三人出て來り、

喜助

長五郎、なんぼお前さんが味噌をあげても、あの娘が得心してたまるものか。

權七

まだ長吉なら不斷の様子と言ひ、どうか知れぬがお前とは合點が行かぬ。

長五

合點が行くか行かぬか、こりや昨晚、かういふものを持たしてよこした。

ト懷中より文を出して、

長五

その時の言傳で、必ず誰れにもいうてくれぬなというてよこした。

喜助

成程こりや文ぢや〜。

權七

どれお見せなせえ。

長五

何を旨の垣覗きな、分りもせぬ癖にわいらが見たとて胡椒の丸呑み、讀めやせまいがな。

喜助

米屋の手代を勤めるものが、女の文ぐらゐ讀めねえでどうするものか。

長五

そんなら本當に讀めるかよ、あのお娘は大抵の者ぢやないぞよ、それに所々に笠のない虚無僧

のやうな僧や、終の方には釣針のやうなものが出であるが、それでも讀めるか。

權七

はて讀めねえでどうするものか、二人して讀んでやらう。

長五 口の内でぼちや／＼読みはならぬぞ、聞えるやうに読んで聞かせろよ。

喜助 どれ／＼。(ト取りに行くを長五郎こなしあつて)

長五 どつこい、澤山さうに罰が當るわ。二人共肖るやうに戴いたり／＼。

ト兩人の頭の上を撫でる事あつて、

長五 そりや讀んだり／＼。(ト兩人へ件の文を投げて見せる。)

兩人 え／＼それでは倒ぢや。

長五 はて倒にも讀むくらゐでなけりや讀む内ぢやない。

喜助 そこもあるてな。

ト權七文を取つて見て、

權七 なんだか大層濡れてゐる文ぢやねえか。

喜助 これが大方濡文といふのであらうよ。

長五 その管よ、昨晚から肌身を放さず、臍の上へひつたり付けて置いたもの。

權七 道理こそ、訝な臭ひがすると思つた。

喜助 何々一筆しめし、

長五 そりや笠のない虚無僧だ。

權七 こゝこれはまわらせろちや。

長五 おくさうぢや、なかく、感心々々。

權七 誠に昨日は氣の志な事を聞きまして、癪しどがおこり案あんじまわらせろ。

喜助 長五郎さん、案あんじて癪しどがおこつたとさ。

長五 ハ、ア何なんんの事ことだ、おれが力持ちからもちの石いしで一寸いちゆ擦すりりむいた事ことをそれ程迄ほどまでに思おもつてくれるか忝かたじけない。

ト長五郎悦ぶこなし。

喜助 どうぞお顔かほみの事ことよろしく都合つあひいたしたく、

長五 なにも頼たのんだ事ことえはないが。

權七 まあ、黙もくつて聞きいたり。

喜助 ほんにこれまで惚ほれたと、あたいやらしい色々いろくに口説くちどき候さうぶを、幸さいはに願ねがながらも長五郎ちごろう

づら。

權七 やあ、おつな事ことが書いてあるな。

長五 づらぢやない、長五郎ちごろうさんぢやねえか、しつかり讀よんだり。

喜助 でも長五郎づら、め、まだめと書いてある。

権七 どれく、後はおれが讀まう、厭ながらも長五郎づらめに態々打解けたやうに見せ、右の事を拵へ度くと存じ、それ故いやらしき文を遣はし、必ず、御心悪しく思召下されまじく候、ヤア長五郎さん、どうやら風が悪くなつて來ましたぜ。

喜助 此の文を昨晩から臍の上に載せて居たとは。

権七 よく臍が宿替せなんだの、序に後を讀まう、根が在所育ちの馬鹿者の長五郎なれば、口先で色騙し、そもじ様のお望みをかなへ度思ひ、
て、
な。

喜助 ても酷い書き方ぢやの。

長五 大方かうであらうと思つた、もう後は讀むに及ばぬ、宛名を讀んだりく。

兩人 長吉様まゐる、君より。

長五 やあ、そんなら矢張長吉めであつたか。(トどうとなりちつとこなし。)

喜助 道理で話が旨過ぎると思つた。

権七 根が在所育ちの馬鹿者とは。(ト兩人長五郎へ指をさし、)

兩人 馬鹿者とは、ハ、ハ、ハ、ハ。

ト兩人笑ひながら奥へはひる。長五郎悔しきこなしにて右の文を取上げ見ても讀めぬ故、いづく
こなしあつて、以前の金に心附き、

長五 勘十郎が持つて来た百兩を此の置懸せに。

ト帳簿筒の抽斗の錠前を煙管にてこじあげ、金を出し中へ此文を入れかへ金を懐中に入れて、

長五 あの文で二人のやつを言いく。(ト此の時奥にて、)

佐兵 はてまあ、もそつとゆるりとして行きやれ。

ト以前の勘十郎先きに佐兵衛お君長吉附いて奥より出て来り、

勘十 いや段々と御馳走 忝 うごごころ。

長五 是は、勘十郎様、お歸りでござりまするか。

長吉 あまやお頼りにござりまする。

勘十 いや又來るであらう、お君随分無事で。

お君 もそつとお話したされませいなア。

ト此の内佐兵衛帳簿筒を見て、

佐兵 ヤア、こりや帳簿筒の錠がこぢ離して中の金が、ヤ、、、。

トびつくりする。長五郎わざとびつくりする。勘十郎立歸り、

勘十　こりや減多めつたには歸かへられぬわえ。

佐兵　イヤ、勘十郎は大事な、主人持ぢや、早う屋敷へ。

勘十　先陣持參せんじんぢえんの金子紛失かねすぢいしとあつては、どうも聞捨てにはなりません。

長五　左様さやうでござりまする、筆前ひつぜんをこぢ離し搦斗はなむねの金がないとは大それた泥棒だ、こりや面を吟味めいぐんみを、まゝ搦斗ひなだしを。(トつかく)と行き、搦斗を取つて来て中の文を取出し、ヤ、何やら書いたものが入れてある、おれや恥かしながら無筆ぢや、長吉こゝへ来て讀んで聞かせい。

長吉　はい、そんならそれを私わたくしに。

長五　さあ何か知らねど詮議せんぎの種たねになるまいものでもない、なあ親父様。

佐兵　さうぢや、長吉ちやつと讀みやく。

長吉　ハイ。 (ト何心なく取つて聞き) 一筆しめし、誠に昨日は氣の毒な事聞きました、起り案おきじ、どうぞ、お頼みのことよろしく都合つがひいたしたく、ほんにこれまで惚れた惚れたとあたいやらしい。(ト讀む内お君びつくりして、つかくと長吉が傍へ牽り)

お君　これ、長吉、減多に此の文讀んでたもろな。(トこれを長五郎立入りお君を引退け)

長五 お君さん、お前の構うた事ではない、引込んでござれ。

お君 でも、その文は。

長五 はてまあ、選のいておいでなあ。(ト此の内長吉口の内にて文を讀んで、)

長吉 ヤ、そんならお君様、あのこれを。

お君 長吉合點が行つたかや。

長吉 さうとは知らず長前の。(ト勘十郎を見る。勘十郎咳拂ひする思入。)

長五 エ、讀まぬか、長吉後を讀まぬは合點が行かぬ。(ト文を取つて佐兵衛の前へ持ち行く。佐兵衛取てて。)

佐兵 なんぢや、長吉様參る君より。(トこれにて兩人はつとこなし。)そんなら娘と長吉は。

長五 疾うからちくり合つてをる其その濡ぬ文、これが此この抽斗ひきだに入れてあるとは、泥坊どろぼうの證據しやうこ、不義盜ふぎぬす人の此こ二人。(ト長吉を引立てる。勘十郎つかくと寄つて、長五郎を引退け二人 庇かばひ、)

勘十 長五郎待つた。

長五 勘十郎様、なぜ止めさつしやりまする。

勘十 此文このぶんには何なにんと書いてあるな。

長五 おれは無筆ぢやによつて讀めぬが、宛名は慥かに長吉様參る、君より、それが慥かな不義盜人の。

勘十 いや、證據にはなるまい。

長五 とは又何故に。

勘十 もつとも長吉様參る君よりとあれば、則ちお君より長吉へ送つた文なれど、こりや證據には相成らぬ。

長五 そりや又何うして。

勘十 されば兩人が金を盗みしにせよ。我が名の書いた文をば後日の證據に、これにて詮議いたせよと入置くやうなる馬鹿者があらうか。

長五 でも盜賊の疑ひかゝれば。

勘十 こりや盜人は外にござる。見ずく知れた古手な仕組み。

長五 ム、でも二人は不義者、その文を。(ト取りにかゝる、勘十郎長五郎をほんとかへす。) あいたゝゝ

たゝゝゝ、こりや勘十郎様、なんでわしを投げたのぢや。

勘十 兩人が不義なら、長五郎そちも不義者ぢやぞ。

長五 ナニ、此の長五郎が不義とは、してその證據は。

勘十 外でもない矢張此狀。(ト文を見せ、)ほんにこれ迄惚れた／＼とあたいやらしく口説き袂を辛

ひに、厭ながらも長五郎づらにとあれば、長五郎そちもこれまでお君に不義を言ひかけたであ
うがな。

長五 いやさ、それは。

お君 これまで私を捉へて、色々とそれは／＼。

長五 これ／＼お君さん、お前顔に似合はぬ酷い人ぢやな。

佐兵 こりや長五郎、おのれも娘を。

長五 さあそれは惚れたが、矢張不義は長吉めだ。(ト長吉を引立てるを勘十郎さへて、)

勘十 こりや、其不義を糺せば其方も同罪。

長五 そんならこれも、ホイ。

佐兵 さうとは知らず娘が淫奔。

勘十 凡て色よき花には垣を結び、折取る者禁制と札を立てゝも手折るは世界の習ひ、まして主なき
娘のお君。

長吉 いや私が過失、此上は如何様とも。

お君 これく長吉、そなたに利はない、折私が。

勘十 ハテ、何事も穩便に、金の行衛は追つての詮議。

佐兵 成程、おれが思案もあれば、長吉は表の二階へ、娘は奥へ。

兩人 はあ。(ト兩人共こなしある。)

長五 まあこれで二人はおり分けたが、二階住居の丁稚め、又お君さんが忍び込んで行くまいものでもない、張番は此長五郎。

佐兵 いやおのれも不義者、憎い奴なれど、何んにもいはぬは死んだ母が頼み故。

勘十 此の家の内を放飼。

長五 おれを鳥ぢやと思つてゐる。いや鳥もとりも角力とりぢや。

勘十 最早暮合、拙者も暫く。

佐兵 二人が納り、勘十郎には奥へござつて。

長五 思へばく。(ト長吉へかゝるを勘十郎突退けて、長五郎をぼんと投げる。)

勘十 實に戀は曲者ぢやよなあ。

ト唄になり、勘十郎佐兵衛思入あつて長吉お君兩人の手をとつて奥へはひる。と暮六ツの鐘鳴る。
奥より以前の權七喜助行燈を灯し出て、長五郎を見て、

權七 ヤア長五郎さんがどうかしてゐるわ。

喜助 ほんに長五郎さんく。ト兩人長五郎を介抱する。長五郎心附いて、

長五 ろぬ勘十郎め。ト兩人を見て、喜助か、權七か。

喜助 これ様子やうすは聞いた長五郎さん。

權七 お前さん、此儘ではおかれまいぞえ。

長五 二人が手前てまへ面目めいめいない、これからは被ひれかぶれお君きみを引ひ攪さらひ、今宵こんやの中に此家このやを斷落たおち、夫それに付つけても二人ふたりに頼たのむは、まあ中宿なかつゆの工面くめん、三味線堀みづなのおくま婆おばがところへ。

兩人 ム、すりや婆おばが所ところへ。

長五 合點がってんか、こりや。(と長五郎兩人へ囁く。)

兩人 ハテそんなら奥おくの。

長五 ハテ、二人ふたりともにおれが幕内まくうち。

兩人 首尾しゆびよく行ゆけば、

長五 金はづツしり。

兩人 そんなら裏へ。

長五 こりや、(ト長五郎こなし兩人をおさへる。是を知らせにて此の道具ぶんまはす。)

米屋塙外の場 本舞臺一面の黒幕、よき所に切戸、用水桶、塙の内へ米倉の二階を見せ、障子閉

切りある。すべて夜の模様よろしく時の鐘にて道具納る。ト詠への獨吟にて花道より小梅好みのこ
しらへにて頭巾小提灯を提げ、お竹を連れて出て來り、

小梅 お竹さんとやら、お前のいかいお世話でござりますた。

お竹 なんの朋輩のこと、長吉どんには様子あつてあれあの二階に、折角逢ひにござんした姉様、内
から連れて行くと目に立つ故、こゝへ連れて廻りました、私がさう言ふ程にこゝに待つて長吉
どんに逢はしやんせ。

小梅 ハイ、忝うござんす、是非とも弟に逢はねばならぬ大事の用、もう日は暮れて參ります
る、うちに居ても心ならず、去でこちの人に隠れてそつと淺次郎に。

お竹 淺次郎とはえ。

梅の由兵衛

小梅 長吉がことでござんす、家では淺次郎と言ひました、此のお家へ參つて名が替りました故。

お竹 矢張長吉殿のことでござんすか。

小梅 左様にござります。

お竹 どれ私は切戸からはひつて、長吉殿にお前さんのごさんした事知らせて上げませう。

ト切戸の口へはひる。

小梅 よろしうお頼み申します。朋輩の好みとて今の女中さん、どうぞ早う弟に逢ひたいものぢや。

ト此時切戸より喜助出て来る。小梅は灯を袖にて隠し、用水桶の蔭へ隠れる。

喜助 長五郎さんの直に三味線堀のおくま婆が所へ行つて萬事の事を。さうぢや〜。

ト花遣へはひる。此時二階の障子を開けて長吉演を出し、

長吉 姉者人々々。

ト下を見下し尋ねる。小梅は前の用水桶の蔭より出る。

小梅 弟淺次郎か、こゝに居るわいな。(ト裏向に二階を見上げる。)

長吉 もしお前の見えたるは、金の事でござんすかえ。

小梅 サア一昨日文で委しく頼んでよこした通り。

長吉 今宵のうちに要るとある百兩の金、これノ、氣遣ひなさんすな、金出来ました。

小梅 そんならその金が、忝かたじけない。

長吉 サアこれまで顔は知らねども、由兵衛殿やお前の命づくとおる故、やうく百兩の金をこしらへたが、私が方へ受取らぬが、これ必ず案じる事ではござんせぬ、たとひ夜が更けても受取り次第私が持つて行くわいな。

小梅 エ、忝かたじけない、兄弟なれば顔も得知らぬこちの人の爲めに、我身までが其様に忘れはせぬぞや。

ト拜む。

長吉 勿體ないこれ姉さん、えゝ何んというても二階と下、お前顔を一寸。

ト小梅提灯を上げて顔を見せる。二階にて長吉思入あつて、

長吉 金は追付け持つて行く程に、人目に立つては悪い、お前は早う。

小梅 そんなら待つてゐるぞえ。

長吉 はて、後までにきつと持つて行きますぞえ。

ト障子をびつしやりと閉める。前内花道より喜助戻つて来る。切戸より權七出る。小梅以前の用水

桶の蔭へはひる。

権七 どうぢや〜、喜助中宿はどうだ。

喜助 その事に付いて長五郎さんに言はねばならぬ、権七われも来い。

権七 そんなら奥で、合點だ。(ト兩人切戸へはひり、小梅出て)

小梅 ア、嬉しや、兄弟は持つべきものと何やらの淨瑠璃にある通り、弟が今の様にいうてたもつ

たので、胸が開けて癢が下つた、ちやつと此様子を由丘衛殿に、いや〜、物がたいこちの人、奉公してゐる者に無心言うたというては又口頃の氣性、いや〜こりや矢張、黙つて渡しませう。ぢやというて今頃は氣を揉んでゐやしやんせう、さうぢや。(ト行きかけて立止り) たとひ言うても金さへ出来たら、萬更悪うも思ふまい、いつここのちの人へ、どれ長吉の來るのを。待ちませうか。(トよろしく知らせに付き此道具ぶんまはす)

本舞臺三間の間常足の二重、見付正面襖、上の方一間の床の間、上手一間二階折廻し、障子閉切り、いつもの所に枝折木戸、よき所へ石の手水鉢を置き、すべて奥座敷の體にて道具留る。と蔭に

て、

皆々 今宵は二十三夜待、約定の淨瑠璃盛衰記梅ヶ枝無間の鐘が所望ぢやく。

トこれより床の淨瑠璃になる。

あと見送りて梅ヶ枝はしばし涙に暮れけるが、必ず氣遣ひなさるゝな、ええわしが心當りのあるというたは皆嘘、お前の命が助けたいばかりぢやわいなあ。

長吉

今姉さんに逢うて、氣遣ひさつしやるな後に持つて行かうと言うたは、お前に力を落さすまいため、今のわしが身の上、どうなる事やらお君様のお返事も、最前の仕宜では、どうならうぞいの。

金ならたつた三百兩。

此方はたつた百兩、山兵衛殿や姉さんの難儀。

可愛い男を移すのか。

こりやどうせうぞいなう。

えゝ金が欲しいなあ、二八十六で文付けられて二九の十八でついその心、

梅の山兵衛

四五の二十なら一期に一度、わしや帯解かぬ。

え、面白さうに隣りには、二十三夜の月待の淨瑠璃、あれに付けても此家へ、奉公に来てお君様と言ひかはし、乗は女夫にならうと思ひ思はれた、お君様を頼んで拵へる金の工面、出来ねば現在の姉嬢、さあ、こりやどうせうなあ。

あ、どうせうなあ、最早日本國に此の梅枝が、祈る神も佛もないか。
最前から心も留めず聞いてゐた、あの淨瑠璃は無間の鐘、それ故に梅枝が。

ト手水鉢へ思入あつて、

わしは又姉さんへの孝行、一心をもつて今宵の手詰め百兩の金。(トきつと手水鉢を見る。)

あ、それよ、夫ゆゑには石になつたる女もあり、我は賤しき流れの身なれど、一念は誰に劣らん、巖となれる手水鉢、水掬ひ上げ口嗽ぎ伏拜みく、人に知らせじ聞かせじと、誓約おつとり傳へ聞く、無間の鐘を撞けば有徳自在は心の鐘、これより小夜の中山へ、遙かの道は隔つれど、思ひつめたる戒念方、此の手水鉢を鐘に擬へ。

今宵の手詰、何うぞ百兩の金の出来ますやうに觀音様々々。(ト柄杓を起り片手にて拜む。)

石にもせよ金にもせよ、志すところは無間の鐘、此世は蛭にせめられ來永々無間地獄の業を受くとも、だんない〜大事ない。

姉さん故には、此の長吉。

ト柄杓にて三水鉢を打つ。途端に毒の鐘鳴る、長吉びつくりして、

ヤア〜、今のは慥かに鐘の音、そんなら一心届いて無間の鐘は。

ト空を見上げてよろしくある。此内鐘鳴る。

はて不思議や無間に擬らへ打つ座に、一イ二ウ三イ四ウ五ツを聞きしは鐘の音。(ト思入あつて、)ム、さては今のは無間の鐘ではなうて、上野淺草の時の鐘、撞く響きをばそれぞと思ひ、迷ひしなるか、段々夜も更け早や今宵も五つ、金が出来ねば姉さん夫婦、此の長吉も次第に縮む命に屠所の羊、もう戌の刻、こりやたとせうぞいなあ。

面色忽ち紅梅の、花もちり〜心も髪も、逆立ち上り柄杓持つ手も身もはれ、すでに打たんと振り上ぐる、二階の障子の内よりも。

ト此内二階バタ〜にてお君長五郎立廻つて金を下へ投げる。

お君 長五郎さん、嚙付からうが此金わしに。

長五 いや折角盗んだ此金、なんのおのれにうまくと。

お君 いや、それでも。

長五 いや、ならぬ。

お君 いや、下さんせ。

その金こゝにと三百兩、ばらりくと投出す、深山あるしに山吹の、花咲
さちららす、

長吉 こりやこれ金、思ひがけない。

如くにて、こゝに三兩彼處に五兩、是は夢かや現かや、誰方か知らぬが此
の御恩、死んでも忘れぬくと、嬉しいやら怖いやら、拾集める心もそゞ
ろ。

長吉 どうぞ百兩。

お君 長吉、そなたの頼みの百兩。

長吉 やあお君様。

長五 さてこそ。(ト飛下りかゝるを勘十郎出て、長五郎を引附け、)

勘十 越度ある奉公人、親元へ預けるは大法。

長吉 段々とお情け。

勘十 所は本所梅堀の、

お君 それ、そなたの此の文。

ト投げてやる。長吉取上げる。長五郎それをとかゝる。

包むに餘る悦び涙、鎧代りの此の金と、あし戴さく。

長吉 おさらば。

勘十 早く行け。

勇みいさんで。

ト三重にて長吉は花道へ、舞臺はよろしく此の仕組み、双方見合ふを木の頭にて、幕引付ける。と直ぐに時の鐘、浪の音にてツナギ、大川端となる。

三 幕 目

大川端長吉殺しの場

役名 梅の由兵衛、源兵衛堀の源兵衛 丁稚長吉、手代喜助、同權七等。

大川端の場。 本舞臺向う正百大川端、淺草の方の夜の町家遠見、此前へ浪手摺、すべて大川端の體よろしく、此前へ淺黄幕をかけ、上手葎簀張りの茶店を片付けし心にて、葎簀を巻き床几を重ねある。 浪の音時の鐘にて幕あく。

ト仕出し皆々思ひくの事あつてはひる。と後流行唄やうの合方になり、花道より、由兵衛着流し一本差し頬冠りにて出て來り花道にて、

由兵

もう大方五つ過ぎ、四つ前でもあらうが向島にて請合うた小三様の身請けの金、代りに渡した頭巾取返す日限も、今宵の今となつて其金が出来ぬとは、これまで立てた由兵衛が男の廣るは厭はねど、金五郎様に萬一の事があつては、大恩受けた隼人様へ。(ト思入あつて、) あゝ世間のよい衆は命がないと、醫者の手をあげた病人を、多くの金を出し人參を盛つて見るが、しかし

これは金さへあれば助かる命、助かるも金殺すも金、なぜに實と世に稱へるぞ。

トしを／＼と舞臺へ来る。此の時上手バタ／＼にて權七喜助長吉を引立て出て来る。由兵衛これにて小蔭へ身を隠す。

權七 さあ長吉、われがもつてゐる百兩の金、こつちへ渡せ。

長吉 減相な、わしや金はもつてはゐぬ、覺えはござんせぬ。

喜助 覺えないとは野太い奴め、長五郎さんに頼まれて、われが後を追つかけて来た、さあその金渡せ。

ト兩方よりかゝる。

長吉 長吉は骨になつても、減多に渡さぬ大事の金。

兩人 否でも應でも取らにや置かぬわ。(ト兩人して長吉を打擲する。)

長吉 アレイ／＼。

ト言ひながら逃げるを、兩人やらぬとかゝる。よき程に由兵衛兩人を見事にとつて投げ長吉をかこひる。兩人起上り由兵衛を見て、

兩人 ヤアうぬはどいつぢや、なんで邪魔をひろぐのだ。

梅の由兵衛

由兵 おりや往來わらいの者もの、通りかゝりて今いまの様子やうす、さてはわいらは物取りものとりだな。

兩人 邪魔じやまするわれから先まきへ。(ト由兵衛にかゝるを一寸立廻つて兩人を追込む。)

由兵 え、憎にくい奴やつめ。(ト立戻り長吉を見て、) これく、見ればまだ若衆わかしゅさうなが、はて悲哀ひあひな目に逢あうた、怪我けがはせぬかや。

長吉 いえ、怪我けがはいたしませぬ、よい所ところへあなたがお出でなされて下さりまして、私わたしが仕合せでござります、有難ありがたう存ぞんじます。

由兵 なんの禮れいには及びませぬ、聞けば金かねをもつて居ゐるさうなが違ちがひ無ないか。

長吉 ハイ、大事だいじにかけて持つてをります。

由兵 油断ゆだんせぬやうにしつかりと持つてゐやしやれ。さうしてこなさんは、何所どこまで行いかつしやるのぢや。

長吉 はい、此この先まきの駒留こまどまりまで参まかります。

由兵 そりやあまだ餘程よほどある、とてももの事ことにおれが送おくつてやらう。

長吉 イエ、それには及びませぬ。

由兵 ハテ金かねもつて夜の道みち、またあのやうな奴やつがゐやうも知しれぬ、おれもどうで歸路かへりみち、遠慮えんりよに及およば

ぬ、サア／＼行かんせ／＼。

トこれより誦への合方になり、長吉先へ由兵衛後よりそろ／＼と花道へ行く。

長吉 お前様、いかにお世話様でござりまする。

由兵 なんのおれも行くついで、さうしてこなさんの名は長吉殿と言ひますか。

長吉 ハイ、よう御存じでござりまするな。

由兵 今の野郎が言ひをつた故。

ト言ひながら兩人花道へ行きかゝる内、由兵衛ふと思入あつて後ろより切らうとする。長吉ちよ／＼とこなしあつて、

長吉 モシ、此道は歩みにくうござりまするな。

由兵 いや常に通りますると、そのやうにもない。(ト又行きかける、由兵衛柄へちよつと手をかける。)

長吉 聞なれど星明りで、ようござりまするな。

由兵 さあ／＼、今宵は二十三夜、もう追付け月代が出るであらうよ。

トいろ／＼捨ゼリフにて花道大あゆみへ廻る内、知らせにて舞臺の黒幕を切つて落す、瓦家遠見、舞臺へ戻つて由兵衛思ひ切つて長吉の懐中へ手をずつと入れる。

長吉 ヤアお前も此金を。

由兵 さあ貸して下され。

長吉 いやくならぬ。(ト由兵衛を突き退け) めつさうな、人を送つてやらうの何のと止直さうに見せかけ、何んぼ前髪でも無禮な事をしやつては爲めにならぬぞえ。

由兵 ヤ何も案じる事はない、こゝまで来たなりやもう儂ぢや、わしはもうこゝで別れませう、氣がつけて行かしやれや。

ト由兵衛は上手長吉は花道へ行きかける。由兵衛退入あつて、

由兵 ヤ長吉殿とやら、一寸待つた。

長吉 えゝ。(トびつくりする。)

由兵 何もびつくりせずと、一寸こなさんに用がある、こゝまで戻つて下され。

長吉 ハイ。

由兵 手間はとらせぬ、一寸歸つて下され。

トこれにて長吉舞臺へ戻る。由兵衛あたりへこなしあつて、長吉の傍へ行きこなしあつて、

由兵 これ、おれは今宵に限つてなければならぬ百兩の金、出来ぬ時は命づく、思ひがけなき長吉殿、

どうぞ其の金二三口貸して下され。

長吉 いえくくなりませぬ、そつちも命づくならこつちも命づく、どうぞこれは堪忍して下され。

由兵 すりや、どのやうにいうてもその金を。

長吉 サア何を隠さう此の金は、今宵中になればわしが大事のく、たつた一人の姉さんが配偶が命がない、それでやうく拵えた此金、それぢやによつてこればかりは、どうぞ許して下さりませ。

由兵 こなたの言ふのは尤ぢや、見ず知らずの人に貸してくれとはわしが無理、さりながら今宵につゞまる百兩の金、無理と知つてこなたへ無心、どうぞ貸して下されえ、これ頼むく。

長吉 私も頼む、どうぞ許して下され。

由兵 さあ無理であらう、無理であらうがこれも矢張お主の爲、これ長吉殿、これ拜むわいの。

長吉 いえくわしが拜みまする。

由兵 どうぞ貸して下され。

長吉 どうぞ堪忍して。

兩人 下さりませ。

ト兩人拜み合ふこなしある。長吉よろしくあつて逃げようとする。由兵衛逃がさじと争ひちよつと立廻つて由兵衛是非なくト刀切る。これにて長吉あつと言つてどうとなり、

長吉 エ、胴慾な、こなたはわしを殺すのか。

由兵 さあ殺したうはないけれどよんどころないお主の爲め、知らぬこなたを殺すは小の蟲と大の蟲、見かへられぬこつちの手詰め、不便ながらも金が欲しさに。

長吉 え、死にともない、今夜一と夜さ死にともない、これわしが命はやらうが金はやらぬ、此金の無い時は、姉さんの配偶に凶事あやまちがあつたならなんとせう、どうぞ助けて其金を。

由兵 命を助け金をやる程なら可愛さうにかうは切らぬ、二三日の内には金拵えて戻しに行かうが、こなたの名どころはなんと言はつしやる。

長吉 いや、名どころを言うたとして、人を殺して金を取る程のこなたぢやもの。

ト又取り付くを一寸立廻つて

長吉 助けて下され、死にともない。

由兵 エ、了簡して死んで下せえ。

ト由兵衛聲立てさせじとして口へ手を當てるはづみに小指を喰切り、ト由兵衛乗りかゝつてとど

めをさす。此の時月出る。由兵衛脇差の血を拭うて鞘へ納め、以前の金を取上げる。此時前幕の手紙落ちてあるをこなしあつて手に取り、長吉の顔を月明りに見て、

由兵 女房小梅（まはらこ）に生寫（いまらつ）し。（ト思入あつて手紙を披き、月代に透し讀む思入あつて。） 淺次郎殿（あさじらうだう）へ姉小梅（あねこ）よ

り。

ト讀み終つてびつくり、死骸を抱き上げ顔をきつと見る。此の時時の鐘、忍び三重になる、前幕の源兵衛出て窺ひある、由兵衛思入あつて長吉の死骸を川へ流し手を合はせて拜みつか〜と行かうとする。源兵衛支へるを引退ける、ちよつとだんまり模様になり、ト源兵衛由兵衛の腰へ取附く、これを振切る、此の時由兵衛の腰の煙草入を引取り、たち〜と後へ下りどうとなる。

源兵 盗人（ぬすびと）め。

由兵 え。

ト磔を打つを木の頭にて、由兵衛は花道へはひる。源兵衛煙草入を透し見る。此仕組よろしく、時の鐘、早き合方にて

ひやうし 幕

大詰

梅堀由兵衛内の場

同仕返しの場

役名 親方才兵衛、下男與太郎、女房小梅、小三、金五郎、醫者久庵、梅の

由兵衛、米屋の娘お君、手代長九郎、同喜助、同権七、金谷金兵衛、源兵衛堀の源兵衛、等。

梅の由兵衛内の場。本舞臺三間の間常足の二重、正面押入納戸口、よき所に佛壇、上の方中二階。下の方門口、二重へ本疊を敷きすびつより人ではひり、すべて世話場の様様、こゝに前幕の親方才兵衛男二三人連れ奥へ踏込まうとしてゐる。下男與太郎馬鹿のこしらへにて、鉢巻片肌脱ぎ、棕

摺箆をしやに構へてこれを止めてゐる。

與太 イヤ〜、薄多にやることはならぬ、與太郎が止めた、一番待つて貰はう。

才兵 イヤ面倒な、馬鹿者に構はずと、さあ男共来い〜。

トバタ〜にて右の男共奥へ行くを、與太郎馬鹿な立廻りにて包み止めて、

與太 ヤイ親方、此の與太郎がかう止めかけては、假令りんびやうになつても薄多にやらぬぞ。

才兵 いやこちの奉公人小三が昨晚から走つて行衛が知れぬ、隠所は大方こゝな内、それで家捜しするのぢや。

與太 こいつ家捜しの店捜しのと、いやらしい奴等ぢやわい。

才兵 あんでもあの押入が氣ぶさいな。そりや男共。

男 合點ぢや。

ト行かうとする。與太郎止める立廻り、よき處へ小梅襷前垂にて出で、皆々を引分け、

小梅 これはしたり、最前から騒々しいと思つてゐたら、與太郎こりや何事ぢや。

與太 小三様が此方の内に引込んであると、鼠のやうに暴れをるわい。

小梅 そんなら身請けの手附口限は昨晚、それで。

才兵 いやその手附に預つてゐる頭巾は昨晚引替へに由兵衛殿が、金を持つて来て取替へて手附は濟

んだれど、まだ後金の催促、それも前に肝心の小三が走つた故、隠所は大方こゝの家、小三を尋ねにやどちらへもおれが物も言はれぬ。(ト小梅こなしあつて、)

小梅 ム、何んと言はしやんす親方さん、こちの人が昨晚手附の金、を持つて行かしたかえ。

才兵 しかも夜更けて。

小梅 はてなあ。(ト思入ある。)

與太 あれ又店搜しを吐かし居る。

才兵 ども。

小梅 待たしやんせ親方さん、よう思うても見やしやんせ、出来難い金を調へて持つて行く程の此方の人、是非に小三様は身請けせねばならぬ仕宜、其の小三様をこちの家に。

才兵 いやく近來は走らせて親元から手を廻して、日割勘定へ立金など、金の山をめつしてわるせりが流行る故。

小梅 置かしやんせ、かう言うても梅の由兵衛の妻、さういふ賤しい身請けはしませぬ、殊に小三様も此方の内にゐやしやんせぬわいなあ。

才兵 そんなら由兵衛殿は留守でござりますかえ。

小梅 留守でござんす、追附主が歸らしやんしたら、何もかも譯が知れませう、それ迄お前も。

才兵 成程、どうで由兵衛殿に逢はねばならぬ後金のせいらく、其間に行衛の知れぬ小三、わきを尋ねて見ようか。

小梅 それがようござんす、何事もまあ後に。

才兵 そんならお内儀。

小梅 親方さん。

才兵 必ず後に、さあ男共。

小梅 ようござんしたなあ。

ト唄になり、才兵衛男共を連れて花道へはひる。小梅こなしある。

與太 天晴通り者のお内儀さんぢやなあ、おれが最前から色々に力んで脅しても歸らぬ親方、それを

お前が出て今の一言で歸るとは、雀の千聲より鶴の一聲ぢやなあ。

小梅 これそんな事を言はずとも與太郎ちやつと奥へ行って、茶を焚付けておきや、追附こちの人が戻

らしやんすである。

與太 山兵衛さんよりおれの腹がきた山櫻、さらば。

ト合方になり與太郎奥へはひる。梅四方を見廻し押入を開け、内より小三出で、

小三 小梅さん、大事ないかえ。

小梅 氣遣ひさしやんすな、今親方は歸したが合點の行かぬこちの人、昨晚遅う手附の金持つて行か

しやんしたといなあ。

小三 サア、さういふ事とは知らず手附の口限は切れるし、伴五郎方へ身請けされては生きてはぬ覺悟、それで庫を關着して金五郎さんに逢はうと來る道で、お前に逢ふと。

小梅 無理に連れて戻つて、あの押入の内へ忍ばせて置きましたか、もう此の上は隠れる事はござんすまじ。

小三 でも貴方が後に来るといふたは、後金の催促。

小梅 手附は濟んで一つ遣へは又一つ、これに付けても弟はくまに。三ツ四ツ五ツあゝ難しい浮世ぢやなあ。

ト思へある。此の向始合方にて金五郎花遣より頬被りにて、つかくと出てすつと内へはひり門の戸をびつしやり閉める。

小三 やあ金五郎さんか。

金五 小三、小梅殿。(ト頬被りをとる。)

小梅 思ひがけなき金五郎様。

小三 私しや昨晚からお前に逢ひたかつたわいなあ。(ト取付く。金五郎となしあつて、)

金五 さあ心にかけてある身請けの日限、由兵衛様に様子を聞かうと思ふ内、勘十郎様の御内意に此の金五郎を召捕の役人此江戸へ。

小三 え、そりやどういふ仔細で。

金五 ハテそなたと言替し圖を立選いた其後にて、彼の色紙の紛失、これ金五郎が仕業盗賊と評議極つたれども、又評議の口限が切れたとやら、譯は知れねど圖許より、何んでも召捕の役人が來てゐるとの事。

小三 さう言ふ事なれば、私が身の上も兼ねお前に言ひ合せた通り。

金五 死ぬる覺悟、小三おぢや。(ト手を取つて行かうとする。小梅向うへ廻り、)

小梅 待たしやんせ、お二人さん。

兩人 ヤア。

小梅 そりやまあ何んの事でごさんすえ、假令身請けが身があくまいが、お圖許から召捕が來ようが、こちらの人に此の様子も言はずに、言ひ合はしたの死ぬる覺悟のと、二人連れにてこりや何處へござんすのぢやえ。

兩人 さあそれは。

小梅 お二人故様々と心を盡してゐやしやんすこちの人、ちつとまあ思遣つても御覽じませ。

金五 さあ小三が縁につれて、由兵衛殿がこれまでの志、どうも気の毒で。

小梅 はてそこがお主なり家本なり、それに連添ふ私、なにも氣遣ひに及びませぬ、なんに依らずこ

ちの人が引請けてゐやしやんすれば、小三さんも其様に二言めには覺悟を極めたと言はずに。

小三 それでも今聞いた金五郎さんの身の上。

金五 國元の噂、捕手の役人。

小梅 そりや又こちの人が、(トこなしあつて、)さういふ事ならかういふ所を若しました。(ト思入)幸ひ

小三様と引分けて置いて、人目に立たぬやう誓のうち、此の壘の下に、まあく。

ト壘を上げる。兩人共手傳ふ。小梅すびつの蓋を取り、下より着物を出し、

小梅 面妖な、すびつの穴に此の着物。

ト擴げて見せる。兩人見て、

小三 しかも男の着物。

金五 それく、血だらけになつてあるわ。

小梅 こりや慥かにこちの人の、昨日から着てゐやしやんした。

ト思入、此内花道より久庵つかく〜と出て、ずつと内へはひる。

久庵 小三こゝにゐたか、さあ来い。(ト小三を引立てる。金五郎立廻りに引廻し、)

金五 わりや醫者の久庵。

小三 ほんにそなたは。

久庵 こりや伴五郎に頼まれて、かき出しに歩く小三が身の上、これから直ぐに。

ト小三にかゝる、金五郎立廻り小三も手傳ひをかし味の仕組み、此の内小梅右の着物を矢張すびつ
の下へ入れ、程よく久庵を右の穴へ突填め疊を敷き、その上へしやんとなほる。

金五 それは。

小梅 邪魔な所へ此久庵、かうして置けば極樂落し。

金五 そんなら此の金五郎や。

小三 私が身の上。

小梅 奥でとつくり相談いたしませう、お二人共さあお出なさんせいなあ。

ト唄になり、小梅こなしあつて小三と金五郎を連れて奥へはひる。弾きながし合方にて花道より、
由兵衛橋の花を携へ内へ入り門の戸を閉し、奥を窺ひこなしあつて、佛壇の戸を開き花挿しを取

出し、右の櫓を立てかへ懷中より前幕の狀を出し。

由兵 淺次郎殿へ姉小梅より、此狀が則ち位牌がはり。

ト狀を佛壇へ入れ、右の花挿を直し下にみて合掌し回向をする。此の内合方、よき所にて奥より

小梅 それ奥太郎、必ず氣を付けてくれよ。

ト言ひく出る。由兵衛びつくりすることなしあつて、佛壇の戸を引立てる。小梅もこなしあつて

由兵 おい たつた今、
おゝこちの人、お前今戻らしやんしたかえ。

小梅 見ればついにないお前、佛壇を開けてなにしやしやんすえ。

由兵 やあ、さ今日はちつと志の日ぢやによつて吞經を。

小梅 そんなら佛壇は掃除せずにある、わしが掃除をして、御燈を上げようわいなあ。

由兵 いやもう吞經はもう仕舞ひぢや、さらば是から一塵吹まう、小梅煙草盆を。

小梅 あいく。(ト煙草盆を持ち来る。此の内由兵衛の胸を捉し、)

由兵 ほんに昨晩落して来た鬮亂、あるかと思つて矢張腰を、あゝ惜しい事をしたわい。

ト常の煙管に煙草をついで喫む。

小梅 こちの人、お前昨晚よう金が出来たなあ。

由兵 いやさ、その金故に。(ト小梅が顔を見て) いや大事の胸亂を、つい落して来たわいなう。

小梅 わしや合點が行かぬ、どうしてその金か。

由兵 これ案じるより産むが易いと、思ひがけない以前の近附に逢うて、てんぼの皮と無心言うたら
つい百圓貸してくれた、それで小三様の平附は済んだ、これから又後金を。

小梅 さうとは知らず此の間から、鼠控になつてお前が叱らしやんせうか知らねども、向島からぢきに弟の淺次郎が力へ行き是非と頼んで置いたが、早く昨晚持つておじやる筈、それに今になんの沙汰もないが、こちの人どうしたものであらうぞいなあ。

由兵 はて、こなたの頼み淺次郎になんの如在があらう。可愛さうに奉公の身の上、何の言うてやらいでもよい事を、ア思へば。

小梅 え。

由兵 いや、それで大方苦勞をしてゐるであらう。

小梅 さあ私もさう思うてゐたれど、お前の男づくりなり又命づく、大事ごさんせぬ、たとひ昨夜の間に合はいでも、是非今日は持つておじやるであらう、それを又後金に、なあもし。

由兵 さ、あそれは。(ト脇見して齒を食ひしめる思入。バタ／＼にてお君走り出で戸を叩き、)

お君 もしく、ちやつと開けて下さんせいなあ／＼。

小梅 これは周章しい、誰ぢやぞいなあ。

ト言ひ／＼戸を開ける。お君内へはひり、うんと目を廻す。由兵衛小梅びつくりして、

え、滅相な、人の内へ目を廻しにはひるといふ事があるものかいなあ。(ト由兵衛立寄り。)

由兵 これ／＼。ト顔を見て) 小梅此娘を見知つてゐやるか。

小梅 いえ／＼、近附きではござんせぬ。

由兵 まあ／＼、水々。

小梅 アイ。(ト茶碗に水を汲んで来る。兩人色々介抱して、) 名も知らねば、なんと呼ばうぞいなあ。

由兵 はてまあ、この餘所の娘御イなう。

小梅 知らぬお娘御様いなう。(ト兩人よろしくお君心附く。)

由兵 どうぢや、氣が付いたか／＼。

小梅 あい／＼、氣が付きましたわいなあ。(トお君立上る。) まあ嬉しや、びつくりしたわいなあ。

お君 段々お前方のお世話忝うござんす、こゝへ來る道でちつと悪者に出逢ひ、見附けられまいと

知らぬ道筋を走つて来て、思はず氣を失うたさうなわいなあ。

小梅 さうしてお前は何處の娘御様で、どこへ行かしゃんすのぢやえ。

お君 あい、此の梅堀の由兵衛さんのお内儀さんに逢ひに。

小梅 エ、。(トこなしある。)

お君 さあ、そこにこちらの人長吉が行つてゐやるによつて。

小梅 もしく、そんならお前は藏前の、米屋のお娘御さんでござんすかえ。

お君 思ひがけない、これはしたり。

由兵 女房共、そりや其方の弟が奉公してゐる所のお娘御か。

お君 さうして長吉は何處へゐやるえ、奥にか、但しは二階にゐやるかいなあ。

ト言ひく行かうとする、小梅止める。

小梅 これ、もしく私も待つて居りますが、長吉はまだこの家へは來ませぬわいなあ。

お君 なんのまあ 昨晚四ツ過ぎに家を出やつた長吉、慥かにこゝへ來てゐやるに逢ひはない、隠さ

ずどうぞ逢はせて下さんせいなあ。

トいろく頼む。此内始終由兵衛思入。小梅こなし。

小梅

現在姉弟の事、なんの隠しませうぞ、眞實今におじやらぬ弟、わしもどうやら心ならぬ、お娘御さん、こりやさあどういふ事であらうなあ。

お君

はて直妖な、昨晚中にお前に渡さねばならぬ金と私への頼み、やうく調へてやつたれば、悦び勇んで共金持つて、直ぐにおぢやつたが、何處へ行つてゐやるぞいなあ。

小梅

そんなら百兩の金をお前が。

お君

さあ、互に言替した交情、末は女夫ぢやもの。

小梅

あの弟とお前は。

お君

お、恥しい。(ト袖にて顔を隠す。)

由兵

ア、南無阿彌陀佛。

小梅

え、思ひがけない念佛を。

由兵

いやこりや看經の餘りぢや。(ト思入あつて、)ハ、ハ、ハ、ハ、また近づきにならぬ女房の弟と、懇ろにしてござる親方のお娘御、よう頃合ひし色事で思はず知らず、殊に金拵えての眞實、女房の案じ、いや氣遣ひない、昨晚から出でゐる長吉、何處へ行くものだ、こちの内へ來にやならぬ。來たら幸ひお娘御と一緒に聞言ぢや、おれも近附きになつて共々に取持にやならぬ。

小梅 ほんに自慢ぢやないが生れ附いて正直な弟、減多に外へは行きませぬ。それに此様に障の入るは。

お君 長吉に片時も離れて居ともない故、わざ／＼こゝへ尋ねて來ましたわいなあ。

小梅 それは済のこと。

お君 是非長吉に。

山兵 さ、來るといふにも、此の七月盃蘭盆に。

兩人 エ、。

山兵 いや裏の座敷敷を掃除させうぞ、そこで待たんせ。

お君 あい／＼。

山兵 おれが案内、さあ此方へ。

兩人 ハイ／＼。

ト合方になり、由兵衛こなしあつて、お君を連れてはひる。後に小梅残り、

小梅 どうも合點の行かぬ弟の身の上、金を持つて出やつたのに今に兄えず、それに不思議な鼻の下このちの人の着物。(トこなしある)こりや怪しからぬ、幽騒ぎがして來たわいなあ。

ト思入ある。ところへ花道より長九郎、喜助、權七を連れて出て来り内へはひる。

長九 これ、こゝが梅の由兵衛が家で、こなさんが内儀の小梅殿か。

小梅 あい小梅でござんすが、つい見たこともないお前方は。

權七 喜助 おいらは藏前の米屋の者だ。

小梅 エ、。

兩人 急にこなさんに見せにやならぬものがある。連れ立つてちやつと見せたら肝を潰さう、さあご

さんせ。(ト兩人して小梅を引立てる。)

小梅 なんぢや知らねど、まあ様子を。

長九 見せたら様子が知れる、遅うなつては檢視が喧しいわい、早う。

權七 合點ぢや。(ト引立てる。) さあごんせく。

ト兩人して無理に小梅を引立て花道へ連れてはひる。長九郎後に残り、

長九 これからこゝな内、合點の行かぬ由兵衛め。

ト奥へ行かうとして、ちよつと思入あつて臆病口の方へそろく忍び込む。花道より金谷金兵衛、

羽織袴お岡侍のこしらへにて家來一人連れて出て来り、

金兵 慥かに此の家とある、それ案内いたせ。

家來 ハッ。(ト門口へ來て、)頼みませう、此家は由兵衛宅かな。

ト奥より與太郎出て、

與太 フイ、梅の由兵衛宅ぢや、これ内ぢやわいの。

金兵 然らば由兵衛殿は在宿かな。

與太 在宿とはなんの事ぢやの、これ、旦那さん、何所やらから侍が來たぞえ。

ト奥より由兵衛出て、

由兵 ヤイ、何を吐かすのぢや、おのれはちやつと奥へ失せう。

與太 おつとしよ。(ト奥へはひる。)

金兵 御免下され。(ト内へはひる。)

由兵 やあ、あなたは慥か。

金兵 下總の國千葉の家中金谷金兵衛。

由兵 すりや金五郎様の御舎兄様。

金兵 如何にも此方金五郎奴が儀に就き、由兵衛ちとお手前に談じ度き事あつてわざと参つた。

ト下にゐる。由兵衛煙草盆を持って出て、

由兵 これははく見苦しい處へ思ひがけないお入り、憚りながら私に談じ度き儀とはな。

金兵 出してくりやれ。

由兵 え、出してとは。

金兵 いやさ金五郎を。

由兵 何んと仰せられます。

金兵 以前は同家中三島隼人殿の家來、今は町人の梅の由兵衛、天晴の心底誠に男一疋、それには引

代へ人非人の弟金五郎め、武士の身にあるまじき隼人殿の息女と不義密通剩へお國を出

奔、今此の江戸に浪浪ひ居て暗樞子を聞けば、由兵衛、お手前の漢からぬ世話身共が爲めには

理直の弟、忝いと一禮を言ふに言はれぬ彼奴が不届、國を立退く由り三島様に預りのお家

の重寶、菅家手向山の色紙紛失の詮議の日進べも早や今開口に迫り、若し色紙出でざる時は隼

人殿には御切腹、策ねて覺悟を見るに忍ひず、殊に立退きし小三金五郎に疑ひかゝり、捕手の

役人を差越すべき相談區々、彼といひ是といひ聞捨てならぬ此金兵衛が密に當國へ立越えし

は、人手にかけうより金五郎に繩かけて、不義の越度の言譯縛首にさすれば隼人殿が明りも立

ち、また色紙の詮議日延べの願ひ、此金兵衛が弟故三島の家滅亡させては、親友の義理といひ武士が立たぬ、それ故お手前に。

由兵 いやく、もし金兵衛様、それではどうやら片手打、金五郎様に不義の科あれば則ち小三様にも準人様が。

金兵 いやさうでない、凡て四海の捷男女同日の論に非ず、女は軽く男は重し、それ故にこそ女兒童と唱へるではないか。

由兵 でも金五郎様を私が。

金兵 匿まけぬとは、そりや一通り右の入り譯けをとつくりと申し聞かすに、由兵衛お手前に似合はぬ一言、弟に繩かけて召連れねば準人殿のお身上、打捨て置かれぬ色紙の日延、こゝを篤と承知いたして何分弟金五郎を。

由兵 はて、なんともはや。

と兩手を組んで思案する。花道より源兵衛出て來りずつと内へ入り、

源兵 おゝ由兵衛内にか。

由兵 これは源兵衛、なんと思つて。

梅の由兵衛

源兵 ちと貴様きさまに見せる物ものがあつて。

由兵 おれもちつと逢あひたいと思おもうてゐた。それは幸さいはひ、してまた見みせる物ものとは。

源兵 外の物ものでもない、これぢや。(ト胴亂どうらんを出して見せる。)

由兵 やあ、そりやおれが胴亂どうらん。(トびつくりする。)

源兵 金物かねものは鈍菊どんぎくの定紋じやうもん、煙管きせるも象眼ぞうがん同じく鈍菊どんぎく、こりやこれ梅うめの由兵衛よじべゑが提物さげものと、誰たれ知らぬ者ものもな

い此この胴亂どうらん。

由兵 ム、それがどうして。

源兵 昨晚ゆうべ拾ひろうた。

由兵 ヤ。

源兵 しかも大川端おほがわはたの屋敷やしきの前まへ二十三夜つぎあかの月明つきあかり、ふつと見み附つけた此この胴亂どうらん。さし汐しとに流ながして仕舞しまへば

人は知しらぬと思おもへども、此この源兵衛げんべゑはな、はて變かはつた所ところで此この胴亂どうらん拾ひろうたぢやないか。

由兵 すりや胴亂どうらんを、源兵衛げんべゑ貴様きさまが。

源兵 賣うらうと思おもうて。

由兵 なんと。

源兵 梅の由兵衛が定紋、慥な、いやさ慥に持主の知れてある此の胴亂。外へ賣つたらきつと大金に
なれどそりや不實、源兵衛は男を立てる氣性、さ恨をうけた此胴亂、由兵衛、貴様に賣らうと
思うて持つて來た。

由兵 そりや忝い、昨晚吉原へ急いで行つた道筋大川端で落したその胴亂、惜しい事ぢやと思つて
ゐたが幸ひ拾ひては源兵衛、氣に入つた、成程買はうがその價ひは。

金兵 千兩。

由兵 ヤ。

源兵 萬兩々々萬々兩、惠美壽講ではないけれども、此の二十日向島の出合は大黒屋、その時の達引
に大人しく事を済した由兵衛、貴様へ返禮いよく此胴亂買ふ心か、むゝはてなあ。(ト思入ある。)

金兵 どうやら仔細ありげな其胴亂、賣買に鈎菊の金具價の手づかひ由兵衛が當惑、此の場に有合
はず金兵衛、其胴亂を求めてくれうか。

由兵 いや〜あなたはお侍、下作な代物お求めは御無用。

源兵 でも此品の價がなくば、外へ賣らうが。

由兵 いや減多に外へは賣らさぬ。

金兵 そんなら價（價）を。

山兵 さあそれは。

金兵 此場（このば）の様子（やうす）由兵衛（よへい）が難儀（なんぎ）、掙（うら）察（さつ）すれば慥（たしか）にもとは。（ト奥を見て、）これは大方（おほむね）弟（あに）め。

ト捕頭（とつとう）を出し立上り、奥へ行かうとするを止めて、

由兵 待つた金兵衛（きんべい）様、すりやあなたには。

金兵 奥へ踏（ふみ）込み（こみ）五郎（ごろう）に纏（まと）打ち、その元（もと）を糺（たよ）せばその方（はう）が難儀（なんぎ）も免（まぬ）がるよ。

ト行かうとするを立廻りて、

由兵 いや由兵衛（よへい）、少しも難儀（なんぎ）仕（し）ませぬ。

源兵 難儀（なんぎ）なければこの胸（むね）亂（らん）を。（ト外へ行かうとするを、）

由兵 は、おれが胸（むね）亂（らん）、滅多（めった）に外（ほか）へは賣（う）らせぬぞ。

源兵 そんなら價（價）を。

金兵 ぢやによつて弟（あに）めを。（ト又奥へ行かうとする。）

由兵 待つた。（ト止める。）

源兵 是非（ぜいひ）外（ほか）へ。

由兵 これ、

金兵 でも。

由兵 サア、

金兵 サアくくく。

ト金兵衛奥へ、源兵衛は外へ、兩方へ行けば由兵衛よろしく立廻り疊を蹴上げる。下より久庵最前
の着物を持つて出る。

源兵 やあ久庵。

久庵 此の由兵衛は長吉殺し、證據は此の着物。

源兵 誠にその通り。

ト立寄るところを田兵衛抜討に一刀切る。久庵傷を負ひ倒れる。

源兵 やあ、それは。(ト立ちかゝるを、由兵衛抜身をひらりと見せる。)

由兵 長吉は殺さぬ、久庵を手にかけた此の血汐。

金兵 は、あ見事、驚き入つた、由兵衛が手の内よりは心の内、身共は今の詞の内弟故に人を殺せしと察せし故、金五郎に縄打つてなにかも彼奴を科人と思ひの外、承知いたしてコレ此如く、

目ま前まへ手てを負おはせしに矢張やっば金五郎はきんごろうを庇かばふ心こころ底てい、はて頼母たのちしいさりとは。(ト奥へこなし、)いや惜をしい性根しやうねを町人ちやうじんと呼よばせる事ことぢやなむ。

由兵

いや行きがけの駄賃だちん、久庵きうあんに傷きずを負おはせし由兵衛よへべゑ、鬪亂ぶらんの價あきに命いのちの安賣やすうり、掛賣かひりにせぬ源兵衛げんべゑ、
こちの利分りぶんであらうが。

源兵

いや負まけてやらう。

由兵

なんと。

源兵

それ。(ト鬪亂を投出し、)外あはへ賣うつたら大金たひきんになる品しななれど、持主もちぬしの由兵衛よへべゑに戻もどしてやるもこつちの商あきなひ、樂うたの種たねを蒔まく互あひに損徳そんとくなしのもとくぢやないか。

由兵

こりや思おもひの外折あは合あうて出でたわ。

源兵

この鞆たもとに拔身ぬきみを入れ。

由兵

帳合ちやうあひ濟すませば。

ト拔身を鞆へしやんと納める。金兵衛こなしあつて、

金兵

いや、まだ身共みどもが注文ちゆうもん。(ト捕繩を投出す。由兵衛取つて、)

由兵

これは。

金兵 縁に柵む義理の捕繩、由兵衛そちが思案で染上げる、彼の紛失の色紙さへ手に入る吟味は商賣がら。

由兵 梅はしぶくも梅の由兵衛、色紙の染上げあら立られぬ手業が大分、慥かにそれと知れてはあれど、かきさがししんしぎれのきず附けてせんなき事、そこを無事に疵を付けずにつぱりとめうばんぢや、明ばん澁染の。

金兵 それを望みに、身共が誂へ。

由兵 とくと承知でござりまする。

久庵 やい由兵衛、おれを此様に切つたな、その返報にわれが訴人する、待つてをれ。

金兵 うぬはお國の手醫者なれば、伴五郎と馴合つて御家老に毒を盛損うた大罪人、それ故見附次第に切捨てよとの仰せ。

久庵 南無三、それでは。

ト振切り逃げるを、ちよつと上へ廻り引据え手早く繩打つ。

久庵 なんの事ぢや、由兵衛をしまひ付けろと思つておれがしまひ付けられた、乃木伊とりが乃木伊

になる、これがほんの毛を吹いて、アイク、、、、疵がついたぞ。

由兵 すりや私わたくしは。

金兵 切り徳とくく。

源兵 はてよい手てつがひ、由兵衛よへびわれが身みの上うへ。

由兵 源兵衛げんべい、貴様きさまにもまたとつくりと。

金兵 身み共どもは旅宿りしどへ、必ずかならず共にその捕縛とらひの。

由兵 縛もつれ解ほどいて見みせませうが、重おもくにも。

金兵 七度ななど結びて見あとなる、碌ろくでは果はてぬ弟せいでが身みの上うへは無む事に。心こころ勞うながら由兵衛よへびさらば、家來けらい共ども

奴やつを引ひ立てい。

ト唄になり、金兵衛思入あつて、家來に久庵を引立てさせ、在道へついとほひる。後に由兵衛こなし

あつて、

源兵 さあこれから由兵衛よへび、誰たれも遠慮えんりよはない、なんと打明うちあけて。

由兵 不思議ふしぎに返かへつた此この胸亂むねご、剛な差じの煙管きせるで一服はく喫くまうか。

ト煙草盆を引寄せ煙草を喫む。源兵衛は何やら言ひ兼ねるこなし、これも煙草を喫む。外から、

才兵 嬉しや由兵衛、戻つてか。

由兵 親方、こりや後金の儲けか。

才兵 さあ此の間の手附はやうく昨晩着んだれど、モウ百兩都合二百兩の身請け、さあ由兵衛受取ませうか。

由兵 渡すに違はぬ小三の身請け、源兵衛もこゝにゐる、才兵衛粹に似合はぬ金の儲け。

才兵 いやく、此源兵衛の方へちやんと手付れして、お前の方へ相談した身請け、後金が今戻らずば昨晩の手附も戻して、小三は矢張りこつちの奉公人。

由兵 昨晩うつたは手附でないか。ありや半金、それを流すとは無法者馬鹿盡すな。

才兵 いやく、由兵衛、そのやうにけんくしても言はつしやりますな、向島で唄巾をのみこんで二十日の日、二十日に取つた同然の手附、すりや三日過ぎるぞえ。こりや道具屋の寄附にも御手附三日限りとしてあれば、流さうといふおれが無理でえすか。

由兵 ぢやと言うて今、後金の百兩。

才兵 なければおれがいふ通り、

由兵 えううぬ、此奴も行掛けの駄賃に。(トきつとなる。源兵衛止めて、)

源兵 由兵衛それ百兩。(ト前幕の金を投出す。)

由兵 やあ此金は。

源兵 向島でどぶ六めが騙つた百兩一兩も違ひはない、そつちに覚えの通り。

由兵 すりや此の金を。

源兵 貸すのではない、戻すのぢや。親方に渡して小三が身請け、さつぱりと立立て、しまやれ。

由兵 ム、これまでの源兵衛と打つて代つた志、まあ何事も後へ廻して手詰の後金。

源兵 時の用には離れのよい男であらうが。

由兵 忝い、それ親方後金の百兩。(ト才兵衛へ渡す。)

才兵 忝い、それで言分はござりませぬ、小三さんが年期證文。

ト證文を渡す。由兵衛取つて懐中へ入れる。

源兵 金受取つたら言分はあるまい。

才兵 なんのござりませう、これといふも源兵衛様の達引。

源兵 こりや、無駄をいふな。(ト目配せする。才兵衛のみこみ。)

才兵 さらにお暇をします、男共来い〜。

ト男共を連れ花道へはひる。由兵衛こなしあつて、

由兵 朋亂どうらんといひ今の金かね、美しづくにしかける源兵衛げんべゑ、こりや此この由兵衛よべゑになんぞ折入せいつて、

源兵 おゝ頼たのみがある。

由兵 ム、。(ト合方になり、由兵衛源兵衛こなしあつて前へ出で下にゐて。)その頼たのみとはおれも承知しやち、また

由兵衛も、貴様きさまにちつと折入せいつて。

源兵 その頼たのみといふは、おれも承知しやちぢや。

由兵 事ことによつたら、やらう。

源兵 そりや何を。

由兵 女房小梅にようせうめいを。

源兵 ム、おれもやらう。

由兵 そりや何を。

源兵 手向山たむけやまの色紙しきし。

由兵 ヤ。

源兵 なんと違ちがひはあるまいがな、ハ、ハ、ハ、ハ、由兵衛よべゑこつばづかしい事ことなれど此源兵衛このげんべゑ、成程小梅なるほどこゑを

貰もらひたい、どういふ因果いんぐゐか藝者げしやの内うちから惚ほれてく惚ほれぬいてゐる、ぢやによつてこの胸むね、今の金かねまだ此この上に望のぞみの色紙しきし、伴五郎ばんごろう様の頼たのみも放擲ほうてきつて、たとひ人ひとが笑わらはうが誇ほらうか、小梅こめいさへ女房にようぼうに持ちや、おれが本望ほんまう我身わがみながら恥はづかしい。どうしてあれに此様こやうに惚ほれた事ことぢや知らぬ、由兵衛ゆべゑ必ず腹立はらたてゝたもるなや。

由兵 鬼おにをあざむく源兵衛げんべゑ、色いろゆゑなればこそ、はて心こゝろの外ほかぢやなあ。

源兵 外ほかか内うちか知らぬが、どうぞわりない無む心しんなれど。

由兵 現げん在ざいの女房にようぼう、源兵衛げんべゑにかうくしろというて、取と持もちはせぬが縁えんを切きつてやらう、はてその上うへで抱だいて寝ねるのはそつちの手際てぎは、去さ状じやう附つけて縁切えんきつたらよいではないか。

源兵 成程なるほど、男おとこの口くちから取とりもちもなるまい、すりやいよく小梅こめいを縁切えんきつてくれるか。

由兵 さつぱりと去さつてしまふが、今いまいうた菅家くさげの色紙しきし、盗賊たうぞくはどぶ六どぶむなれど、持も主ぬしは源兵衛げんべゑと健たかに知しれてあれど、表おもてだつて詮議せんぎもならぬ筋合すぢあひなれば、それで折入せいつて由兵衛ゆべゑが頼たのみ。

源兵 根ねが盗ぬすみ物ものゆゑ密ひそかに賣うりけうてくれと頼たのまれて、肌身はだみ放はなさぬ此この色紙しきし。

ト懐中より色紙の箱を出して見せる。

由兵 それを。(ト取りにかゝるをちやつと持ちかへ。)

源兵 いやこればかりは、津多に渡さぬ、去狀書いた其の上で。

由兵 すりや去狀を見て、その色紙を。

源兵 小梅と引きかへに違ひない、併し由兵衛おれをいかさまにかけると、此色紙をべりくくと引き

微つてしまへば、小三は元より金五郎始め、幾人死人が出来ようやと知れまい。

由兵 ぢやによつて小梅をきつと。

源兵 約束が違へば、長吉殺しの訴人はおれが。

由兵 いや命は惜しまぬ、色紙が欲しい。

源兵 そんなら由兵衛。

由兵 源兵衛とくと。

源兵 様子を見ようわい。

由兵 ム、。(ト湖吟になり、兩人こなしあつて源兵衛中二階へはひる。由兵衛思入ある。)

へはる。上の夜、闇はあやなしこれかとよ、香やはかくる、梅の花、散れど薫りはなほ高く、袂に伽羅の煙り草、きつうをしめどそのかひも、なき玉ころもほんにまあ、柳は緑、紅の、花を見すて、歸る雁。

ト此の唄の内山兵衛色々思案する。花道より小梅涙にしほれて花道の角にて躓きこけて、起き上り、門口へ来て思入。こなしあつて涙を拭き、なりをつくりずつと内へはひる。唄の切、弾きながしの合方、由兵衛と顔見合せ。

由兵 小梅、最前から何處へ行つた。

小梅 あい、隅田川の渡場へ。

由兵 はて、かはつた所へ何しに。

小梅 さあそれは。(ト言兼ねる。由兵衛こなしあつて、)

由兵 おれに隠して遠歩き、どうでろくな事ぢやあるまい。

小梅 なんのいなあ、言ふに言はれぬ、それはく。

ト悲しさを隠す思入。此の内中二階の障子を開き源兵衛様子を見てゐる。由兵衛源兵衛ちよつと見てわざと腹の立つこなしあつて、

由兵 いまくしうてならぬわえ。(ト灰吹を煙管にて叩く。小梅こなしあつて、)

小梅 もしこちの人、そりや何事でごさんぞいなあ、お前に隠して私が行つたはちつと譯のある事、その様子を言ひたいけれども、どうも言はれぬ、何事も堪忍して機嫌直して下さなせ、私

が身の上はな。

由兵 イヤそちよりはおれが身の上、割つて言はねど追附。

小梅 エ、。

由兵 いやさ追附男の効験、存分にせにやならぬ。(ト源兵衛が方へかけて言ふ。)

小梅 それく矢張りその様に腹立てゝゐやしやんす、機嫌直して下さんせえ。これ申し一生の、いやさ、頼みぢやわいなあ。

由兵 や、何んぢや、わりや泣くか、なんの悲しうもない事を。

小梅 あい、何んの悲しうもない事、泣きやしませぬ此様に笑うてゐますわいなあ。(ト由兵衛思入。小梅顔をちつと見て、) こちらの人、由兵衛殿、私よりお前が、なんで泣かしやんすぞいなあ。

由兵 なにが悲しくて、おれが。

小梅 イエく、それお前の兩の目に、涙が一杯たまつてあるわいなあ。

由兵 いや、こりや春先で逆上るのぢや。(トこなしあつて拭ふ。)

小梅 こりやもうこたへられぬわいなあ。(ト悲しさを隠す心にて、チロリと茶碗を取つて来て手酌にて酒を飲む。)

由兵 こりやいつにない、様々な藝が上つたな。

小梅 アイ上つたわいたち。(ト一口飲んで由兵衛に助けてくれと出す。由兵衛顔をそむける。) 横いかえ。

由兵 おりや酒どころぢやないわい。(トぐつと飲んで顔を擧める。)

小梅 衛ないかえ。

由兵 熱鐵を飲む思ひぢや。

小梅 ほんに由兵衛、藝者の時からふつとま前と言替はして今此様に女夫になつて慕すのは、これ

が天上の雲とやら、私やこんな嬉しい事はござんせぬわいなあ。

由兵 それも逢ふは別れ、生は死の元といふ事あれば、いつ別れようやら知れぬ。寝ねてその心で。

小梅 いえ／＼私や別れはせぬぞえ、あの金輪奈落の底までもま前と離れはせぬぞえ、それで此様に。

に。

トまた酒をついで飲まうとするを、由兵衛左の手にてその手を持つて、

由兵 もう大概に飲んだがよい。

ト此時小梅由兵衛が止めてゐる左の手の小指をちつと見て、

小梅 こちの人、お前の此の小指は、どうさしやんしたえ。

由兵 ヤ。(トちやつと引く、小梅思入。)

小梅 えゝ大方おほまはた刺さる折刺刀せさしでちよいと。(ト言ひつゝまた手とりて、)但し深爪ふしづめか棘いばらでもたつたかいな
あ。(トとつくりと見て)いや／＼、こりや深爪ふしづめでも棘いばらでもござんせぬ。

由兵 おゝ切きつてやつた。

小梅 そりや誰たれに。

由兵 さあ、餘所よその女子をまごに。

小梅 あのお前まへが。

由兵 心中しんちゆうに切きつてやつた此この小指こゆび。

小梅 そりや信實しんじつに。(トとりつくをとつて突退け、源兵衛が方を見て、)

由兵 小梅こらふ、いやになつた。

小梅 えゝ。

由兵 とんと倦あきが來きたぞ、傍そばへ寄よるな胸むねが惡わるいぞ。

小梅 こちの人ひと、そりやまあなにを言いうて下くだんすぞいなあ、その指ゆびは慥たしかに。さあたとひ心中しんちゆうに餘所よその
女子をまごに切きつてやらしやんしても、もう／＼私わがや何なににも言いやしませぬ、愠りん氣きどころかお前まへに追おひ

出だされて、なんとせうぞいなあ。

由兵 互たがひに心底見抜いた上の女夫めうと、今の様やうに言いうてさへその通とほり、此この上うへまた聞きいたらびつくりする。

小梅 えゝびつくりするとは。

由兵 おゝびつくりさす。(ト源兵衛の方へかけて硯を取りさら〜と去狀を書いて、)そりや。(ト去狀を投付

けわきみする。小梅取つて、)

小梅 去狀そりじやうの事こと、そんなら私わたしを。

由兵 縁切えんきつた喉のどやつた、その去狀そりじやうをきり〜持もつて出でてゆけ。

小梅 此この去狀そりじやうを、私わたしに此この去狀そりじやう。

トうち〜して由兵衛にとりつく。由兵衛こらへかね、

由兵 なんにも知しらずに。(ト背を擦らうとして源兵衛を見て、小梅を突放し。)縁切えんきつたといふ證據しやうこの去狀そりじやう、

ナ去狀そりじやうぢや。

トわざと源兵衛へ聞かす。

小梅 これお前まへ、此こ様な願ねがひな心こゝろぢやなかつたに。

山兵 飛鳥川の淵は瀬と、夜の間に変る男の心。

小梅 さあ私が心も。

山兵 なんにも言ふな、聞く耳持たぬ。

小梅 エ、私が心、竹なら割つてお前に見せたいわいなあ。

山兵 そりや此の山兵衛も。いや未練な奴ぢや。

小梅 さうぢや。(ト山兵衛が脇差にて左の小指を切る。)

山兵 やあ〜、なんでこりや指切つた。

小梅 心中に。

山兵 や。

小梅 サア、お前に去られた上は是非がない、これから私も而當、藝者の時から心をかけて色々口説いて下さった源兵衛さん、今更女房に持つてと口で言うても得心して下さすまい、それで心中に切つた此の指、源兵衛さんに見せて女夫になります。

山兵 すりや源兵衛に眞實の。

小梅 此の縁お前の構ひにやならぬ、此の去狀。

梅の由兵衛

由兵 心中ちゆうしゆうに拵むすといひ。

小梅 よう縁切えんぎつて下くださんした、惨むだい心こゝろの由兵衛よしべゑ殿どのちやもの、此この世よではお前まへの顔かほを見みませぬぞいな

あ。

由兵 なんと。

小梅 私わがや源兵衛げんべゑさんと、末長すゑながう添そひとげまする。

ト小梅去狀をもつて花道へ走りはひる。由兵衛見てつかくと出で門口の柱によりつき向うをきつとながめほろりと泣く。此の内二階より源兵衛懼び勇みて下り來り、

源兵 えゝかぢいゝな、これゝ由兵衛よしべゑ殿どの、今いまのを見みておりやほんに得心とくしんぢや、こゝな結むすぶの神かみの、

南無由兵衛なむよしべゑ大明神だいみょうじんさまゝ。

ト外へ出ようとする。

由兵 源兵衛げんべゑ、男おとこづくの約束やくそく、去狀さりじやうやつた上うへはこちの望のぞみの。

源兵 色紙しきしか、小梅こめい故ゆゑなら色紙しきしも身上しんじやうも置おいて行ゆく。(ト色紙の箱を由兵衛に渡し、)おれはこゝにをるに、

可愛かあいやうろゝたぢ尋たづねて居ゐやう、小梅こめいばうおゝいゝ。

トうつゝの襟になつて花道へ走りはひる。奥バタゝにて小三金五郎出て來り

金五 これ／＼由兵衛殿、様子を聞いたが思ひがけない。

小三 小梅殿をなんでそなたは。

由兵 ハテ女房の事はうちやつて置かつしやりませ。それよりお悦びなされませ、小三様お前の身請けもすつぱり濟んで年季の證文。(ト懐中より最前の證文を出し小三に渡す)金五郎様、色紙はやう／＼無難に取返ししました。

金五 えゝ忝い、小三が身請けといひ、此の色紙。

小三 皆由兵衛が志、なんと禮を言はうやら。

由兵 さういふ間に時がうつる、お二人共に其品を勘十郎様へ御持参あつて金兵衛様へ御執成、さすれば御身の言ひ譯け。

金五 そんなら此の色紙を一時も早う。

小三 勘十郎様や金兵衛様へ。

金五 由兵衛殿には。

由兵 後から参ります、さあお二人共。

金五 さうぢや、小三おぢや。

由兵 あれでお二人ふたりの身みの上うへ、日出めでた度たく納をまる上うへは。
ト唄になり、金五郎小三を連れ魚紙を持って花道へ走りはひる。由兵衛後にてこなしあり、

と思入ある。此のところへ奥よりお吉出で、

お君 由兵衛殿よへべゑだん、まだ長吉ながきちはおじやらぬかいなあ。

由兵 打明うちあけて得心とくしんささうか。いや／＼それではかへつて。

お君 まあ何所どこへ行きやつたのかいなあ、えゝ長吉ながきちもわしが此この様やうに案あんじてゐるのに、ちつとまあ顔かほ見せてたもつたがよいに。

由兵 なんぼ待まつても長吉ながきちはな。

お君 まだ暇ひまが要いるかいなあ。

由兵 こりやもういつそおれが尋たずねて来こよう、むゝさうぢや。

ト身拵へする。此の向お君慌びいそ／＼捨ゼリフの内納戸より小梅つか／＼と出で、門の戸をびつしやり閉めると、これより胡弓入りの合方になり、小梅後ろにて戸を押へ、由兵衛こなし、お君思ひがけなく。

お君 小梅殿こめだん。

由兵 去つた女房立戻つて来たは。

小梅 由兵衛殿、名乗つて出やしやんすには及びませぬ。

由兵 なんと。

小梅 潮田川の渡場へ流れよつた弟の死骸。

お君 エ、。(トびつくり)

由兵 その死骸の口に喰切りある小指、殺者の證據、これ。(ト左の小指を見せる。)

小梅 いえ、これ。(ト同じく左の小指を見せる。その手を取つて。)

由兵 さては最前切つた、そちが小指。

小梅 お前の替りに。

由兵 ヤ。(ト小梅を突放し、下手人は此の由兵衛。

ト此の内お君由兵衛が顔を見てゐる。

お君 そんならあの長吉は。

由兵 大川端の屋敷前で、昨晚手にかけて殺して仕舞つた。

お君 エ、。(トびつくり)

小梅 ハ、ア。(トとりみだし大泣き。此の内始終合方、由兵衛佛壇より以前の手紙を取つて来て、)

由兵 淺次郎殿へ、姉小梅より。

兩人 え、その文は。

由兵 金と一緒に持つてゐた。(トきつと開き下ゐて。)これ現在連れ添ふ女房の弟、淺次郎と聞いて

はをれどまだ逢はぬのが因果、昨晚手詰の金の工面に説方なく思案工風も暗まざれ、百兩所持する丁稚長吉、悪者共が手込めにするを片つばしから追ひまくり、送つてやらうと先へ立ちお主の爲めの出来心、非道と知つて無理やりに貸さぬを酷う、死ぬる際まで此金は命づくというたは矢張り此の由兵衛へ、姉の頼み、これ此状を取上げて知らぬ事とて胸慾に、二十三夜の月夜に死顔見れば小梅に生寫し、落ち散りし此の状を拾うてびつくり、さては長吉というたは、であつたかと、思へば後の死骸の片付け、さし汐なれば大川へ心で水葬、せめて名乗つて出る淺次郎は、こりやなげきの言譯、殊にお君様の心底最前二人が様子、此の由兵衛は人殺しの仕置にあはぬその先に、心は死んでをるわいやい。

お君

小梅さん、由兵衛さんが長吉を殺したといなあく、わしやどうせう、長吉が死にやつたらなんとせう、これお前も弟の事ぢやないかいなあ、え。

トこなしあつて由兵衛にとりつき、

お君

なんでお前は長吉を殺さしやんした、可愛さうに、まあ矢張此家へ来てゐるであらうと思つて知らぬ道を尋出して尋ねて来たも、逢ひたさ見たさ、それ殺したとはこちや厭ぢや、長吉に逢ひたい顔見たい、元のやうに長吉を賠うて返しや〜。

ト懐袖にて由兵衛を叩き、又打伏して泣く。小梅こなしあつて、

小梅

お君様、懐心の一筋に道理ぢや、道理でござんすわいなあ。あこれこちの人、覺悟を極めて死ぬるまで、お前に恨みを言ふまいと思つてゐたがたつた一言、えゝ聞えませぬわいなあ。

由兵

こりや何事も、金が敵とあきらめてくれ。

小梅

お主の爲めに弟一人、見かへはせねど恨みはこれまで、お前が弟に逢うてやつて下さんせぬ故互に敵を知らぬとて、さういふ事とは思はず、隅田川の渡場より米屋の男が呼びに来て、行つて見や喧嘩さんしたかと外の案じに思はずも、隅田川の渡場より米屋の男が呼びに来て、行つて見てびつくり、弟が死憎、その時私も氣を失うたわいなあ、あたりの人に世話になり心を静めて死憎を見れば、口にくはへた小指の證據、殺者の詮議と泣き〜戻つて此の事を、言ふに言はれぬ着物の血潮、よもやと思へどお前の素振、酒にまぎらし試して見れば、左の小指切つてや

つたは色事いろごとと聞いて嬉うれしさ、さは言いへ矢張やつぱり疑うたがうて、去狀さりじやうとつて思案しあんをきはめ、わしや弟おとうとの下げ手て人と覺悟かくご極めてお前まへの様子やうすを。

ト取りつき泣くこなしあつて、

由兵ゆへい よい女房にようぼう共どもお君様きみさま、何なにをいうても詮せんない線言くりにこと、此この上うへは後申あとをむらふが肝心かんしん、その序ついでに由兵衛よへべゑも。

ト立上る。兩人兩方よりとりつく。由兵衛思入ある。

お君おきみ そんならお前まへは。

由兵よへべゑ 由兵衛よへべゑが懸僧かきそうからう。

兩人ふたり いえ、諦あきらめてゐるわいなあ。

由兵よへべゑ 思おもへばまだ蕾つぼみの花はなの長吉ながきちを。

お君おきみ 殺ころす刃やいばもお主しゅの爲ためめ、

由兵よへべゑ 夫思むしおもひの、(ト兩人を引寄せ、)

三人さんにん 心こゝろを察さつして、空そらに春雨はるさめ。

ト手をと리카はし泣く。此の内奥うちおく扉ひらより長五郎ながごろう窺のぞひ出て、

長五ながごろう 長吉ながきち殺ころしたは、いよく由兵衛よへべゑ、われを。(ト立廻り、)

お君 やあ悪者長五郎。

長五 最新のお君、おれが戀人。

トお君を引立てる。小梅さへえる。此内花道バタ／＼、金五郎色紙を持って走り出で、

金五 コレ／＼由兵衛、最新受取つた色紙は此通りの偽物、夫故勘十郎様には以ての外のお腹立。

由兵 ヤ、／＼、／＼、(ト取つて見て) 誠に是は襖のまくり、さては源兵衛めが。

金五 それ計りぢやない、小三が身の上、道で待伏して伴五郎や源兵衛が、年季説文共にあちらへ奪

はれた。

由兵 すりや説文も小三様も。

小梅 こちの人、お前の身の上より誠の色紙。

金五 小三が事も。

由兵 それ。(ト行かうとする。長五郎又かゝる。小梅金五郎立廻り、この内お君思入あつて)

お君 南無阿彌阿佛々々。(ト自害する。)

皆々 ヤ、これは。

お君 未來へ行つて長吉に。

皆々 それ程道に。

長五 うぬを。(ト立廻りよろしく。)

小梅 これなう。(ト長五郎を押へる。)

由兵 なんでも源兵衛めを。

ト花道へ走りはひる。これにてよろしく

幕

本舞臺一面土手の模様、幕の内より由兵衛伴五郎を踏附け、十平次が手をねち上げ、源兵衛刀を抜
きかけ、是を留めてゐる見得よろしく、踊り三味線早幕に幕あく。

源兵 由兵衛、小二を戻したりや言分あるまいがな。

由兵 いや小二様を受取つても、まだ謙の色紙をこゝへ出せ。

ト突廻す。十平次抜切り、伴五郎を上り。

源兵 色紙とは何を、最前われに渡したではないか。

由兵 そりや謙のまくり紙、菅家御正筆の一向山の色紙は、源兵衛うぬを始め伴五郎どぶ六、骨をひ

しいでも、出させにやならぬ。

源兵 伊、ヤ知らぬ、色紙よりうぬを。

由兵 命の濟んだ梅の由兵衛。

トかゝるを一寸立廻り。此内より長五郎走り出で、

長五 やあ、みんな爰にゐるか。

源兵 長五郎、われも一緒に由兵衛めをけしてしまへ。

皆々 合點だ。

由兵 相手は應はぬ一くるめ、昔の商賣、さあ何處からでも。

皆々 こりや面白。

ト四人を相手に面白き鳴物にて大立廻りになる。皆々寄つて由兵衛を舟へ打込む。起上り四人を泥の中へ打込む。源兵衛を引上げ懐中より色紙の箱を取出し。

由兵 これこそ識の色紙、えゝ忝い。

まづ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

梅の由兵衛（終り）

敵討噂高松

かたき

うち

うはさ

のたか

まつ

敵討高砂松

(研辰||七幕)

志賀別荘の場

同城内門番所の場

同城門表先の場

序幕

役名

比良井市郎右衛門、唐崎九市郎、同才次郎、烏賣忠七實は結城左衛門尉

友宗、若殿本太郎、小主水、足輕會平太、門番甚助、田那上運平、中間鮎助

刑部宗勝、守山辰次。本田の姫夕照、侍女宮城野、腰元みどり、近習宅助、

諸士運平、同雁平、其他諸士等。

本舞臺三間の二重、向ふ金襴、左右落間、後へ寄せて網代堀、一面の萩の盛り、總て本田家志賀別荘の體、二重に褥を敷き、夕照姫、下げ髪、裾襦にて住ひ、傍に腰元二人附添ひ居る、平舞臺に辰次、麻上下、大小にて控へ、烏賣忠七、やつし頭巾、袖なし羽織、手甲脚絆、烏賣りの荷を擔いで居る、此見得早舞にて幕あく。

辰次 コリヤ、烏賣何處迄通るのぢや。

忠七 ア、モシノ、其様に仰せあらずとも、何卒商ひをさせて下さりませ。

辰次 聞きわけのない奴ぢや、ならぬと申すのに。

宮城 辰次様、何やら賣物の様にござりますが、何故おせり合ひなされませぬ。

辰次 イヤ、姫君を始め御家臣方お詰合居る處へ、烏賣りの身として放し鳥をさせてくれいと、のほろづの願ひ、見苦しい、下りをらう。

忠七 イヤ、そのお叱りを逃り見ず、押して願ふも商賣づく、實は商ひがいたしたのでござります。

夕照 あの者は烏賣とな、あの様に頼む故幸ひの放生會、購めてやりたいなう。

宮城 畏りました。申し辰次様、アノ烏賣が姫君の御機嫌に叶ひました故、お引合せなされませいなア。

忠七 ヘイノ、それは有難い仕合せにござります。お侍様、そこをよろしう御願ひ申します。

辰次 コリヤヤイ烏賣め、其方は仕合せな奴ぢや、今放生會をなされるとある故御前へ出やれ。

忠七 ハイノ、御免なされて下さりませ。(ト搦手を仕ながら前へ出て) 私は結城に住ひます新米

の烏賣、忠七と申しまして毎度京都へ参ります。私が差上げまする雀は、堅田邊で捕ります故、罠りが違ひます、モウ雀賣りの開山ぢやと評判に預り、瀬田の忠七と異名を取つた、名物男でござります。

ト此時、下手より侍三人、麻上下大小にて出で來り、

運平 ハア、姫君これにお渡りでござりまするか。一大事の儀が出来いたしました。

軍平 刑部様にも取りあへず。

鳩平 只今これへお越しでござります。

辰次 何、一大事差し起り、取敢へず刑部様にも。

宮城 これへお越しなさるゝとは。

夕照 みづからが身に取つて。

皆々 お氣遣ひな事ではござりませぬか。

辰次 シテ、刑部様には、何れへお越しなさるゝのぢや。(ト此時下手より。)

刑部 イヤ、刑部宗勝大れへ乗つて夕照に對面せん。(ト序の舞になり、刑部、上下、大小にて出で來る。)

忠七 コリヤ怪しからぬ御取込み。ドレ、何も片附て控へませう。(ト荷を隅の方へ片附ける。)

展次 是はノ 刑部様には火急のお越し。

皆々 先くこれへ。

刑部 罷通る、ト二重へ上りあたりを見廻して、何は格別、夕照が身に取つての一大事故、取る物も取敢へずわざくこれ迄伺候いたした。

宮城 シテ、一大事と仰せられますは、如何様の儀にござります。

刑部 ヲ、その儀は兼て武將家より、御媒介下されし儀に就き、高丸家より火急に館へ使者到着、先一日は夕照病氣の願ひに寄り、今日迄與入延引いたせしも、姫の病氣は虚病との取沙汰、是に依て先達て結納の代りに送り遣はしたる、鈴虫の香爐受取りあるべし、然らば急ぎ與入れいたしてよからうと火急の使者、夕照返事はなんとノ。

夕照 白は大切なる、願望のある身なれば故。

刑部 いやなれば猶の事、一刻半時も猶摩はならず、早々結納の印し高丸家へ返すより、外に思案はよもあるまじ、サア返答は、どうぢや、どうぢや。

夕照 たとひとの様にあらうとも、父上様のお國入り迄はなんと返事の仕様もなし、是非に及ばぬ此場の仕儀、これ宮城野、結納の香爐返してたも。

宮城 畏りました。(ト上座より箱を取り出し) ハ、ア、左様なれば結納の香爐御返上申しまする。

刑部 イヤ、大切なる品故に、一寸改めて。

宮城 御尤、姫君様、憚りながら。(ト宮城野、箱を出し、姫君あけて見て。)

夕照 ヤア、コリヤ大切な。(トびつくりする、刑部是に目を附け。)

刑部 香爐が如何いたした。

夕照 サア。

宮城 どうあそばしたぞ。

夕照 コリヤ、此中には。

刑部 何にもせよ。(ト見てびつくりなし。) 誠にこりやいつの間にか、紛失いたした。

辰次 鈴虫の香爐は高丸家の重寶、紛失したとばかりでは事はすまぬ、ハテ笑止千萬。

刑部 何にもせよ、合點のゆかぬ寶の紛失、さつする處某が領分を御納なす、品田藤藏といへる盜賊の仕業にてはあらざるか。(ト姫こなしあつて。)

夕照 さうぢや。(ト懐劍にて死なうとする。)

宮城 コリヤ、何故の御生害。

夕照 何故とは、大切なる香爐を失ひしも皆白が誤り故。

宮城 エ、御座氣な姫君様、妾にお任せなされませ。

夕照 それぢやというて。

皆々 マア、お待ちなされませ。ト留める、此時奥にて。

本太 ヤア、面倒な、放せ。

皆々 先づ、お待ちあそばしませ。

ト早舞にて、奥より小主、廊上下、眉間に疵を受け逃げ出る、諸士留めながら出る、若殿本太郎、袴ばかりにて馳差を引提げ、小主水を追ひながら出る、後から諸士、○△□の三人、廊上下、大小にて附添ひ、止めながら出る。

本太 憎い小主水、ウ又眞二ツ。

皆々 先づ、お留りあられませう。

トいろ／＼留めるのを振拂ひ、花道へ追つて行く。此時、花道より、唐崎九市郎、上下、大小にて出で來り、能き所にて本太郎をきつと留め、

九市 殿、恐れ乍ら、先／＼。(ト留る、若殿きつとなつて九市郎を見て。)

本太 ム、そちや唐崎九市郎、予に向つて無禮の留立て、逆言の小主水打ち放す、そこ退け。

九市 イヤ、お留めは申されど、御手づから御佩刀を抜き放し、御手討ちとは餘りの一興、小主水が過言の罪科、逐一九市郎承り、事を組すは身不肖なれ共家來の役目、先づ〜お待ちなされませ。

ト本舞臺へ押戻す、若殿きつとなつて、

本太 主従の禮を輕んじ慮外の諫言、それぢやに依て。

九市 スリヤ、君に向つて慮外の御諫言申せし故に。

本太 手討にする、爰放せ〜。

九市 イヤ、先づお待ちなされませ、小主水が罪の次第、何卒拙者めに、御聞かせ下さりませ。

本太 フ、如何にも申し聞かさう、予が思ひ立つたる當所唐崎の明神の社頭残らず取拂ひ、一本松を庭木に取寄せる様申附けたる、奉行の役目を承りせざるのみならず、予に詞を返す不届者。

小主 ハツ、一旦の御説、返し奉るには恐れながら當所唐崎明神は、お國名譽の靈地、殊更松は日本の名木、もしや御家にお祟りもあらんかと、夫故若輩の拙者なれども、此儀をもつての御諫言。

本太 ヤア、たとひ靈地明神たりとも予は當國の主人、一旦申出せし予が詞、此の儘にさしおかば政

道の表面白からず。それ故討放す、九市郎、そこ退げく。

九市

御諫言を奉るは御家の爲、良薬は口に苦し、御用ひなく御手討にあはゞ武士の面目兼ての覺

悟、一命惜む小主水でもござるまい、此上は拙者も御手討の御相伴に預りませう。サア、十つ

ぱりとあそばせく。(ト前へ出る。)

本太

ヤア、不敵の一言、その方も手討にいたす、覺悟いたせ。

夕照

兄上には。

皆々

お待ちあそばされませう。(ト女形皆々、本太郎を留める、諸士は小主水をかばうて。)

諸士

お逃げなされい。

ト立役、皆々本太郎を隔てる。敵役は小主水をわざと本太郎の方へ突きやる。此立廻りの中に本太郎はいらつて斬つて行く。此とたん下手にある烏繩を斬る、本雀澤山飛び出す、皆々びつくりなし。

皆々

これは。(ト空を見上げる、九市郎きつと見て)

九市

天晴。

本太

ム。

九市

本太郎様の御手にかゝり、籠中を退れし數多の小鳥、御手討よりは放生會、實に大度の御言ひ、

有難う存じまする。

本太 命冥加な籠の鳥、羽交ひ仲して、飛び去りをらう。

九市 ハア、有難うお受け召され。

小主 ハア、有難う存じ奉りまする。ハア伏する、忠に、思入あつて向うへ出て。

忠七 ヤレ、恐ろしや、すんでの事に、オ、恐や。(ト身震ひをする)

運平 ヤイ、うぬは最前の鳥賣め、まだそれにおつたか。

忠七 おつたかとは懇意な、商ひを仕かけた處が、方々ともめが出来、片隅へ寄つて居たが、納りがつきまして、御目出たう存じまする、つまらぬのはこつちでござります、雀には逃げられ籠はくだかれ、併し放生會の代物は戴いて歸りたうござります。

九市 ム、スリヤ只今放せし小鳥はその方が代物とな。

忠七 ハイ、私のでござります。

九市 シテ、代物は何程ぢや。

忠七 イヤ、何程と申しますより私は、若殿様よりお受取申したいものがござります。

本太 何、町人、予が手から受取りたきものがあるとな。

忠七　　へい、それ、あなたのお首が申し受たうござります。

本太　　や、なんと。

忠七　　只今も一寸聞いてをりますれば、なんぼ神様は見廻しでも、ものおつしやらんと申しさして、も、無法の我儘、異見する者は手討にすると、なんぼ下の者ぢやとて、軽々しう瓜か茄子見ろ様に、御成敗にもなりますまい、商ひの代物もそつちの手から籠をくだき、放しておしまひなされしからは、取り返しがなりませぬ、それぢやに依て代物代りに貰うて歸るあなたのお首、無理か尤か、よもや無理ではござりますまい。

ト一々本太郎に當て付けて言ふ、丸市郎感心なせし體、本太郎は理に詰り。

本太　　ム、。

刑部　　ヤイ、ウヌ素町人め、本太郎殿に向ひ搦々との世迷ひ言、扱はウヌも品田源藏が同類の者よな。

辰次　　ソレ何れも、繩打ち召され。

運平　　心得ました。腕まはせ。

忠七　　コリヤまたあんまり。(ト立廻つて兩人忠七をねぢ上る、忠七きつとなつて。) 上使。

皆々 何と。

忠七 上使へ手向ひ、慮外であらうぞ。(ト兩人を投げ退けてきつとなる、九市郎こなしあつて。)

九市 ハテ、存ぜぬ事として種々の無禮、眞平御高免下されませう、何は格別御上使とあれば。

皆々 先づく是へ。

忠七 役目の儀なれば罷り通る。(ト二重の上手へ行く。)

九市 思ひがけなきこの別荘へ御入來、シテ、あなた様は何れよりの御上使。

忠七 鎌倉武將より直の嚴命。

九市 スリヤ、武將より直の御上使とな。

忠七 此場の一件、逐一見聞きしたれば、改めて上意を述ぶるに及ばず、粟津高丸とも長き囚みにて、上意をもつて姫が縁邊、今に興入延引の沙汰といひ、此返答が承りたい。

九市 ハア、その儀に就ては。

刑部 アイヤ九市郎、疎略の返答無用に召され、町人の分際で此場で聞きし口寫し、かたりの正體、

何と不敵の者ぢやござらぬか。

辰次 御上使入來の式作法は、夫れく禮儀のあるもの、衣類は元より一刀も帶せず、ましてや木城

へ参るべきを、却て此別荘へ來りしはかたりの正銘。

運平 いかさま、先觸れの案内もせず。

辰次 イヤ／＼御兩所、その姓名は拙者最前承り居るが、確か雀の忠七とやら。

運平 何、御上使の姓名が。

鴈平 あの雀の。

軍平 忠七とナ。

辰次 イヤモウ、舌を刺られて飛びさうな名前ではござらぬか。

運平 なかく左様でござる。

皆々 ハ、、、。

本太 ヤア、皆の者まだるい穿鑿、此本太郎を欺かんと不敵の曲者下れ／＼、エ、此座を早く下り

おらう。

忠七 ム、スリヤ忠七を。

本太 ウヌ、下賤の身を以て、同席恐れぬ、うづ虫め、本太郎が手の内、骨身にきつとこたへたか。

ト扇にて打つてかゝるを突廻し、二重に腰をかけ。

忠七 斯く姿を變へて來りしは當初の實否を探らん爲、秘密の役目、疑はしくば此奉書、慎んで拜見召され。

九市 何、御奉書とナ。(ト立寄るを本太郎、二重より奉書を引いたくり、引き裂く。)

本太 僞筆の奉書持つて歸れ。(ト平舞臺へ投る、辰次こなしあつて。)

辰次 ふてくしいかたりの上使、ソレ何れも門前よりたゞき出さつしやれ。

運平 心得ました、かたりの鳥賣り、キリく此場を。

皆々 立つて失せう。

忠七 歸つてよくば此方より。

皆々 キリく失せう。

忠七 ム、。(トこなしあつて、花道へそろく行きかける。此内九市郎奉書の破れを引寄せ、びつくりして、忠七へ目を付け。)

九市 御上使待つた。(ト忠七聞かぬふりをして行きかける。)イヤサ、鎌倉武將の盟命に依て、御發遣ありし誠の上使。

忠七 ヤ、何と。

九市 結城左衛門尉友宗様には上使の御役目、御苦勞千萬に存じまする。

忠七 ム、さすがは忠臣。(ト正面を向き引抜く、是にて、麻上下になり、荷の中より大小を出し。) 友宗が

家來、早まぬれ。(ト是にて家來花道より出る。)

本太 スリヤ、匹夫下郎と思ひの外。

刑部 當時鎌倉武將の直參。

辰次 結城左衛門友宗様とは。

敵役 皆々 アノ、雀の忠七か。

九市 御先君、忠勝公の郎等、結城三郎殿の末葉。

辰次 何は替別、御上使様には。

九市 先づく、是へ。

皆々 御通りあらませう。

忠七 役目の表、上座許しめされい。(ト太鼓、音になり、静々と二重に上り。) 當家へ對して舊縁の某此

度の役目を受け、衣を變へて來りしは事穩便に計らはんが爲。

刑部 ソレ御上使へ御詫びく。

辰次 ハア、思ひも寄らぬ御入來故、殿を初め我々一同疎略の段、眞平御免下さりませうなれば。

皆々 有難う存じまする。

忠七 詫びて返らぬ比場の急變、武將の斃命役目の某、先づ差當つての不調法は君の御手づから御

脚をすへて、御認めありし大切の御奉書を、引裂き捨しは本太郎殿一生の不覺。

九市 アイヤ、その儀に就きましては、憚りながら眼前御上使様へ此身一つを。イヤサ若殿、此身一

つに比母の次第、何卒許せつけて下さりませうなれば、有難う存じまする。

本太 ム、九市郎、承知いたしました。

九市 スリヤ御承知下されしとナ。

本太 今こそ汝がすゝめに任せん。

九市 左様ござれば。

本太 此場の一件、よきに計らへ。(ト本太郎は、近習共を引連れ、奥へはひる。)

九市 アイヤ、殿、御退座下されては。(ト立上るを、忠七隔て。)

忠七 イヤ待て九市郎、聞きしに増る亂法狼藉、此儘武將の御前へ。評議の上にて後日の沙汰、其方

きつと承知であらう。

九市 スリヤ、遙々と御到着ありし、御役目も思はずに。

刑部 武將の御前へあからさまに言上あれば。

辰次 悔んで返らぬ木太郎様、御上使様の御情にて。

三人 返答の御猶豫を。

皆々 願はしう存じまする。

忠七 上意の次第は格別、君の御奉書り裂き捨てし御座の返答。

九市 その申譯こそ御願ひ申せし拙者が身の上、一旦失ひし氣なれど詮議任出し差し上げませう。

忠七 スリヤ其方が寶の詮議を。

九市 及ばずながら拙者めが、思ふ仔細もござりますれば。

忠七 然らば即刻此座を去らず。

九市 糺して御目をかけませう。

刑部 九市郎、スリヤ寶の在所を。

九市 只今糺して御目にかけてませう。御上使御免。イヤ何、守山辰次殿。

辰次 何でござん。

九市 田那上運平殿。

運平 御用かな。

九市 御兩所共一寸是へ。

辰次 スリヤ身共に。

運平 アノ、手前も。

九市 如何にも。(ト合方になり、九市郎は眞中に、辰次上手に、運平下手に座し。)

辰次 唐崎九市郎、呼び出し召されたは、

運平 用ばし、

兩人 ござつてかな。

九市 サア、御兩所共高丸家の重寶鈴虫の香爐、紛失なしたるその行衛、眞直ぐに白狀めされ。

辰次 ヤア黙りをらう九市郎、御手前は何を見つけ何を證據に身共等へ對し餘りの過言、寶の行衛白

狀とは何のたは言、氣でも違うたか、結納の寶紛失せしは姫君の誤り、身共は知らぬ、それに

盗んだとは、何ぞ慥かな證據があるか。(トきつと言ふ。)

刑部 九市郎殿、辰次を名ざして盜賊呼はり、其身の明りを立てようとは、コリヤちと卑怯であらう

ぞ。

九市

アイヤ刑部様、明りが立たうが立つまいが、理非明白に糺さんとする九市郎が此場の言議、其許嫁にはおかまひなく、暫時お控へ下されい。

刑部

然らば、控へて見物いたさう。(ト九市郎、小さき六角の箱を出し、文を添へて前に置き、箱の蓋を開き。)

九市

サア兩人、此品能く存じて居ようが。

辰次

ヤアそれは。

九市

よも知らぬとは言はれまい、斯ういふ事に心を碎きし甲斐あつて、昨日多賀頼見物の歸るさに、不思議に手に入る此一品、若殿木太郎様を調伏なし、御短慮の御病氣募らせんと空恐ろしき企みの段々、家の寶を破却させその虚に乗じてお家をば、横領成就の上は、大金を出だすと雷雲へ即諾の此一書、一々記せし姓名を此處にて讀み上げようか。

辰次

サア、それは。

九市

言譯あるか。

辰次

サア〜。

九市 何と動きはとれまいがな。(トきつと言ふ、兩人顔見合せて。)

辰次 ム、。モウ是非に及ばぬ。(ト兩人して斬つてかゝる。九市郎留めて見得。)

運平 コリヤ、我々も。(ト其中へ斬込む。辰次上手へヒヨロ〜となり、倒れる。)

鷹平 エ、。(ト九市郎を目がけ手裏剣を打つ。九市郎は軍平を引廻して受留める、軍平アツト言つて倒れる、

刑部 思はず刀を引提げ立上る。忠七是れをよろしく留める。九市郎兩人と立廻り。)

九市 ソレ、小主水。

小主 心得ました。(ト押へる。九市郎三人を下緒にてくゝる。三方一時になり。)

九市 御上使御秘分あられしか、詮議のつるを得ましたれば暫時の御猶豫、是非共御上使のお情に

て。

忠七 如何にも縁邊の儀は、實が出づれば追て吉日良辰を選み、速かに事の納る道理、納め難きは本

太郎殿、御奉書を破られし、此返答は如何いたす。

九市 その儀も後刻迄暫時の御容赦、召捕りし兩人は大切なる詮議のおとり、後方迄きつと糺明、御

上使様には奥殿へ、御入りあつて御休息。

忠七 詞に従ひ、兎も角も。

九市 女中ぢやうちゆうぢや方はおもてなしを。

忠七 然しからば、各々おの／＼。

九市 御上ごじやうし使様。

忠七 刑部けいぶ殿。

刑部 先まづ御入ごいり、

皆々 あられますらう。

ト唄になり、忠七先に九市郎附添ひ、皆々奥へはひる。小主水こすゑ蓮平を、立役の侍一人は鷹平を、双方引立てはひる、刑部奥を窺ひて平舞臺へ下りる。下手より曾平太出る。

曾平 刑部けいぶ様。

刑部 コリヤ、曾平そへい太今たいいまの様子やうすを。

曾平 何も彼なにかも、小蔭こかげにてとつくりと。

刑部 先まづ辰次たつしから介抱かいぼうを。

曾平 心得こゝろえました、エ、此様このさまは見みられた事ことかえ。(ト辰次を引起し、活を入れようとする。)

辰次 ヲツト曾平そへい太、活くわには及およばぬ、モウよい、モウよい。

會平 ム、御安泰に渡らせ給ふか。

辰次 渡らせ給ふ處かい、當てられたと見せたは身共が奥の手、ずんと健すこやかに渡らせ給ふ、併ひとしあの

九市郎といふ奴は、油断ゆだんのならぬ小癪こしやくもの者。

刑部 生けて置いては後日ごにちの妨まげげ、いつそ一思ひとおもひと打うちかけし身共が小柄こづか。

辰次 狙ねらひは逸それて軍八ぐんぱちめが、無慚むざんの最期さいご。

刑部 彼奴あつちも一味いみの端はしくれなれば、せめて死骸しがいを。

會平 身共みどもが馴染なじみ甲斐がひに葬はなむつてくれよう。(ト軍平の傍へ寄る。軍平飛び起きる。)

軍平 ア、めつさうな、葬はなむられてたまるものか。

辰次 ハア、是これも奥おくの手てをやりおつたな。

軍平 そこらはぬかつてよいものか。

刑部 シテ、彼かの儀ぎはどうぢや。

會平 松倉まぐら卿きやうの短刀たな、イザ、お受取りうけと下くだされ。(ト懷中より袋入の短刀を出し。)

辰次 目利めきは身共みどもが御手おてのもの。

刑部 會平そへい太出ただかした、よく仕果しおせた。

曾平 イヤ、何に寄らず執念かけた上からは、いやでも應でも手取らにやおかぬ此曾平太。

刑部 時に曾平太、その手並を見込む上は、今一色申し付け度き一大事、使者の間にて何かの密談。

辰次 マア、それ迄は刑部様。

曾平 何なり共、承りませう。

刑部 然らば、辰次。

辰次 先づござりませ。(ト唄になり、刑部初め皆々集へはひる。引き違へて腰元みどり出る。)

みど ほんにマア此時は何やら御用が多いので、文認める間もない忙しさ、幸ひ雲は密かな所、ちや

つとこの間に、さうぢやく。

ト視引き寄せ、文を書きはじめる。此時奥にて、人の足音する故、手早く文を仕舞ひ

みど 斯うしてお届け申したら、よもや御返事のない事はあるまい、アノ胸惹な才次郎様、エ、モウ

辛氣な事ぢやわいなア。(ト此内奥より曾平太出て来て見て居る。)

曾平 我等とても御返事のない故に、テモマア、辛氣な事ぢやわいなア。(ト前へ出る、みどり見て。)

みど ヲ、お前は曾平太様かいなア。

曾平 曾平太様かいなアとはどうしたものだ、餘り辛氣な御返事ぢやないか。

みど ドレ私わたくしは奥おくへ。

會平 オツトどつこい、手放てはなしてたまるものか。(ト振袖びんすゑを引張る。)

みど エ、又またかいなア。

會平 又またかいなアとは馴染なじみな、コレみどり。みどり坊ぼう。一寸下ちやとに居まなさんせいなア。

ト無理むりに引張ひり座ざらせる。會平太かいへいこなしあつて、なまめきたる合方あひがたになり。

會平 今更いまさら言いふのも愚痴ぐちなれども、大抵たいてい色事いろこと師しのお定さだりぢや、言いはぬ事は聞きえぬが、全體ぜんたい身共みどもが御當ごたう

家けへ御奉公ごほうこうにありついたは何なにの爲ため、三井寺みいでらへ御代參ごだいさんの時ときフツト見染みぞめしが悪縁あくえんにて、契ちぎり深ふかしの橋渡はしわたして、世話せわしてくれたあの萬助まんすけ、お前まへの親仁おやしんであらうとは夢ゆめにも知らぬ盗人ぬすひとの晝寢ひるね、ぐつ

たりやらかしてのらりくらりと門番かどばんの、家いえへ出でかけて行いつた時に、丁度ちやどお前まへがお宿下りやどくだりして居またを見て、一倍いっぺん思おもひが増まして來きた、晝ひるは幻まぼろし、夜よるは夢ゆめ、現いまにも忘わすれられぬ思おもひの種たね、胸むねの苦くるしさ

みどり殿どの、推量すいりやうしてくれたがよい。(トみどりはうるさいといふ思入。)

みど エ、あたきらひな、あたすかん不ふ作法さくぱな事こと、父ととさんに告つげるぞえ。

會平 イヤモウ、告つげられても責せめられても、斯かうなつたらいつその事こと、殺ころされたが本望ほんまうぢや、顔見かほみ

てはどうもこたへられぬ。(トみどりに寄る。)

みど アレ、悪い事して下さんすなア。

ト突退け逃げんとする。此内甚助、油さしを持って出る。曾平太はみどりと取り違へ、甚助を捕へ。

曾平 イヤモウ、悪い事でも良い事でも、斯うなつたらやけくそぢや。

ト甚助を押倒す。此時、油さしを落す故、曾平太滑りべつたり座ぐ。甚助も滑りかけて。

甚助 どつこい。(ト踏みこたへる、みどりは見て。)

みど お前は父さん、好い處へ。

曾平 ヤア、甚助か。(ト言はうとして。どつこいしよ。(トべつたり下に居る。))

甚助 シ、甚助ぢや、コリヤ娘を捕へてどうさつしやる。

曾平 イヤ甚助殿、こなたの口からさう打割つてあらはにものを言ひかけりや、こつちも一番言はや

ならぬ、恥かしながらみどりに惚れた、改めて甚助殿、得心させて女房に貰ひたい。

ト甚助あきれしこなしあつて。

甚助 エ、あなたはまアあきれたものぢや、ようまアそんな事が言はれたものぢや、又娘も曾平太殿

が斯ういふしたらと俺の耳に入れておけばよいものを。

みど さいなア、外の事ならお耳にも入れますが、あなたの無理な事故に、ツイ案じ過して言はな

んだわいな。

甚助 ム、さうかく。イヤ何事も俺が胸にあれば案じぬがよい、サア爰に居ては悪い故ちやつと

奥へ行つて、御用を聞きや。

みど ハイ、左様なら此後其悪い事をしやさんせぬ様、おつしやつて下さりませいなア。

甚助 サア、よいと申すに、早く行け。

みど ドレ、私は奥へ。

曾平 ヤア。

みど 御用を聞きませうか。(ト腹になり、みどりへはひる、曾平太腹の立つこなし)

曾平 サア、甚助どうだ、いよく娘を女にくれるか、但しは不得心か。

甚助 マア、いやぢや。

曾平 何と。

甚助 剛だ違ぐればあつさを忘るゝと、こなたも御用を出さつしやるなう、親戚は斯う悪うは

産み附けはさつしやるまい、こなたも此は長門の事じ、惣左衛門様の御

惣領に産れ、こなたに別を、こなたは此甚助が妹、こなたは大切な御子、成人する

に随したがひ行おりとあらゆる悪業あくごうわざ、大津おほつの追分おひわけで雲助くもすけと迄成たり下さり、御流浪ごりゅうろうなさるがおいとしさに、一昨年おととしの冬ふゆ私わたくしがお組頭くみづらにお願ねがひ申まをして御奉公ごほうこう、それよりしても朋輩衆ほうはいしゆと喧嘩けんかばかり、それは私わたくしが後あとへ廻まわりお詫わがをすればこそよけれ、人抵たごの事ことぢやござりませぬぞ、それを忘れて娘むすめへ戀慕こいぼ、此上このうえ無法むぼうを働はたらけば、お組くみへ斷ことわつて御門前ごもんぜんからたゞき出ださうか、以後いごはきつとたしなまつしやれ。

トきつと言ふ、曾平太こなしあつて。

曾平
イヤ、ゑらいものぢや、甚助じんすけわりやアモウ言いふ事ことはないか、娘むすめをくれずばくれぬでよいが、コレ大恩おほにんのある宗左衛門そうざゑもん様の若日わかひ那曾平太なぞへいだい様さまぢや、三拜さんぱいして娘むすめをくれべきに、それを其様そのさまに申まをすとは事ことの外ほかなる其心底そのしんぞこ、是非ぜひ共娘ともむすめは俺われが貴たかふぞ。

甚助
イヤ、どの様に言いへばとてお家いへに仇あだなす悪人あくにん、殊ことに實まことに望のぞみをかける盗賊たうさく、何なにしに娘むすめをやらるるものか。(ト是こゝにて、曾平太むつとせしこなし。)

曾平
ヤア、だまりやアがれ、御家おいへに仇あだなす大悪人だあくにんとは何なんの事ことだ、それに又盗賊またたうさく呼よはり、何なにを證據しやうこに申まをすのぢや。

甚助
ヲ、盗賊たうさくといふ證據しやうこは紅葉山あふぢやまにて、そちが懐中ふちちうより落おたる密書みつしょ。(ト密書みつしょを出だし。)

曾平 ヤア、それは。

甚助 何と曾平太、盜賊と云うたが此甚助の誤りか。

曾平 イ、ヤ、身共その密書覺えはない。

甚助 其覺えなきものが、名宛に長濱曾平太殿とは何で書いてある。

曾平 サア、その名宛は。

甚助 是ぢやに依て盜賊に、娘はやらぬと云うたのぢや、それが何とした。」

曾平 サア、それは。

甚助 お組頭へ持つて出ようか。

曾平 サア、それは。

甚助 御吟味を願はうか。

曾平 サア、くく。

甚助 よもや言譯はあるまいがな。(トきつと言ふ、曾平太むつとして。)

曾平 ム、その言譯は。(ト抜打に斬つてかゝる、甚助是を留め。)

甚助 どつこい、さう味くはさせぬぞ、手前達の一人や二人苦にするものか、一合取つても武士の端

くれ、あのこゝな恩知らずめが。(ト突き放し。)

會平

エ、さうぬかしやア。(ト又斬りにかゝる。甚助刀をたたき落し、頸髪取つて、ぐつと引き附け。)

甚助

コリヤ、うぬがいくらじたばたしてもモウ叶はぬ、此黨故に見限つた、宗左衛門様は御尤も、
いがみくさつたその手の内では、めつたに人は斬れまい、及ばぬ事だ叶はぬ事だ。

ト引き起し、拔身を引つたくりボンと當て。

甚助

人外めが。(トきつとこなし、會平太はそのまゝどつさり、甚助は密書を見て。)此の密書の様子では、
大それた科人、併し此位ひに異見の杖加へたれば思案も附かう、御組頭に差出すべき此書面な
れど、暫時様子を見届けて、無事に双方納まれば浪風立たぬ御家は高歳、ドレ御番を仕よう。

ト唄になり、甚助下手へはひる。後合方にて會平太起上りいろ／＼こなし、此時、上手より鮎助、
あわただしく走り出で、會平太を見て。

鮎助

會平太様ぢやござりませぬか。

會平

そちや鮎助か、アイタ、。(ト臍腹を押へ。)何ぞ用事か。

鮎助

イヤ外の事でもござりませぬが、代参戻りの御家老を待ち受けて討取る手筈、最早彼是時刻な
れば。

會平 ヲ、そりや承知ぢや。

鮒助 承知なれば、早う御出なされませ。(ト手を、取りにかゝる。)

會平 アイタ、アイタ。(ト下に居る。)

鮒助 何だ、コリヤどうなされましたのぢや。

會平 イヤモウ、息がはづんでものが云へぬ。(ト鮒助を招く。鮒助心得て。)

鮒助 エ、耳かな。(ト是にて騒ぐ。) スリヤ、門番の甚助を。

會平 コリヤ。(ト又騒ぐ。)

鮒助 成程々々、コリヤ生かしては置かれぬ奴ぢや。

會平 ぢやに依て。

鮒助 血祭りに殺した上。(ト大聲にて言ふ。)

會平 コリヤ。(ト思はず押へて。) アイタ、、、。(トべつたり下に居る、鮒助口を押へる。道具廻る。)

本舞臺平舞臺、見附三間の間城門の心にて、丸家根の扉に小門有て出這入り、大門には柵を入れてあり、東西高石垣。土手の上は塙の裏門脇。上手に瓦家根、板びさしの番小屋、折廻し屋體、白張りの幕を張り、見附、唐紙襖、屋體に黒落しの番所行燈、突棒、刺股、切手桶、六尺棒等あり、右二重に基助、魚行燈に火を燈し、板對立の影にて、楊枝を削つてゐる。本釣鐘、合方にて道具留る

甚助 ドレ／＼一服仕ようか、只居ようより手を動せば今日の煙草代丈は取れる、氣兼ねなしに一服や
らうか。(ト煙草を呑む、花道より曾平太先に、運平尻からげ頬形りにて出て、後より鮎助出で、番小屋を
窺ふ。)

鮎助 曾平太様。

運平 たしかにあれが甚助の。

曾平 コレ。(ト押へて) 何分身共が合圖する迄、けどられぬ様忍び寄つて、合點か。

運平 承知ぢやが、鮎助あわてゝぼろを出すな。

鮎助 何、お前様こそぼろを出さぬ様になされませ。

曾平 そんならわれ達は後から來やれ。

鮎助 氣遣はずとお出なされませ。

ト是にて、曾平太本舞臺へ來り、尻からげを下して頬冠りを取る。此時、小門の外より、近習宅助
合印の弓張を持ち、番所の前に來て。

宅助 御門番殿、御大儀。

甚助 ヲ、宅助、歸りやつたか。

宅助 やうく、今歸りました。

甚助 さうかいの。

ト言ひながら曾平太と入れ違ひ、花道へはひらうとする故、運平、鮎助、提灯を見て悪く〜と、
ふ思入あつて後しさりして小屋へはひる。宅助は何心なく花道へはひる。兩人は小屋の中にて行き
違ひたる思入にて、出で來り窺ふ。曾平太、揉み手をしながら、

曾平 モシ〜、甚助さま。ト進み寄り傍へ行く。甚助、すかし見て。)

甚助 ヲ、こなたは曾平太殿。

曾平 ハイ、曾平太めにござります、先程はお有難う存じます。

甚助 扱は性根に入りましたかの。

曾平 イヤモウ、こなたの段々との異兄がたつた今合點が行きました、それ故お禮に出で來ました。

甚助 何もお禮を受けようとてするのぢやござんせぬ、心さへ直つたら悦びます、マア〜爰へかけ

さつしやれ。

曾平 左様ならお許しなされて下さりますか。ト屋體の端に腰をかける。甚助こなしあつて。)

甚助 是はしたり、何ぼぢきに費が入れ替つたとて、その様に懇勤にせいでもよいぢやないか、マ

アこつちへ、上つたがよい。

會平

へい、今迄は大きに了間違ひをやらかしました、ほんに私の様な者をお世話下されたのも忘れ、こなたの娘に戀を仕かけ悪い事を仕ましたが、モウ／＼ふツつり思ひ切りました程に、

御了簡して下さりませ。ト言ひ乍ら、會平太は、煙管を口にくはへ、様子を見てゐる。

會平

コレ、甚助殿、向後性根を入れかへる程に、何卒最前の物をば。
ム、最前の物とは。

會平

こちらへ戻して下されませぬか。

甚助

ハ、ア、最前の物とは大方。(ト以前の密書を出し)此密書の事であらう。

會平

左様々々、さつぱりと魂を入れ替へました故、それを戻して下さりませ。
成程、魂さへ入れ替へたら。イヤ／＼あんまり早過る、受取り憎い、マアうかつには渡されぬ。

會平

そんなら是程頼んでも。

甚助

お前の口から魂を入れ替へたと言はず、人から言はれる様にさんせ、その時には戻して進ぜろ。

曾平 スリヤどうあつても今いますぐには。

甚助 味の事ことを、言いふ人ぢやなア。(ト是にて曾平太、むつとせしこなし。)

曾平 エ、おきやアがれ、その密書みつしょをうぬに持もたせておいては、夜よがゆつくり寝ねられぬ故ゆゑ、返かへさぬとい

うて取とらずにおかうか。(ト此時、運平、鮎助、よいかといふ思入、曾平太兩人に。)ソレ。

運平 合點あつてぢや。(ト兩人甚助にかゝるを拂ひ退け。)

甚助 コリヤわいらは何なにとする。

曾平 こま言ことぬかさず密書みつしょを渡わたせ。

ト是にて密書を引張り、いろ／＼立廻りあつて、トト運平は鐵行燈を打ち返す。鮎助は番行燈を倒す。双方共消える。くらがりに成る。

甚助 南無三なむ、燈火あかしを。

ト曾平太抜いて甚助へ斬りかゝる。是にて甚助六尺棒を持て受ける。鮎助、運平、火鉢の灰をかぶる。曾平太鐵行燈の火袋の中へ首を突込み眞黒になり、双方見すかし、三方共一時の見得、忍び三重の合方にて此道具廻る。

本舞臺城門の裏手、東西石垣、高塀、本釣鐘にて道具留る。ト花道より小主水、着附上下、大小にて、提灯を持ち出で來り。

小主

最早もはやあれは瀬田せたの御門ごもん、少しすこも早はやう、さうぢや、く。

ト本舞臺へ来る。バタ／＼にて小門の中より鮎助、運平投身にて逃げ出る、提灯に行き當りびつくりしてたゞきおとさうとする。小主水きつとなり提灯にて顔を見ようとする。兩人は見せまいとする。ト、鮎助提灯を切落す。運平斬込むを小主水扇にて打拂ひ、片手にて鮎助を引き付ける。此立廻りよき見得にて此道具廻る。

本舞臺元の道具に戻る。ト曾平太斬付けてみ、甚助六尺袴にて留めてゐる。是よりくらの探り合ひいろ／＼立廻つて、トド曾平太は甚助の肩先に斬付る。甚助へたる。曾平太たゞみかけて斬込まうとする。甚助六尺袴にてめつた打に打つ。此見得にて道具廻る。

本舞臺元の裏門の道具になる。ト小主水鮎助運平を相手にくらの立廻り。トド扇にて鮎助の刀をたゞき落す。鮎助は上手へ逃げてはひる。運平斬つてかゝる。トド小門の處へ押しやられ、運平門の中にころげ込む。小主水續いてはひらうとするを、運平内より戸を押へて居る。此見得よろしく道具廻る。

本舞臺又元の道具になる。ト曾平太、甚助に乗りかゝり密書を取りとどめを刺してゐる。運平は小門のくらがりの内より扉を押へてゐる。甚助は苦む、是にて運平は「さては」といふ思入あつて扉の手を放す。小主水はひる。運平を捕へようとする。此物音に曾平太逃げようとする。小主水は曾平太へ渡り合ふ。此時市郎右衛門ぶつ／＼き野袴にて家來に提灯を持たせ入り来る。曾平太は提灯を

斬つて落す。市郎右衛門曾平太を捕へ、

市郎

曲者。くまもの

(ト曾平太の小腕を取り、見事に投げるを木の頭。) とつた。

ト早繩をたぐる。家來は震へてゐる。小主水は運平を引付ける。此見得よろしく、早き合方、風の音にて、

ひやうし 幕

二幕目

栗津本城の場

役名

比良井市郎右衛門、唐崎九市郎、同才次郎、若殿本太郎、結城左衛門

尉友宗、足輕曾平太、守山辰次、刑部宗勝、中間鮎助、中間琵琶平、走井文

吾、鼻之丞、市郎右衛門妹ちらん、奥女中みどり、諸士軍平、同雁平、同三

藏、同藤助、番人二人、近習二人等。

本舞臺平舞臺。黒幕、一面の石垣、土手通り矢切りを見せ、所々に蘆原の茂み。松の釣枝、立木、此後ろに土藏を見せ、すべて江州瀬田口の體、七ツの鐘、合方にて幕あく。ト花道より中間琵琶平

研

辰

柿の脚絆、（ト）をして、小田原提灯を掛け出て來り、花道にて、

琵琶

あの鐘は七ツだな、コリヤひどく遅くなつたわえ。（ト）言ひながら本舞臺へ來り。（ト）ハ、ア、爰は何處だ。（ト）提灯にてあたりを照らして、南舞臺は瀧田口御寶藏前裏通り、コリヤ道をとつぱぐつてとんだ所へ、ハテ、コリヤ變だわえ、斯ういふ時には魂を臍の下へ落し附て、先づ一服煙草でも。（ト）此時落ちてまりし、鑑札に氣附き。）なんだ妙なものが。（ト）袋を取り見て）コリヤ御門出入

の鑑札だ。（ト）鑑札を見て）

守山辰次細下坂口部屋鮎助。扱は彼奴めが、夜鷹でも買ひに出かけて、落したものと見える、定めて難儀をして居よう、何卒返して、イヤ、人の事よりおらが鑑札。（ト）探し見て、びつくりし）ヤア、コリヤないわ、ハア今朝屋敷を出かける時、ヲ、よいわ、幸ひ拾うた此鑑札、鮎助と名乗つて歸つてくれべえ。

ト煙草入りより煙管を出し火を附ける。此時、人の足音する故、提灯の火を消し眞中の蘆原の中へ忍ぶ。奴鮎助頬冠りして、番人金兵衛と斬り結びながら出る。此時辰次、着流し、大小、頬冠りにて下手の蘆原より出る。此中、鮎助 番人金兵衛を斬り倒し、とゞめを刺す。中間琵琶半、後より出て、様子を見てゐる。此時辰次前へ出て、

辰次
鮎助首尾は。

鮎助
まんまとしてやつた、轡。(ト轡を出して渡す。)

辰次
ヲ、出かした、然し此死骸を捨て置いては後日の災ひ。

鮎助
イヤお氣遣ひなされますな、かやうの事もあらんかと、琵琶平めが名前を記せし此鑑札、ちよろまかしておきましたれば。(ト袋人の鑑札を出し、是を斯うして。

ト探り寄り、死骸の手に持たす。琵琶平手さてはといふ思入。

鮎助
此死骸に持たせおかば、盜賊は琵琶平め。

ト此内、琵琶平悪い奴だといふこなしにて、鮎助の鑑札を出し、死骸に持たせ、斯うしておけばよい、といふ思入あり、兩人は是に氣の附かぬこなし。

辰次
イヤ、よく氣が附いた、彼奴は比良井の組下なればイデ此上は邪魔になる、兄弟を罪に取つて落せば、何も彼も此方の思ふ盡。

鮎助
イヤ、うまい手つがい。

辰次
最早、夜明け。

鮎助
人の見ぬ間に、お先へござれ。

研

辰

辰次

合點だ。

ト始終本釣鐘にて、辰次先に立ち鮒助も行かうとする。此時琵琶平窺ひ寄つて辰次の鑓を持って引き留める。辰次扱はといふこなしにて振り拂ひ行く。鮒助隔てる。始はくらぶりの模様、だんまりの心にて、三人引つ張りの見得にて、此道具廻る。

本舞臺通し二重、金の大襖、總て粟津家城中大廣間の模様、右二重の真中に、若殿本太郎、着附、長上下にて舞に居り、後ろに、麻上下の近習二人、小姓二人居並び、上の方に上使左衛門、着附長上下にて高相引にかゝり居る。此前の筒花活に菊の花活けあり。右二重下手に刑部、着附上下にて控へ平舞臺上手に、諸士一二、下の方に三四、皆々、麻上下にて居並び、此見得明け六ツの太鼓にて道具留る。

刑部

今日は重陽の御壽。

士一

鎌倉在府の大殿を始め奉り。

士二

若殿本太郎様にも益々。

士三

御機嫌うるはしく。

士四

恐悦至極に。

皆々

存じます。ト皆々平伏する。序の舞になり。

刑部

則ち御當家の御先祖平八郎忠勝様には、信州天神坂の合戦、天祿二年九月九日日頃手馴し松倉卿の鎗引提げ、數千の敵を突破り、遂には城を乗取つて比類なき手柄を顯はし給ふ。

左衛

其砌り、勳功ありし松倉卿の穂先を以て短刀となし、當家の寶と承はる。

士一

則ち今日の儀式に用ゆる御家の先例。

士二

然るに其短刀、先達て紛失いたし。

士三

草を分つて詮議いたせど。

士四

今に於て在所知れず。

左衛

其所を計つて此左衛門、今日の役名を申受しも、當家の無事を計らはん爲。

刑部

ハア、萬事に御心添への段、有難う存じ奉ります。

左衛

此度某當家へ参りしは先達て申し入れし如く高丸家へ武將よりの御指圖を以て、當家の姫君夕照が婚姻の媒人は則ち此山城左衛門、結納の印として高丸の重寶鈴虫の香爐先達て差し送りし處、今に於て輿人延引は媒介たる左衛門が誤り、夫故急ぎ輿人ある様改めて武將の嚴命。

刑部

イヤ、其儀は家老たる比良井市郎右衛門に申し付け置きましたれば、追つて返答申上るでござりませう。

左衛 シテ、比良井市郎右衛門は。

刑部 いまだ登城仕りませぬ。

左衛 斯く打捨ておくは某をないがしろのいたし方。此上は猶豫はならぬ、夕照興入あるべき、其

の日と申すは。

皆々 サア、その儀は。

左衛 但し又送り越せし鈴虫の香爐、お返しあるか。

皆々 サア、それは。

左衛 姫を伴ひ立ち歸らうか。

皆々 イ、ヤ、その儀は。

左衛 香爐を受取り申さうか。

皆々 サア。

左衛 御返答は如何でござるな。(トきつと言ふ、此時揚幕にて市郎右衛門。)

市郎 アイヤ其御返答、比良井市郎右衛門それへ參つて、申し上げん。

ト序の舞になり、市郎右衛門着附、上下、家老のなりにてツカ〜と出で來り、直に本舞臺へ來て、

よき處に控へる。若殿奉太郎思入あつて。

本太 ヲ、市郎右衛門、只今登城いたしたか。

市郎 ハア、先づは若殿初め御上使様、一家中の各々、今日は重陽の祝儀。

刑部 先づいてお互ひに、

皆々 御上使様に存じまする。(トこなし。左衛門思入あつて。)

左衛 比、市郎右衛門。

市郎

左衛 守殿には鎌倉在府なれども、萬事を計りつふ其方なれば、婚姻首尾よく整へば兩家の

然るに今に姫の輿入延弓、斯く捨ておかるゝは様子あつてか、返答によつて計らふべき

、市郎右衛門、何と。

刑部 御上使の仰せらるゝが御尤も、早速輿入いたすにも肝心の夕照姫は。

市郎 ナイヤ、それは拙者申し上げん、刑部様にはお控へ下され、成程左衛門様仰せの通り承知仕

る、御上使の指圖の縁組早速取り急がんと思ふ折柄、志賀の別荘にて短刀の紛失、あづかり

しり、御上使の誤り、大殿には鎌倉御在府中の事なれば如何はせんと思ふ折柄、姫君様には御病氣

左衛 シテ、比良井市郎右衛門は。

刑部 いまだ登城 仕りませぬ。

左衛 斯く打捨ておくは某をないがしろのいたし方。此上は猶豫はならぬ、夕照興入あるべき、其

の日と申すは。

皆々 サア、その儀は。

左衛 但し又送り越せし鈴虫の香爐、お返しあるか。

皆々 サア、それは。

左衛 姫を伴ひ立ち歸らうか。

皆々 イ、ヤ、その儀は。

左衛 香爐を受取り申さうか。

皆々 サア。

左衛 御返答は如何でござるな。(トきつと言ふ、此時揚幕にて市郎右衛門。)

市郎 アイヤ其御返答、比良井市郎右衛門それへ參つて、申し上げん。

ト序の舞になり、市郎右衛門着附、上下、家老のなりにてツカ〜と出で來り、直に本舞臺へ來て、

よき處に控へる。若殿本太郎思入あつて。

本太 ヲ、市郎右衛門、只今登城いたしたか。

市郎 ハア、先づは若殿初め御上使様、一家中の各々、今日は重陽の祝儀。

刑部 先づいとお互ひに、

皆々 御上使様に存じまする。(トこなし。左衛門思入あつて。)

左衛 比、市郎右衛門。

市郎 ハ、

左衛 守殿には鎌倉在府なれども、萬事をいっつふ其方なれば、婚姻首尾よく整へば兩家の

に今に姫の輿入延引、斯く捨ておかるゝは様子あつてか、返答によつて計らふべき

市郎 市郎右衛門、何と。

刑部 御上使の仰せらるゝが御尤も、早速輿入いたすにも肝心の夕照婚は。

市郎 ナイ、それは拙者申し上げん、刑部様にはお控へ下され、成程左衛門様仰せの通り承知仕

る、先よりの指圖の縁組早速取り急がんと思ふ折柄、志賀の別荘にて短刀の紛失、あづかり

しり、市郎の誤り、大殿には鎌倉御在府中の事なれば如何はせんと思ふ折柄、姫君様には御病氣

南無三、輿入延引いたさば高丸家への申譯立ち難く、とやせんかくやと晝夜心を勞する折柄、又候や再度の御上使、只此上は夕照姫病氣平癒あらば、早速輿入いたすに依て暫時の間は、何卒左衛門様の御計ひにて。

諸士 皆々 デモ、みすく。

市郎 ハテ、其方達が知つた事ではないわサ。

四人 ぢやと、申して。

市郎 ハテ、いらざる差し出、控へおらう。

左衛門 市郎右衛門、寶の紛失姫の身の上、國家の納り、嗚、心勞であらうなア。

市郎 ハア、拙者が胸中、憚り乍ら御推量下さりませ。

左衛門 斯申す家老が祖父、大部友光は當家の先祖平八郎忠勝殿の家臣、味方原の功名が鎌倉殿の御目にとまり直參に召し出され、則ち此粟津家は拙者に取つては、古主の嫡流。

市郎 誠に深き御好みを思召し、御猶餘下さらば主人が悦び、拙者が安堵、此儀願ひ奉る。

左衛門 シテ、夕照の病氣は。

市郎 物怪同然。

左衛 何と。

市郎 人は四百四病しよしよの病びやうの器き、何時いつどの様やうな御病氣ごびやうきの起おこらうやら、物ものの怪けの業わざと見え、折せに觸ふれては物狂ものぐるはしきその有様ありさま。

左衛 アイヤ、市郎右衛門いちろうゑもん、汝な如何程いかほど包つつみかくす共とも、夕照ゆふくらひ嬬ひらは。

士一 國達こくたつなされて。

同二 御館ごやかたには。

四人 お越こしなされぬぞや。

市郎 ム、。ト前まへにある花活はなけの菊きくを見て、此菊このきくは諸花しよくわに勝すぐれ、自みづから君子くんしの徳とくあり、故ゆゑに菊きくは花はなの弟おとうとと賞ちやうす。

左衛 昔唐土周王むかしもつこしろうちうに仕つかへし慈童じどう、誤あやまつて君きみの枕まくらを越こゆる。

市郎 群臣ぐんしん其そのの罪つみをあけて、遠とほき山路やまぢに捨すてんと奏そうす。

左衛 帝みかど、深ふかくあはれみ給たまひ四句よくの偈げを授あたけ給たまふ。

市郎 慈童じどう心に彼かの偈げを保たもち、常つねに菊きくの花はなの雫しづをなめて。

左衛 七百余歳よひさひの命いのちを延のほはる、則すなはち彭祖ほうそ是これなり。

市郎 それはい。

左衛 是は今。

市郎 世帯の首の諺にも。

左衛 一寸延びれば尋とやら。

市郎 スリヤ御上使の御賢慮にて。

左衛 菊の判断。

市郎 國家の納り。

左衛 合點がいたか。

市郎 御芳志の程。(ト飛びしさり。) 有難う存じ奉りまする。(ト平伏する、本太郎思入あつて。)

本太 申し付し品、是へ。

小姓 ハア。(ト白木の箱を三方に乗せ、持出で左衛門の前へ直す。)

本太 ハア、本太郎が心を範めし其一品、御披見下さりませう。

左衛 何か様子の有磯海、深き思案の此箱は。

本太 あけて言はれぬ拙者が心。

衛左 籠めし一品知らね共、奥へ參つて後程披見。

市郎 先づそれ迄は對客の間にて御酒一献。

本太 今様の節檢校殿に申し付けて御氣慰みに。

刑部 此上は姫の身の上。

諸七 四人 短刀の一件。

左衛 間ふも語るも、今宵の落着。

本太 萬事の思案。

市郎 後程迄に。

左衛 然らば、本太郎殿。

本太 左衛門様。

市郎 御上使様には。

刑部 皆々 先づ、いらせられませう。

ト唄になり、左衛門先に本太郎、刑部、その外皆々附添ひはひる。後に市郎右衛門残り、合方になり。

市郎

今左衛門様のお渡しなされし此の菊の一本、ム、。(ト菊を取上げ、こなしあつて。)夫れ花は臣下、根元は御主君、落花微塵になすとも根元を枯らす謂なし、忠義は金鐵さりながら、寶の紛失は若殿の越度、其身に引受け忠義を立つる弟九市郎、察する所伯父刑部殿を初め、守山辰次とは思へ共荒立てられぬ寶の前議、若殿の御身の納り姫君の御身の上、花物言はねど今宵の中、事を納める工夫が、(ト花を下におく、是を道具替りの知らせ。)ありさうなものぢやなア。

ト思案の思入、合方にて道具廻る。

本舞臺三間の間敷寄屋建、見附鼠壁、床の間に金比羅のお札を飾り、神酒、洗米を供へあり。東西落間、後に寄せて建仁寺垣、石燈籠、柴垣、舞臺一面の菊の花壇、いつもの所に枝折門、右二重に九市郎、着流し一本差し、座布團を敷き、硯箱を置き、手紙を認めてゐる。よき處に蟲籠あり、此見得、獨吟にて道具納まる。

迷ふにぞ、今日こそ秋に萩の葉の、露草程も偽の、あるかなきかは白菊の。

ト是にて九市郎筆を止る。

九市

ヲ、思へば武士の身の上程味氣なきものがあらうか、短刀の紛失二つには、鎌倉御館の御教書を誤り裂きし若殿の、科を此身に引き受けて、潔く切腹と、覺悟は兼ねて極めしが、心にかかるは若殿の御短慮、諫書を残し相果てなば、憐れ不便と思召し、御心和ぐものなれば死後

の忠節此上なし。

床にゆかしき夕月夜、埒釣り葉の奥座敷、寝ぬ夢に聞くおとり草。

ト右の唄にて、又手紙を認める。花道より娘おらん振袖、屋敷風、小さき提重を袱紗にて包み、携へ出て、花道にて。

らん ア、嬉しや、どうやら斯うやら爰迄は來たれ共、向うに見えるあの數寄屋が九市郎様の御居間

であらう、ヲ、さうぢやく。

あやめもわかぬ夕顔の、その睦言のしるしだに。

ト合方にておらん本舞臺へ來て、切戸の傍へ行き思入ありて。

らん ハイ、誰ぞお頼み申まする。モシ。ヲ、しんき、取り次ぎの衆はござらぬかいなア。

ト九市郎氣附き。

九市 ハテ心得ぬ、誰れ問ふ者もなき閉居の間、殊に女の聲にて音信しは。(トおらん此聲を聞き。)

らん ヲ、さうおつしやるは九市郎様、こゝあけて下さりませいなア。

九市 ム、其聲は。(ト手早く書置を卷き納め、切戸の傍へ行く。)

らん 九市郎様。

九市 思おもひも寄よらぬ。

らん ようまア、おまめでおいでなされましたなア。(ト取付く。)

九市 ア、コレ、人ひとや見みん、サア内うちへく。(ト手を取り内く入れて) 御咎おまがめを蒙あかる閑居ひいきの某まが、番人ばんにんを

附つけ出入でいりを許ゆるさぬ此別莊このべつさうへ、こなたはどうしてござつた。

らん ハイ、門番もんばんの衆しゆへお金かねをあげて、事ことを分わけて頼たのんだれば。

九市 ア、たつて咎とがめもせず。

らん 心こゝろよう適よしてくれたわいなア。

九市 ハテ、粹すいな番人ばんにんぢやよなア。

らん マア、何なにから申まをしませうやら、思おもひもよらぬ今度こんどの御儀ごぎ儀ぎ。

九市 マア立ちながら話はなもなるまい、サアく是これへ。(ト兩人二重へ上り、こなしあつて) そもじは夕照ゆふとく

様さまの御傍おそば仕つかへ、自由じゆうに出ては御前ごぜんの首尾しうびが。

らん サア、其その姫君ひめぎみ様さまには此程このほどより、御行衛おゆゑが知しれませぬわいなア。

九市 スリヤ姫君ひめぎみには、ア、御出國ごおつこくなされしとか、ム、。

らん 人ひとに洩もれては一大事たいじと兄市郎衛右門様あにいちろうゑもんさまのお計はからひにて、御病氣おびやまと披露ひろうして忍しのびくに御行衛おゆゑを、

御詮議申してをりますわいなア。(ト台方になり。) 妾やあなたの女房ではござりませぬかいなア。御主の罪を此身に引受け此川崎の下屋敷へ、押込めにおなりあそばせしと、きいて身もよもあられませうか、又其上に悲しいは義理ある兄辰次殿、兄や弟ではない元は他人、女房になれと無體の執事、操を守つて得心せねば所詮生けてはおかぬとの事、非道の刃に死ぬるともせなためてあの六郎が一目、見たいばかりに参りましたに、こりやまアなんといたしませうぞいなア。

九市 扱はさういふ事であつたか、あの辰次といふ男は言語道断の不埒者ぢやなア。(ト此時奥にて。)

鼻之 表に人音するは、誰ぢやく。

九市 馬鹿者の鼻之丞、見咎められては面倒な。(トかくす。鼻之丞、前髪着附にて出る。)

鼻之 何でも此所に。(ト見まはして、きよろ／＼する。九市郎こなしあつて。)

九市 エ、馬鹿者め、何をきよろ／＼。

鼻之 イヤサ、たつた今こゝで。

九市 用事はない、立つて行けく。

鼻之 それでも今こゝに。

九市 エ、参れと申に。

鼻之 ハア、と答へて失せにけり。(ト淨瑠璃を語りながら、奥へはひる、九市郎後を見送り。)

九市 イヤ、モウよい。何とまア困つた奴ではないか。

らん さうして召し上りものは、皆あの人がかしらへますのかえ。

九市 どうして、朝夕三度の食事は親類なれば小左衛門殿、屋敷の賄。

らん そりやまア、嗚御不自由でござりませうなア。

九市 御推量下されい。

らん さうあらうと存じまして。(ト以前の袱紗より、杯のつきし提重を出し。内外の者の口顔を忍び、手

づから調べて参りました、無調法ながらせめてもの御氣晴し。まア御酒一つ召上つて下さりま

せ。

九市 是は近頃忝い、凡そ此廿日餘り酒と言ふ名も忘れをつたが、早速賞罷いたさう。

らん そのやうにおつしやつて下さりますと、嬉しい事でござりますわいなア。

九市 さらば一献。(ト杯を取り上る。)

らん ドレ、お酌いたませう。(ト酌をしようとする。九市郎止め。)

九市 イヤ、此杯は、先づ／＼お手前から。

らん そりや何故でござります、まア／＼あなたから。

九市 ハテ、おもたせの御馳走なれば、亭主役にお始めなされい。

らん ほんに言渡とは名ばかりにて、まだ祝言も此度の騒動、そんなら私から始めませうわいなア。

九市 ヲ、それがよい／＼、ドレ身共が前をばいたさうか。

らん 是は憚りでござりまする(ト一口呑んで) 憚りながらあなた様へ。(ト九市郎呑んで)

九市 ヲ、甘露々々。(ト此時鼻之丞、奥より出て察り)

鼻之 ヤア、見つけた、見つけた。(ト兩人びつくりなし)

らん ヲ、びつくりしたわいなア。

鼻之 お咎めの身を以て美しい娘を引ずり込み、酒盛りをやらかすとは強がよい、此由を注進する。

九市 ア、コレ／＼まで／＼、是は唯の娘ではないぞ。

鼻之 ム、唯の娘でなくば、金を出して買ったのか。

九市 イヤサ、おゝさうぢや、日頃信心する金比羅様の御化身ぢやわいなう。

鼻之 エ、そりや嘘ぢや、金比羅様は男神。

九市 ハテ、其所が神道變生女子。

鼻之 エ、。

九市 ハテ、勿體ない。(トおらんの手を取り上座へなほし。) 南無金比羅大權現、おんあびらうんけんそは、か。

鼻之 ム、そんならその女は、金比羅様の御化身か。

九市 神慮を輕んじ、慮外すれば罰が當るぞよ。

鼻之 ヤア。

九市 後で某がお詫び申さう程に、早く奥へ行けく。

鼻之 男が女に化けるのか。(ト鼻之承奥へはひる。後に兩人こなしあつて。)

九市 日頃我々兄弟は、象頭山を信仰なし奉る事をよく知つて居る故、今の様に言うたのぢや。

らん 勿體ない、罰の當る事はないかえ。

九市 ハテ神は見通し、大事ない。

らん 久し振りにてお酒を一ツ戴きましたれば、大さう酔うて參りました。

九市 身共も餘程酔酩いたした、ア、是にて此程よりの氣散じが出来た。

らん それは宜よろしうござりました。(ト此時九市郎以前の書置を落す。おらん目早く見て。)こりや何なにやら書かいたものが。(ト是にて九市郎びつくりなし、書置を引つたくる。又獨吟になり。)

〽 ついに一歳ひととせ、二歳ふたとせに、三歳みとせを待つや小車をぐるまの。

らん もうし九市郎様、今の書かいたものはありやなんでござんすえ。

九市 是これでござるか、ヲ、それく、弓矢ゆみやの秘傳ひでんの書物かきものぢやわいなう。

らん イエく、さうではござんすまい、さうおかくしあそばすのは餘所よこそのお女中ぢよちゆうからの、お文ふみでがなござんせう。

九市 なんの左様さやうなものではござらぬ。

らん さうでなくば今いまのを一寸いちゆと。(ト懐へ手をかける。)

九市 ハテ扱さてしつこい。(ト兩人争ふ事あり。トド書置を見て。)

らん ヤ、こりや是これ、書置かきねさ。

九市 ア、コレ。(ト押へるを獨吟になる。)

〽 勤つとめの内の忍しのぶ筆ふで、口説くせつした夜よの思おもひ草くさ。

ト兩人引張りの見得にて、此道具廻る。

本舞臺三間の間見附金襴。東西障子屋體、右二重、眞中に本太郎、羽織袴にて褥に座り居る。廊下下の侍二人、小性兩人附添ひ、下手に刑部着附、上下にて居並び、平舞臺眞中に走井文吾腹を巻き鉢巻きをせし早打のなりにて、悶絶してゐるを諸士四人介抱してゐる。上手に辰次着附、上下、下手に市郎右衛門、銀の藥吞を持ち、双方より立かゝり居る。此見得早舞、バタ〜にて、道具止る。

皆々 文吾殿、御前でござるぞ、文吾どの〜。(ト市郎右衛門、文吾を引き起し、耳に口を寄せ。)

市郎 走井文吾、時が切れた。

辰次 不忠者めが。(ト辰方よりきつと云ふ。是にて文吾、心付き兩人の顔を見て。)

文吾 御家老様、辰次様、いづれも様。

市郎 心が附いたか。

文吾 ハア、御手づからの御介抱、勿體至極にござります。

辰次 若殿様にも、是に御出座。

文吾 ハア。(ト平伏する。)

本太 鎌倉表の次第心元ない、様子は何と。

文吾 ハア、大殿堂殿守様には先日下旬の頃より、些少の御所勞。

辰次 何、大殿には。(ト辰次、刑部と顔見合せ思入あり、)

皆々 御不例とな。

文吾 ハア、御病氣も御全快なく、御食事とても召し上られず、百日が其間に御藥の利日見えざれば、御本服の程も心立なしと典藥の醫案、未だ重らせ給はぬ中、若殿を武將家へ御目見得の上、御家督相續あらば大殿を初め一家中の安堵、急ぎ御下向あるべき赴き、大殿の御上意でござる。

市郎 ハテ、存じも寄らぬ大殿の御不例、總て腑と申す病は百日を限るもの、急ぎ彼の地へ御下向あつて、御家督御相續あそばせば、中將家の御師範と、言はれ給ふ當家の面目。

辰次 アイヤ御家老、若殿御家督御相續とあるからは、兼ねて武將の御懇望當家に傳はる松倉卿の短刀、差し上げる筈なれどその一振りは先達てより、紛失いたしてをりませうがなア。

市郎 夫故にこそ唐崎九高郎、身の誤りとあつて閑門仰付られ、押籠の身の上。

辰次 ム、その九市郎を押籠めおかば、短刀は手に入りまするか。

市郎 サア、其所は身共が詮議をなし、きつとお上へ差上げまする。

辰次 何、その短刀をば。

市郎 如何にも。

辰次 ハテたア。(ト思案のこなし。)

市郎 他家にあつて益なき短刀、當粟津家の家園に望をかける奴等の仕業、さすれば此盜賊は近くに

ある。(ト刑部、辰次に目を附ける。兩人は顔をこむける。)

士一 短刀詮議の目當は足輕の曾平太。

士二 朋輩足立甚助を討つたる曲者、此程より牢屋へ押込め。

士三 様々に糾明いたせども。

士四 今に於て白狀せぬしぶとい奴。

市郎 天罰といふ責木にかけて、立所に白狀いたさせ、奪ひ返さんに何の手間暇。

刑部 イヤく、さう味く行けばよけれど何としてく、なう辰次。

辰次 左様々々、今迄知れぬ短刀の行衛、ハテ心元ない。

市郎 其所を取御覽にいれん。

辰次 もし又、手に入らぬ其時は。

市郎 申譯の工夫は種々。

辰次 ぢやと申して。

市郎 ハテ、いらざる心遣ひ御無用々々。イヤナニ文吾、其方は長途の勞れ、次へ參つて休息あれ。

文吾 有難うござります、併し大殿より内密の儀もござれば。

市郎 イヤ、その儀は追つて、暫時休息。

文吾 衣服を改め、後程出仕。

市郎 早打大儀。

文吾 ハア、左様なれば、後刻御意得ます。ト文吾はひる。四ツの時計鳴る。此時揚幕にて。

呼び 比良井才次郎様御出仕。(ト序の舞になり、才次郎、着附麻上下にて出で、本太郎を見て。)

才次 ハア、思ひも寄らぬ若殿様へ端近の出仕、ハア。(ト花道よき處に平伏して。) 大殿壹岐守様御不

例のよし、早速の注進承ると等しく、取る物も取り敢ず出仕いたしてござります。

本太 ヲ、待兼ねた、才次郎近う。

才次 ハア、各々御めん下され。(ト本舞臺へ來り、下手へ控へる。本太郎思入あつて。)

本太 比良井正春。

才次 ハア。

本太 此度東國より知せに依つて早速彼の地に發足いたせば、父上の家督を譲り受け、中將家の御師範

となる此本太郎、軍學弓馬槍劍の道は豫め得たりと歸も、柔道捕り物は未だ其奥を極めず、柔道の奥儀水月と名づくる秘密、此座に於て傳授いたせよ。

才次 ハア、御意を返すは恐れながら、御傳授の儀は今暫く御猶餘願ひ奉りまする。

本太 遠慮いたすは傳授を惜むか。

才次 身命全き事君の賜、何しに惜みませう様はござりませぬ。

本太 ム、扱は柔道未熟と悔り夫故の事なるか。

才次 イヤ、全く以て。

本太 大事故許さぬのか。(トきつと言ふ。)

才次 ハア、御意の通りにござりまする。(ト是にて本太郎赤面する。)

本太 ム、。

辰次 アノ、是サく才次郎殿、そりや御心遣ひでござらう。御自分には近頃東國より歸らしやつ

て、若殿の武藝の御上達は御存じあるまいが、持つて産れし御器用肌拙者なども柔道には、餘程骨を折りましたが、イヤモウ何として何として、一家中は申すに及ばず近國近在の諸先生、

刑部 毎度試合に参られても、若殿の御手に立つ者は一人もござらぬわ。
只今辰次の中す如く武藝は拔群の本太郎殿、よい程に傳授を許し高祿にありついた方が、よさ

さうなものだぞよ。

才次

イヤ未熟若輩の拙者なれ共武藝は師の導きに依て、共の甲乙は豫め承知いたしまかりあるが
コリヤ各々には、御存じない儀にござりまする。。(ト此時本太郎、羽織を脱ぎ、立ち上り。)

本太

四人の者、立合の用意く。

四人

ハア。(ト四人身拵へする。本太郎鐵扇を持って、ツカく、と平舞臺へ下り。)

本太

サア、四人の者共、余に勝たば褒美は加増、違慮いたさば曲事なるぞ。

士一

主従の禮儀は禮儀。

士二

慮外いたすも。

士三

武藝の勤み。

士四

恐れながら御容赦は。

四人

仕らぬ。

本太

ヲ、出かすく。

四人 恐れながら。ト是より白嚙子になり、本太郎、一、二の兩人を取て投げる。三、四、双方より窺ひ。)

油断の窺ひ、(ト立廻りあり、ト、四人を投げ、きつと見宿。)

本大 見たか才次郎、飛鳥を欺く今の働き、是でも奥儀は許されぬか。

才次 天晴の御上達驚き入り奉る、さりながら身體手足の働に毛頭透はござらね共、御心の御修行足らざれば、御傳授は申されませぬ。

何と申す。

本太

才次 同じ武藝と申す中にも、劍術と柔道は、心理の沙汰に等しからず、劍を持つては進むを可と

し、體に取つては退くを元となす、君藝道に誇る御心あらば極意を得たりと慢心起り、御身に

誤ちあらんは必定、その意を察し差控へ故意と御傳授申さぬは、御大切と存する故。

本太 ヤア、口賢くも言ひ曲るよな、さ言ふ汝が自慢の鼻を打ち折りくれん。

ト本太郎きつとなる。才次郎兩手を膝に置きて笑ふ。本太郎せき込み腕を取つてねぢ上る。才次郎わざとねぢられる。是より六段の合方になり、いろ／＼木手の立廻りあり、

本太 如何に才次郎、斯様に備へし身體の固め、投げらるゝなら投げて見よ。

才次 イヤ、其儀は無禮。

本太 許す。

才次 御免。ト本太郎を投げる。是にて一同びつくりなし。

皆々 ヤア、若殿様。(ト此時、市郎右衛門立ち上り、才次郎の襟上を取つて引附け。)

市郎 アノ爰な無禮者めが、如何に御免あればとて大切なる主君に對し、手向ふとは不敵な汝、異見

のしもとは斯うく。(ト扇子にて才次郎を打つ。) 大殿への申譯、いつそ身共が手にかけて。

本太 ヤレ待て市郎右衛門、はやまるな。

市郎 イヤ憎い弟、此場に於て。(ト又斬りかゝるを、本太郎、留めて。)

本太 傳へ聞く唐土の燕は、成王に鞭て四百餘州を起せしためし、今才次郎が働きは我が高慢を
取りひしぐ、無禮は却て彼が忠節、たとひ主従たりと雖師となり弟子となるからは、五體の
骨を取りひしいでも、教へ諭すが武門の習ひ。

市郎 それぢやと申して。

本太 今正春に説破され、日頃の慢心忽ち折れ、心理を得たる我が悦び。

市郎 スリヤ無禮の御咎もなく。ハア流石は寛仁の御計ひ、先づく。(ト手を取つて、上座へ直し。)

辰次 それでは餘り依怙の沙汰、いつそ身共が。(トツカくと傍へ來て。) 御前叶はぬ。

皆々 立つしやれ。(ト引立にかゝるを振り拂ひ、辰次かゝるを留めて。)

才次 それ、水月と書く文字は即ち水の月。(ト辰次を引きまはしてよろしくあり。本太郎是を見て。)

本太 ム。(トきつと呑込みしこなし、兩人立廻つて。)

才次 手にも取られず、窺ふにも進べられず。(ト靜に辰次を引廻し、本太郎に諭す思入。)

本太 ム。(ト得心せし思入。)

才次 心を以て心に傳ふる矢流の相傳、柔の心意。

本太 ム。

才次 柔能く剛を制すと言ふ一心の置き處は。とくと御會得。(ト辰次をとんと下に置き、なされませ。)

本太 ヲ、傳授はすんだ、承知々々。(ト市郎右衛門、感服の思入あつて。)

市郎 ム、教へたり、習ふたり、命を命に御主君を諫めし忠臣、無禮を許せし若殿は君子なり。市郎右衛門感心いたしてござります。

本太 斯様な家來を持ちしは他門への面目家の譽れ、新地二百石加増なし、予を初め一家中へ師範の役目申附くるぞ。

市郎 何、新地二百石下されんとな。コリヤ才次郎承つたか。

何、新地二百石下されんとな。コリヤ才次郎承つたか。

才次 ハア、有難き君の御仁政。

市郎 須彌蒼海にも増りし御恩。

才次 心魂に徹しまして。

兩人 有難く存じ存りまする。(ト嬉し涙に泣く。刑部思入あつて。)

刑部 何と辰次、世は末になつたではないか。主君を投げて二百石とは妙な世の中。

辰次 左様でござる、いつそ踏殺したら一萬石にもなりませうか、なう何れも。

士一 イヤ、我々も斯様に鍛錬いたしておつたら。

士二 せめて若殿の足でも持つて引き倒し。

士三 五十石か、百石位は貰ふもの。

皆々 イヤ、残念な儀でござる。

本太 水月の傳振出すむ上は親人の御不例心元なし、初更を相圖に出發なし、夜を日に次いで急がん。

刑部 御家督相續の砌りなくて叶はぬ松影の轉、即ち本家の系圖も同然。

辰次 イヤ、たとひ轉は持參なす共、御婚禮の松倉卿の短刀差し上げねば、御家督相續は相なります。

まろ。

市郎 ヤア、又してもく、其方共の存ぜぬ事だ控へてよからう。

辰次 イヤ御家を大事に存する故。

市郎 氣遣ひいたすな、若殿御出立迄に詮議いたして見せる、いらざる差し出、控へてゐよと申すに。

辰次 ム、然らば控へませう。(ト九ツの時計鳴る。)

士一 最早午の上刻。

士二 御祝儀の刻限で。

四人 ござりまする。

才次 何様、今日は九月九日重陽の御壽、御先祖忠勝公、數度の合戦に比類なき手柄を顯し、拜領ありし松景の轉。

市郎 則ち御家の系圖と定め、御家督相續の禰は、武將の上覽に備へる古例。

才次 さるに依つて、今日は御家にとつては吉例の日柄。

刑部 本太郎様には御上使の饗應、座席を改め。

皆々 御祝儀の御酒一盞。

本太 何様、東國へ出府の門出、祝ふ別れの杯くまん。

市郎 才次郎、若殿に附添ひ奥へ参つて何かの用意、一家中へ申し渡してよからう。

才次 畏つてござります。

刑部 シテ御上使への返答は。

市郎 其返答も初更限り。

辰次 お家の落着。

才次 若殿の御慶足。

形部 先づそれ迄は。

市郎 暫時の休息。

才次 若殿様。

本太 才次郎。

市郎 先づお入り。

皆へ あられませう。(ト唄にて皆々はひる、後に市郎右衛門、辰次、刑部、諸士二人残る。)

刑部 何、雁平、軍次、その方共は科極つた長濱會平太を引き出し、成敗いたしてよからう。

鷹平 軍次 ハア、心得ました、(ト兩人立つを。)

市郎 コリヤ、兩人共何れへ参る。

鷹平 ハア、獄屋へ参り科人曾平太引き出し。

軍次 成敗いたさうと存じまして。

市郎 イヤ、一國の政道は家老たる某の役目、其方達の詮議はたのまぬ。」

兩人 デモ、刑部様の御指圖なれば。

市郎 イヤ、御一門とは申しながら御隠居同様の刑部様、無益の御指圖、御無用になされませう。

辰次 イ、ヤ、殿の御家來、安達甚助を手にかけし科人なれば。

市郎 下手人は私事、鎌倉武將へ差上る短刀の紛失は、疑もなき足輕曾平太。

辰次 イヤ、如何様に申す共、短刀の紛失は唐崎九市郎が誤りと、言はれたではござらぬか。

刑部 みす、知れた下手人を、許すと云ふは依怙の沙汰、政道が暗い。

市郎 ム、頼を以て友を呼ぶ、鳥を鷲と争つても助命をもと思はるゝに、却つて成敗急がるゝは刑

部殿の御勝手に、悪い事でもござりまするか。

刑部 何サ、身共決して左様な事は。

市郎 然らば辰次、お手前は。

辰次 イヤ何も無い。

市郎 左様なればいらざる御配慮、御控へ召され。

トきつと言ふ。皆々顔見合せ、悪いと言ふ思入、バタ／＼になり以前の文吾、上下に改め暮あきの金兵衛の死骸を戸板に乗せ、近習兩人にかゝせて出で来り、

久吾 何れも、一大事でござる。

皆々 何、一大事とは。

久吾 ハア、若殿の御指圖にて、松影の尊取り出さん爲、瀬田口の御寶藏へ参りし處、盜賊の仕業と

見え番上金兵衛は殺害され、寶の尊は外箱ばかりにて紛失いたしましたござります。

市郎 何、スリヤ、尊は紛失いたせしとな。(ト當惑の思入。)

辰次 ヤア／＼そりや尊は紛失とな、短刀の紛失といひ若殿の御出府の折柄、御持参なくては跡目も

叶はず。

刑部 萬一其内に、大殿御死法ある時は御家は斷絶。

辰次 短刀献上の願ひは延引もならうけれど、若殿御發足の今となつては。

刑部

大切な轡くわがなくて、御家おいへは滅めつした。

鷹平

御家おから老、コリヤ何いなされます。(ト思案の思入、此時揚幕にて。)

鮒助

何いれも、轡くわの盜賊たうぞく、捕とらへましてござります。

皆々

なんと。(ト早舞にて、鮒助、琵琶平、兩人立廻りながら出る。皆々是を見て。)

鷹平

ヤア、守山組もりやまぐみの二郎鮒助。

軍平

比良井組ひらみづぐみの中間、琵琶平。

刑部

盜賊たうぞくとはこりや。

辰次

何いれが盜賊たうぞくだ。

鮒助

さればでござります、夜前御頭やまへおびらの御用ごようにて京都へ参つた歸り足、通りかゝつた瀬田口せたがuchiの御寶藏ごほうざう表通り宮おもてどちみやの前の藪蔭やぶかげより、うろたへ出たる此の琵琶平、こやつうろんと引つ捕へて斯くの仕合あはせ。

ト右のセリフの中、立廻りながら、兩人本舞臺へ来る。

琵琶

ウヌ、正直正路ちやうじきちやうろな琵琶平びはへいに其言そのいひかけ、エ、覺おぼえはないわい。(ト又立廻る。)

辰次

ア、コリヤ、組下くみしたに盜賊たうぞくあらば頭かぶたる者の不調法ふてうはふ、シテ其その琵琶平びはへいを盜賊たうぞくとは。

鮎助　ハア、慥たしな證據しやうこは金兵衛きんべいの手に持もつたる此この鑑札かんさつ。(ト是にて文吾、金兵衛を改める。)

文吾　ム、誠まことに。

鮎助　比良井組ひらみやまぐみの琵琶平びわへいと、あり／＼書かいてござりますれば、それに相違ちがひはござりませぬ。

辰次　文吾殿ぶんごどの、その品しな是これへ。(ト文吾はためらふ。)

鮎助　何を御ご憚たはなされます、(ト文吾の手から鑑札を取り)イザ御改ごかいめ下くだりませ、(ト辰次に渡す。)

辰次　斯かういふたしかな證據しやうこがあれば。(ト言ひながら鑑札の袋を取つて見る。)

辰次　ナニ、守山もりやま辰次組下しんじやくみした、坂口部屋さかぐちべ鮎助あなすけ。

敵役 皆々　ヤア。(ト顔を見合す。此内市郎右衛門思入あつて。)

市郎 琵琶平びわへい、その下郎げらうめに繩打なげうちて。

琵琶 　ハツ。(ト鮎助逃げようとするを捕へ。)サア、繩なげにかゝれ。]

鮎助　コリヤおれを何なにとするのだ。

琵琶 　轉ころの盜賊たうぞく、繩なげにかゝれ。

鮎助　べら棒ぼうめ、うぬが名なの鑑札かんさつがどうしておれの科とがになる。

琵琶 　こいつ耳みみにはひらぬか、不便ふびんな奴やつぢや。

市郎 サア、辰次今の名を讀つしやう。

辰次 イヤ、是は。

琵琶 讀めずば私が讀みませう。(ト引き取り。) 守山辰次組下坂口部屋鮎助。なんと是でもあらがふ

か。

鮎助 どうしてそれが。イヤ何御頭、なんとかして下さりませ。

辰次 うぬが疎相で手盛りを喰うたを、夫を身共が知るものかい。

鮎助 そりやまたあんまり。

辰次 エ、控へておらう。(ト押へつける。)

市郎 近習の者、金兵衛の死骸片附い。(是にて近習二人、下手にはひる。)

市郎 コリヤ、鮎助、近う参れ。

鮎助 ヘイ。(トためらふ。)

市郎 今身共が尋ぬる仔細、偽らずと言ひ聞せよ。松影の轡人に頼まれ、其方奪ひ取つたであらう。

鮎助 イヤ、左様な事は。

市郎 イヤ、最早露顯に及ぶからは、誰れ彼れの遠慮はない、シテ其頼み手は。

鮎助 サア、それは。

市郎 よもや是に居られる、御人達ではあるまい。

鮎助 コリヤモウこゝには。(ト逃げ出すを、琵琶平押へる。)

琵琶 ウヌ、さうはさせぬぞ。

ト此時鷹平、運平の兩人立かゝり、鮎助を押へる心にて、琵琶平にかゝる。琵琶平兩人に當身をくれる。辰次これにて琵琶平にかゝる。市郎右衛門二重より下り辰次の刀を落す。刑部立ち上らうとして、市郎右衛門に目を附けられそのまゝになる。琵琶平此中、鮎助を當てる。

市郎 辰次、其方は此刀で誰を斬る。

辰次 憎い鮎助、眞二つにいたさうと存じて。

市郎 いや、詮議ある鮎助を手にかくれば、轡の行方も知れざる道理。

辰次 ヤ。

市部 餘りお世話をおやきになさるな。(ト辰次を突放す。)

辰次 エ、命冥加な。(ト市郎右衛門と顔を見合せ。) 下郎めぢやなア。(ト元の座に直る。)

市郎 コリヤ琵琶平、鮎助に詮議もあれば取逃さぬやう、心を附けよ。

研

辰

琵琶 ハア 畏りました。ト鮎助に活を入れ、手早く繩をかけ。キリ／＼立たう。

鮎助 エ、いま／＼しいなア。(ト琵琶平に引かれてはひる。時の鐘鳴る。)

市郎 最早黄昏、誰とある、燈火持て。

近習 ハア。(ト燭臺を二本持ち出で、よき所におく。)

市郎 辰次殿、一寸是へ。

辰次 あの身共に。(ト合方になり。)

市郎 外でもござらぬ、お聞きの通りの仕儀、家老の某甚だ心痛いたするが、御手前何ぞ御思案は

ござるまいか。

辰次 さればでござる、お家の重寶松菘の轉の盜賊、只今の處では十が九ツ鮎助と目星はつけ共、餘

り手強く拷問なし苦し相果でもいたしなば、詮議の目當もござるまい。と申して若殿御意足迄

に手に入らねばならず、コリヤ如何思召しますな。

市郎 何を申すも大切なる寶の紛失、アノ鮎助を拷問なし、寶の出でぬ其時には申譯には身共が腹。

辰次 スリヤあの中譯にはお腹を召すとな、外に詮議の仕様もありさうなものぢやなア。

市郎 如何様、拙者として好んで切腹など仕らぬ、なれ共轉の在所知れざる時は此の身の上、とはい

へ雲を當てなる言議、二重箱の其中は。

辰次 金梨子の高蒔書。

市郎 袋の切れは世にも稀なる。

辰次 古錦欄の二重鶴。

市郎 シテ、その轡の金色は。

辰次 南盤鐵の丸、

市郎 ム、それぞ則ち松影の轡、隨に御身が。

辰次 エ、。

市郎 持つて居ようが。

辰次 アイヤ御家老、そりや何を言はるゝ、轡の賊は下郎の鮎助、身共は一向存じませぬ。

市郎 いや、下郎に盗ませ共方が、かくしおるに相違ない。(是にて、辰次きつとなつて。)

辰次 何だ、下郎に言ひ附け身共が所持せしとは、役目を功に出るまゝの共一言、祿に高下はあると

ても同じ侍だ、曇り霞のなき某を様々との言ひかけ、科に取つて落さんとは、守山辰次共
手にや乗らぬ。

市郎 ム、左程潔白の其方なれば、此印籠の覚えはあるまい。(ト印籠を出して見せる。)

辰次 南無三、それを。(ト奪はうとする。市郎右衛門その手を打つ。)

市郎 夜前鮎助寶藏へ忍び入り、轡を盗んで立ち退く處を、番士金兵衛に見咎られ殺害なせし其處へ其方來つて轡を受取りかくしゐるに相違あるまい、證據と云ふは此印籠、死骸の傍に落ちたるは、何と是でも言譯あるか。

辰次 サア、それは。

市郎 速かに轡を出すか。

辰次 サア。

市郎 拷問せうか。

辰次 サア。

兩人 サア〜。

辰次 さう言やいつそ。(ト斬つてかゝるを立廻り、辰次の後より轡を取り出す)や、それを。

ト取りにかゝるを市郎右衛門引きつける。敵役皆々氣を揉む思ふ。

市郎 動きおるな。人外めが、(ト合方になり。)元來其方は五ヶ年以前是なる刑部様の推擧を以て、刀

脇差の研磨に妙を得たるを以て、小身ながら當家へ有りつき、御親子は申すに及ばず一家中にもへつらひ、表に仁義は飾れども心に企む邪智、肝此市郎右衛門の目鏡に違はず、言語道斷の不行跡組下の下郎に言ひ附け轡を蓋ませし企みの段々。トサア、白眼んだ眼に相違はあるまい祿盗人とも人外とも、言はう様なき人非人めが、天罰主器観ひ来ておのれを責むる苛責のしもと、カウ／＼、(ト扇にて打ち) コリヤ、此様な不鍛練な手の内にて身共に及向ふとは及ばぬ事だ、馬鹿者めがト突きはなし、奥へ向ひ) ハア御上使様、御聞きあられましたか。

左衛

ヲ、委細の様子聞いた／＼。(ト正面の襖をあげ、左衛門尉近習兩人出る。)

市郎

ハア、無事に手に入る松影の轡、イザ、御受取り下されませう。

ト三方に乗せ、左衛門尉の前へ直し、引き下つて平伏する。

左衛

今に始めぬ市郎右衛門の計ひ、系圖の轡に兎事なければ初吏を相圖に出府の用意。

市郎

畏つてござれ共、心がかりは今一品の、松倉卿の短刀の行衛。

左衛

イヤ、其儀は少しも氣遣ひいたすな、獻上の日限延引の儀は斯く申す左衛門が、きつとよしたな

に計ひ得させん。

市郎

ハア。重々の御厚志、拙者當城に残り詮儀仕出し、追つて上へ差し上げませう。

左衛 それ聞いて先づ安堵。(ト市郎右衛門刑部を見て。)

市郎 刑部様にも。ト思入あつて。嗚御悦びでござりませう。

刑部 イヤモウ、轡の舞事に手に入るもそちの働き、満足々々。

左衛 此上は奥へ参つて木太郎殿の門出の杯仕らん、市郎右衛門は後より。

市郎 左様なれば左衛門様。

左衛 市郎右衛門、後刻。(ト唄になり刑部、左衛門はひる。辰次、市郎右衛門の傍へ来り。)

辰次 ハア、我ながら迷うたり、若氣の至り後先の辨へもなく、愆といふ字に目がくれし出来心、只

今の御異見は、辰次の五體に染み渡たり、面目もなき次第、誤つて改むるに憚る事なしとは聖人の教えの今月今日只今より魂を入れ替へ、是迄の不忠を改め身を骨に碎き。(ト市郎右衛門に寄り。)

諭へにもいふ、慈悲は上から、御家老様のお取計ひにて、此儀何卒穩便に。

市郎 若殿始めての御参勤、先づ御先乗りは小姓組、才次郎の役目は諸士の段り。

辰次 サア、段々との御立腹は、御尤ではござりませう。

市郎 御臺所を始めとして、諸侯方への御土産は先格の通り、ム、是もよし。

辰次 スリヤ、如何様に願ひましても。

市郎 初更（よる）と言いうても今暫いましばらくく、ハテ、心こゝろぜきな事ことではあるわえ。

辰次 イヤサ御家老（ごみやらう）、今一應御思案（ごうごしあん）を。（トいろく言つても市郎右衛門取り上げぬこなし。）ム、コリヤ

御家老には噂（うわさ）か響（ひびく）か聞えぬふりか。モウよい、モウ頼（たの）まぬ、身に諷（ふせ）りがあればこそ言葉（ことば）をつくして詫（わ）をするのだ、モウ頼（たの）まぬ、何（なん）爰（こゝ）ばかりに日は照（て）らぬ。じたい刀劍（やうけん）の研磨（けんま）、新刀古刀（しんたうこたう）の目利（めり）に於（お）ては凡（ま）そ日本（にっぽん）に並（なら）びのない此辰次（このちんじ）、何（なん）れの諸候（しよこう）にても五百石（ごひやくいし）や三百石（さんひやくいし）はすぐにくれるえ、あやまればよい事（こと）にして武士（ぶし）に恥辱（ちじよく）を興（おこ）へたな、其上（そのうへみども）身共（みども）を不（ふ）鍛練（たうれん）とぬかしたな、その不（ふ）鍛練（たうれん）の手の内（うち）、受（う）けて見（み）よ。（ト辰次斬つてかゝるを、市郎右衛門押へ。）

市郎 コリヤ、動（うご）かるゝなら動（うご）いてみよ、此扇（このあふぎ）が刃物（はもの）なら、汝（な）が首（くび）はころりと落（おち）るぞ。

辰次 何（なん）を、其（その）の廣言（ひろげん）。（ト又斬りかゝる。此時敵役二人も斬つてかゝる。トド三人共、打ち揃え。）

市郎 コリヤ、身（み）動（うご）きなせば命（いのち）がないぞ。（トきつとこなしあつて。）此度（このたび）は助（すけ）けてくれる、此座（このざ）は叶（かな）は

ぬ立（た）つて失（う）せう。（ト刀を前にほうり出し。）ハテ不（ふ）便（べん）千萬（ばん）。ドレ、御前（ごぜん）へ参（まゐ）らう。

ト唄になり、こなしあつて市郎右衛門奥へはひる、敵役の諸士二人は辰次を見て馬鹿々々しいと言ふ思入にて奥へはひる、辰次一人残り奥を見て、只一討ちといふこなしにて花道へはひる。後合方にて奥より才次郎、刀を掲げ出で来り。

才次

誠に有難き師の御恩、まだ部屋住みの某に、奥義の秘傳下されし故にこそ今日の幸ひ、夫につけても兄九市郎殿、此度の災難に主君の大事を身に引き受け、心の底は切腹と覺悟召されしいたはしき、御命救ふ思案と言ふは。(ト行かうとして立ちどまり。)イヤ／＼御閉門の御身の上、それについても大兄市郎右衛門様の、深き御思案あつての事か、心ならざる事ぢやなう。

ト思案の思入、此時合方きつぱりと成り、奥女中みどり、島田わけ、着附淺黄無垢、忌中のなりにて出て来り、

みど

是は才次郎様でござりまするか、妾はあなた様にちと御願ひがござりまする。

才次

ヲ、誰かと思へば奥女中のみどり殿、御親父甚助殿の不慮の御最期、御愁傷の段察し入る。

みど

御推量なされて下さりませ、産みの母には三つで別れ杖とも思ふ父上に、夢見たやうな、本意ない別れ、悲しい事でございまする。

才次

ム、シテ身共に願ひとは。

みど

妾が願ひと申しまするは。

才次

その仔細は。

みど

サア、それは。

才次 何事なにごとでござるな。

みど アノ、それは、(ト扇あふを出し、) 是これ見て下くださりませ。(ト才次郎、開き見て。)

才次 ム、扇面せんめんの畫まは八景はっけいの第一。

みど 唐崎からさきの雨あめの景色けしき。

才次 砂地すなぢに雨あめは。

みど 御判断ごはんげん下くださりませいなア。(ト合方あひがたになり。今更申いまさらまをすも覺ほしながら過すし月見つきみの御遊ごゆうの時とき、思おもひ染そ

めたる心こころの一心しん、思おもひの程ほども情なさなや、水臭みづくさいすげない御返事ごんじ、不束ふつかな妾めかけなれば御心ごこころには入い

まいけれどせつない心こころを思おもひやり、どうぞ叫なへて下くだされませいなア。(ト取付とけくを振拂ふひ、)

才次 アノ爰こゝないたづら者ものめが、父母ふぼの忌いは三ヶ年さんねんそれさへ未いまだ満みたさる内うち、歎なげきを外よそにみだら千萬ばん。

みど 其御叱そのおしりは無理むりならねど、外ほかに願ねがひがござりました。

才次 ム、叻太刀おたがちがして貰もらひたいか。

みど サア。それは。

才次 何なにと、違ちがひはあるまいがの。

みど サア、誠まことは敵たてが討うちたいと思おもうて見みても誰たれといふ、頼たのみに思おもふ人もなし、戀こひと孝かちとの二道ふたぢを思おも

ひ込んだる妾の願ひ、力となつて父様の無念をお晴し下さりませいなア。

才次 ム、さこそあらん。義に依て頼まれたものなれ共、討つべき敵は國家の科人、夫故仇討は出来ぬ故、此戀は叶ふまい。

ぬ故、此戀は叶ふまい。

みど それでは敵を目前に見ながら、討つ事は出来ませぬか、父上様への申譯、さうぢや。

ト自害しようとするに、才次郎是を留める。

才次 ヤレまでせくな、たとひ罪人なればとて、罪一等を軽くして、曾平太を出牢させる工夫もある。

みど スリヤ曾平太の出牢あれば、助太刀なされて下さりませるか。

才次 義を見てせざるは勇なきなり。(ト扇を投げ)開いて見よ。(トみどり見て)

みど ム、此扇は矢走の歸帆。

才次 引きは返さぬ弓取の。

みど つもる恨みも比良ヶ根の。

才次 雪諸共に。

みど 打ち解けて。

才次 返事を三井の。

みど 兼ての約束。

才次 時の至るを一ツ松。

みど かならず違うて下さんすな。(ト手を合せ拜む。)

才次 何の、拙者の心は石山。

みど エ、嬉しうござんすわいなア。(ト取付く。)

才次 身共は兄九市郎殿の、御閉居へ參つて何かの相談。

みど アレまア待つて、下さんせいなア。

才次 イヤさうしては。

ト振り切るはずみに鑑當り、みどりム、と倒れる。才次郎見て思入あつて、印籠を投出し、花道へはひる、是にて道具廻る。

本舞臺元の數寄屋へ戻る。月を出し花道へ菊の土手板を出し、花壇に蝶飛んでゐる。右二重の眞中に九市郎住ひ、蝶に目をつけて居る。能き所に遠州形の行燈を灯し、合方にて道具留る。

九市 ハテ心得ぬ、夜陰に蝶の飛び交ふは。それ兵を起す時は天理を考へ次に人の道を知る。扱は倭

人あつてお家を横領せんと窺ふものがあると覺えたり、是を思へば實の納失姫君の御出國、ハテ心にかゝる事ぢやなア。(ト花道より才次郎、着附袴にてツカ〜と出て、花道にとまり。)

才次 兄九市郎殿閉居の居間、何卒お目にかゝりし上、此身の願ひお家の納り兄々への孝の道、思案の的は今宵の中。

ト懷中より一書を出して、傍の寒山子の弓矢を取つて、一書をく〜りて射る。仕かけにて上手の柱へ立つ。九市、是を見て。

九市 狛ひときもせぬ、忍びの矢柄。(ト見て。) 此一書は。

才次 イヤ、其矢の主は拙者でござる。(ト切戸をあけてはひる。)

九市 ヤア、其方は弟才次郎。

才次 閉居の御身故持を守り心ならざる此疎遠、眞平御免下さりませ。

九市 何の〜、同じ骨肉の兄弟なれども、御身は剛勇にして短慮の氣質、某は又柔弱故、心合ざる兄弟と思ふ故、左のみ不審にも思はぬわ。

才次 何は格別、今宵わざ〜参りしは、チトお願ひの僕があつて。

九市 ム、改めて願ひとは。

才次 其仔細は是でござる。(ト傍にある矢柄を取つて差出す。)

九市 ム、傳へきく唐土には、他人同志深く交り兄弟の儀を結ぶ時は、矢柄を折つて擇ひを立てる。

才次 イヤ、其古事とは相違して兄弟の縁をまつこの通り。(ト矢を二つに折る。) 今日今宵、兄でない、弟でないと言ふ御一言が承りたい。

九市 そりやまた何故。

才次 ハテ知れた事、科人の兄を持つては手前の迷惑、大見市郎右衛門殿は役柄なれば格別の沙汰、此方目下なればこなたの身の成行で、如何なる祟りあらうも知れず、表向き役人中へ、此事届

けおきたれば他人の拙者、最早祟りは參らぬ筈、さつぱりと勘當なされて下さりませ。

九市 長幼序あるは聖人の教へ、兄は弟を深く憐み、弟は兄を敬ふが、人たるもの誠の道、木石

にも劣りし其方、弟といふも穢はしい、望みの通り勘當ぢや。

才次 ソリヤ、その詞に相違はござらぬか。

九市 ハテ、犬猫に論は無益。

才次 如何様。兄弟は他人の始りぢや。(ト花道へ行きかゝるを。)

九市 才次郎、待て。(ト是にて振り返り。)

才次 用がござるか。

九市 言ひ置く事はそればかりか、死してはものは言はれぬぞや。

才次 何と。(トギツクリこなし。)

九市 兄が科を身に引受け、潔く腹切つて死ぬる覺悟、後の心を思ひやり心にもなき惡口雜言、よ

もや違ひはあるまいがな。(ト是にて才次郎、ツカく〜と戻り下に居て。)

才次 スリヤ、拙者が心底を。

九市 オ、サ、知らいでならうか骨肉同腹、事に望んで義を磨くは親人譲りの魂。(ト才次郎思入。)

才次 エ、恨めしい兄者人、主人の科を身に引受け一命投げ出しこなた一人が、忠義を立つて弟の

拙者はなんとなりまする、こなた様は御目鏡を以て他家を相續、今腹切つては、唐崎の苗字を

失ふ、忠孝二つは武士の長、主君の御爲國の爲、それ故拙者が命を捨て、末世の記録に忠臣の

名を残させて下さりませ、兄者人頼みまする。

九市 イヤ〜、一旦科を受けし身共、如何に弟なればとて罪を譲り存命なせば、武士の道は何處

で立つ、その方は後に残り兄市郎右衛門殿諸共に、寶の在所詮議して犬死ならぬやうにして、

死後の汚名を雪いでくりやれ。

才次 スリヤどうあつても拙者の望は、聞き入れては下さりませぬか。

九市 死ぬばかりが忠義にあらず、生きての忠義は尙大切、とつくりと合點いたせよ。

才次 是非に及ばぬ。(ト刀の柄に手をかける。)

九市 ヤレ待て弟、早まるな。

才次 それぢやと申して。

九市 イヤ、冥土の魁、此方も。(ト九市郎刀の柄に手をかける。)

才次 イヤ兄上、誤り給うな。

九市 イムヤ、身共が。

才次 イムヤ、拙者が。(ト双方互ひに争ふ。此時市郎右衛門、ツカ〜と兩人の真中へはひる。)

九市 兄弟共、物に狂ふか、うつけ者めが。(ト双方へ突放す。)

才次 ヤア、いつの間にやら兄者人。

九市 どうして、爰へは。

市郎 兩人共に死を争ひ命を惜まぬ志は、見事武士の魂なれ共其後に實が出れば犬死同然、才次

郎とても共如く九市郎になり替り、切腹なせば義理は立たうが主君へ對して第一不忠、何故存

命して諸共に、實の詮議はいたさぬぞ。

兩人 サア、それは。

市郎 生は難く死は易し、死ぬるは必ずとどまれよ。

才次 オ、其詮議は刑部が屋敷。

市郎 イ、ヤ、それとても様々に間者を入れてさぐれ共、企みの洩れん事を恐れ、國を隔てし身寄り

の者へ二品を送りしに相違なし、今彼等を荒立てたば毛を吹いて疵を求むる喻、うかつに手出しもなるまいわい。

九市 然らば、我等長らへて。

才次 主君へ忠義が立ちませうか。

市郎 サア、御發明にはましませど元來知慮な若殿様、弟才次郎は若殿のお傍に附添ひ兄に替つて

忠義を盡し、まつた九市郎は出國なされし姫君の御行衛香爐の詮議、某は後に残り短刀をば詮議いたし兄弟仲よく長らへて、主君へ忠義を盡せし上、忠孝二道の譽れの二道、名も高松の家名の榮へ、かならず共に忘るゝな。

九市 ハア有難き御教訓、心魂に徹し有難く、必ず忘却仕りませぬ。

才次 我々は仰せに従ひ、若殿のお傍に附添ひきつと守護なし奉らん。

市郎 オ、道は返答満足いたす。さり乍ら事に望んで身を忘るゝは、珍らしいからぬ武門の習ひ。

九市 仰せの如く、生は死の元。

才次 逢ふは別れの始りと聞く。

市郎 是今生の、暇乞にもならうやら、九市郎。

九市 ハア。

市郎 才次郎。

才次 ハア。

市郎 よう顔見せてくれいやい。(ト三人顔を見合せ、愁ひのこなしあつて、氣を替へ。) ハ、、、、大事の門途に涙は不吉。ト懷中より守袋を出し。コリヤ金比羅大権現の御守り、九市郎其方へ譲り置けば、大事にかけて出立いたせ。(ト又刀を出し。) 此一腰は來國俊身共の秘藏、覺えの業物。

ト九市郎、刀を抜き見て。

九市 刀は武士の美道具、拙者の帶劍は小鳥止守。

才次 又私のは備前國光。

市郎 我わが一腰こしは重光しげみつへ譲ゆづり。

九市 拙者せつしやが刀やいばは正春まさはるへ。

才次 さし詰め、拙者せつしやは兄者人あにやひとへ。(ト取り替へ受取る事あつて。)

市郎 斯かう取り替かへば兄弟三人あにいひと。

九市 たとひ所ところは隔へだつとも。

才次 朝夕あさゆふお傍そばに居ゐる心こころ。

兩人 兄者人あにやひと。

市郎 無事むじの便たすりを待まちつて居ゐるぞよ。(ト此時、時計鳴る。)

九市 アリヤモウ、初更しよせう。

才次 若殿わかどのの御立おたちの刻限こくげん。

市郎 用意よういいたせ。

才次 ハア。(ト行かうとする。此時鮎助、窺のぞひ出で。)

鮎助 才次郎さいじらう、覺悟かくご。(ト斬つてかゝるに突き廻まわはして、取つて押へ。)

才次 コリヤこれ下郎げらうの鮎助あなづけ。

市郎 かまはずと行けく。

才次 ハア。(ト立廻はつて、見事に投返し、花道へはひる、奥よりおらん出で。)

らん 九市郎様。

九市 おらん殿。

らん 様子は残らず聞きました、思ひも寄らぬ今宵の旅立ち、迎も斯うなる上からは、お連れなされ

て下さりませ。

九市 なかく以て左様な事が、大事を前に抱へながら女を連れては足手まとひ。

らん それぢやと申して。

九市 そちは後に残り居て兄者人の御介抱、我れは是より直様發足。(ト立ちかゝるを。)

鮎助 われをやつては。(トかゝるを突き廻し。)

九市 たとひ鐵石域に隠しあるとも、香爐を無事に取返し姫君の御供をして立ち歸らん。

市郎 オ、潔しく、身共は是より曾平太を言議いたし、短刀の在所も何れ今宵の中。

九市 然らば此ま。(ト鮎助を投る事あつて。)おさらば。(ト行きかける。おらんとめる。)

市郎 早行け。

九市 ハア。(ト急ぎ花道へはひる。市郎右衛門、後を見送り。)

市郎 ハテ、いさましい。(ト又廻助かゝるを刀を引つたくり斬りつけ。)
若者ぢやなア。

トポンと返すを、道具替りの知らせ、おらんは市郎右衛門に取り付き、市郎右衛門は向ふを見込む
よろしく合方にて廻る。

本舞臺一面黒幕、牢屋の塀、忍び返し附き。眞中に柳の立木仕掛あり。よき處に番所行燈、上手に
文吾相引にかゝり居る。傍に牢屋の役人兩人、十手を持ち控へ居る。此見得、時の太鼓にて道具留
る。

文吾 此度、大殿の御不憚に就き若殿には御出度、彌次右へ差し出す短刀の紛失、詮議の日常は安達甚助

を手にかけてし長濱曾平太と極りし故、此程より拷問にかくれ共、今に於て白狀いたさぬよし、
御家老市郎右衛門様の仰せを受けし此文吾、只今短刀の在所白狀させん、ソレ曾平太を此處
へ。

兩人 ハア、畏つてござります。(ト兩人上手へはひり、纏付きの曾平太を引出し來る。)
下におれ。

會平 コリヤ、さう大きな聲をするなえ、俺が勝手に下に居るわ、どいつもこいつもまじまじと
したしやツつらだわえ。(ト曾平太こなしあり、文吾思入あつて。)

文吾 コリヤ、曾平太、其方先達て安達甚助を手につけ、松倉卿の短刀を盗み隠せしに相違あるま

い、サア眞直に白狀いたしてしまへ。

會平 イヤ、一向に存じませぬ、覺えはござりませぬ。

文吾 ム、しぶとき一言、ソレ責にかける。

會平 たとひ水火の辨問でも、白狀いたす氣は毛頭ござりませぬ。

文吾 ヤア、憎き一言、ソレ。

兩人 ハア、(ト立ちかゝるを、此時下手より奴退灯を持ち、後より市郎右衛門出る、)

文吾 是はく御家老様。

市郎 ヲ、文吾大儀く。(ト入れ替り、上手へかけ) シテく、白狀いたせしか。

文吾 ハア、情けを以て、色々に詮議いたしますれど、今以て白狀はいたしませぬ。

市郎 ム、さうあらうく、此奴中々一應や再應にては申すまじ、今宵の吟味は某が直々にいた

すであらう、其方達は此所を遠ざかつてよからう。

文吾 畏つてござります。

市郎 コリヤ文吾、其方は。(ト囁く。)

文吾 畏つてござります。(ト棒鞘の刀を市郎右衛門に渡し、皆々下手へはひる。)

市郎

コリヤ會平太、其方が一命はお家の大事にかゝはる命、足輕風情がお家の實に、目をかける調はあつまい、コリヤ外に頼み手があらう。サア、其頼み手は何者ぢや、白狀さへいたすれば誰人の褒美、一命を助け金子を與へ追ひ拂はうが、サア、盗み取りし短刀の隠し處を申上げい、どうぢや。(ト物和かに言ふ。會平太こなしあつて。)

會平

ム、待てよ、白狀さへすりや命を助けた上で褒美の金、コリヤ、味い風が吹いて来たわい。

市郎

只今言ひ聞かす通り、白狀なせばその身の仕合せ、又たつて白狀せずば是を見よ。ためさねばならぬ新身の刀、不便ながらも此場にて。

會平

ム、如何にも味い話だが、マアよさう、短刀の在所何も彼も言はせておいてばつさり、イヤ、そんな甘口に乗るやうな、會平太ぢやないわえ。

市郎

スリヤ、如何様に申しても。

會平

千度言つても同じ事だよ。

市郎

モシ又此場に於て助けなば。

會平

命に替る實はない、白狀せうかい。

市郎

スリヤ、しかと白狀いたすか。

會平 ハテ、御念ごねんには及びませぬ。(ト市郎右衛門思入あつて袴鞘をぬき。)

市郎 エイ。(トいましめの繩を切る。)

會平 これは。

市郎 サア、命いのちは助けた、して短刀たんたうの在所ちよかと申すは。

會平 ム、命いのちを助かる上うへからは、短刀たんたうはお渡わたしいたしませう。

ト會平太上手へ行く。市郎右衛門提灯を持ち、目を附けて居る。此時後より辰次頼冠り尻からげ手鎗を持ち、柳の木を傳ひ、塀の上よりおりる。會平太捨石を取り退け、下より短刀を出して。

會平 則すなはち松倉まつくら柳やなぎの短刀たんたう、イザ御受ごうけ取り下くださいまし。

ト差し出す振りにて割斷を見す。し斬りつける。辰次、提灯の火を消す。市郎右衛門は會平太の短刀を引つたり引きさすへる。此時辰次、市郎右衛門の太股の處を突く。市郎右衛門突かれ乍ら。

市郎 欺たぶらし討うちちとは卑怯ひけつな奴やつめ。

辰次 こま言ことぬかさず、くたばつてしまへ。

ト鎗を捨て、刀にて斬つてかゝる。此中へ會平太はひり短刀にて斬りつける、市郎右衛門深手を負ふ、三人よろしく立ち廻はつて、市郎右衛門斬り倒され、とどめをさす。

辰次 ヤレ／＼、中々手強い奴だわえ。

會平 大骨を折らしやアがった。(ト短刀を出し。)是が則ち望みの短刀。

辰次 かたじけない。併し、そちも身共も、高飛びせずばなるまい。

會平 そりや、あたりまへでござります。(ト兩人行かうとする。此時番人兩人出で。)

番人 曲者。(ト一人ッ、かゝるを、ボンと返し。)

辰次 早く行きやれ。

會平 合點だ。(ト花道へはひる。辰次柳の木へ登り、向うを見込む。此道具廻る。)

本舞臺平舞臺、一面牢屋の埒外の模様、番小屋、此真中に才次郎、柳の枝の動くのを見てゐる。此傍に琵琶平龕燈提灯を持ち袖に隠して窺うてゐる。此見得、合方にて、道具とまる。ト本釣鐘虫の聲にて、辰次以前のなりにて柳の木を傳ひ、塀を乗越へ、番所の屋根を足代にし飛び下り、身拵へして行きかゝるを、兩人こなしあつて、才次郎、辰次の帯際を取つて引き戻す。琵琶平龕燈を差し出す。辰次たきおとす。是にて三人きつと見得、辰次逃げようとするを、琵琶平向ふへ廻り立ちふさがる。辰次、才次郎に斬りつける。才次郎身をかはし立廻はつて、辰次すりぬけ花道へかかる。才次郎すかし見て

才次 曲者。(トすかす。)

辰次
エイ。

ト小柄を打つ才次郎程よく受け留める。琵琶平は下に居る。才次郎向ふを見込むを木の頭、辰次は走りはひる。後双方引張りよろしく。

ひやうし 幕

三幕目

阿雷明神前の場

信州十市渡しの場

役名

唐崎九市郎、同才次郎、守山辰次、田村外記左衛門、篠塚傳内、絹屋

松之助、宿引き兵四郎、刑部家來寸平、もがりの竹、すりの辰、田村の娘お

まさ、娘おつる、浪人の薬賣り、茶店の女房お銀、旅僧、醫者、馬子、船頭

田村の供等。

本舞臺平舞臺。向ふ淺黄幕、上の方石の鳥居、玉垣、松の立木。下の方、葭簀張りの出茶屋真中に
壺間半の床几を直し、薬賣り、浪人のこしらへ、深靱笠、朱鞘の一本差し、薬箱の上に紙を並べ、

研

辰

三四九

口上を言つてゐる、此傍に病人の腹ふくれ杖にすがり居る、旅僧、醫者、立つてゐる。巾着切りの辰、皆々の腰の廻りを窺居る。下手に絹屋松之助、半合羽、脚絆、壺本差しにて煙草を吞み床几にかゝり居る。茶店の女房、前垂れがけにて仕出しを呼んで居る。參詣の旅人行き遊び、此見付辻打ちにて暮あく。

女房 サア、どなたもお休みなすつてお出なさいまし。

藥賣 私が家の名法萬病療治膏と申すは、世間の醫者が見放したる難病でも、即座に治るといふ妙藥

でござります。

松之 時にお銀さん、隣りの吾妻屋は皆達者でござらぬか。

女房 ハイ、どなたも變る事はござりませぬ、さうしてあなたは東屋へお泊りかえ。

松之 いつも此宮の本では、向うが定宿でござるわいなう。

女房 左様でござりまするかえ。

醫者 コレ、藥屋さん、この萬病に利くといふ藥を私に賣つて下さい。

藥屋 サア、お購め下さい。

旅僧 イヤ、斯う見た處が其許は醫者の様子、醫者が藥を買ふといふのは、どういふものでござりますの。

醫者 ハア、問はれて誠に面目ないが、此頃始めた醫者故に藥の調合を存じませぬ故、萬病の藥にて、間に合はさうと思ひまして。

旅僧 それで、受け賣りと出かけたのか。

醫者 イヤ、面目次第もござりませぬ。

松之 イヤ、お銀さん、大きにお世話になりました。

女房 是から何處へお出なさいます。

松之 明神様へ參詣をして、吾妻屋へ行つて泊ります。

女房 それでは、晩程又お目にかゝりませう。

松之 ドリヤ、參つて來ませうか。(ト神樂になり、松之助、鳥居の内へはひる、巾着切り後をつける。)

旅僧 愚僧も參詣いたさう。

醫者 そんなら、藥屋殿。

藥賣 有難うござりまする。(ト皆々鳥居の内へはひる。藥賣りと茶店の女房残る。)

女房 モシ、藥賣りの銀藏さん、大分賣れましたねえ。

藥賣 イヤおかげで商ひがありました、ドレ 私は一寸呑んで参ります、店をお頼み申します。

女房 サア、行つておいでなさいまし。(ト霞笠の内へはひる。唄になりおつる振袖にて出る。)

兵四 モシ、おつるさん、おつるさん。(ト宿引兵四郎、後より出で来り。)

つる オ、驚れかと思へばこなたは兵四郎、こなたに用はありませぬわいなア。

兵四 おまへはなうても、私はあるのぢや、マア、向うへお出なされませ。(ト本舞臺へ来る。)

モシおつるさん、おまへはなア。(ト合方になり。廿四孝の温衣ではないが、そも内方へ奉公に來た其の日からお姿を見てツイ可愛らしいと思つたが因果の縁、其故此明神様へ立願して、思ひ焦るゝ此兵四郎、少しはさつして下さりませいなア。

ト此時茶店の女房出る。

女房 モシ兵四郎さん、それでお前はすむかいなう、イ、エイナア、妾が斯うして稼ぐお金も、皆ん

なお前に入り上げて、今更おつるさんに見替へるとは、アノ愛な女喰ひめが。

兵四 エ、つべこべとやかましい、今大事の處ぢや、引き込んで居ろ。

女房 引き込んでゐろもないものだ、腹さんさん欺しておいて、妾や腹が立つてゝならぬわいな

ア。(ト兵四郎の胸ぐらを取つて立廻る、おつる、鳥居の内へはひる、兵四郎見て。)

兵四 南無三、おつるさんを逃がしては。(ト行かうとするを。)

女房 お前をやつて、なるものかいなア。

ト兩人立廻り、兵四郎先に女房はひる。大拍子になり花道より、辰次着流し、深編笠、浪人のこしらへにて出で來り

辰次 ア、殊の外なる宮居の繁昌、實に泰平の御代ぢやなア。

ト本舞臺へ來る。此時、下手より、下郎寸平、半纏股引、大小飛脚のこしらへにて三度笠を持ち出で來り、顔を見合せ。

辰次 コリヤノ、其方は刑部様の家來、寸平ならずや。

寸平 ム、ウ、さうおつしやるは、慥に。(ト笠の内を覗き。) ヤア、あなたは。

辰次 コリヤノ、めつたに本名はいはぬ事ぢや。

寸平 イヤモウあなた様のお行衛を、處々方々と尋ねました折柄、則ち主人刑部様より、お尋の御書狀。(ト首にかけし狀箱を渡す。辰次、あたりに氣を兼ね讀み終り、腰より矢立を出し、返事を認める。)

辰次 遠路の所お使ひ大儀、委細の儀は認めあれば、よろしく御手渡し申してくりやれ。

寸平 ヘイ、畏りました。(ト狀箱を受取り。) 眞平御免下さりませう。(ト寸平花道へはひる。)

辰次 ア、木にも萱にも恐るゝ此身、誠にびつくりいたしましたわえ。(ト此時兵四郎出で。)

兵四 何處へ隠れたか、一向に知れぬわい。(トウロく搜してゐる。)

辰次 ア、コリヤく、兵四郎、兵四郎、(ト是にて、笠の内を覗き。)

兵四 ヲ、是はく、旦那様、あなた様には何御用あつて、此處へ。

辰次 イヤ、其方に用事あつて、近うく。

兵四 ヘイく。(ト合方になり、腰をかけ。)

辰次 元來そちは身共を育てし乳母の倅、いはゞ譜代の家來も同然、ナリヤ、何事も打あけて、頼む

は其方只一人。

兵四 ヘイ昨日御嶽の宿で不思議にもおめにかゝりましたが、一家一門に見放され、此信州路迄さ迷

ひ來て、今では吾妻屋の奉公人、お頼みにもなりますまいが、よい折柄でござりました。

辰次 それに就き密々の話と言ふは、圓元より持参せし路銀も手薄に相なれば、此短刀を、質入れな

してくりやれ。(ト短刀を出し。)

兵四 ヘイく、爰は田舎の事なれば、日の明いたものもござりませぬが、力いつばい働ませう。

ト此時鳥居の中にて。

つる お銀さん、妻や先きへ行きますわいなア。

兵四 ヤア、ありや、モウ歸りか。

辰次 たつた今刑部様より、御内意の書狀到來。

兵四 エ、一寸待つて下さりませ。(トあわて、鳥居の中へはひる。)

辰次 ア、コリヤ兵四郎、ハテ信をきよとく、一向頼みにならぬ奴、こりやうつかり大事の品をあ

づけて近年の粗相と申すもの、何はしかれ宿迄歸り一思案いたして見よう。

ト静かなる大拍子にて、花道にかゝらうとして、向うを見て、

ヤア、あれへ參るは慥かに唐崎九市郎、彼奴に逢うては面倒だ。(ト又後へ立ち戻り。) 織日な

れば、社内も定めし人込みならん、コリヤ、いかどいたしたものであらう。(トいろくうろた

へ、茶屋の見世を見て。) ム、よし。

ト深編笠を冠り居る。此時大拍子にて、花道より九市郎四天割りかけ、菅笠を持って出來り。

九市 ム、向うに見ゆるが當國の神社阿曾明神、ハテ賑かな宮居ぢやなア。

ト矢張り右の唄にて、本舞臺へ來ると、鳥居の中よりおつる出で。

つる お銀さんは、モウ行かれたかしらん。

九市 オ、幸ひの此茶店、是にて暫く休息のいたして參らう。

トおつると行き違ひ、互ひに除ける心にてつけまはし、おつる九市郎に見惚れる思入。九市郎、かまはず床几にかけ。

九市 イヤ何女中、こなたは此茶店のあるじかな。(トおつる上氣して、耳へはひらぬこなし。)

茶を一ツ下されい。ト矢張り黙つてゐる故、煙草を吞まうとして。) コリヤ火がござらぬ、火を一ツ下されい。ハア此娘は聾ぢやさうな。(ト此中女房鳥居の中より出る。)

女房 オ、店にお客さうな、ようおいでなされました。

九市 コリヤ、煙草の火をくりやれ。

女房 ハイ、消えましたかいなア。(ト茶釜の下の火を入れて持つて来る。おつるとらうとする。) おつるさん何をしなさる。(トおつるかまはず引つたくり、)

つる ハイ、お火をあげませう。

九市 ハ、ア、聾でもなかつたさうな。

ト此中辰次、笠の内より九市郎を見て立たうとする。九市郎こちらを見ると又藥などいぢくり居るおつる矢張り見惚れてゐる事。

九市 さうしてお女中、モウ何時でござるな。

つる ハイ何時でござりませうなア。

九市 モウ、七ツでもあらうかな。

つる 七ツでもござりませうなア。

九市 ハ、コリヤ、餘程時刻が遅れた、ドレ／＼一寸參詣して宿を取り、休息いたさう。些少なれども茶代は爰へ。(ト懷より、錢を出してやる。)

つる モそつと、御ゆるりお休みなされませ。

九市 イヤ、ゆるりと休みました。(ト行かうとする。)

つる ア、モシ、(ト留める。)

九市 イヤお世話でござつた。

ト振り切り九市郎辰次の前を通る。是にて辰次面を背ける。此内九市郎は鳥居の内へはひる。おつるはうつとり見惚れて居る。此内女房は店を仕舞ひ。

女房 今夜はおまへの處へ嫁御を連れて行かねばならぬ、私も早仕舞にして行きますせう、モシおつる

さん。(ト言へども、見惚れて居るゆゑ。)モシ、行かうではないかいなア。

つる オ、びつくりした、妾しや行くのはいやぢやわいなア。

女房

遅うなつたら清兵衛さんのお叱り、サア〜ござんせいなア。(ト手を取りはひる。)

辰次

ア、ヤレ〜、あぶない事〜、彼奴が當所へ入り込んだれば最早此地に足は留められぬ、今宵の中に難所を越へて北國路へ志さん、コリヤ急に心がせいて來たわえ。

ト神樂になり、氣を急いで、辰次下手にはひる。パタ〜にて鳥居の中より、松之助、すりお辰の袖を捕へ、出て來り。

松之

オ、お前ぢや〜。

辰

エ、おりやア知らねえと言ふ事よ。(ト競り合ふ、此時もがりの竹、博奕打のなりにて出る。)

竹

何だ〜、わりやア辰ぢやねえか、どうしたのだ〜。

辰

ヲ、竹か、此二才め、おれを盗人だとぬかしやアがるから了簡がならねえのだ。

ト言ひ乍らそつと竹に錢入れを渡す。此前より九市郎鳥居内より出て見て居て思入あり。

松之

エ、盗人猛々しいと、おのれが奪つたに違ひない、サア戻してくれ〜。

竹

かう〜、若い〜、マア〜待ちねえ、おりやア此土地でもがりの竹といふ顔役だ、奪られたに違ひなくば取り返してやる、マア〜まちなせえ〜。

松之

ハイ〜、宜敷うおたのみ申します。

竹 奪つたと言ふのも奪らねえと言ふのも、證據がなけりや水掛論だ、裸になつて震つて見せるが
510。

辰 よし、見せてやらア。(ト帯を解き、着物を振ひ。) サア、どうだ、あつたか。

松之 エ、おのれ、今現在懐から、奪つた紙入れ、ない筈はない。(トよくよく見て、不審の思入。)

竹 どうだ有るか、イヤサ、紙入はあつたのか。

松之 ハテ、たしかに。(ト是にて、辰は松之助の襟髪を取つて。)

辰 アノ爰な大がたりめが、よくも言ひがけをしたな、サアどうするか、覺えてゐやアがれ。

ト握りこぶしにて打つ。

松之 エ、悔しいく。(ト打たれ乍らもがく、此時九市郎辰を投げる。)

辰 アイタ、、、。(ト竹前へ出で。)

竹 イヤお侍、おめえは何しにこゝへ。

九市 何しにとは横道者、紙入れを奪ひ其上に、馴れ合つて打ち打擲、見かねて留に出たのだわ。

竹 ム、それぢやお前さんも此奴をば、盗人とおつしやるのか。

九市 さう言ふ汝も同類なるわ。

竹 何だとは。

九市 サア、只今是にて見てをれば、留る振りにて立ち舞ふ中、手から手へ渡せし紙入、身共が慥かに見届けおいた。

辰 それ知られたら、モウ是れまでだ。

竹 ウス、覺悟しやアがれ。

ト兩人して九市郎に打つてかゝる。九市郎立廻つて竹の懐中より紙入を引き出し、松之助の前へ投げ出して、兩人を打ちすすえる。

九市 それにてとくと、改め見やれ。

松之 お蔭で無事に戻りました、有難うござります。

九市 ち、うが無くば、こやつも勝手に。(ト突き放す。兩人下手へ逃げてはひる。)

松之 何れのお方が存じませぬが有難うござります、私は甲州郡内にて紺屋松之助と申す者、當所へ糸の買ひ出しに参り、元手の金子を奪られましては、國元の親共へ申譯もござりませぬ所、あなた様のお蔭にて無事に戻り、嬉しうござります、何卒失禮ではござりまするが、私の宿迄お越し下さりませうなれば、有難う存じます。

九市 イヤ、御厚志の段は過分なれども、望みあつて遍歴いたせば、その意には任せ難し、自儘なれ

どもこのまゝに。

松之 左様に仰せられましたは、違つてと申すも却つて失儀。

九市 イヤ、決してかまやるな、障りなき申少しも早く。

松之 左様なれば、御言葉に随ひまして。

九市 氣を附けて参れ。(ト大拍子になり、松之助は花道へはひる。) コノ身が参らずば危い難儀、ハテ仕

合な男ぢやなア。(ト思入あつて。) 國元を出でし口より、晝は一日足に任せ、夜は早泊りの旅、

とても、旅人の噂に耳を恃て様々と心を碎けど、香爐の在所姫君の御行衛、今に於て手がかり

なく。(ト此時以前のナリ辰窺ひ出で。)

辰 ウヌ。(トかゝるを。)

九市 ハテ、何とした。(ト投げ退けて。) ものであらうなア。

ト此模様よろしく思案のこなし、合方にて道具廻る。

本舞臺向う淺黄幕、通しの草土手。上手の方、浪板渡し場の上り口。下手、松の大樹蘆原、此前に

田舎茶屋、茶店の亭主庭を敷き、草鞋を作つてゐる。すべて信州姫津川十市渡しの場合。在郷唄にて、
道具留る。

ト上手より渡し船にて、仕出し大勢乗つて来る。船頭竹俵をさして出で。

船頭 ソレ、當るぞく。(ト皆々、捨ゼリフにて下手へはひる。) オイく、太助どん、青柳の酒樽はまだ來ぬか。

亭主 ライ、まだじよ。

船頭 さうか、そりやア勝手が悪いなア。

ト言ひ乍ら船を漕ぎはひる。馬子唄になり、花道より才次郎、かるさん風呂敷包を背負ひ、大小に出る、後より馬子やかましく言ひ乍ら出て來り、花道にて。

馬子 ライく侍、さう二本差しだと思つて威張るなえ、威張るなえ。

才次 何の威張るの何のと、迷惑千萬な事を申す奴ぢや。

馬子 それぢや何故乗らうと言つたに、何故乗らねえのだ。

才次 イヤ、此方馬、駕は望みでない、初手から斷りを申したのぢや。

馬子 エ、何をぬかしやがるのだ。(ト才次郎の手を取り。その手を振ち上げる。)

才次 エ、命冥加な。(ト突き放す故。)

馬子 おれ様ぢやなア。(ト馬子逃げてはひる。)

才次 何處の浦にも國に盜賊、彼奴も刀の錆になる奴、アゝなげかはしきものぢやなア、オ、向う

へ見ゆるが十市の渡し、ドレ船の便りを相待たうか。(ト舞臺へ来る。)

亭主 お休みなされておいでなさいまし。

才次 如何さま口脚も七ツ下り、休息いたして參らうわえ。

ト腰をかける。亭主茶を出す。禪の勤めになり、上手より外記左衛門着附、ぶつさき羽織、野袴、大小にて、娘おまき、振袖の旅なり杖を突き、奴兩掛を傍に置き、船にて出る。

船頭 旦那、上り場を氣を附けて下さいまし。

外記 オ、娘、すべらぬ様に氣を附けて參れ。

まき アイ〜。

外記 コリヤ角藏、兩掛を氣を附けろ。

角藏 ヘイ、畏りました。(ト外記左衛門先に、皆々上り。)

外記 そんなら娘、そろ〜行かうか。

まき ハイ、參りませうわいなア。(ト鳴物キツバリとなり、舞臺を歩きながら) 申し父さん、あの傳内

と言ふ奴は、悪い者人でござりまするなア。

外記 イヤモウ、悪いのなんのと、それ故に工夫して昨夜の泊りで出しぬき、是にて厄病神を拂うた

と言ふものぢや。

まき 是で私も、心が落着きましたわいなア。

ト言ひ乍ら花道へ行きかゝる。花道より篠塚傳内、半纏ぶつさき殿引にて、後ろを振り返りノ、こなしあつて。

傳内 先へ行きしか但しは後か、是非見當てたいものぢやなア。(ト附け際にて、行き逢ひ。) オ、是

は是は外記左衛門殿、おまき殿、お早うござつたなう。

外記 オ、篠塚氏か。(トおまきと顔を見合せ。)

まき 傳内様。

傳内 イヤモウ、御兩所に逢はうと存じ地藏の辻から近道を横切り、青柳迄参る道の棒鼻にて尋ねた

れば、まだお越しはないとの事、それでは道が違つたのかと取つて返して参りましたが、ハテ

よい處にてお目にかゝり、ヤレく嬉しやく。

外記 未明に宿を立ちました時、御手前には寢入つてござつた故、給仕女に傳言をいたし、ソロク

是迄参つてござる。

傳内 青柳迄は一里餘り、暫く是にて休息いたして參らう。

外記 何さま、ソレ角藏兩掛をそれへおろせ。

角藏 へいへい。(ト兩掛を下ろす。)

外記 サア、娘もかけやれ。

まき アイへい。(トかける。)

外記 ドリヤ、一服いたさうか。(ト皆々かけて。)

傳内 外記左衛門殿、途中ではござれども、御同宿も今晩限り、是非明日は追分より、お別れ申さ

やならぬ仕儀、就いては諏訪の温泉にて申し上げたる、御息女の身の上。

外記 不束な娘を度々の御所望なれども、彼れには言號の夫がござれば、心に任せる譯には參らず、

夫故御斷り申せどもお聞き入れなく、又候の仰せ、此儀はひたすらお斷り申す。

傳内 サアそこでござる、たとひ言號がござらうとも約束變替は常の習ひ、殊更貴殿の御病中、書夜

御介抱申す中おまき殿にも申し聞けたら、父上さへ得心なら如何様共と、申されたれば。

まき 左様に申したは當座の退れ、父様は御病中無體な事をなさる故。

傳内 スリヤ、身共を欺されたのか。

外記 アイヤそれは格別、武士たる者が一旦約束を致しおき、今更違變が相成りませうや、御手前には、是迄の縁と諦め下されい。

傳内 ム、スリヤ武士故に約束をば、面白、身共も武士だ、言ひ出した上からは刀にかけても貰うてみせう、サア田村外記左衛門、性根を据えて返答おしやれ。

外記 さう聞いては愈々罷りならぬ、御身が刀にかけらなら此方とても刀にかけて、やるまいと云うたら如何いたす。

傳内 ム、斯うするわ。(ト息込む。此時才太郎ツカ〜と出で。)

才次 御兩所待つた、暫く〜。

兩人 何と。

才次 只一言申し度き仔細がござる、御兩所共に早まりめさるな。

外記 見受けますれば旅のお侍。

傳内 我々が争ひをば。

兩人 お留めめされし、其仔細は。

才次 外でもござらぬ、身不肖の拙者なれども、お預けなされて下さるまいか。

外記

心有こゝろり氣けな侍さむらい、手前てまへは事ことは好このみ中まをさぬ。

傳内

拙者せつしやは貴殿きでんの留とどめられし、其仔細そのしさいを承うけたまはりし上うへの事こと。

才次

サ、其所そこでござる、御兩所ごりやうしよ争まをひなさるれば、討うつか討うたるゝは知しれた事こと、左様さまようあつては第一さい主ぬし君くんに對たいして大不忠だふちゆう、又また貴殿きでんとても主ぬしる女おんなを御所望ごしよぼうなさる御心根ごこころねは、近頃ちかごろ狭せまい御分別ごさべつべつ。

傳内

だまらつしやい。

才次

挨拶あいさつは時ときの氏神うぢがみとやら。

傳内

だまらつしやい。

才次

此争このまをひは何卒拙者なにとせつしやに。

傳内

エ、だまりをらう、身共みどもに於おては不承知ふしちだ。

才次

ム、スリヤ御得心ごとくしんはござらぬか。

傳内

知しれた事ことだ。

才次

成程なるほど、御手前おてまへの如ごとき人面獸心じんめんどうしん、利非りひのわからぬ侍さむらいは理解りかいを申まをしても聞き入きいれまい、それでも侍さむらいか。イヤサ武士ぶしか。

傳内

イヤ、言いはせておけば、雑言過言ざつごんくわごん、汝なんから先さきへばらしてくれるは。(ト抜き打ちに斬りつける)

才次 是はまた御短慮千萬、御承知なければ、御相手になりませうか。(ト利き腕を振じ上げる。)

傳内 サア、それは。

才次 御得心下さるか。

傳内 サア、それは。

才次 御返答は、如何でござる。(ト突き放す。此内外記左衛門、感心せしこなし。傳内思入。)

傳内 ム、如何にも挨拶承知いたした。

才次 然らば違背ござらぬか。

傳内 オ、如何にも。

才次 それでこそ、拙者の詞も相立つ、イザお刀を。(ト拾つてやる。傳内きまりの悪きこなし。)

傳内 最早用なき拙者故、罷り歸る。

才次 サア、御勝手に御出なされい。(ト傳内二足三足行きかけて。)

傳内 ア、思へば〜。

才次 まだ言ひ分がござるか。

傳内 イヤ、何もないわい。(ト花道へ走りはひる。才次郎後を見て。)

才次 ハ、ハ、ハ。(ト笑ふ。外記左衛門見て。)

外記 イヤ、御年若とは申し乍ら、天晴の御手の内、實に感心、ナウ娘。

まさき サイナア、さうしてまア、天晴な殿御振り。

外記 お齒を以て無事に納まり、何と御禮を申さうやら。

まさき 有難う存じます。

才次 是はく痛み入つたる御挨拶、イヤ何れの家來か存ぜね共、世には無法な奴もあればあるもの、嗚お困りでござつたらう。

外記 未熟の拙者ではござれども、彼等如きの二人や三人、あながち恐るゝにはあらねども、娘といふ足手まといがござる故斯くの仕合、又拙者には鎌倉の呢近田村外記左衛門と申す者、近頃

は、弟内記に家督を譲り諸大名方へ射術の指南、シテ又御身様の御姓名は。

才次 お尋ねなくとも此方より、名乗るべき筈なれども、浪人なればおこがましく。

外記 何、御浪人とナ。

才次 一所不住の境界でござる。

外記 近頃不躰ながら拙者宅へお越しあつて、門弟共の御世話下さる譯には参るまいか。

才次 近頃不躰ながら拙者宅へお越しあつて、門弟共の御世話下さる譯には参るまいか。

研 辰

まき ほんに今日の御恩送り、おいやではござりませうが、妾の家へ御出あつて、ならう事なら一生でも。

才次 イヤ、其儀は身共如何ばかり、大慶至極に存すれども、大切な望みがござれば。

外記 ナニ大切な望み、スリヤ早残念千萬、次第によらば不束の娘の聲に願はんと思ひし事も成らざるか。

まき そりや、妾のお願ひも。

外記 オ、是非ない儀ぢやと諦めよ。

まき ハアー。(ト泣く。)

才次 イヤ、數ならぬ拙者をば、左程迄仰せあるは御難き事なれど、それにしても御兩所の御言葉にては、御息女には御言號の有る御様子。

外記 イヤ、其儀は傳内の無理所望を防がん爲の作り事。(ト思入ありて。) 只今仰せありし御望みの儀。

(トすこし考へ。) 矢流一家の奥儀を極め、武藝といひ天晴智勇、ム、其望みの儀は、扱は御邊が心中身共の推量、よもや相違はござるまい、左様とは存ぜずに身勝手な事申し並べ、而目次第もござりませぬ。

才次 ア、よしなき拙者がお出合申し御心配をかけ申した、望みだに成就の上は縁組の儀は叶はず

とも、再會の時節もござらう。

外記 申す迄もなけれ共、何分共に御身を大事に。

才次 其許様にも御健勝にて。(ト暮六ツの鐘なる。)

外記 南無三、最早暮るゝさうな。

才次 哀れを誘ふ、秋の暮れ。

外記 心残りは多けれども、

才次 最早お越しなさるか。

外記 是非に及ばぬ、御別れ申さう、サア娘行けく。(ト言へども、名残りを惜しむ思入。)ヲ、道理、

ハテ扱行けと申すに。(ト花道へ突きやる。角藏は雨掛を擔ぐ。おまきは見返る。)アア、挾箱が目障り

になるわえ。(ト雨掛が邪魔になるこなし。)アノ傳内めが不行跡。

まき それに引き替へ、花も實も。

外記 右にはいやなり。

まき 思ふはならず。

外記 とは能く言うた、たどへやなア。(ト唄になり、心を残して三人花道へはひる。)

才次 ア、思ひよらざる親子の親切、若し鎌倉へ赴く時は、コリヤよい便りを求めたわえ。

ト禪の勤めになり、花道より以前の寸平出て来り。

寸平 暮れたれば渡しがあるまいと、急いで爰に参つたが、どうやらまだある様だ。(ト本舞臺に来て)

コリヤ、せんどうく。ト呼ぶけれども、運事なき故。エ、寝てでもゐるか、いまくしい。

ト才次郎、寸平に目をつけ、

才次 御手前は、江州粟津家の御脚ではござらぬか。

寸平 オ、如何にも。イヤく大阪の者。

才次 イヤ、かくさつしやるな、丸に木の字の合印。

寸平 ヤア。

才次 見知りある齋部が家来、何と違ひはあるまいがな。(ト是にてよくく見て。)

寸平 ヲ、ほんにわりやア比良井才次郎。

才次 ム、扱は會平太、辰次への内通の使ひだな。

寸平 イヤ、そんな使ひぢやないわえ。

才次 心得ぬは其狀箱。

寸平 コリヤモウ、たまらぬ。(ト逃げ出すを引戻して、狀箱を取り上げる。) それ奪はれては。

ト抜き身にて切つてかゝる。立廻りの内狀箱を投げつける。是にて密裏出る。

才次 何々、邊路の處御書狀有難く、つぶさに拜見仕候、此所は讀むに及ばず。

寸平 それを。(ト取らうとするを、引きまはして。)

才次 且又短刀の儀、仰せ下され 早速返上仕り度候へ共、末々に拙者出世の種共仕り度候へば、御斷り申上候、違つて御懇望に候はゞ金子二百兩、御つかはし下さる様頼み上げ奉り候、以上、粟津刑部殿へ、守山辰次より、ム、ム、コリヤよいものが。

寸平 それを。(ト又取りにかゝるを見事に返し、足にてふまへるを、木の頭。)

才次 手に入つたわえ。

トよろしく、合方にて。

ひやうし 幕

四幕目 吾妻屋の場

役名

唐崎九市郎、同才次郎、守山辰次、吾妻屋清兵衛、絹屋松之助、下
兵四郎、すりの辰、清兵衛妹あつる、花嫁お宮實は腰元宮城野、下女およし
茶屋女房お銀等。

一本舞臺、平舞臺、正面本二階。見附納戸口。下手に駄荷の書割り。上下押入れ。此上手大段階子、
上手高二重の中二階。下手板摺、此前に馬除けの石。いつもの座門口。是にかけ行燈、商人衆御
宿、吾妻屋、と書いてあり。右平舞臺に亭主清兵衛、煙草盆を控へ居る。前幕の松之助着流しにて
脇に座り、飯を喰つてゐる、下女給仕をしてゐる上手に娘おつる、鏡臺に向ひ髪を撫で付けてゐる。
丸行燈に灯を踏し。向う通るは熊野道者の唄にて、暮あく。

下女 もそつとお上りなされませ。

松之 イヤもう澤山でござります。(ト箸をおく、清兵衛こなしあつて。)

清兵 若旦那、只今のお話は、危い事でもござりましたなア。

松之 イヤモウ危い段か、命がけの目に遭ひました。

清兵 あなたも御存じかは知りませぬが、此宮の本から二里足らずの、信州越中の関境、くりから峠

と申す所へ山賊の頭が住んで、手下の盗人が此邊へ働きに出る取沙汰。

松之 フム、そんなら大方今日の奴等も、その手下でがなあらうわい。

下女 モシ、御膳がすみましたら、お湯をお召しなされませ。

松之 ハイ、イヤモウ怪しからぬ目に遭うたので、大分に草臥れました。

清兵 コレおよしや、按摩を呼んで来いよ。

下女 畏りました。

松之 そんなら清兵衛。

清兵 ごゆるりとお休みなされませ。(ト松之助下でおよし、奥へはひる。) まあ何は兎もあれ、若旦那

運の強い御方ぢや。

つる モシ兄さん、最前茶店のお銀さんが、今夜は嫁さんを連れて来ると言はしやんしたが、そりや

本眞の事でござりますかえ。

清兵 さればさ、そちも何時迄迄家へも置かれず、何れへなりと、嫁入りさせねばならぬ身の上、さう

なる時は後が困れば、相應な者があれば世話してくれと頼んであるが、さうして今夜連れて来ると。

つる アイ、言うたわいなア。まア兄さんも嫁御が来るなら、いろく仕度もあらうのに、その様に落ち附いてゐて、すむかいなう。

清兵 サア、突然に来る嫁ぢや、何なり共有り合せた器で、ツイ杯を出しておけ。

つる いくらかまはぬと言うても、何か支度をせすばなるまい。是々、誰かおぢや。

兵四 ハイく、(ト奥より出る)何か御用でござりまするか。

つる アノ今夜急に兄さんの處へ、お嫁が來るとの事、祝儀のお肴を拵へてたもや。

兵四 ハイ、畏りました。

つる 早くたのみますぞや。

兵四 ハイく。(ト奥へはひる。引き違へて下女およし出る。)

下女 おつる様、御目出度いお話でござんすなア。

つる オ、よい所へ來た、そなたは押入れの欄にある三ツ重ねの杯と、お正月の組重と、銚子を出したも。

下女 ハイ、畏りました。(ト奥へはひる。)

つる コレ兄さん、お前風呂へなとはひり、首筋の袷でも落しておきなさんせいなア。

清兵 コレ、何を言ふぞい、正のものを正で見せる、汚れた所が値打ちや。

つる エ、モウ、負惜みな事ばかり、しんきな御方ではあるわいなア。

ト賑かなる唄になり、花道より以前の茶屋の女房お銀、二升樽と肴籠とを持ち出る、後より、嫁お宮着流し、綿帽子にて、風呂敷包を廻へ、出て来り。

お宮 コレく、お銀さん、妾が頼んでおいた事はよいかえ。

お銀 よいともく、何もかも呑み込んでゐる、氣をもまずとサアくお出。(ト本舞臺に來り。)ハイ、おたのみ申しまする。

清兵 コレ妹、お客ぢやさうな。

つる アイく、(ト門口へ來て。)どなたかおはひりなされませ。

お銀 おつるさん、妾ぢや、嫁御を連れて來ましたわいなア。

つる オ、お銀さん。モシく兄さん、モウ嫁さんが來てぢやわいなア。]

清兵 何ぢや、モウ來たのか、そりや大變ぢや。(トそこらを片附ける。)

お銀 サアくお宮さん、おはひりなさんせ。

お宮 アイく。(ト兩人はひる。)

お銀 マア、若嫁御の事なれば、先づ上座へ。(ト手を取つてよき處へ座らせ。)して肝心の花髻様は。

清兵 ハイ、く、髻君は是にをられます。

つる 兄さん、お前、何をしてぢやぞいなう。

お銀 サア、く、爰へ御出なされまし。

清兵 ハイ、只今それへ。(トうぢくしてゐる。)

お銀 是はしたり、何をまア、その様に。

清兵 イヤサ、おれも恥かしいわえ。

お銀 何を言うてぢや。(ト手を取り。)先づ髻様のお席はこちらへ。(ト座らせ。)斯うした處は、髻様

やら見合やら、ナア申し清兵衛様、氣に入りましたかえ。

清兵 イヤ、おれの女房にはちつと過ぎましたわいなう。

お銀 嬉しやく。マア、く、納つたと言ふもの、お宮さん、髻様に御挨拶を。

お宮 ハイ、く、不束な者なれども、よろしくお頼み申します。

お銀 ア、コレ、く、此子はなア、おつるさんと言うて、清兵衛様の妹、仲好うして上げて下さん

せ。

つる イヤモウ、妾の爲には大事の兄嫁、仲好うせいでなりませうかいなア。

お宮 何分お頼み申します。 (ト此時奥にて。)

兵四 ヤレ、忙しいな。 (ト片肌ぬぎ、俎の上へ野菜を乗せ持ち出て来り。)

手が廻らぬ、此芋の皮を剥いて下され。

つる コレ兵四郎、そんなものを、爰へ持つて来ては困るわいなう。 (トお宮を見て。)

兵四 フム、爰にゐるのは、嫁御様か。 (トツイと奥へはひる。)

お銀 おつるさん、ちやつと杯を出して下さい。

つる アイ、コレ、およしやく。 (ト呼ぶ)

下女 ハイ。 (ト三ツ組の杯、鍔子を持ち出る、お銀、取つて前に置く。)

お宮 モシ、お銀さん、初手から妾の頼んだ事をば。

お銀 ほんにさうぢや。 (トこちらへ来て。)

時に清兵衛様、杯をせぬ前方、すこし頼みがござんすぞえ。

清兵 へ、ア、そりやまア、どの様な頼みぢやなう。

お銀 ハイ、別の事でもござんせぬが、女夫になるはなるけれども、一つ寝をせぬ様にとくれくも

頼みぢや。

清兵 ハア、そんなら何か、あの人を女房に持つても、一つ寝は出来んと言ふのか。

お銀 近頃無理な、願ひぢやけれどなア。

清兵 そりやつまらぬ、その様な女房が何處の國に在るものか、それでは俺を、欺したのぢやな。

お銀 イエ、さう言ふ譯ではなけれど。

松之 何か、御目出度い話ぢやなう。(ト奥から松之助出る。)

清兵 ヘイ、その目出度いは目出度いが、どうもその……。」

松之 それがとは、どうしたのぢや。

清兵 どうしたと申して、親の命日に、魚を貰うた様なものでなア。」

松之 何を言ふのやら、一向にわからぬわ。(是を唄になり、花道より九市郎出る。)

九市 途中にて承つた、旅籠屋の目印、これぢやわえ。(ト門口へ来て) コリヤ、若イ者、吾妻

屋と申す、旅籠屋は是か。

お銀 ハイ、こちらでござります。

九市 然らば、今宵は止宿を頼む。

お銀　へい、一寸お待ち下りませ。(トこちらへ来り。)　申し旦那、お客様でござります。

清兵　何御客人、今夜はどうも困る。(ト言ひ乍ら門口へ来て。)　へい、御覽の通り見苦しき田舎家、

間敷とてもござりませねば、御宿の儀は平に御断り申します。

九市　イヤ、苦しい、不自由は旅の修行、たとひ贅の上にも。

清兵　左様なれば、御不自由さへおいとひなく、お泊りなされて下さるなら、如何様共いたしませ

う。

九市　それは承知ぢや、許せ。(ト内へはひる。)

清兵　それおつるや、お客様ぢや。

つる　ハイ、只今お濼ぎを取りませう。

九市　イヤ、それには及び申さぬ。(ト此時おつる九市郎を見て。)

つる　ヤア、あなたは。

九市　ム、さう言ふ女中は。

つる　今日、明神様でお目にかゝつた。

九市　その時の、娘御。

つる ようまア御出なされましたなア。(ト悦ぶこなし。松之助も九市郎を見て。)

松之 コレく清兵衛殿、今日の難儀を救ふて下されたは、あなたちやくく。

清兵 是はまア、妹と言ひあなた迄、何をキヨトくなされます。

松之 サア、今日悪者の難儀を退れたは、あなたのお蔭。

九市 ムウ、誠に甲州郡内の組屋殿。

松之 よろしう御禮を申したも。

清兵 ハイ 承知いたしました。(ト九市郎に向ひ。) 是はまア不思議の御縁で、私方へ御出下されま

して、有難うござりまする、何をおかくし申しませう、此方は私の爲には御恩を受けし御主

筋、難儀の場所へあなたがお越し下さりまして、お助け下されしとの事、その御禮も申したう

ござりますれば、お心置きなういつ迄も御逗留なされて下さりませ。

九市 いかさま、佛説に言ふ一樹の蔭、身共が宿りを求めしは、何んぞの因縁でがなあらうわい。

ト此時おつるいろくこなしあつて、九市郎が傍に寄り。

つる 申しそれでは御窮屈、お召物をお着替えなされて、御ゆるりとなされませ。(ト此時兵四郎出る)

兵四 ハ、ア、それではお娘は此侍に氣有り名古屋と来てゐるな、そりやあんまりぢやくく。

清兵 ヤイ／＼兵四郎、おのれそりや何を言ふのぢや、大事なお客様の前をも憚らず。

兵四 イヤモウ、破れかぶれぢや。

清兵 エ、何を言ふのぢや、すつこんでをれ。(ト小言を言ひ、お宮に向ひ。)コレ／＼女房共、此お客様

はおれが爲には、大事の／＼のお客様ぢや、御挨拶を申しておけ。

お宮 アイ／＼。(ト衣紋をつくるひ。)是はまア、どなた様かは存じませぬが、よう御出なされまし
た。

九市 スリヤ、こなたは當家の。

つる ハイ、たつた今、見えました。

松之 女房でござりまする。(トお宮九市郎の顔を見てびつくりなし。)

お宮 ヤ、あなたは。

九市 オ、こなたは。

お宮 思ひも寄らぬ。

九市 變つた所で遭ひしよなア。(ト膝をたゞき、不思議の思入。)

お宮 ほんにあなたにお目にかゝつたら、何からお話し申さうやら。

丸市 身共とても早速尋ねたき仔細もあれど、こゝは旅籠屋、諸人の入り込み、うかつな事は言らま
いぞ。

ト清兵衛、九市郎の顔を見て、

清兵 コリヤ〜女房共、あのお侍は近附きか。

お宮 アイ、妾が前方上方で、御奉公に上つたお里敷の若旦那様。

清兵 アノ若旦那。ハテナア。コレ〜お銀どん、一寸愛へ来て下さい。」

お銀 何んぞ、川でござんすかえ。

清兵 俺への頼み、断りの筋が知れた。

お銀 知れたかえ。

清兵 ソレ。(ト九市郎の方を見て、又お宮を見て。)なア。(トこなし、兵四郎思入。)

兵四 成程、根ざしは斯くと知られたり。

お銀 そんな事かも知れぬわいなア。(ト清兵衛、むつとして。)

清兵 エ、何やらいま〜しうて、氣合が悪うてならぬわい。

松之 ア、コレ〜、氣合が悪いとは何がその様に腹が立つのぢや。

清兵 立ちませいでか若旦那、よろものを思うても見て下され、何處の國にか嫁に來て夫婦一ツ寢は斷りぢやと、そんな嫁がどこにあります。

兵四 オ、親方、そりやお前が尤ぢや、一體、此お銀さんが悪いのぢや。

お銀 何、妾が悪い、妾よりお前よう妾を欺したねえ。

清兵 サア、モウ誰れでも堪忍がならぬ、堪忍袋の緒が切れたぞ。(ト立ち上る。)

松之 アムコレ、私の爲には大恩のある旦那様の前で、何をするのぢや、何をするのぢや、こなたは氣でも違ひはせぬか。

清兵 ヘイ、誠にどうも恐れ入りました、ツイ持病が起りまして旦那様の前をも憚らず、眞平御免下さりませ。

九市 なんのなんの、此様な處へ参り合すも、一ツは旅のうさ晴らし、その心配は必ず無用。

つる ほんにまア、いろ／＼の取り込みで肝心の御飯を忘れてをりました。コレよしや、ちやつと持つて來やいなう。

九市 アイヤ、札の辻とか申す所で當國の名物、信濃蕎麥を澤山にたべましたれば、後程にして下され。

つる 左様なら、お風呂へおはひりなされませ。

九市 如何様、湯に入らねば草臥も休まらぬて。

つる アノお脊中は、妾がお流し申しませうわいなア。

清兵 女房共、こなたは勝手へ。

お宮 何かの事は、必ず後で。

九市 然らば、御亭主。

松之 お侍様。

清兵 御ゆるりとお召しなされませ。(ト唄になり皆々奥へはひる。清兵衛こなしあつて。)いか程御馳走申しても、あきたりない大事のお客、放し座敷は普請中二階は疊が汚れてある、まだしも南の中二階、きれいで至極上等なれど昨夜からの浪人客、まさか座敷の取り替へもなるまい、ハテどうしたものであらうなア。

ト思案のこなしにて奥へはひる。此時中二階の障子を引き抜き、辰次脚絆をはき身ごしらへをしてゐる。

辰次 ア、ヤレ、恐ろしやく、今日の晝明神の前で遭遇し、危い處を脱れたが、又も此家へ泊

りに來るとは、コリヤまた何とした因果ぢややら、何んでも爰を抜け出して曾平太が隠れ家、くりから峠へ尋ね行き、その上で何とか思案せずばなるまい。

ト尻をからげ身ごしらへをする。唄になり花道より、才次郎、以前のなりにて出る。

才次 入口のうどん屋で、教えてくれし旅籠屋の目印、吾妻屋と言ふのはあの行燈、さうぢやく。

ト本舞臺へ來る。此内辰次身ごしらへして出て來り。

辰次 何んでも早く逃げるが勝、さうぢやく。(ト上り段へ片足かけると門口へ才次郎來て。)

才次 頼まうく。

辰次 ヤレ情けない、どいつか又來をつた。(トそつと引き込む。)

下女 コレお松どん、店に御客があるさうな。(ト言ひ乍ら奥から出る。)どなたでござります。

才次 手前は、諸國武者修行いたす者、一宿が頼みたい。

下女 へい、左様でござりまするか、旦那様に左様申しますれば、まアこちらへ、お這入りなさりませ。

才次 然らば、許しやれ。(ト上手へ通る。下女煙草盆を出し、奥へはひる。)ヤレく、先づ一服いたさう

か。(ト煙草を吞み乍ら。) 最前十市の渡し場にて手に入つたる敵の密書、此狀の文體にては敵

は是非共此邊りを、御儀なすに相違なし、それにしても見者人九市郎様の御身の上、姫のお在所尋ねん爲御出圖のその後にて、大見市郎右衛門様の不慮の御最期。騒動の様子も御存じなく何處にどうしてござるやら、片時も早くお目にかゝり兄弟一致し日頃の本望、ア、何かの様子、お知らせ申したいものぢやなア。(ト此奥より清兵衛出る。)

清兵 へい、お泊りのお客様は、あなた様でござりまするか。

才次 御身は當家の御亭主か、身共は諸國修業の浪人、何卒今宵の一宵をば。

清兵 そりや、願うても申さねばなりませぬが、お連れ様とても見えませぬば。

才次 ム、一人旅故ならぬと申すか。

清兵 へい、御氣の毒様乍ら、旅籠屋仲間の掟でござりますれば。

才次 ム、成程、掟とあらば力及ばぬ。ハテ、江口の君ぢやよなア。(ト立ち上り、出ようとする。)

清兵 ア、モシお待ち下さりませ。江口の君とは御心あつてか。

才次 世の中をいとふ迄こそ堅からめ。

清兵 假の宿りを惜む君哉。

才次 古歌の心は、身が述懐。

清兵 斯程かたじけなく優やさしきお侍さむらい、お歸かへし申まをすも餘あまりの殘ざん念ねん。

才次 デモお手前てまへの、家業かげふの掟おきて。

清兵 破やぶらぬ思案しあんは。ム、(ト行燈あんどんを取とつて來きて。) まッこの通とほり。

才次 ム、雲間くもまに秋あきの月つき一ひとツ。

清兵 影かげは二ふたツの、お連つられ様さま。

才次 天晴あつはれ頓智とんちの、(ト此時辰次ちしそつと覗のぞき、才次郎さいじらうと顔かほを見合みあせ障子しょうじを閉しめる。才次郎さいじらう思入おもひいあつて。)

ム、慥たしかに。(ト行いかうとする。)

清兵 まア、奥おくへ。(ト隔へてる。ござりませ。(ト才次郎さいじらう、氣きを替かへ。)

才次 お世話せわでござる。

ト唄うたになり才次郎さいじらう中二階ちゆうにがいへ目を附つけ奥おくへはひる。清兵衛せいべゑ小首こくびを傾かたけ奥おくを見て又二階ふたがいを見、いろ／＼
こなしある。此内辰次このうちしんじは障子しょうじをあけ、ツカ／＼と下くだりて、表うらの方かたへ出でようとするを、清兵衛せいべゑ留とどめて。

清兵 御容お容様さま、何いづれへお越こしなされます。

辰次 イヤ、身共みどもは一いち寸すん。

清兵 見受みうけますればお立たちの御様子ごやうす、何なんぞ御氣おきに障さりし事ことでも。

辰次 イヤ何も氣に障りし事は。イヤ何、氣に入らぬ事がある。

清兵 そりや、何事でござります。

辰次 あの座敷が氣に入らぬ、あまり端近く騒々しうてならぬ。

清兵 左様なれば、二階の小座敷にいたしませう。

辰次 ム、左様か、それなれば参つてやらう。

清兵 左様なればお出下さりませ、お衣具も押入れにござりまする。

辰次 左様か、ドリヤゆるりと休まうか。(ト二階に上る。清兵衛こなしあつて。)

清兵 イヤ集じるよりは産むが安いと、こちらから頼んでも入れ替つて貰ひたい所を、向うから取り

替ろとは、願うたり、叶うたり、コリヤノ、誰ぞ来い。

下女 ハイ〜。(ト出で来り。)何ぞ、御用でござりまするか。

清兵 オ、よしか、中二階をきれいにしして、煙草盆へ火を入れて置けよ。

下女 ハイ畏りました。(ト中二階へ上り掃除をする。合方になり九市郎手拭にて顔をふき乍ら出る。おつる

大小を抱へ、付いて出る。)

九市 ア、ヤレ〜、さつぱりとしたわえ。

清兵 お湯の加減は、どうでござりました。

九市 イヤモウ、熱からず、ぬるからず、近年の上湯であつた。

つる 兄さん、妾が附いてゐるわいなア。

清兵 何を言ふぞい。コレおよし、掃除はよいか。

下女 ハイ、すつぱりと拂つて、お床ものべておきました。

清兵 オ、それでよい、イヤ何、旦那様には終日のお草臥れ、

つる モウ、お休みなされませいなア。

九市 いか様、彼是と夜も更けた、モウ何時であらうなア。

清兵 モウ四ツ前でもござりませうか。

九市 ドレ、然らば休まうか。

つる サア、かうお出でなされませ。(ト合方になり、おつる案内して上手の中二階へ上る。)

清兵 コレおつるや、行燈の灯が消えると悪い、附木をお枕元へ置くがよいぞ。

九市 イヤ、火打袋を持参いたせばその心配には及び中さぬ。

清兵 イヤ、お武家と申すものは、御用心のよいものでござりまするなア。

九市 其許にも嘸お勞れ、早くお休みなされませ。

清兵 へい、あなたも、お休みなされませ。

ト清兵衛表の行燈を入れ門口を閉める。此内九市郎布圍の上へあがる。おつる世話をしてゐる故。

九市 ア、コレ、モウ宜しうござる、早く下へお出下され。

つる 左様でもござりませうが、せめておみあしでも。

九市 イヤ、闇夜に婦女に灯を借りすと、御身も身共も若い同志、一緒に居ぬが人の儘み。

つる それぢやと申して。

九市 ハテ、御出なされと云ふに。(ト此時清兵衛。)

清兵 コレ、おつるや。

つる アイ。(ト出る、九市郎障子を閉める。)

清兵 妹や、モウ旦那はお休みになつたか。

つる エ、知らぬわいなア。(ト奥へはひる。)

清兵 ようぷりくと怒る奴ぢや、ドレ、表口の閉りを見て、一寝入りしてこまごう。(ト行燈を消

し。)火の用心。

ト夜番の太鼓、割竹の音になり、探り／＼奥へはひる、此時奥より才次郎下締を纏にして出る、上手の中二階へ目を附け、忍び寄つて障子を踏み放すと、是にて行燈の火消える。九市郎は、ハツト心得起き上り枕元の刀を取り身がまへする。才次郎布團を引き逃けても人が居ぬ故不審のこなし。此内九市郎は刀を抜く。此光りにて。

才次 扱こそな。

トせき込んで斬りつける。九市郎は斬り結ぶ。互に刀の光りを目當てにツカ／＼と平舞臺へ下り、九市郎階下の脇に積んである、濫紙の荷物に積き、刀にて荷繩を切り中より白木綿の反物出る。是を才次郎目當にめくら投げに打ち附け、手利き同志の危ふき立廻り、いろ／＼あつて。

九市 狼籍者か、盗賊か。

才次 何んと。

九市 但しは、宵の意趣斬りか。

才次 何を。

九市 仔細を語れ、ナナなんと。(ト此中、才次郎聞き耳立てム)

才次 ム、其五音、聲音は。

九市 ム、さう言ふ聲は。

才次 中兄九市郎様ではござらぬか。

九市 弟才次郎、まてく、控へて居よ。

ト火打袋より火打を出し才次郎はさぐり寄り、行燈をさし寄せる。行燈をつけ顔を見合せ。

才次 オ、誠にこなたは。

九市 寢所へ斬り入りしは、盗賊の所爲と心得。

才次 敵の在所と心得、兄上とも、

九市 弟とも知らず、

才次 打ち合せたる、

九市 白刃と、

才次 白刃、

兩人 ハテ、危い事なう。(トこなし。)

九市 今、其方が詞の中、敵の在所と言ひたるは、義に依つてみどりに頼まれ、甚助が仇曾平太を討

け覩ふ存意ぢやな。

才次 兄上には國許の様子、まだ御存じはござりませぬな。

九市 何、本國の様子とは。

才次 大兄市郎右衛門様には、こなた様御發足のその後にて、人手にかゝり無慘の横死をなされまし

た。

九市 ム、シテ、敵は何處の何者。

才次 日頃よりお目をかけられし、守山辰次の仕業でござる。

九市 何、スリヤ敵は辰次とな。(トびつくりなし。)

才次 サア、今更中すも便なき仕合せ、松倉卿の短刀詮議に御心を苦しめられ、悪事の根ざしは刑部

なれども、荒立てられぬ本家の流れ、彼に一致の長濱曾平太寶の在所を探り問はんと、密に

獄屋にお越しなされしを、欺し討ちと相見えて、數ヶ所の深手に無慘の御最期、是非もなき武

運の末、見上残念にござりまする。(ト是にて九市郎思入、才次郎の襟髪取つて引き付け。)

九市 アノコ、ナ卑怯者めが、此九市郎は今の今迄夢にも知らぬ兄の御最期、おのれ後に残り乍ら何

故敵を取り逃した。言はう様なき大腰抜けめが。(ト突き放す。)

才次 エ、恨めしい兄者人、身共は若殿御出府の御見送り、草津の宿迄参りし處、督しからぬ胸騒ぎ

に、お座願ひ宿を飛んで立歸る獄屋の裏門、柳の下にて摺れ違ふ怪しの曲者、辰次にあらうと

は夢にも知らず、待てと一聲かけたれば、エイと飛び来る手裏劍のよくく見れば兄者人が、守山辰次に遣はされたる後藤の細工、今一足早くんぼと思ひしも後の祭り、涙と共に御遺骸を相雲寺へ葬りし上、こなたの行衛敵の在所、此信濃路へ入り込みしと風の便りを力となし尋ね参りし今日今宵、不思議に兄弟再會せしも世になき兄の御導き、斯く御目にかゝる上からは、兄弟互ひに心を合せ仇を報ずる思召しはござらぬか、拙者が卑怯でない申譯、御死遺がまゐりましたか。

九市 ア、誤つたり弟、兄の最期に心の顛倒、空しくお果てなされしとは、露いささかも知らずして香花一つたむけぬは。

才次 宿業とは言ひ乍ら。

九市 よくくろすき兄弟の。

才次 果敢ない御縁で。

兩人 ありしよなア。(此時辰次浴衣を行燈にかぶせる事あり。)

才次 歎きにまぎれ遅れたり、最前此家へ参りし折柄、はからずチラと見かけしはまさしく守山。

九市 何、敵辰次が此家へ。

才次 見届けしはアノ一間、思ひ違ひが手引となりて、兄弟の名乗り合ひ。

九市 吾々が入り込みし、様子を氣取り此家の内より。

才次 逃げ去らんも計られず。

九市 二階天井、押入下家。

才次 隈なく捜し、引きずり出し。

九市 木望遂ぐるは。

才次 今此時。(ト二階を目がけ行かうとする。)

九市 コリヤ、密かにく。(ト此時辰次片手にて疊をまくり、水を下家へ流す。是にて行燈消る。)

才次 南無三、灯しが。

九市 弟、ぬかるな。

才次 御油断あるな。(ト此時奥より兵四郎寢まきなりにてあくびを仕乍ら出て來り。)

兵四 何んぢや、まつくらがりぢや、少しもわからぬ。

ト門口へ行く。辰次忍び足にて、二階を下り、九市郎は二階へ上る。辰次又才次郎とすれ違ひ門口へ出て、兵四郎に突き當る。

兵四 エ、誰ぢや、どいつぢや。(ト言はれて、辰次鼻をつまみ。)

辰次 申し、大和屋と言ふ宿屋はどこでござります。

兵四 エ、ソリヤ東へ五軒目ぢや。

辰次 有難うござります。

トそつと花道へ行つて、ヤレ／＼嬉しやといふ思入あつて、辰次花道へはひる。

兵四 エ、誰ぢや。(ト兵四郎才次郎に突き當る。)

才次 何。(ト當てる。此時お宮の宮城野手燭を持つて出で來り。)

お宮 九市郎様はいづれに御出でなさるゝやら。(ト才次郎見て。)

才次 オ、こなたは宮城野殿。

お宮 才次郎様か。(ト此時九市郎門口を見て。)

九市 ソレ、門口が開いてをるぞ。

才次 ム、誠まことに今のくらがりまぎれに。

九市 風かぜを喰くうて逃げ失せたり。

才次 少しも早く。(トツカ／＼と花道へ行く。)

九市 ヤレ待て、早まるな。

才次 イヤ、人面獸心の守山辰次、引提へて一刀の下に。

九市 イヤ、心の急くは尤なれ共、闇夜と申し不知案内。

才次 ぢやと申して。

九市 エ、早まつて仕損するな、待てと申さばまア〜待ちやれ。

才次 エ、残念千萬。(ト戻つて来る。此時九市郎下へおり。)

九市 先、何は差置き宮城野殿、承り度きは姫君の御身の上。

宮城 さればでござりまする、御心一途の夕照様、いろ〜お諫め申せどお聞き入れあそばされず御

園を立退き、妾の故郷越中富山の両親にお預け申して御結納の寶、鈴虫の香爐を、再び手に入

れお詫びの種と妾をやつし、所々方々心を盡して居りますわいなア。

九市 スリヤ、姫君様には御安泰となア、チエ〜忝い。(ト倒れてゐる兵四郎を才次郎引き起し。)

才次 此奴が面はどうやら覺えが、オ、それよ守山方に因みの下郎。

九市 敵の行衛、詮議の糸は。(ト活を入れ。)

才次 コリヤ、汝は辰次が身内の者、落付く先を知らぬ事はあるまい、サア白狀いたせ。

兵四 イ、ヤ、俺は知らぬ、覚えがない。

才次 エ、言はぬなら、いつそ斯うして。(ト刀を振上げる。)

兵四 ア、待つてくれ、口でまざく言はうより、辰次が自筆の此書附け。(ト才次郎見る。)

九市 シテまた、姫君の御在所は。

宮城 越中富山、鷹匠町。

才次 辰次が在所は相州鎌倉、芝口二丁目。

兵四 井澤承順と申します。

九市 スリヤ、姫君には北國へ。

才次 扱は敵は東國へ。

九市 身共は越中へ立越えて、彼の夕照姫の身の納まり。

才次 拙者は鎌倉へ趣き、辰次が實否を見届けん。(ト此時清兵衛勝栗揚昆布を三方に乗せ出で来り。)

清兵衛 ハア、恐れ乍ら御兩所様へ、吾妻屋清兵衛、御錢別の仕ります。

九市 何、吾々に。

才次 錢別とな。

清兵 へイ、お話の様子承り、當所の名産此二品、心ばかりのお立ちの悦び。

才次 敵を揚栗。

九市 名を揚毘布。

清兵 へイ、御目出度うござります。

才次 其許の志。

兩人 過分々々。

清兵 殊に申し上げますには、御兄弟様には北園へお越しとあれば、是より先に二里ばかり信濃越中の國境、くりから峠の半腹には獅子戻りと申しまして、難所がござりまする、こなたの崖よりあなたの崖へ、藤づるを引きまして鼠徑に人を乗せ双方へ引き渡す、下は數十丈の地獄谷、御用心が肝腎でござります。〔ト此時九ツの鐘鳴る。〕

宮城 アノ鐘は、モウ子の刻。

才次 忠と孝とに。

九市 東と北へ、立別れ。

才次 敵の實否。

九市 姫ひめの案あん否ひ。

才次 見み届とどけし其その上うへにて。

九市 飛ひ札さを以もつて。

才次 五ごひの、通つう路ろ。

九市 出で遭あふ所ところは。

才次 四よッ谷や新しん宿しゆく。

九市 上あ州しゆう屋や十じゆ右みぎ衛ゑ門もん。

才次 比ひ良ら井ゐの家いへには、恩おんあるもの。

九市 時じ刻こく移うつさず。

才次 すぐ様さま、發はつ足そく。(ト行かうとする。此前より、すりの辰窺ひ出で、兵四郎日記せして。)

兵四 辰 小のれをやつては。(トかゝるを、才次郎は兵四郎を、九市郎は辰を引付け。)

九市 敵かたきの枝えだ葉はは。

才次 此この場ばの血ち祭まつりり。(ト兩人を一時に返すを、木の頭。)

清兵 ヨウく、御お見み事こと々々。

ト扇を廣げ感心のこなし、是をキザミにて、よろしく。

幕

五幕目

尾花ヶ原の場

俱利迦羅蚌の場

役名 唐崎九市郎、同才次郎、絹屋松之助、長濱曾平太、守山辰次、米屋喜

兵衛、獵人獅子右衛門、渡し守徳六、同柿六、虚無僧燕山、腰元みどり、手

下大勢等。

本舞臺平舞臺、向う黒幕。真中に石の地藏尊、臺座閉き。所々すゝきの茂み、能き處に掛稻、松の釣枝、すべて信州尾花ヶ原の體、風の音にて暮あく。と淨瑠璃になる。

次第なり、更渡る尾花ヶ原の秋の霜、月西山に影遠く、狐の聲も衍して、いと物凄く聞えたり。

ト本釣鐘になる。花道より腰元みどり、菅笠を持ち、杖を突き出る。後より獵人獅子右衛門、袖なし輕さん、白髪のかしらへにて、鐵砲をかたげ付添ひ出る。

研

辰

四〇三

獅子 ア、コレ〜女中、見りやアまだ若い身空で、人も通はぬ尾花ヶ原、夜更けて通るといふ様な

大膽な事があるものか。

みど さればでござんす、後の一ツ家で問うたれば、四五町行けば家續き旅籠屋もあると聞き、ツイ

十町二十町一里餘りも参りました。

獅子 ア、コリヤそなた欺されたのぢや、木曾の宿から街道へ抜ける道、四里半といふものは、腰

をかける所もないわい。

へき 聞くよりハツと心には、驚き乍らさあらぬ體。

みど イヤモウ、袖乞同様の一人旅、是迄野宿をした事は幾度もござりますれば、何處たりと行き付

き次第、案じることもござりませぬ。

獅子 イヤ、いくら何んでも大膽な、去年の秋からくりから山には、盜賊の頭が住んで巢を張つてゐ

るといふ山中、金を奪られた其上に如何なる事にならうも知れぬ、私の家へ來さつしやれと言

ふに。

へかは 顔に似合ぬ眞實に、みどりは氣をば落ち附けて。

みど 是はまア、御親切に有難うござります、お前の話の有り様に、今更後へも戻られずどうしたも

のと思つたに、そんならお詞に従ひまして、何卒今宵の一宿を。

獅子 オ、心安い事ぢや、その代りには夜具もなければ、進ぜる物も稗か粟か、まアひだるうさへな

ければよいと、一夜さの我慢さつしやれ。

みど ほんにまア、良い御方に御目にかゝり、難儀の場所を助かりました。

獅子 そりやアさうと夜も更ける、少しも早く行きませう。

みど ハイ、お連れなされて下さりませ。

地獄で逢つた獅子右衛門鬼の念佛打ち連れ立ちて、二足三足。

ト是にて兩人本舞臺へ来る。みどり花道階際にて草履の切れしこなし。

みど ア、もし、一寸待つて下さりませ。

獅子 どうした。

みど ひよんな所で、草履の鼻緒が。

獅子 何鼻緒が切れた、俺が上げてやりませう、ア、何んぞ其處等にないかしらん。(ト稻村を見て)

オ、あるぞ。

幸ひ立ち寄る稻村の、内より突き出る氷の刃、ハツと斗りに七轉八倒。

みど もウし、どうなされました。

立ち寄るみどり、掛稻分けてぬつと出たる大男。(ト曾平太黒羽二重大小にて出る)

髪はおどろに髪ぼうく、血刀提げて突立ちしは、夫と言はねど山賊と、看板打つたる有様なり、(トみどりこなし。)

獅子 エ、欺し討ちとは、卑怯な奴め。

よろほひく立ち寄るを、片手なぐりの片車、二ツになつて死してけり。
ト曾平太獅子右衛門を殺し、刀を突き立て思入。

曾平 みどり、久しいな。

みど エ、(ト見て、びつくりなし。)

曾平 コレ長濱曾平太様ぢや、見忘れはせまいがな。

みど 何、曾平太とや。オ、誠にそちは曾平太、父様の敵、覺悟しや。

用意の刃物抜くより早く、只一討ちと突きかゝるを、かいくぐつてしつか

と押へ。

會平

コレみどり、此會平太様の言ふ事を、耳をさらつて能く聞けよ。(ト上下の合方になり。) われが親の甚助を殺せしは、われを女房にくれぬ遺恨、今でも俺の言ふ事聞きやア其身の出世になる事だ、又厭と言ふが最後、此の老孝同様に首と胴との生き別れ、生死の境これみどり、いゝ返事を聞かしてくれ。

猫撫で聲の面憎さ。

みど

エ、言はうやうなき大悪人、女でこそあれおのれをば一太刀斬つて父様の、修羅の御無念諦らさんと、神々様へ願をかけ巡り遭うたは天の導引、サア尋常に勝負せよ。

勝負々々と詰め寄つたり。

會平

ハ、ア、さりととは悪い合點、たとひ天狗の化けたのでも高の知れた女一人、其手が一本動くが最後、美しい首が飛ぶぞよ、首のねえのは不自由だから思ひ直して女房になれ、みんな其方の爲ぢやわやい。

戀に目の無き油断を見すまし、飛びかかつて左の肩先一刀。

アイタ、わ、わりやア俺を斬つたなア。

うろたへを眼附込みく、たゝみかけて斬りつくるを、しつかと留めて。

會平 スリヤ、いよ／＼聞かぬのぢやな。

みど エ、耳の穢れ、けがららしい。

言ふより早く拜み討ち、受けつ流しつ斬り結ぶ、無法の手の内女業、危か
りける。

エ、口惜しや、心は彌強に逸れども言ふに甲斐なき女業、敵を討たぬのみならず、此身も敵の
手に掛かり死ぬる命は是非もなし、父様許して下さりませいなア。

言ふ聲さへも細り行く、野末にすだく虫の聲、ともに哀や添へぬらん。

會平 オ、悲しからう／＼、是がいやささにさつきから、いくら言うても聞き入れなく、片意地張つ
たしぶとい女郎、廻り殺しだ、観念なせ。

肩先さ脊筋容赦なく、此所を一寸彼所を二寸、無慘と言ふも愚なり。
トみどり切られ死す。

そりや、今が往生だ。(トとどめを刺さうとして。)イヤ待て、惜しいものだなア。

ためらふ所へ急ぎ来る才次郎政春、月の明りに斯くと見て、足を早めてか
け來り、首筋掴んですでんどう、心地よかりし有様なり。(ト會平太を投げ退

け、みどりを見て。

才次 ヤア、コリヤこれみどりが數ヶ所の深手、扱は山賊等の仕業よな。

許しはせじと立ち向ふ。

會平 ヤア、わりや比良井才次郎だなア。

才次 ム、相好は變れ共、髓かに汝は長濱會平太。

會平 ウヌも、ついでに。

我武者の會平太無双の手の内、苦もなく刀打ち落され、只一討ちと振り上ぐる。

ア、コレく待つてくれ、これには段々言譯がある。

才次 何、言譯とな、サア早くぬかせ、どうぢやく。

會平 その仔細は、(ト油断を見て)と云うて逃げるのだ。

かけ行く肩先き後袈裟、ばらりずんと斬り下げられ、のた打ち廻る四苦八苦、報いは目前天の罰、車返しの胴斬りは、心地よかりし有様なり。

才次

扱はみどりに出合ひ返り討ちにいたせし、極重悪人よな、義に依つて助太刀頼まれ、はからず此場へ参り合せ討つて捨てしは甚助みどりが、我を導きせしならん、親子が恨み思ひ知れ。

そつ首はつしと打ち落せば、五體は朱に氣味よき最期。

ト首を斬り、みどりを引き起し。

コリヤみどり、氣を儘に持つてくれ、比良井才次郎なるぞ。

今際の耳に通じけん、手負ひはやうく目を開き。

みど

ヤア、あなたは才次郎様か。

才次

オ、才次郎だ、敵長澤曾平太は身共が討つて、まッこの通り。(ト首を見せ) 逆も存命叶はぬ深手、未來へ土産の敵の首父甚助に追ひ付きて此世の仇を報いしと、修羅の恨みを晴らさせよ。

言ひ聞かすれば、みどりは嬉しく。

みど

嬉うござんす、才次郎様。

とは言ふものゝ味氣なや、日頃戀しい床しいと、焦れ慕うた政春様。

せめて此世の思ひ出に、二世の夫よ、つま鳥の。

比翼の床の添伏しに、解けて逢ふ夜の月魄を、待つに甲斐なき此最期、此

世の縁は薄くとも、未來の契りを待ちますと、言ふも苦しき斷末魔、此世の名残りおし鳥の、尾花ヶ原の草の露、消えて果敢なくなりけり。

才次

ア、是非もなき今宵の仕儀、今一足早くんばかゝる愁ひも見まじきもの、不便のものゝ身の上やなア。

項羽を欺く政春も、そゞろ別れに堪えかねて、涙にむせぶばかりなり。

ア、我れ乍ら迷うたり、大望ある身に不覺の涙、一寸延れば暫時の不孝、此のまゝ東國へ發足せん、さうぢやく。

すでに、行かんとなす所へ。(ト此時盜賊の手下大勢出て來り。)

手下

ヤア、頭を殺した侍め、片附けてしまへ。

皆々

合點だ。

皆抜きつれて追つ取り巻く、政春ふつと吹き出し。

才次

ムハ、小ざかしき山賊共、矢流の奥儀を受け傳へ、天が下には一人もせざる者なき政春を、猫に寄りし鼠輩の如等、我が手にかけるは刀の汚れ、素頭微塵に打ち碎き此世の暇とらせ

てくれん。

手頃のてごろ小松こまつを引きひ抜きぬきて、當あたるを幸さいひ、右往左往うわうざわうに投なげ廻ませば、コリヤ叶かな

はぬと山賊共さんぞくども、ちりくばつと逃にげ散ちつたり。(ト是にて皆々逃げてはひる。)

相あ手ひなれば政春まさはるは、四は方ほうをきつと打うち見みやり。

今いまはこれまでこれよりは、敵かたきの在ありしらま弓ゆみ、やたけ心の若武者わかむしやが忠ちゆうと孝かう

との追お分ひや、道みちは二筋身ふじみは一つ。

ト此時、手下の〇、窺うかがひ出いで。

手下 ウヌ、やらぬ。

かゝるを取とつてあづま投なげ、廻めぐる月日つきひはひま行ゆく駒こま、踏ふみ出だす足あしの膝栗毛ひざくりげ

トいろくあつて、手下を投なげ。

東あづまの空そらへと。(ト床の三重にて才次郎向うを見込む。是にて淺黄幕をかぶせる。)

本舞臺向う打ち抜き奥深に山の絶頂を見せ。大柱外嶮岨なる山、真中二間の間通しの谷間。所々霞にて見切り。すべて信州越中の國境くりから峠の體。上手に渡し守徳五、下手に同じく柿六、煙草を吞んでゐる。一聲打ち上げ、風の音になり、道具納まる。

急いそぎ行ゆく、山やま又また山やまを經へ廻めぐりて、登のぼり詰つめたる絶ぜつ頂ちやうは、くりから峠たけの嶮けん嶮をに
て、岩がん石せきそば立たち谷たに川がはの、水みづ音おと遠とほく物もの凄すこき、此こ所こにも住すめば住すむ人ひとの。

徳六 オ、徳又よ。

徳五 何なんぢやい。

徳六 今朝けさ暗くらい内うち一番ばんに越こした浪なみ人んど、後のちに戻もどつて來くるさうなが、アリヤ、何どこ處こへ行いつたのであらう。

徳五 大おほ方ほう、岩い屋やの不ふ動どう様さまへ、參まかつたのであらう。

ト雨方より高聲にて言ふ、此時上手へ米屋竹藏、股引尻からげ、帳と財布を割り掛けにして、出で來り。

米屋 どうぢや徳又、此頃このごろは逢あはぬなう。

徳五 オ、塚原つかはらの米屋こめや殿どの、掛取かきとりに行いかつしやるのか。

米屋 さうぢや、今日けふは少すこし道みちが違ちがひ程ほどに、早はやうやつて下くださんせやア。

徳五 合點がてんぢや、サア、乘のらんせく。

米屋 オイ、(ト血籠ちまきに乗る。)

徳五 よしかの、ヲイ、柿かき六むヤアイー。

柿六 ヲ、イ。(ト東より繩を引く。米屋、向うへ越して籠を出す。)

米屋 ヤア有難い〜、錢は戻りに置きますぞや。

柿六 ヲ、ようござんす、早う行つてござんせや。

米屋 ヲイ〜。(ト東へはひる。松之助前のならにて東より出る。)

松之 お世話乍ら、越させて下され。

柿六 アイ〜。

松之 いくらぢやなう。

柿六 廿四文でござんすわい。

松之 ソレ、廿四文。

柿六 サア〜乗らんせ〜。(ト松之助乗つて。)

松之 おりやア初めてぢやが、氣味の悪いものぢや、怪我はないかなう。

柿六 何を言はんす、旅人一人落したら下手人にとられるわいなう、下を見ると悪い故目をふさいで

居さんせ。

松之 よし〜。

柿六 徳五、そりや引け。

徳五 ヲ、イ。(ト西へ引きつけ) サア〜出さつしやれ〜。

松之 ホ、ウ、モウよいのか、ヤレ〜命拾ひをしました。

ト西の方へはひる、引き違へて、辰次覆面頭巾着流し大小にて出で来る。

徳五 ヲ、こなたは最前越した浪人殿、早う戻つてござんしたなう。

辰次 さればサ、大切なものを預けて置き、心急くまゝ失念した、早く元へ戻してくれ。

徳五 ハイ、サア〜乗つたり〜。

辰次 よし、よし。(ト乗る事)

徳五 何んぢや、どうしたか繩がたるんだ様だ。(ト繩を締む直す。東の假花道より以前の九市郎出る。)

九市 ハア、清兵衛が言ひ聞かせし、獅子戻りといふは此所ぢやなア。

柿六 アイ、昔はふごで引いたげな、危ないに依つて只今は駕で越しますよ。

九市 ム、シテ價は何程ぢや。

柿六 ハイ、廿四文でござりまするが、お侍と御出家は、何處でも只越しますわいなう。

九市 イヤ、さうではない。ソレ。(ト錢を渡す。)

柿六 ハイ／＼ありがたうごんす、サア／＼ちやつと乗んなされ／＼。

九市 ヲ、承知ぢや。(ト籠に乗る。)

柿六 徳五よ、今度は兩方から引き違ひぢや。

徳五 ヲツト、承知ぢや／＼。

兩人 そりや。(トよろしくあつて。)

命の藤網蔦かづら、見下ろす谷は數千丈、猛虎の窺ひ毒蛇の口、危ふかりける。

ト此淨瑠璃にて兩方より靜に引き違へ、能き所にて行き違ふ。双方顔を見合し、

辰次 ヤア、おのれは。

九市 そちは。

ト辰次抜き打ちに九市郎の乗りし籠を切り落す。九市郎は谷間へ落ちる。辰次は手早く東の方に渡る。是にて淺黄幕をかぶせ、道具出來次第切つて落す。

本舞臺平舞臺。正面見事なる大瀧、前側流れ。東西峙山、舞臺前土手板打ち返し、總て谷底の體。爰に九市郎衣裳破れ大小の鞆は碎け、下手に閃絶してゐる。眞中に虛無僧燕山、岩臺に腰をかけ天蓋を背に結びつけ尺八を持ち、九市郎に目を附けてゐる、一聲打ち上げ、風の音、道具納る。

燕山

此山の絶頂は獅子戻りと號する絶所、血駕の引き渡し、ム、扱は藤綱にあやまちありて此谷底へ落ち入りしか、何にもせよ。

仔細あらんと立ち寄つて、鳩尾のあたり手足の六脈、心静にとつくと伺ひ

さ、呼吸は絶ゆれど心腎の脈、健かなるは、甦らん事疑ひなし。(ト印籠の薬を飲ませ。)

あたりの谷水すくひ上げ、顔にそそいで耳に口。

旅のお侍、なうく、心を健かに持たつしやれ。

御に響く一聲に、筋骨忽ちうごめきて、眼を開きてあたりを眺め。

どうぢや、お心が附きましたるか。

九市

ハア、何國の誰人かは存じませぬが、思ひ寄らざる御介抱、シテあなた様は。

燕山

身共は一生不住の虚無僧燕山と申す者、参り合せて斯くの仕合せ、ハテ、命冥加なお侍ぢやなア。

九市

是と申すも御手前様の御介抱のお蔭、一命助かり何とお命を申さうやら。

燕山

命に別條はなけれども、斯様な大難身體の勞れ、此所より四五丁行けば拙者の知る邊もある故

九市

ハア重々の御厚意、辭退に及ばず御介抱に相なり申さん。

研

辰

四一七

燕山 然らば、此のまゝ御同道仕らう。

九市 何分宜しく願ひまする。

立たんとすればこはいかに、腰より下は大盤石、刀を杖に立ち上りては、

又がつくり。

燕山 イヤく、御心はせくならんも筋骨碎け、容易に歩行は叶ふまい、身共が肩をお貸し申さう。

九市 イヤ、それでは却つて。

燕山 ハテ、遠慮も時により申す。

是非共斯うと手を取つて、弱きを助ける肩車。

ト肩へ引きかけ二足三足行くと、トヒヨになり、破風より鷹一羽、引きせんにて向うへ飛び去る。

燕山 アレく、御覽あれ中空に。

九市 秋風立ちて、白雲飛び。

燕山 草木枯れて、鷹南に歸る。

九市 漢の蘇武といふ者。

燕山 夷狄の爲に兩足の筋をたゝれ。

九市 足蹇あしなえとなつて凡九年およそねん。

燕山 遂つひに歸國きこくいたせし故事ふるごと。

九市 時ときに取つての此身このみの吉兆きつちう。

燕山 お心慥こゝろたしに。

九市 忝かたじけない。

引ひくに引ひかれぬ世よの中なかの、人ひとは情なさけの花車はなぐるま、片輪車かたわぐるまの足曳あしびきや、山路やまぢを指さし
て。

ト兩人ふたりちよつとよろめく。燕山やんざんこなしあつて、

たどり行く。

ト三重みやへにて、よろしく、

幕

六幕目

護持院ヶ原の場
九段坂小屋の場
英龍軒住居の場

役名

唐崎九市郎、同才次郎、非人龜藏實ハ十右衛門の子分、中間琵琶平、

夜鷹お辨、鶯の者折助、おむのへげ忠、中間、侍金吾、同銀吾、奴二人、英

龍軒實ハ外記左衛門、九市郎妻おらん、外記左衛門娘おまき、こし元等。

本舞臺平舞臺雪の草土手、中遠見。城の垣、角矢倉。真中に番小屋。下手に入口あり。下寄りに茶屋床几を持たせかけあり、すべて護持院ヶ原の體。夜鷹のお辨立つてゐる、鶯の者折助等ひやかしてゐる。此見得四ツ竹の合方にて幕あく。

折助 ヲ、寒さむいいく、どうだ、お辨べん坊ぼう忙いそがしいか。

お辨 ア、大晦おほみそ日は近ちかくなるし、雪ゆきが降ふつて寒さむいせぬか御客おきやく様さまもすくないよ。

薦 どうだ、おれ達たちを客きやくにする氣きはねえか。

お辨 お前まへならお断ことわりだよ、聞きけばおつるさんといふ色いろがあるさうだ。

薦 常談じょうだん言いつちやいけねえ、そんな者ものはねえよ。

折助 時に、四五日後から此近所へ、美しい夜鷹が出るといふが本當か。

お辨 ア、そりや私の妹分だが、今夜は此雪だから休みかも知れないよ。

折助 さうか、楽しみにしてゐたが、そりやつまらねえ。

鳶 それを聞いたら、早く歸らう。

折助 俺も、河岸へ行つて、一杯引つかけよう。

兩人 ア、寒い〜。(ト兩人、捨ゼリフに、下手にはひる。)

お辨 何だ、人をひやかしやアがつて、ア、寒い、震えあがらア。

ト花道より、おらん肩入れの着附け、傘をさし下駄ばきにて出て、

らん ア、此様にまア明けても暮れても、降つてゐるとは困つたものぢやなア、それはさうとあの

お辨さんが嘸待ちかねてゐやしやんせう。ドレ、立場へ行かうわいなア。

ト雪おろしにて、本舞臺へ来る、お辨見て、

お辨 ヤヤ〜、おらんさん、大そう遅かつたねえ。

らん さいなア、妾も早く来るのだけれども、ありやうは主にも深くかくし、虎の門の金比羅様へ夜参りをするといふて来る故、それで遅いのぢやわいなア。

お辨 そりや尤もつともでござんす、何を云うても侍さむらいの果はて、堅苦かたくるしいのは仕方しかたがないわえ。

らん ハイ、先頃さきごろお話しはなしした通りとおり妾めかけは上方かみかた者もの、仔細しさいあつて所ところを立ち退のき、此江戶このえどへ來きて此程このほどより、主ぬしの

大病たいびょう、着類きりぎは元もとより頭つむりの物迄ものまでも賣うりつくして薬いすぢに代かへ、今いまでは其日そのひの煙いぼも立たて兼かね、斯かうしてお世話せわになりなりますが、此上このうえ共に何分なにぶんおたのみ申まをします。

お辨 そりやお前まへ、妾めかけが引き受うけお前まへを間まじりに客きやくを引ひきかけ、葎たし簀かの内うちは私わがが代かり、一度ひともつとめはさ

せないが、立ちまへは割わりを能よくあげてゐるよ。

らん 毎夜まいよ々々々々あなたにばかり御苦勞ごくろうかけ、お氣きの毒どくにござります。

お辨 何なに、いゝやね、お互たがひの事ことだから、モウ客きやくの來きる時分じぶん、着物きものを着替かえて仕度しどをおしよ。

らん アイ〜。

ト葎簀の内へはひる。合方あがたになり花道はなみちより中間ちゆうかん赤合羽あかあはにて箱提灯はこぢとうを持ち出でる。後あとよりをかしみの侍さむらい長合羽ながあは大小蛇おほいづなの目めの傘かさをさし、いやらしきこしらへにて出でる。此時このとき葎簀たしの内うちよりおらん出でて立たつてゐる。侍さむらいおらんを見て立たち留とどる。おらん袖そでにて顔かほをかくす。

侍 ア、コリヤ〜、可内待べくないまて。

中間 ハア。

侍　ハテ、うるはしき夜鷹の形相、唐土にては楊貴妃我朝にては小野小町、それにもおこく劣ら

ぬ、おもかけ、ア、美しき女子ぢやなア。

らん　申し、お遊びなさんせぬかいなア。

侍　ム、遊び度きものなれども、まさか俵の者を待たせておいて葭笥の内へもはひれまい、又出

直して参らう、可内参れ。

中間　ハア(ト上手へはひる。)

らん　何んぢややら、すかんお人ぢやなア。(ト又小屋の内へはひる。)

ト合方になり、花道より、琵琶平、破れし赤合羽、言びた菅笠を持ち出て来り、

琵琶　ア、まだ雪は止まぬと見える、今年のやうに降る年もないものぢやなア。(トおらん又出る。)

寒いつめたいと言つた所が、おら達は丈夫な身體、お旦那は嘸おつらからう、兄御様市郎右衛門様の仇を報いんものと、御出國なされし後、おらん様のお供をして、お後を慕ひ尋ね廻り、やうくお目にかゝつた所が、敵の爲に計られて足腰立たぬ御難病、良い薬が差上げたいと思つてもそれもならず、ア、どうしたものであらうなア。と考へた所で仕方がない、ドリヤ、早く歸りませう。(ト本舞臺へ来る、おらん見て。)

らん モシ、お遊あそびなさんせいなア。(ト袖を引く。)

琵琶 エ、面白おもしろくもねえ、そんな機嫌きげんぢやねえわえ。(ト顔を見合せ。)ヤア、あなたは。

らん ヲ、こなたは。

ト此時お辨出て真中へはひり、琵琶平の道具をたゞき落す、おらんは顔をかくしお辨は下に居る。

琵琶 思おもひがけない、ム、。

ト手を組む。此の引張りよろしく、道具廻る

本舞臺平舞臺、向う一面の雪幕、真中に非人小屋、能き處に雪持ちの紅梅、雪おろしにて道具止る

ハシハシなる淺間嶽あさまかたに立つ煙けむりり、遠近をちこちびと人の袖寒そでさむく、吹ふくや嵐あらしの大井山おおいのやま、今いまぞ浮う

世よを放はなれ坂さか、雪ゆきの衣えのうすひ川がは、佐野さのの渡わたりに着つきにけり。

ト此語にて、花道より九郎郎平人のなり、いざり車に乗り竹板にてこぎながら出る

九市 ヤレノ、草臥くたひれた、手足てあしの達者たつしやな時ときには歩行ほかうは左程さほど苦くにはならねど、斯かうなつては仕方しかたがない

やろく此所こゝまでこぎつけたれば、先まづ一服いっぶくいたさうか。

ト膝の下より、煙草入、煙管を出し、火入れの火をほざり、

ア、コリヤ火ひがあるぞノ。(ト吸ひ付け、思入。)園にを出いでしは三年ねんい以前ぜん、姫ひめの御行おゆく衛香ゑかう臺たいの衣あそび

所、松倉卿の紛失二つには見の仇、何卒討たんと憂き苦勞、却つて敵の其爲に數千丈の谷間へ落され、死すべき命を虚無僧の燕山殿に助けられ、牛れもつかぬ片輪となり生き甲斐のなき九市郎、斯る中にもおらん、貞節琵琶平が忠義、二人の者に廻り會ひしは是も一つの天の加護、又二つには才次郎元來彼は短慮の性質、身に誤りはありはせぬかと案じらるゝは血筋の兄弟、斯く月日を送る内モン辰次が病死なせば、誰を日當に本意を遂げん、ア、口惜しく、イヤイヤ身共が力を落しては、二人の者が案じるであらう、さらば小屋へ立ち歸り、二人の歸るを待つといたさう。ト小屋の方へ行きかける、此時非人龜藏出る。

龜藏 オ、いざりの松九郎殿か。

九市 お仲間の龜藏殿、ドレそれへ參つて。(ト刀を杖に車より下りようとする。)

龜藏 ヲツト、やつぱりさうして居たり、車は俺が、引込んでやるわ。

九市 イヤそれはあんまり、

龜藏 ハテ、遠慮には及ばぬわいなう。

藤澤寺の門前に。

ト綱を持つて、小屋の内へ引き込む。此時上手より侍〇△の二人、股引ぶつきき、大小にて出て、

九市郎に目を附ける。九市郎は鼓を取り。

九市

雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪ふりし。

侍○

ヤイく非人、見ればいやしからざる人品、何故斯く迄落ちぶれしぞ。

九市

是はお尋ねとも覚えませぬ、御覽の通り兩足叶はず、斯くの仕合せにござりまする。

侍△

ハテ、不便千萬。(ト錢を出し。)合力いたさう。(ト九市郎扇にて受ける。)

龜藏

モシく旦那、私にも下さりませ。

侍○

エ、汝は逆者な身體を持つて、横着者めが。

龜藏

へい、くれなきア、くれねえでいゝわ。

侍○

たはけたやつ、サア、參らうか。

侍△

先づく。(ト兩人花道へ行き。)

侍○

イヤ何、金吾殿、いよく彼奴に相違ないかな。

侍△

如何にも九市郎に、まぎれござらぬ。

侍○

兼ねて守山氏のお頼みの通り。

侍△

今宵夜更けて、我々兩人。

侍○ アコレ、必ずぬかるな。

侍△ 御案じ下されるな。

九市 ハテ、らんは何をいたしてをるやら、モウ戻りさうなものぢやなア。

ト兩人、花道へはひる。入れ違つておらん、五合徳利を提げ出て来る、

らん モウく、最前琵琶平に逢うた時の間の悪さ、何卒主に知れねばよいがなア。

ト本舞臺に來り。

ハイ、只今歸りましてござりまする。

九市 ヲ、おらんか、今宵は大分遅かつたなう。

らん ハイ、金比羅様へ参りました、ツイ手間が取れました。

九市 ヲ、さうであらう、今爰に居る龜藏殿に世話になつた、禮を言うてくりやれ。

らん それはまア御親切に、ありがたうござります。

龜藏 イヤ、その禮には及ばぬ事、ドレ私も行つて寝るとしよう。

二人 大きに有難うございました。(ト四ツ竹の合方にてはひる。九市郎こなし。)

九市 何んと、怪しからぬ寒さではないか。

らん ハイ、お寒からうと存じまして、少しばかり買つてまゐりました。(ト徳利を出す。)

九市 コリヤ好物の諸白、コリヤ能く氣が付いた、其所等邊りに繩切れはないか。

らん ハイ。(ト繩切れを出す。)

九市 その徳利を松の枝にくゝし付けて、下から焚火をすると燭が出来るぞ。

らん ほんに、是はよい思ひ付きでござりまするなア。

九市 林間に酒をあたくめるといふ趣向ぢや。

らん 成程左様でござりまするなア。

ト枯木を集め火を附け焚火をなす。四ツ竹の合方になり、花道より、琵琶平竹の皮包を提げて出て来る。

琵琶 定めし旦那様にもおまち兼ね、ドレ、急いで参りませう。(ト本舞臺へ来て) 只今歸りました。

九市 琵琶平なるか。

らん ヲ、琵琶平、歸つたか。

琵琶 奥様。

らん ア、コレ。(ト何んにも云ふなといふ思入、琵琶平承知ぢやといふこなし。)

九市 ヲ、能い所へ戻つて来た、おらんが土産の諸白、モウ爛が出来たであらう、コレおらんく。

ト呼べども、おらんうつむき見る故。

九市 是はしたり、又癢でもいたむのか。

らん イエく、何んともござりませぬわいなア。(ト徳利を取り九市郎かけ碗を出し酌をなし。)

九市 ア、上爛ぢやわく。(ト琵琶平、竹の皮包みを廣げ。)

琵琶 せめてお肴に是なりとも。

九市 何んぢや、煮染か、イヤ賞玩いたさう。(ト嘆ふ、琵琶平、ホロリとなし。)

琵琶 ア、おいたはしい事だなア。(ト合方になり。誰あらう粟津の御家中、五百石の旦那様が今諸

白と此煮染を、御賞玩なさるとは、まだ其上に奥様がござましい。(ト氣をかへ。イヤサ、世に

浅ましい此境界、下郎の腹は裂けるやうでござります、(トよろしく泣く。)

らん 道理ぢや、尤ぢやわいなア。(トよろしく、泣く。)

九市 さりとは愚痴な、晋の豫讓は漆を呑み智伯が仇を報ぜんとなす、我も弟に廻り逢ひ首尾よく

敵を討つまでは、何んの苦勞も思はぬわい、琵琶平泣くな。

琵琶 ハイ。

九市 女房も泣くな。

らん ハイ。

九市 エ、泣くなと申すに。

兩人 ハア……。(トよろしくこなし。九市郎思入。)

九市 さうして琵琶平、モウその合羽を脱いでもよいに。

琵琶 イヤ、此合羽はどうも。

九市 ハテ、脱がしてやれ。

らん ハイ。(ト無理に合羽を脱がせる。)

九市 そちは裸ではないか。

らん 今朝迄着てゐやつたが、どうしやつた。

琵琶 ヘイ、虫がつかました故雪の中へ埋めておきました、さうして私は八ツ時分から、根津の殿様

の御國入りで、品川迄長持をかついで来る約束をいたしましたれば、一寸行つて参ります。

九市 それはよいが、その裸では、此雪に。

琵琶 イエ、長持をかきますれば、汗が出ます。(ト小屋の内より、息杖を持ち來り。) 旦那様、奥

様、お風を召さぬ様になされませ。ドリヤ行つて参りませうか。(ト花道へ行き。)まけりやアナアまける程、長持かるいなア。ア、寒いく。

ト雲助唄を唄ひ乍ら、花道へはひる。後を見送り。

九市 モウ、行つたか、テモ感心な奴ぢやなア。(ト合方になり。)人の情も世にある時、我れ本國にありし時は、召仕うた者も數多ありしが、只今にてはちりくばらく、今の此身になる迄も附き添ひくるゝは、彼一人。

らん 忘れはおかぬ、嬉しいぞや。

九市 ア、持つべきものは、家來ぢやなア。(ト思入、此時雪降り出す。)

らん ヲ、又雪が降つて來た、雪風あたればお身の障り。

九市 なにさま夜も更けて來た、小屋にはひつて休まうか。

らん さうなされませ。

九市 大儀乍ら、此車を引いてたもれ。

らん アイく。

引けば因果のめぐり來る、片輪車を甲斐々々しく、小屋の内へと引入れて、

足曳あしびきならぬ尾長鳥おながどり、遠寺えんじの鐘かねも鳴り響ひびく、哀あはれをさそふ雪吹雪ゆきふぶき、おらんは小屋こやより窺のぞひ出いで、思おもひありげに立ち止とどり。

らん

サア〜お休やすみなされませ、妾わたしや、火ひの要えい心じんをして参まります。ト静しずかに、本釣鐘雪ほんつりかねゆきおろし、おらん下手うしろへ来て思入おもひいれ。思おもひ廻ませば勿體むつていない、假かりにも夫おとの目顔めがほを忍しのび、たとひ肌身はだみは穢けがさず共心ともごころの穢けがれ名なの穢けがれ、お許ゆるしなされて下くださりませ。

身みをふるはして伏ふし拜まがむ、涙なみだの雨あめか雪吹雪ゆきふぶき。

それに付つけても情なさけなきは夫おとの身みの上うへ、たとひ今守山辰次いまもりやまのつじにめぐり逢あふとも、本意ほんいの程ほどは思おもひもよらず、重光しげみつ様さまともあらう身みが、野末のすえの小屋こやに落ちおふれて、まだその上うへに此御病氣このごびょうき、助すけけたいと心こころは碎くだけど、心こころにまかせぬ貧ひんの病びょう。

凍こえの雪ゆきを清きよめの水みづ、取とり出だす一軸いちしやく押開おしかき。(ト一軸いちしやくを出いし。)

日頃ひごろ信しんずる象頭山金比羅大權現ざうづさんこんびらだいこんげんへ誓ちかをかけ、我わが命いのちを生いかすに夫おとの病氣びょうきを救すくはせ給たまへと、思おもひ込こみし七日ななひの斷食だんじき、今宵こよひが満願まんがん明あけなば知し死期しじ。

さら〜と一軸いちしやくを、海うみの小枝こえだに打うちかけて。

南無金比羅大權現、夫の病苦を救はせ給へ。

上着を脱げば、心も清き白木綿、女の念力一心不亂。

夫の爲にはいとぬ苦行、南無金比羅大權現様。

降り来る雪に身をさらし、髪も容も白雪の、亂れ心の亂れ髪、女の操ぞ。

ト床の三重、おらん手を合せ下にどうとなる。此見得よろしく三重にて道具廻る。

舞臺中足の二重。見附けに模様唐紙、上手折廻しの茶壁、向う鼠壁、床の間に軸をかけ、鈴蟲の香爐を飾り、茶の湯道具一式を飾り、いつもの處に大振の屋敷門。下手屋敷堀、切り破りあり。右二重に外記左衛門、着附け袴にて、利休行燈にて歌書を読みふる。此傍に、おまき、振り袖屋敷娘にて茶を立てゝゐる。二重の下に腰元、茶臼を挽いてゐる。此見付琴唄にて道具留る。

外記

此徒然草の作者吉田の兼好といふ坊主は、中々しやれた者ぢやわえ。

まき

御茶の御稽古にお勞れもあそばさず、夜の更ける迄歌書を御讀なされて、さぞ御氣儘にござり

ませう。(ト茶碗を持って來たり。)まア、一ふく召し上がられませう。

外記

ヲ、コリヤ忝い、先づ御手前から。

まき

まア、御父上様から。

外記 ヲ、然らば。(ト呑み。) 中々服加減ぢや。

まき 何んぞよい、御口取りを。

外記 イヤ、それは爰燻の沙汰、常に釜をかけるものが、さう奢つてはたまらぬて。

まき あなた様がさう仰つしやります故、御出入の衆がしはい旦那ぢやと申しまする。

外記 下々の者は儉約の意を知らぬ、打ち捨ておいたがよい。

まき 今一服、差し上げませうか。

外記 モウよい。イヤ何おまき、明日は根岸の宗匠の月並ぢやが、おぬしの歌は出来たかの。

まき 趣向は浮みましたれども、未だ出来ませぬ。

外記 拙者も何かよい歌を讀んで、社中を驚かしてやりたいものぢや。

腰元 申し、夜も更けましたれば、モウ御休みあそばしませ。

外記 ヲ、モウ臥つてもよからうわえ、表へ氣を附けよ。

腰元 畏りました。

まき 此お部屋が暖かうござります、これへお床を延べませう。

外記 イヤ茶席で臥せるといふ法はない。さうして明日は早朝から池尻の屋敷へ出ねばならぬ、かい

巻と枕を貸してくりやれ。

まき それでは、お寒うござりませう。

外記 大事な、別して寒うもあるまいわえ。

ト外記左衛門こなしあり。おまき障子屋體へかい巻き枕を持つて行き、腰元表を閉める。外記左衛門煙草盆を提げて一間へはひる。

外記 今宵は別して冷える、必ず風を引くまいぞ。

まき 有難うござります。

外記 サア休みやれ〜。(ト障子を閉める。)

まき お岩や、モウ何時であらうなア。

腰元 四ツ過ぎで、ござりませう。

まき 冬の夜は長いなう。(ト唄になり、奥へはひる。)

腰元 さうして内の旦那様は御裕福故、去年の秋三百兩といふ金を出して、鈴虫の香爐をお買ひなされたが、

妾にあのお金があつたら、櫛笄を買はうもの、ア、つまらぬ身の上ぢやなア。

ト唄になり奥へはひる、本釣鐘合方にて、才次郎黒羽二重着流し黒縮緬の頭巾、大小高下駄にて傘

をさし、花道より出て来りよき處に留まる。月出ぞ

才次

やうく雪も晴れ渡る、老女の化粧冬の月、ア、物凄き眺めぢやなア。(ト思入あつて。)ア、いつぞや信州宮の前なる吾妻屋にて、見九市郎殿にお別れ申し、敵を尋ねん爲南部仙臺津輕の果さ迷ひ廻るも二歳餘り、淺草寺にて結城春衛門様に計らずも御目見得とげ、姫君のお身の上は御病氣と情實なし、志津馬、宮城野と共にお館に、かくまひ下されしとの事、先づ是にて一つの安堵、此上は御納納に用ゆる鈴虫の香爐、是非共讃州高松家へ御返し申さねば、兩家の婚姻御家の大御、某きつと詮議仕出し差上げませうと、御受け合ひ申せしは某隨軒といふ某術の師匠が、鐘中の香爐買ひ求め所持なすよし、譲り受けんも金子はなし一面譲もなき御人故、借りる譯にはゆきがたし、と云うて香爐の手に入らぬ其時は。(ト思入あつて) いつその事忍び込んで、イヤく如何に忠義のためぢやとて、盗みをなせば盜賊の汚名、ア、如何いたしたものでぢやなア。(ト木舞臺へ来る。此時奥よりおまき出て。)

まき
思ひ出せば去年の秋、十市の渡しで見染めし殿御、思ひ出しては寢附かれず、ア、辛氣な事ではあるわいなア、オ、斯ういふ時は歌でも讀んで、氣を晴さうか。

ト、然草を出して見て居る。此内才次郎いろ／＼家に目を附けて。

才次 コリヤ、丈夫な普請の様子、中々素人などには窺ひがたし。(ト下手の塀を見て) ム、爰か

ら。よし／＼。(ト此時、太鼓、割竹の音して夜廻りの來る體。) ア、比良井才次郎ともいはれる身
が、夜盜をするも忠義の爲、天道神佛許させ給へ。

ト思ひ切つて塀を破る。凄き合方にて犬の聲などよろしく、おまき聞耳立つて。

まき あの音は、(ト才次郎塀を破る事。よろしく。) ヤア父上様、盜賊がはひりました。

外記 何、盜賊ぢや。(ト刀かけの大小を取り。) コリヤ、騒ぐな／＼。

ト手を取り襖を小楯に窺ひ居る。才次郎下手の障子をあける。外記左衛門すかし見て、此時鎗を突
き出し。

ウヌ、盜賊覺悟。(ト突きかける。才次郎是を留めて、合方替り手練同志の立廻り。) コリヤ、娘、

手燭々々。(トおまきウロ／＼して、手燭へ火を灯し差し出す。)

才次 待つた／＼、身共は物奪りではござらぬ、暫く／＼。

外記 何を。(ト又立廻り。)

才次 先づ、暫く／＼。(ト此時おまき才次郎の顔を見て。)

まき ヤアあなたは、ヲ、さうぢや／＼矢張りあなたぢや、父上様、此盜賊様は十市の渡しで、お目

にかゝつた。

外記 エ、。

まき その時の、お侍様ぢやわいなア。

外記 何をたはけた事を、此侍は非道な業を。

まき イエ、見違ひはいたしませぬ、ソレとつくりと、あなたのお顔を。(ト手綱を見せる。)

外記 ム、誠に。(トびつくりなし。鎧を落す。)

まき 何んと違ひは、ござんすまいがなア。

外記 ハテナア。(トあきせし思入、思案をして) イヤ何お侍、先達ては信州にて、御意得ましたそ

の折柄、主の敵か、親の敵か、何づれ大望ある身の上とは、身共とくと見受けしが、それに引き代へ今宵の有様、サア包ます是にて御話しなされい。

才次 御不審は御尤も、御當家の英龍軒殿を外記左衛門殿とは夢にも知らず、面目もなき御對面、御

尋ねにあづかりまして何しに偽り申さんや、拙者は江州粟津の家來比良井市郎右衛門が弟、

同苗比良井才次郎政春と申す者。

外記 ム、扱は、矢流家第一の高弟、政春殿とは御手前であつたよな。

まき そんなら噂の 高い劍術の御名人、才次郎様とはあなた様でござりましたか。

才次 ハア、主君の姫君を結城左衛門様の媒介にて、高丸讃岐之助様へ御婚嫁の御取り結び、御納

納の印たる鈴虫の香爐、詮議の役目を承り國元發足の折柄、大兄直政を守山辰次の爲に討た

れ敵の在所實の詮議、然る所御當家に香爐のある事承り、武士たる者にあるまじき事乍ら、

日限に差し迫まり、今宵密に忍び入り奪ひ取らんとせし此場の仕儀、何卒御推量下されたし。

外記 ハア、驚き入りし御心底、侍の名を捨て、主君の爲に賊となる、イヤお出かしたされた、お

出かしたされた。

才次 拙者何卒見九市郎に面會なし、共に敵を討ちます存意、別に命は惜しうござらぬ。

外記 ム、さうして、その九市郎殿と申す兄御には、近頃廻り逢はれしか。

才次 何處に御出なさるゝやら、別れまして早二歳、御心當りでもござりませぬか。

外記 その九市郎殿の面體は。

才次 天庭廣く而長にして、年の頃は廿三四、きなじりに黒子のあるは、母の譲りにござります。

外記 ム、扱は甲州よりの歸り道、九段下の松の根岸に燈の浪人、よしあり氣なる侍と不便に思ひ

鳥目恵み、よくく面體見てまわりしが、瓜を二つの貴殿の面さし。

才次 ム、その非人が兄九市郎殿のなれの果、浪人なしてをらるゝならば、此身に取つて何より重疊てんぱく。（ト此時おまきこなしあり。）

まき これいなア父上様、いつぞやより云うた事、何卒叶えて下さんせ。

外記 ム、よし／＼。（ト床の間の香爐を持ち來り。）才次郎殿、大切なる香爐確たつに御受け取りなされい。

才次 スリヤ、此香爐を私わたくしに。

外記 それが則ち彈引き手、不東なやつなれど、末長く添そうて下され。

才次 ム、（ト思案のこなし。）

外記 猶豫いさよの體ていは、不得心か。

まき アノ、妾めかけが御氣ごきに入りませぬか。

才次 イヤ、全く左様な儀ではござらぬども、兄の敵を討つべき身の上、敵の爲ために返り討ちになるま

いものとも申されぬ故、今宵の情けは明日の難がたき、此儀は何んとも御返事ごへんじが。

外記 その儀は兼ねて承知の上、望みを達たつせし曉あけには、ナウ娘。

まき それさへ御承引下さらば、長くお待ち申しますする。

才次 それ程のお詞、然らばその儀は如何様共。

まき アレ、父上様、如何様共とおつしやるわいなア。

外記 ム、先づは御承引の段 忝し。然らばせめて、ム、。(ト思入、罐子の茶を立て、持ち來り。)

此茶の銘は友白髪、只何時迄も添ひとげるやう、娘が呑んで聲殿へ。

まき アイ〜。ト一口呑み、憚り乍ら。(ト才次郎呑む。次に外記左衛門も呑み。)

外記 イヤ、目出度し〜。(ト八ツの鐘鳴る。)

才次 アイヤ最早丑滿五更の知らせ、直様九段に罷り越し。

外記 御同苗共、對面あれ。

まき それでは、直ぐに御出でござりまするか。

外記 親子三人囚みは内訌。

才次 首尾よく兄の敵を討ち。

まき 目出度く御歸りあそばす迄。

外記 鈴虫の香爐、奪はんとせし盜賊。(ト渡し。)

才次 忝し。(ト受け取り、ツカ〜と行くを。)

外記 盜賊待て。(ト小判の包みを打ち付ける。才次郎受け留める。)

才次 是は。

外記 道の路用。

才次 御厚志の段有難し。(ト才次郎、花道へ走りはひる。)

まき アノ、申し。(ト行きかけるを、引きまはして。)

外記 ハテ、頼もしき若者ぢやなア。

ト感心の思入、早き合方にて此道具廻る。

本舞臺、元の非人小屋、本鉤鐘合方にて、花道より、以前の○△の侍二人頬冠り尻からげ、奴二人付き添ひ出て來り。

侍○ イヤ何、金吾殿、いよく守山氏には今宵の中に。

侍△ 密に讃岐へ出立、後の始末は我々へお頼み。

侍○ 足は立たねど、彼奴もしれ者、欺し寄つてたつた一討ち。

侍△ 合點だ。(ト昔々本舞臺へ來り奴に囁く。奴兩人小屋を窺ひて戻り。)

奴 お二人様、よく寝ております。

侍○ ム、それは重疊々々。

侍△ サア、お越しなされい。(ト皆々支度をして、小屋の外より披身を突き込む。)

九市 ワア、。(ト菰を引き切り、惣身朱に染み、竹杖を突きはひ出る。おらんびつくりする。) ヤア、何奴なれば、欺し討ちとは、卑怯な奴め。

ト竹杖に仕込みの白刃を抜き斬りつける。

らん コレ、御心慥かに御持ちあそばしませいなア。

皆々 エ、面倒な。(ト立廻り、トゞ九市郎を斬り倒す。△はおらんを押へつける。)

九市 エ、口惜い無念なわえ、足腰立たぬ此難病、大死するは、残念ぢや。

侍 エ、面倒な、いつそとどめを。(ト立ちかゝる此時おらん剣起き法劍を抜き。)

らん 南無金比羅大権現様、何卒成就なさしめ給へ。

ト自害する。此時大ドロくになり、松ヶ枝の掛物仕かけにて燃える。是にてきられし九市郎むつくりと立ちて、四人を取つて投げる。此時、以前の琵琶平、竹ばさみの御教書を持ち出る。九市郎是を見て。

九市 ハテ、怪しや。

兩人 いぶかしやなア。

研

辰

九市 神變不思議な此吉兆、梅の梢にかけ奉りし大権現の御守り、忽ち猛火に消え笑せしは。

琵琶 無き玉の緒の連理にて、自然と是へ引き寄せられしは、主従二世の奇縁なるや。

九市 歎し討ちにて不覺を取り、數ヶ所の疵を受けたるも、今又夢の覺めたる如く。

琵琶 誠にあなたのおみ足は、いつの間にやら立ちました。

九市 ヲ、立つたわい立つたわい。

琵琶 御平癒なされたは。

九市 エ、忝い。(ト此時、四人抜き連れてかゝるを、兩人して斬り倒し。)

らん エ、轉しや右轉や、それで羨も安堵の臨終。

九市 扱はおらんの一念にて。

琵琶 神も納受まませしか。

らん 我が夫、琵琶平、早おさらば。(トおらん、よろしく落ち入る。)

九市 ア、はや事は切れたるか、不便の最期を見るものぢやなア。

琵琶 悲しみあれば喜びと、結城様のお情にて、姫君様の御在所知れ、速に高丸家への御興入れ、

安堵の御教書。(ト渡す。九市郎押し戴き。)

九市 エ、石（いし）遣（つか）し、然（しか）し紛（ま）失（し）の香（かう）爐（ろ）刀（たう）、二（ふた）品（しな）の揃（そろ）はぬ間（ま）は申（まを）言（げ）なき此（こ）身（み）の不（ふ）運（うん）、ハテ何（な）んとしたものであらうなア。（ト思（し）案（あん）のこなし。此時（こゝろ）上（う）手（て）より。）

才次 イヤ、氣（き）遣（つか）ひめさるな見（み）者（もの）人（ひと）、其（その）香（かう）爐（ろ）は手（て）に入（い）りましたぞ。（ト才（さい）次（じ）郎（らう）出（で）る。）

九市 ヤア、そちは才（さい）次（じ）郎（らう）、而（ゆ）目（め）もなき不（ふ）思（し）議（ぎ）の對（たい）面（めん）。

才次 談（だん）議（ぎ）に心（こゝろ）を碎（くだ）かれし、鈴（すず）虫（むし）の香（かう）爐（ろ）は手（て）に入（い）りました。（ト差（さ）し出（で）す。受（う）取（と）つて見（み）て。）

九市 ム、紛（ま）ふ方（かた）なき鈴（すず）虫（むし）の香（かう）爐（ろ）、エ、忝（かたじけ）ない。シテ其（その）方（かた）はいつぞや信（しん）州（しゅう）宮（みや）の前（まへ）にて相（あ）別（わか）れ、それよりいたして何（なん）處（ところ）に住（す）所（じよ）。

才次 あなたにお別（わか）れ申（まを）してより關（せき）八（はつ）州（しゅう）を談（だん）議（ぎ）なし、先（まづ）達（た）つてより當（たう）所（じよ）の住（す）所（じよ）。

九市 ム、不（ふ）くそちの言（げ）らひにて、香（かう）爐（ろ）は手（て）に入（い）れど、今（いま）一（ひと）色（いろ）は松（まつ）倉（くら）卿（けい）の短（た）刀（たう）。

兩人 如（い）何（なん）いたしたものであらうなア。（ト此時（こゝろ）、下（した）手にて。）

龜藏 イヤ、松（まつ）倉（くら）卿（けい）の短（た）刀（たう）、それへ持（も）ち参（まを）いたしませう。

琵琶 ム、あの聲（こゑ）は慥（たし）かに非（ひ）人（にん）の龜（かめ）藏（ざう）。

九市 短（た）刀（たう）を持（も）ち参（まを）なすとは。

ト下（した）手（て）より、龜（かめ）藏（ざう）衣（い）裝（さう）を着（き）着（け）へ、いさみのなりにて、袋（ふくろ）入（い）りの短（た）刀（たう）を携（も）ち出（で）て、九（く）市（いち）邸（てい）に渡（わ）す。九

市郎見てびつへりなし。

九市 ヤア、コリヤ是、お家の重寶、松倉卿の短刀、コレ弟。

才次 ム、ドレ。(トよくく見て。) 誠に違はぬ、兄者人。

九市 弟。

兩人 忝かたじけなし。

九市 シテ、龜藏殿の此姿、短刀持參のその仔細は。

龜藏 イヤ、私わたくしはあなた様の御息ごおんになりし、麴町上州屋十右衛門の兒分こぶたでござります、あなた様さまが

此所に御出いでなさるを、十右衛門が通りかゝり御見受け申して心ならず、私わたくしに守護しゆごいたせよと

の言いひ付け、それ故ゆゑ非人ひびととなり御用ごようをきゝしは、私わたくしの役やく、又それなる短刀たんとうも主人しゆじん十右衛門が買か

ひ求め、あなた様さまへ差し上げますのでござります。

九市 ハア、驚おどろき入つたる御親切ごしんせつ、御禮ごれいは詞ことばに述べ難がたし。

才次 此品手このしなてに入る上うへからは、敵辰次かぢたつじを捜たづし出し。

九市 日頃ひごらの本望ほんまう、達たつしてくれん。

龜藏 イヤ、辰次たつじめは御當所ごたうしょに足あしを止とめてをりましたが、又候またぞろや遂ちゆうとん電でんいたしました。然しかし落おち行ゆく先ま

きは是なる密書に。イザ、御被見下さりませ。

九市 何から何迄、重ねくの御親切、琵琶平、讀み上げい。

琵琶 八ア、(ト聞き見て。)何々書面を以て申達候、最早鎌倉へも比良井兄弟の者、入り込みし故、足も留めがたく、讃州高松領配下村へ立ち退き申候、就いては、彼地にて研屋辰次とお尋ね下され候、委細の事は到着の上萬々申上候、栗津刑部様へ、研屋辰次より。

九市 おのれ辰次、如何程に退がるゝとも、本意を遂げんは寸時の間。

才次 御用意あれ、兄者人。

九市 ア、勇しゝく、今日の襦袢は會稽の、

龜藏 明日の錦と鬪す、

琵琶 武名は四方に、

龜藏 かくれあらざる、

才次 讃岐の仇討。

九市 急いで發足。(ト此時以前の奴、二人窺ひ居て。)

二人 ウヌ、覺悟。

トかゝるを立廻つて、兩人を双方へ投げるを木の頭。皆々引張りの見得にてよろしく、

ひやうし 幕

大詰

丸龜濱の場
高松仇討の場

役名 唐崎九市郎、同才次郎、虚無僧燕山、守山辰次、田那上運平、和尚隨

願、坊主才念、船宿の亭主、刀屋次右衛門、悪者一、同二、仕出し町人△、

同○、講中大勢等。

本舞臺 淺黄幕。上手に高く石垣を積み、其上に見事なる石燈籠、金比羅大權現と彫り付けたる常夜燈。すべて丸龜濱の體。下手に茶店、是に町人二人旅なりにて休みある。眞中に三八、立はだかり鈴を振つてゐる金比羅參りのこしらへ、代參箱を香負ひ秘文を唱へてゐる。在郷唄にて幕あく。

運平

象頭山金比羅大權現、奥の院には十一面觀世音。

△ 是れはしたり行者様、餘りちりんくやられてはのぼせてならぬわえ。(ト錢を出してやる。)

運平 有難や、只取る、そはかア。(ト無性に鈴を振る。△、耳を押へて。)

△ ア、モウよい／＼、耳ががん／＼するわえ。

□ ほんに最前から見たやうだと思つたら、お前は大和橋の籠正様ではござりませぬ。

△ 是はどなたかと思つたら柳の文三様、金比羅様へお参りかな。

□ イヤ、少し商賣都合で阿波へ行く道すがら、勿體ないがお参りをして行きますわいなう。

△ ほんによう似た事もあるものぢや、私もついで乍ら、参詣と思つて。

□ それはよい道連れぢや、一休みして行きませうか。

△ さうしませうわいなう。

ト休む、「鎌倉見たか」の唄になり、花道より辰次合羽を着て、頭を手拭にて巻き風呂敷包みを提げて出て来る。後より船宿の亭主、合羽股引にて煙草を呑み乍ら出る。此後より盧無僧燕山、前にたりにて天蓋を冠り見えがくれに、辰次に目を付けながら出る。花道に留り、

辰次 扱亭主、此度は不思議の縁にて段々と世話になり申した、然し身共は金比羅様へ参詣をいたさ

ねば相ならぬ故、残念ながら此はづれにて別れ申す。

船宿 ハイ、それはお名残り多うござりまするが、高松領とおつしやるがどの邊でござりまする。

辰次 イヤ、身共は、香西領迄参る者サ。

船宿 ヘイ、左様なら追分迄御出なされませ、道も近うござりまする。

辰次 如何様、そちは當地の勝手を能く知つてをると見ゆる。

船宿 大阪の船宿の事故、年に二三度づ、通行いたしますので、此邊はよく存じてをります。

辰次 然らば、追分迄同道いたさう。(ト兩人本舞臺へ来る。運平立ち塞がり。)

運平 おんきばらつしやうそはか。(ト鈴を振つて附け廻り。フト顔を見合せ。)

辰次 ヤア、そちは。

運平 誠に、貴殿は。(ト言はんとするを。)

辰次 コリヤ、報謝を願はゞ眼先きをきかせい、身共は金比羅に参詣いたす者ではないわえ。

ト押へる。船宿の亭主は錢を出してゐる。燕山はそろ／＼舞臺へ來り、兩人の様子を窺ひ乍ら下手へはひる。

船宿 此邊りには澤山な金比羅参り、報謝すれば限りがないが、旦那の代りに報謝いたませう。

ト錢を遣る。行者の運平辰次に目を附け乍ら。

運平 是は／＼思ひがけない、御對面でござりまする。(ト言ふを、目顔で知らせる。)

船宿 申し旦那、それにてお休みなされませ。

辰次 如何様、幸ひの腰掛ぢや。(ト腰を掛ける。△□の兩人、船宿を見て。)

△ ヤア、貴公は、大彌先生ではござらぬか。

□ そんなら、モウ後船で着きましたか。

船宿 イヤモウ、近年にない風浪故、思ひの外早う着きました。

△ 時に籠正様、お前なり私なり、大彌の先生と来ては話しの合ふよい道連れ、御一緒に参らうではござらぬか。

□ 成程々々、當時前では音に聞えた粹の水の上、面白さうな道連れなれども、先方にもお連れがある様ぢや。

辰次 ア、イヤ、手前は夜前大阪表より便船いたしましたれば、幸ひ亭主が金比羅参詣と申す故、誠に海上にての一夜の馴染、是非共別れねばならぬ故、亭主何も遠慮に及ばぬ、御兩所に付き合せて、是より先へ参るがよいわ。

船宿 ヘイ、左様なら自由乍ら、折角のお供なれども。

辰次 是にて、最早別れるであらう。

船宿 さやうなれば御鏡を懸ひ。サア、御暇を受けたれば。

△ 打ちこんじての三枚ざし。

□ 連れ立つて、行きませう。

船宿 左様なれば、旦那様。

△ サア、行きませう。(ト三人、捨ゼリフにて上手へはひる。)

運平 辰次様、お久しうござります。

辰次 思ひがけなき此出會ひ、そちや田郡上運平、變り果てし其なりは。

運平 イヤモウ、騒動の場から遂電して天竺浪人、思ひ附きし金比羅行者、猶又話に聞きますれば會

平太を語らうて、比良井市郎右衛門を。

辰次 コリヤ、大事な儀ぢや、うかと申すな、それ故身共は今の流浪、比良井兄弟の奴等身共を見の

敵と附け覗うてゐるけれど、身共は又根に任せ夜を日に次いで、大阪へ到着いたし、一日一夜

の海上にも、此地へ渡つたれば、先づ善くは安心の形ぢやて。

運平 兼ねて貴殿の生國は當所なりと聞いたる故、實は此地を徘徊なし御目にかゝらん心組、シテ刑

部様より、お便りがござりましたか。

辰次 スリヤ早、落ち附く先々より、書狀を以て知らずれば、便りの儀は度々あれども騒動以來は刑

部様にも、押込め同然の御身の上にて頼みにはならぬ故、斯く故郷へ志せしは、彼の兄弟の

奴等の息の通ふ中は何國の果てへ參つても、枕を高く寢られねば此地へ引きよせ、しまうて取

る身共の思案、御身に出會ふこそ幸ひ、以前のよしみもある事故、力になつてくれるであらう

なア。

運平 イヤ、そりや改めてお頼みなくとも、一旦の契約故何處迄も一味同心、如何にも其をりに及び

し時は力になりませう、シテ貴殿の落ち付く先きは。(ト此時、燕山出て窺ひある。)

辰次 高松の城下にて香西領の下配下村といふ所で、研屋辰次と以前の名前で尋ねれば、在所の事故

早速に知れまするわ。

運平 成程、下配下村、承つております。

辰次 然し身共は久々にて、故郷へ急ぐ事なれば、甚だの心急ぎ。

運平 直様お越しなされまするか。

辰次 せめて道迄同道もいたしたけれ共、そのなりでは。

運平 イヤ、人目に立たぬやう、目先きをきかして参ります。

辰次 然らば、何かは道々話さう。

運平 左様なれば、辰次様。

辰次 運平ではない、金比羅行者、身に附いて参れ。(ト兩人上手へはひる。燕山思入。)

燕山 誠に身共が推量に違はず故進へたよる守山辰次、高松の城下下配下村とあるからは、此所より

程近し、最早袋の鼠も同然、然し昨夜の正夢に九市郎初め、才次郎諸共常地へ参りし知らせな

りしが、あれも正しく正夢なるか、いづれにもせよ辰次が實否、今一應見えがくれに後を慕

ひ、ム、さうぢや。

ト笠を解る。此模様よろし 道具廻る。

本舞臺真中に三間の大師堂。前側化粧屏風、正面に障敷格子を、れ賽籠箱、能き所に一間の床几を直し、此上に毛氈をかけ机を直し、此上に平瓦澤山並べあり。平舞臺真中、大籠に釜をかけ唐々に床几を直し腰衣の坊主茶を汲んで居る。以前の仕出し腰を掛け煙草を呑んでゐる。三味線入りの禪の勤めにて、道具留る。

坊主 大師堂、瓦の御寄進、御志はござりませぬか。

治右 是れ御坊、火が消えたわい。(ト火入れを取りに行く。)

坊主 ハイ、火をさし上げませう。

治右 ハイ、是は憚り様でござります、瓦の寄進一枚だけつきませう。(ト錢を出し。)

坊主 それは御奇特にござります。(ト机の傍へ行き、胡粉の筆を取つて。)御名前は何といたします。

治右 左様、江州大津の商人、刀屋治右衛門と願ひます。

坊主 承知いたしました。

ト書いてゐる、花道より九市郎、才次郎着附け輕さん風呂敷包笠を持ち、柄袋大小、草鞋にて出る。

九市 ヤレ、怪しからぬ早船であつたわえ。

才次 時に兄者人、此間より餘程の御歩行、お障りはござりませぬか。

九市 イヤモウ、常よりは却つて、丈夫に覺えるわえ。

才次 それは結構にござります。何はしかれあれへ參つて、休んで參らうではござらぬか。

九市 如何様方様いたさう、サア來やれ。(ト兩人、本舞臺に來る。)

兩人 イヤ、御免下されい。(ト休む。坊主見て茶を出し。)

坊主 大師堂、瓦の御寄進はなされませぬかなア。

九市 成程、大分瓦の寄進があるやうぢや。

才次 兄者人、何はしかれ象頭山へ、參詣いたさうではござらぬか。

ト此時、治右衛門つくつく二人を見て居る。坊主手桶を提げて。

坊主 あなた方の是にお出の内、一釣瓶提げてまゐります。(ト下手へはひる。治右衛門こなし。)

治右 イヤ、申し失禮乍ら、あなた方は粟津の御家中、比良井様の。(ト是にて治右衛門を見て。)

九市 イヤく、手前等は、何も其様な者ではござらぬ。

才次 東國の者でござるが、シテこなた様は。

治右 私は大津の者でござりまする。(ト顔を見て、考へ。)イヤく、矢張り比良井様の御兄弟様ぢや。

私は大津の刀屋、雷 治右衛門と申しまして、市郎右衛門様とは到つて御入魂にいたしましたし

たが、イヤモウ、あの辰次の爲には、今に難儀をしてをります。

九市 ハア、如何なる事やら手前一向、左様な者でござらねば、何が何やら解り申さぬ。

才次 コリヤ、人違ひでござりませう。

治右 成程、それでは手前の思ひ違ひ、イヤ失禮な事申し上げました。

九市 なんのく、左様な事はまゝある事ぢや。

才次 決して、何も申さぬわ。

治右 イヤ、恐れ入りましてござります、然し是を御縁にお山迄、お供いたしませう。

九市 イヤ、私等は後よりゆるりと参れば。

才次 まア、御先へ御出下されい。(ト是にて、治右衛門荷をかたげ。)

治右 ハテ、よう似た人もあればあるものぢやなア。(ト考へ。) 左様なら、お先へ参ります。

ト唄になり上手へはひる。後に兩人見送りて。

才次 兄者人、こなた様には今の町人、御存じでござりまするか。

九市 されば見知つたやうなれ共、めつたに姓名は名をられぬ。

才次 なれ共、正直さうな人に見受けました。

九市 イヤ、く大事の前、決して油断はいたされぬて。

才次 モウ、ソロ／＼参りませう。

九市 とはいへ、庵主が歸らねば。

才次 イヤ能うござる、せめて寄進に附いて参りませう。(ト傍にある瓦を見て。) 何、施主研屋辰次と

は、守山辰次が以前の姓名。

九市 ドレ。(ト取つて見て。) 誠にこりや辰次の手跡。

才次 スリヤ彼奴めは此所を、最早通り過ぎしよなア。

九市 いまだ胡粉のかはかぬは。

才次 遠くは行くまい。

九市 弟、參れ。(ト行きかける。此時下手より燕山出る。)

燕山 アイヤ兄弟共、暫くく。(ト天蓋を脱ぐ。)

才次 ヤア、共許は燕山殿。

燕山 久し振りの御面會。

九市 こなた様にも、御健勝の體。

才次 拙者とても、一別以來。

燕山 シテ、九市郎殿の難病は癒えましたか。

九市 イヤモウ、何からお話し申さうやら。

燕山 敵守山辰次が在所、明細に相知れましたぞ。

九市 スリヤ、共許様が。

才次 辰次の在所を。

燕山 見届けしはたつた今、彼が故郷は當國と承り、西國筋へ下りしは御身に助太刀いたさん爲、

先刻船より上りし時同じく上りし浪人者、敵辰次と聞くよりも直に實否を糺さんと、後をつけ
て参りしが蟲が知らせて取つて返し、思ひも寄らぬ此面會、最早本意を達する時節、兄弟共に
安心召され。

九市 シテ、辰次の在所と申すは。

才次 確と見届け下されしか。

燕山 如何にも、當國香西領にて下配下村といへる所。

九市 ソリヤ、聞き及ぶ辰次が故郷。

才次 下配下村へ、参りしとな。

九市 此上は、直ぐさまあとより。

才次 三人、三手に引き分れ。

燕山 出會ふ處は、下配下村。

九市 兄弟が口頃の望を。(ト瓦を持って。)

才次 敵守山辰次めを。(ト兩人、瓦を手に取り投げつける。瓦二ツに割れる。)

燕山 二ツに割れしは、よき吉瑞。

二人 然らば此まゝ。

燕山 用意いたせ。

トはげしき見得にて、此道具廻る。

本舞臺平舞臺。通しの寺の塀。此上手大門、此の兩方に西光寺と書きし提灯に、火を燈しあり。次、行かうとしてゐるを治右衛門是を捉へ居る。悪者三人さゝへ居る。此見得双轡にて道具止る。

辰次 エ、放せ〜。

悪者 エ、退いた〜。(ト引キ分けようとしてゐる。)

治右 イヤ〜、めつたには放さぬぞ、こなたに貸した十五兩、今爰で戻せ〜。

辰次 イヤサ、身共は今浪人の身の上、歸參をすれば退すといふに。

三人 待てと言つたら、待たねえのか。

治右 エ、何をこなた方の知つた事かえ、サア今爰で返してくれ。

辰次 サウぬかしやア、ウヌ。

三人 たゝきのめすぞ。

治右 面白い、手込めにするならして見さつしやれ。

皆々 エ、めんだち面倒な。

ト治右衛門を大勢して打つ。此時双盤を早め、下手より九市郎出て、此體を見て。

九市 ヤア、ウスは守山辰次だなア。(ト辰次、びつくりして。)

次辰 ヤ、こりやたまらぬ。(ト逃げかゝるを、治右衛門取り附く。)

治右 サア金を戻せ。(ト是を振り切らうとする。爰へ花道より才次郎出て来り。)

才次 それにごさるは、まじしやひと見者人か。

九市 フ、かまき弟、辰次は是に。

才次 何、辰次とナ。

ト本舞臺に來り捕へようとする。悪者三人邪魔をする。此時辰次は治右衛門を振り切り、門内へ逃げてはひる。下手より燕山出で。

燕山 才次郎殿か。

才次 フ、燕山殿、辰次は寺内へ。

燕山 何、此寺内へ。(ト引き退けて立廻り九市郎は悪者を投げ。)

九市 心元ない、さうぢや。(ト門内へ行かうとするを悪者さゝへる。)

燕山 何にもせよ。(ト矢張悪者邪魔をする。)

二人 それをやつては。

トかゝる。此模様双盤にて道具廻る。

本舞臺、眞中に三間の大佛殿、釋迦の座像、前通り天人の欄間すべて西光寺本堂。こゝに和尚墨衣にて、鉦をたゞき、講中大勢百萬遍の珠數を繰つてゐる。此見得にて道具止る。

皆々 南無阿彌陀佛々々々々々々々々

ト夢中に珠數を繰つてゐる、辰次逃げて來り、ウロ／＼して百萬遍の中へはひり、珠數を繰り居る皆々、心附かぬ體。

皆々 なまいだ〜。

ト九市郎走り出て見廻し、いろ／＼に尋ね、フツト辰次と顔を見合せる。

九市 ウヌ、辰次め。

ト飛びかゝらうとする。講中が邪魔になるこなしいろ／＼あつて、珠數を潜つて眞中へはひり辰次を捕へようとする。辰次危ふく脱れる。

皆々 なんまいだ〜。(トぐる／＼廻りに追ひ廻す。此時、才次郎走り出で。)

才次 ウヌ、辰次め。

ト是も大手をひろげ追ひ廻す。辰次上手へ逃げる。是にて兩人、追つてはひる。

皆々 なんまいだ〜。

ト此時下手より燕山出でウロ〜尋ね廻り、百萬遍の人数を一人々々見廻し、上手へはひる。引き違へて、辰次、走り出で、百萬遍の中へ飛び込み、和尙を倒し撞木を取らうとする。和尙びつくりして渡すまいとする。是を撞木にて頭を打ち黒衣を脱がせる。是にて和尙あきれてはひる。辰次手早く衣を着し鉦をたたきゐる。九市郎。才次郎氣をいらつて出で來り一人々々首筋を取つて、改めて見る。皆々びつくりして、

皆々 大變ぢや〜。

ト無茶苦茶に東西へ逃げてはひる。此時辰次震えながら鉦をたゞきゐる。氣味の悪いこなし。鉦をたたき後を見返り逃げたいといふ思入。ソロ〜立ち上がつては又座つてしまふ事あり。此中兄弟は上手へ再びはひる。此時以前の和尙出で來り、辰次の顔を見て、

和尙 ヤア、あなたは、どうやら。(ト小聲に言ふ。辰次あたりに氣を兼ね。)

辰次 是和尙様、俺ぢや〜。

和尙 俺とは誰ぢや。(ト震え〜、顔を見てゐる。)

辰次 是、和尙様見忘れさんしたか、ソレ、前方此處に居た、研屋辰次でござるわいなう。

研

辰

和尙 ヲ、ほんにさう言はつしやれば、どうやら。オ、こなたは辰次殿ぢや〜。

辰次 久し振りにて此村へ戻つて来て、思ひも寄らぬ急難に出合ひ固却いたしまする、どうぞ匿まうて下さるまいか。

和尙 サア、そりや馴染のこなた故、匿まうて進ぜ度いものぢやが、急な事故どうやら。

ト氣味の悪きこなし。

辰次 サア〜、人を助けるは御出家の役、辰次が一生懸命の場合、助けて下され後生ぢや〜。

和尙 ぢやというて、どうしてよいやら。

トウロ〜する、此時以前前に一緒に居た田那上運平を才次郎追うて来る。辰次びつくりして鉦を叩きゐる。才次郎運平を押へ付け、顔を見て。

才次 ヤア、うぬは一味の田那上運平、辰次を何處へ逃がした、サアそれをぬかせ。

運平 エ、それを身共が知るものかい。(ト張り切り、逃げようとする。)

才次 さう言や、いつそ。(ト抜きかける。)

運平 何を。

ト兩人一寸立廻り。此時九市郎上手より以前の悪者を追つて出る。九市郎兩人を引き捕へ顔を改め

突き放す。是にて辰次に突き當り辰次の冠りし花の帽子脱げる。辰次、びつくりする。兄弟辰次を見て。

九市 ヤア扱こそなア。

才次 辰次覺悟。

辰次 南無三。

ト傍の燈火を消す。是にて暗くなる。忍び三重の合方、

才次 ヤア、コリヤ燈火を。

ト此時、辰次上手へのがれはひる。九市郎は遅平と、才次郎は悪者と、さぐりあつて引き捕へ、兩人一時にあてる、此見得、道具廻る。

本舞臺平舞臺、一面に竹挟みの塀、真中に踏み込み附きの雪隠、松の立木、石の雪見燈籠、手水鉢奥庭の模様。本釣鐘にて道具止る。トバタ／＼にて上手より辰次逃げ出る、下手より以前の治右衛門出で來り辰次と突き當り、辰次にあてられ倒れる。辰次花道へ逃げ行き悪いといふ思入にて引き返し、上手へ行かうとして又引き返し、雪隠に心づき。

辰次 ヤレ／＼、恐ろしや／＼、コレ幸ひの隠れ處。どつこい、此燈籠を消しておかねば。

ト雪見燈籠を吹き消す。下手より燕山火繩を振ひて窺ひ出る。是にて辰次燈籠の蔭へかくれる。燕

山いろく見廻してフツト雪隠に心付き、火繩を振り足にて戸をあけ内を窺ひ火繩を振り振り向うへ出る。是にて辰次四ツ這ひになり、ソロソロ雪隠の中へはひる。そつと戸を閉める、

燕山 ハテ心得ぬ、寺内の隈々尋ねても、行衛の知れぬ守山辰次、命冥加な奴であるわえ。

ト言ふ時、辰次正面の窓から顔を出し舌を出し悦ぶ。此時治右衛門氣が付き起き上り、燕山に行き當り。

治右 ヤア、ウヌ、辰次め。

ト燕山にしがみ附くを引き廻して火繩にて顔を改める。双方より九市郎 才次郎出で聲を知る邊に

兩人 辰次、覺悟。(ト燕山に双方より詰め寄る。)

燕山 イヤ、身共ぢやく。(ト火繩を振つて見せる。)

九市 アノ、燕山殿でありしよなア。

才次 さうとは知らず、すんでの事に。

兩人 危い事なう。(トこなし、此時下手にて。)

捕頭 ソレ。(ト是にて、六人の捕手十手を持ち出で來り、三人を取り巻く。)

捕手 腕廻せ。

燕山 コリヤ何故の。

兩人 狼籍なるぞ。

捕手 コリヤ、手向ひか。(ト此時捕手頭馬乘提灯をさし附け、)

捕手 者共待て、(ト三人を見て。)見れば兩腰をた挟み居れば、仕官人か、浪人か、何れにもせよ夜中

寺院へ踏み入つて、參詣人を騒がせしは何等の仔細あつての事か。訴へに依つて召捕に向ひし
某、言譯あれば申せ、承らう。

九市 ハア、お役目御苦勞千萬、全く我々は怪しき者にあらず、當寺に逃げ込みし者あつて、是非な

く、斯く寺内へ亂入はいたせしが。

才次 毛頭、不都合いたすべき者にあらず、御役目の表に對し他聞を憚る事なれ共、御疑念晴しに此

一書、密かに御被見下されたし。

ト懷より一書を取り出し捕手取次いで捕手頭に渡す。捕手頭書物を讀み。

捕頭 此儀は早先達つてより承りし一條、スリヤ御貴殿方は比良井氏の御兄弟よな。

九市 拙者は唐崎九市郎。

才次 比良井才次郎めにござりまする。

捕手 シテ、それに控へられしは。

燕山 恐れながら拙者事は、義に依つて兄弟の者共へ助太刀いたす燕山と申す者。

捕頭 シテ、當寺へ入り込みし敵の辰次、行衛は知れましたか。

九市 其故にこそ斯くの仕合せ。

才次 暗夜と申し、案内知れぬ此寺内。

燕山 取り逃がさば詮なき事、心勞いたしてむりまする。

捕頭 イヤ、其儀は少しも氣遣ひ無用、既に拙者は右の次第、御領内へ觸渡しなば心靜かに詮儀仕出し花々しく勝負をなし、世にその名を揚げられよ、拙者は手配り萬端に心を急げば早まさらば。

燕山 お役目の段。

三人 御苦勞に存じます。(ト捕手頭、行かうとして、腰の提灯をさし出し。)

捕頭 助太刀召さるゝ燕山とやら。

燕山 ハア。(ト向うへ出る。)

捕頭 暗夜を照らす、今宵の寸志。(ト差し出す。)

燕山 ハア、辭退申さず、お借用仕ります。

捕頭 家來、供いたせ。(ト皆々、花道へはひる。)

燕山 御兩所、此上共におこたりなく。

九市 天井、下家は言ふに及ばす。

才次 今一應、とくと吟味を。

燕山 油斷めさるな、コレ。

ト騒く。三人思入あつて上手へはひる。此時辰次戸をあけて表へ出る。左右の様子を窺ひ又雪隠にはひる。戸を閉めて窓から顔を出してうまくいつたといふ思入。舌を出す。此模様よろしく道具廻る。

本舞臺、平舞臺、以前の雪隠の裏手になる。本釣鐘、虫の聲蛙の聲にて道具止る。ト雪隠の壁を中よりあげ、辰次蜘蛛の巢だらけになり出る。此の時上手より九市郎、下手より才次郎出で、此の物音に聞耳を立てる。辰次着物の土を拂ひ、窺ひ乍ら、花道へ行きかける。

辰次 ア、日頃信心奉る金比羅様の御利益にて、毒蛇の口を退がれ出し、命冥加な俺様ぢやなア。
九市 さてこそ、辰次め。

ト兩方より大手を廣げ詰め寄る。辰次びつくりなし、いろく逃げ廻る。ト九市郎は才次郎を捕

へる。辰次と思違へて。

九市 しめた。(ト才次郎びつくりなし。)

才次 兄者人。

九市 才次郎か。(ト言ふ内、辰次花道へ逃げのび此時思はず。)

辰次 ア、嬉しや。(ト胸を撫でおろす。兩人向うを見て。)

九市 コリヤ、待ちをらう。

才次 何んでも、此の道。

ト花道の方へ来て辰次を捕へようとする。辰次命限り花道へはひる。才次郎此の後を追ふ。九市郎才次郎の影を辰次と思ひ、同じく追つてはひる。此の模様道具廻る。

本舞臺淺黄幕、松原の體。上手へ月昇る。と韋駄天になり、花道より辰次一生懸命に逃げて出る。後より才次郎追ひかけ出る。辰次は本舞臺へ來り、西の通ひへかゝると西の揚幕より九市郎走り出で辰次と行き當る。

九市 ウヌ辰次、こんどは逃がさぬ。

ト捕へようとする。辰次(見物の席)場の中へ飛び込み。東の花道へ昇り東の場へかくれる。九市郎も場の中を東の花道へ上り見失ひ、本舞臺に來りウロ／＼して、小家へはひる。辰次此時花道へ上

り、本舞臺へ行かうとする。下手より燕山出で辰次を見て、

燕山 コリヤ、辰次。

ト引き捕へる。是にて辰次振り切り逃げようとする。トゞ辰次花道へ逃げようとする。燕山追ひかける。花道より、九市郎出で、大手を廣げ待つて居る故、辰次場の中を西の方へ逃げようとする。才次郎出で通ひ道へ塞がる。辰次これにて西へ通ひより、本舞臺へ退れようとする。燕山本舞臺より追ふ。辰次又場の中へ飛び込む。トゞ三方より、辰次を挟み、燕山提灯を振り差出みかざし。

燕山 うまいく、モウ此度は逃がさぬく。

ト是にて本舞臺の淺黄幕、切つて落す。

ト本舞臺、見附け奥深に浪の遠見。前側手摺打ち寄せ。板松のすかし、高松の紋の高張り提灯を建て、侍麻上下に改め、合引にかゝり居る。以前の捕手皆々弓張りをかざし、六尺棒を持つて、立ちかゝり居る。浪の音にて、道具止る。と辰次三方より狭まれて絶體絶命になり、刀を抜き才次郎に斬つてかゝる。才次郎逃げる。燕山是を見て。

燕山 兄弟共、何を逃げる、サア勝負々々。(ト是にて兄弟辰次をよき所迄おびき寄せ。)

才次 兄者人、初太刀を召され。

九市 如何にも、その言葉を待つて居たのぢや。

ト是にて九市郎辰次とよろしく立廻り、ト辰次の腕を斬り落し控へる。此時辰次斬られし臍を委
ぎ合す事などあり。オ次郎是を蹴飛ばして渡り合ふ。燕山尺八にて辰次の頭を打ち、ト兩人辰次
を斬り倒し控へる。是にて燕山辰次を引き起す。辰次刀を持つて落ちし自分の腕を取つて又立廻
る。いろくあつて、辰次鬨り殺しにされる。

九市
才次 兄上の敵、思ひ知つたか。

トとどめを刺す。

侍 目出度いく、敵討ち取る上からは。

燕山 早く此のまゝ、國入りく。

ト此時頭取出で。

頭取 先づ今日は是限り。

ト此模様よろしく。

ひやうし、幕

打出し

大正十五年五月十七日印刷
大正十五年五月二十日發行

『世話狂言傑作集』第八卷
定價金 參圓

檢 印



編纂者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

河 竹 繁 俊
濱 村 米 藏
渥 美 清 太 郎

東京市日本橋區通四丁目五番地

和田 利 彦

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

瀧 澤 一 郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

株式會社 秀英舍

東京市日本橋區通四丁目五番地

春 陽 堂

(電話大手五二、四二〇番)
振替東京一六一七番

河竹繁俊氏
濱村米藏氏
渥美清太郎氏
共編

歌舞伎劇大系 (全三十卷)

時代・世話狂言傑作集各十五卷

各冊
四百頁乃至四百八十頁
定價 參閱 送料八錢
陽堂發行

世話狂言傑作集 (全十五卷)

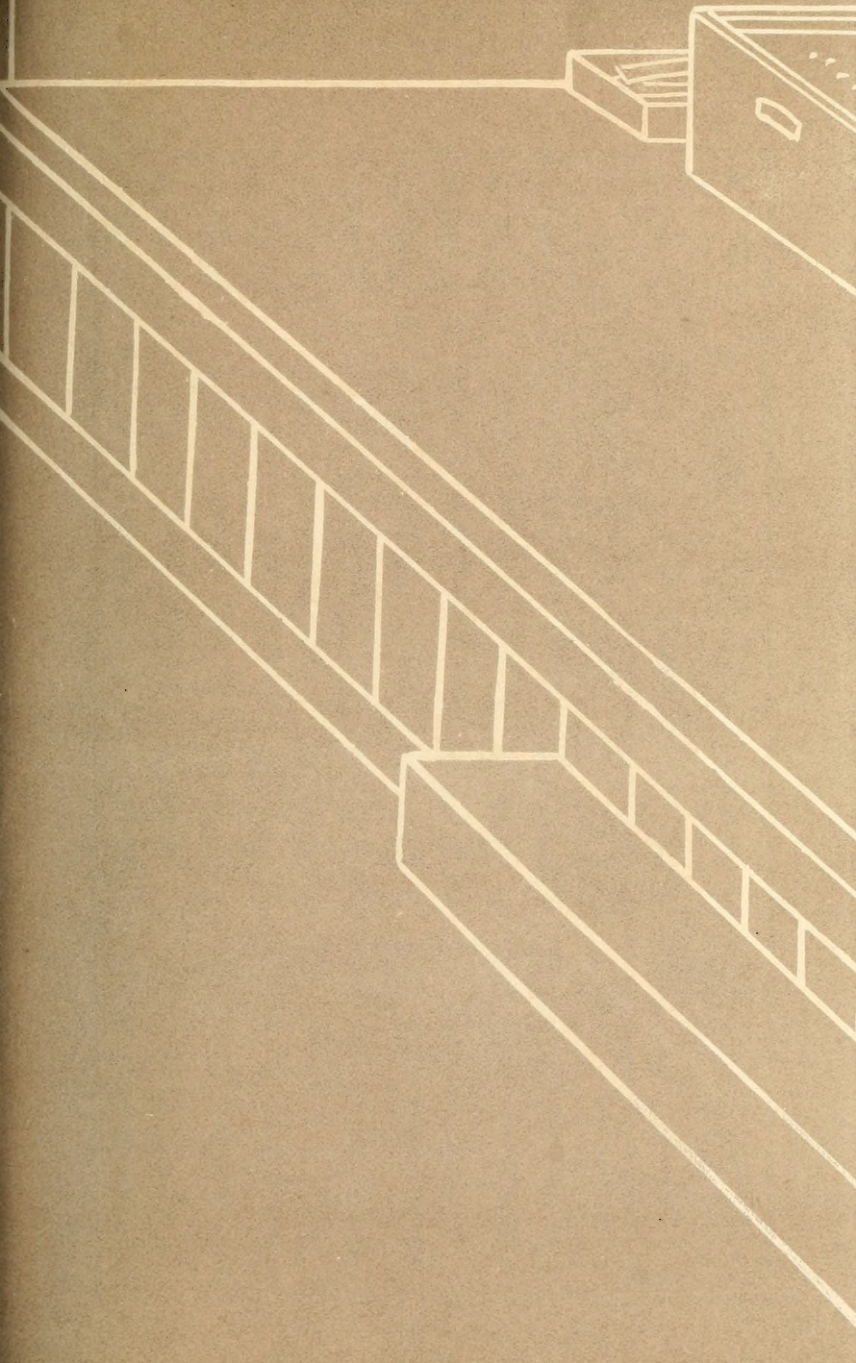
- 第一卷(既刊) 四谷怪談。法界坊。嫁切り。梅川忠兵衛。
- 第二卷(同) 天竺徳兵衛。幡隨院長兵衛。酒屋。清玄。
- 第三卷(同) 八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無間七。
- 第四卷(同) 唐人殺し。堀川。野崎村。五大力。
- 第五卷(同) 女歌舞伎。殿様勘次。泰山。名工藤右衛門鼓の里。裏表心曲尺。(棟平虎彦集)
- 第六卷(同) 累物語。白石噺。鬼神お松。夏祭り。
- 第七卷(同) め組の喧嘩。三人片輪。上野戦争。松田の仇討。(竹柴其水集)
- 第八卷(同) 朝顔日記。二人新兵衛。廓文章。梅の由り衛。
- 第九卷(續刊) 大經師。お妻八郎兵衛。千雨幟。かしく六三。

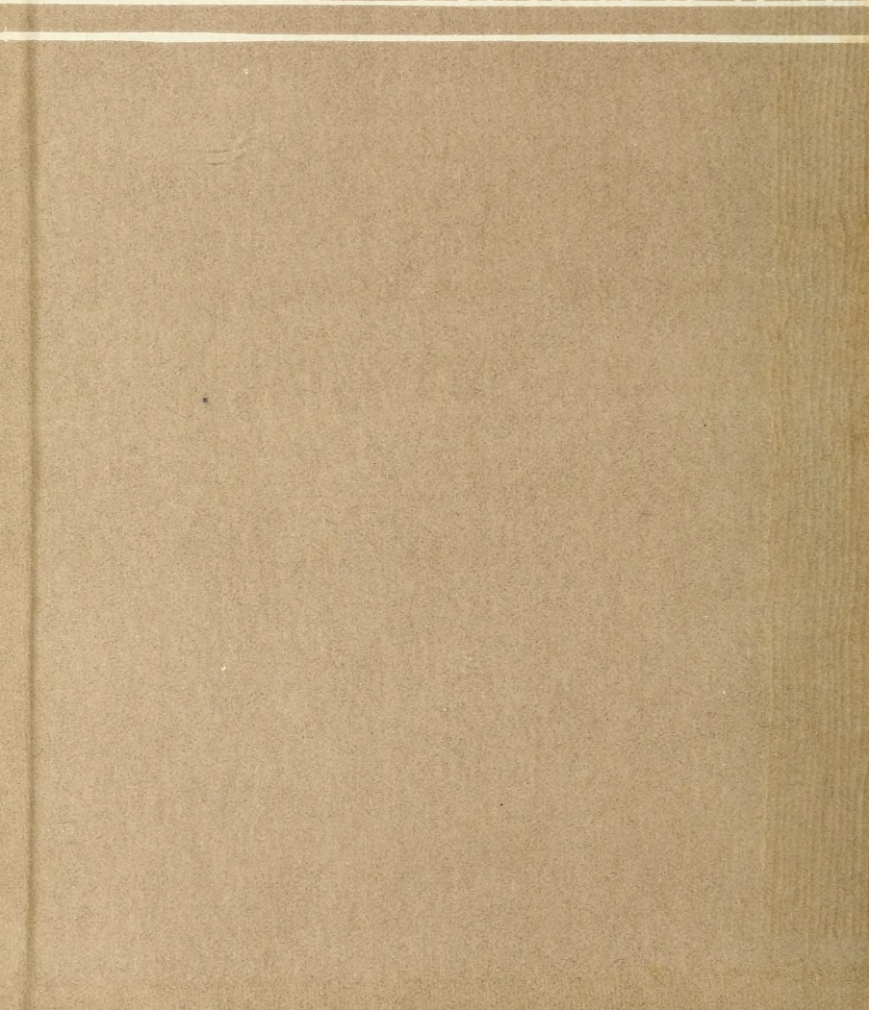
(以下續刊、卷次、内容には多少の變更あるべし)

時代狂言傑作集 (全十五卷)

- 第一卷(既刊) 義經千本櫻。石切原。扇屋瀬谷。遊生物語。卅三間堂。
- 第二卷(同) 高野山。軍山姥。玉三。義經腰越狀。新海雲傳話。
- 第三卷(同) 阿清。菅原。板額。山門五三桐。
- 第四卷(同) 先代萩。圓性翁。辨慶上使。高平物語。彦山權現。
- 第五卷(續刊) 忠臣藏。小野道風。六彌太。娘景情。
- 第六卷(同) 廿四孝。平家女護島。宅兵衛上使。鎌倉三代記。
- 第七卷(同) ひらがな盛衰記。伊勢物語。岸姫松。輝虎退膳。
- 第八卷(同) 伊賀越。阿古屋。盛綱。安達ヶ原。有職鎌倉山。
- 第九卷(同) 一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。

(以下續刊、卷次、内容には多少の變更あるべし)





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02988 8187

新
春
陽
堂
版